Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-29

スーパーグローバルハイスクール(SGH)研究開発実施報告書 第5年次 平成31年度

(Citation)
スーパーグローバルハイスクール(SGH)研究開発実施報告書,5:1-143

(Issue Date)
2021-03-27

(Resource Type)
book part

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012703

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012703

文部科学省指定期間：平成27年度～31年度

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

スーパーグローバルハイスクール（SGH）研究開発実施報告書

第5年次　平成31年度

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization

UNESCO Associated Schools

神戸大学附属学校部
神戸大学附属中等教育学校

Kobe Univ. Secondary School

巻　頭　言

神戸大学　理事・副学長
岡田　章宏

神戸大学附属中等教育学校（以下，附属中等）は，神戸大学の附属学校再編計画により平成 21 年度に創設された新しい中高一貫教育校です。平成 27 年度から，「地球安全保障への提言を目指す『グローバルキャリア人育成神戸モデル』」をテーマに，スーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受けました。「ユネスコスクール」としての特色を生かしたテーマ設定でもあります。以来５年間，21 世紀の教育課題の解決に貢献できる学校を目指して，志高く実践を重ねてまいりました。

附属中等は，「グローバル・エクセレンス」の実現をめざす神戸大学教育憲章との一貫性を踏まえ，創設以来「グローバルキャリア人」育成を教育目標に掲げてきました。「グローバルキャリア人」とは，「優れた課題発見力を持ち，世界の中で自己を位置付け，文化理解と行動を踏まえて，国際協力による関係構築を積極的に行おうとする人材」のことで，実践型グローバル人材の育成を目指す神戸大学と軌を一にしながらグローバル・リーダーを育成するための教育に尽力しています。

SGH では，新学習指導要領が強調する「課題研究」に，先導的に取り組み，多くの成果を挙げてきました。全生徒が 18,000 字の論文を執筆し，年々レベルアップが図られています。この内容は，昨年度末に公刊した『探究の力を育む課題研究』（学事出版）に結実しています。

同時に，課題研究を支えるグローバル・アクション・プログラム（GAP）等，国際交流活動を意欲的に展開し，短期間に，シアトル（米），高雄（台），ハノイ（越），ケンブリッジ（英）の高校と交流校協定を結んで，相互研修を行ってきました。今年度は神戸大学主催 Global Forum を開催し，シアトル（米），ハノイ（越）の生徒の参加を得て，世界的課題について議論し，協働で解決策を提案する発表を行ってフォーラムを成功させることができました。

神戸大学は高大連携講義，大学教員による課題研究の支援など，様々なかたちで附属中等と関わってきました。高大接続改革に伴い，SGH 指定を受けて附属中等との間で実施した本学の高大接続研究入試は，現在，一般の高校にも門戸を広げた「『志』特別入試」として発展的に継承させています。今後も，これまで以上に附属中等との連携を密にしていきたいと考えています。

このように，SGH の指定を受けることによって，附属中等は「グローバルキャリア教育」の内実を創りました。本事業は，今年度を最後に終了しますが，神戸大学は，文理融合の卓越研究大学として，附属中等が SGH で得た成果を持続的に支援したいと思っています。

本報告書を御一読いただき，附属中等の SGH 事業に対しまして，ぜひとも忌憚のない御意見と御指導を賜りますようお願い申し上げます。

SGH 研究開発実施報告書（第 5 年次　平成 31 年度）

＜目　次＞

巻頭言
目　次

１章　本校 SGH の概要　1
　１　本校の概要　1
　２　本校 SGH 構想の概要　3
　３　平成 31 年度　研究開発実施計画　5
　４　平成 31 年度　研究開発実施完了報告　8

２章　各分野の実施報告　18
　１　課題研究について　18
　２　グローバル・アクション・プログラム（GAP）　25
　３　本校における特設科目（「ESD」，「国際理解」）の取組　33
　４　英語教育高度化に向けた取組　39
　５　SGH と教科教育目標の策定　43
　６　その他の取組（グローバルキャリア人育成のためのキャリア支援プラン）　45
　７　神戸大学の戦略と研究開発組織　46

３章　生徒の活動紹介　48
　１　グローバル・アクション・プログラム（国内研修）　48
　　A　震災・復興・減災宮城交流プログラム（DR3）　48
　　B　全日本高校模擬国連大会　52
　　C　臨海実習　54
　　D　ユネスコスクール関連事業　57
　　1）アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト　58
　　2）ESD Food プロジェクト　62
　２　グローバル・アクション・プログラム（海外研修）　66
　　A　米国シアトル研修　66
　　B　ベトナムハノイ研修　70
　　C　台湾研修：Asian Student Exchange Program（ASEP）　74

D　カンボジア研修 78
E　英国ロンドン・ケンブリッジ研修 82

活動の様子 87
課題研究ポスター優秀作品 98

４章　SGH 事業の評価 103

関連資料
1）各教科教育目標 123

2)「2019 年度授業研究会」,「SGH 第 5 年次報告会」プログラム 138

3）平成 31 年度教育課程表 141

4）6 年生（6 回生）SGH 課題研究テーマ一覧（抜粋） 142

地球安全保障への提言を目指す「グローバルキャリア人育成神戸モデル」 143

１章　本校 SGH の概要

１　本校の概要

（１）学校名，校長名

神戸大学附属中等教育学校，　藤田　裕嗣

（２）所在地，電話番号,FAX 番号

兵庫県神戸市東灘区住吉山手 5 丁目 11-1

TEL　078-811-0232　　FAX　078-821-1504

（３）学校全体の規模（平成 31 年 4 月 1 日現在）

＜生徒＞

前期課程						後期課程						計	
第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		第 4 学年		第 5 学年		第 6 学年			
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
123	3	121	3	131	4	113	3	136	4	160	5	784	22

※現在は,学校再編の過渡期であり,将来各学年 3 クラス計 18 クラス規模になる予定。

＜教職員＞

校長	副校長	事務長	主幹教諭	指導教諭	教諭*	養護教諭	栄養教諭	非常勤講師	ALT	SC	学校司書	事務職員	計
1	2	1	2	2	42	2	1	11	2	2	2	6	76

注）１　校長，ALT，SC（スクールカウンセラー），学校司書及び事務職員には，併任，非常勤または短時間勤務者を含む。

２　教諭の内，4 名は任期付。

（４）神戸大学附属中等教育学校の教育目標等

【教育目標】

・国際的視野を持ち未来を切り拓く真理探究の精神に富んだグローバルキャリア人を育成する。

・「見つける力」「調べる力」「まとめる力」「発表する力」の４つの力とそれらを統合する「考える力」を，教科の学習はもちろん,「Kobe ポート・インテリジェンス・プロジェクト（Kobe プロジェクト）」をはじめとする教育活動全体を通じて育成する。

【目指す生徒像】

１　主体的に自己及び社会の未来を切り拓くことのできる生徒

２　国際的な視野を持ち,自他を認め合って行動できる生徒

３　真理探究の精神に富み，新たな価値を創造する力を身に付けた生徒

【教育課程編成のポイント】

１　中等教育学校としての強みを発揮できる教育課程の編成。

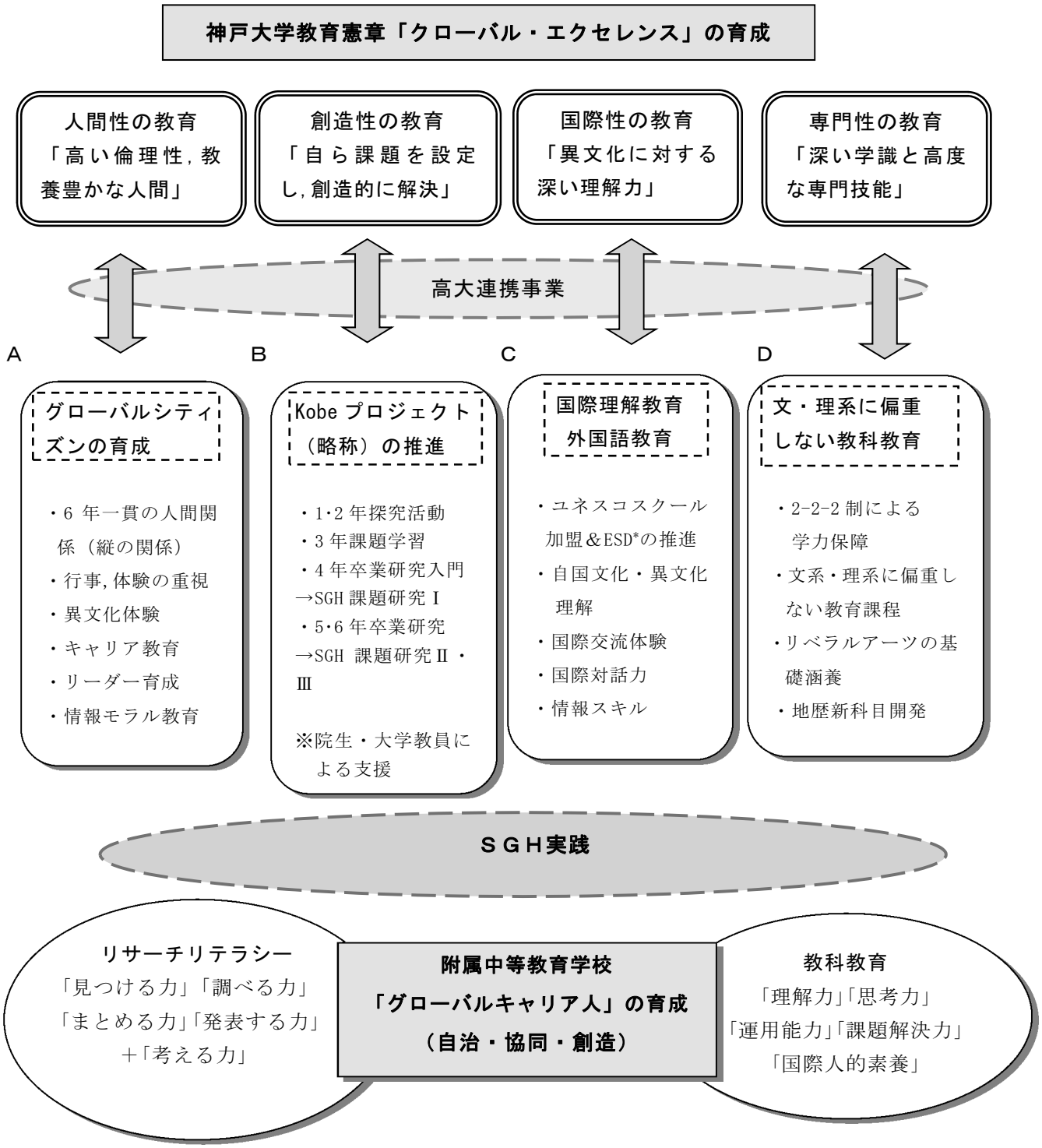
２　生徒の発達段階に対応し，6 年間を 2 年単位の 3 期に区分した教育課程の編成。

３　国際的視野を持ち未来を切り拓く真理探究の精神に富んだグローバルキャリア人育成。

①学校生活全般で生徒による自治を尊重することにより自己や社会に対しての主体性を育成。

②協同学習を中心として様々な場面で他者との対話を重視，自他を認め合う心を育成。
③「Kobe プロジェクト」を中心として教育活動全体を通じて探究する力の育成。

■ 神戸大学の教育憲章と附属中等教育学校の教育理念と概要



＊ESD：Education for Sustainable Development（持続可能な開発のための教育）

２　本校 SGH 構想の概要

（１）対象とする生徒数　（平成 31 年 4 月 1 日現在）

1 年	2 年	3 年	前期	4 年	5 年	6 年	後期	総計
123	121	131	375	113	136	160	409	784

※1～3 年は前期課程生で予備対象。4～6 年は後期課程生で全員が本対象。

（２）研究開発構想名

地球安全保障への提言を目指す「グローバルキャリア人育成神戸モデル」

（３）研究開発の概要

国立大学附属学校及びユネスコスクールとしての特色を活かした次の 3 点を核とする「グローバルキャリア人育成神戸モデル」の開発と実践

①課題研究を核とする教科横断型体系的グローバル人材育成カリキュラムの開発

②国内外での圧倒的なグローバルアクションプログラムの実施

③高大一体による実践を支える確かな調査研究の推進

（４）研究開発の内容等

１　全体

１）目的・目標

本校は「優れた課題発見力を持ち，世界の中で自己を位置付け，文化理解と行動を踏まえて，国際協力による関係構築を積極的に行おうとする『グローバルキャリア人』」を「グローバル・リーダー」と位置付け，その育成を教育目標に掲げている。

現在のグローバル社会の諸課題を解決するには，「地球安全保障」の実現を図ることが不可欠であり，本事業においては，次の 3 観点を核として，生徒のグローバルキャリア力を総合的に向上させ，高校生の視点に基づく「地球安全保障への提言」を発信させる。

①課題研究を核とする教科横断型体系的グローバル人材育成カリキュラムの開発

②国内外での圧倒的なグローバル・アクション・プログラム（GAP）の実施

③高大一体による実践を支える確かな調査研究の推進

これによる『世界の課題を自ら発見・探究し，具体的な解決を提案できる次代を担う人材を育成する「グローバルキャリア人育成神戸モデル」の開発』を，本事業の目的とする。

２）現状の分析と研究開発の仮説

本校は「ユネスコスクール」並びに「SGH アソシエイト校（平成 26 年度）」，「SGH 指定校（平成 27 年度より）」としてグローバル教育に注力しており，神戸大学との緊密な連携をその最大の特徴としている。これまでの教育実践並びに生徒のアンケート調査等の結果，「総括的取組が不明確」，「高次元の指導体制や発表形態の整備」，「教科教育改革」，「各種事業の整除」といった課題が明らかになっている。

そこで，次の 3 点を本研究開発の仮説とし，「グローバルキャリア人育成神戸モデル」の開発によってグローバル・リーダーが育成され，これらの課題が解決できると考えた。

①「地球の安全保障」をキーワードに，「課題研究」Ⅰ（4 年）－Ⅱ（5 年）－Ⅲ（6 年）として系統的に実施し，高次の課題発見力及び国際対話力を育成する。

②カリキュラム再編を通して，グローバルキャリア人に必要な文化理解・幅広い教養を含む資質・能力・技能を育成する。

③神戸大学や国際専門機関等の多彩な支援を得ながら，高大一体運営の下で，各種事業を推進する。

３）成果の普及

SGH ホームページを開設するとともに，本校文化祭等での発表・展示に加え，本事業の各種グローバル事業や公開研究会等における発表及び報告書の作成・送付による成果の普及を行う。さらに，神戸大学との連携により，大学ホームページへの掲載，海外交流行事及び文化祭等での発表，オープンスクールでの展示等による成果の普及に取り組む。

２　課題研究

１）課題研究内容

①全体テーマ「神戸から発信する『地球の安全保障』への提言」

②4 研究領域

Ⅰ　震災・復興とリスクマネジメント

Ⅱ　国際都市「神戸」と世界の文化

Ⅲ　提言：国際紛争・対立から平和・協力へ

Ⅳ　グローバルサイエンスと拠点都市「神戸」

２）実施方法・検証評価

①「課題研究」:「課題学習」（前期課程第 3 学年）では，個人による課題学習を通した研究基礎力の養成に取り組み，「課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（後期課程第 4・5・6 学年）では，個人研究による課題の探究，個人論文ならびに英文要約の完成及びプレゼンテーション発表を行うとともに，3 年間を通して「課題研究アクション・プログラム」と連動することにより，地球の安全保障に関する認識の深化を図る。

②「課題研究アクション・プログラム」研究意欲の向上並びに国内外の高校生との交流促進に資すると共に，課題研究の成果を発表する場として，国内外でのワークショップ並びにフォーラム等を開催する。特に「高校生グローバルフォーラム」は，本事業の総括的取組として，EU や ASEAN 等の世界の地域連合をテーマに，企画・交渉から開催まで生徒自身の手で実現させることで，「グローバルキャリア力」習得の集大成とする。

③「課題研究を支える特設科目等」: 課題研究を高いレベルで実施するために，特設科目「国際理解」及び教科「ESD」を教育課程に設ける。

３）必要となる教育課程の特例等

①「特設科目『国際理解』の設置」: 本事業における「課題研究」の総合化を図るため，現行の「現代社会」2 単位のうち 1 単位を削減し，1 単位科目「国際理解」を置く。

②「教科『ESD』の開設」: 生徒の理解促進を図るため，各教科等で取り扱われている「持続可能な開発のための教育」の内容を合科的に学ぶ教科「ESD」を置く。

３　上記以外の取組

１）課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価

①「教育課程の整備」: 教科の枠を越えた領域の編成，教科目標の再設定及び共同探究学習方法による授業改革を進め，「グローバルキャリア力」育成の一層の推進を図る。

②「英語教育改革」: 授業の高度化，外国人との交流機会の増加及び英語による研究発表による改革を継続的に実施し，世界に発信できる英語力を習得させる。

２）課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等　該当なし

３）グローバル・リーダー育成に関する環境整備，教育課程課外の取組内容・実施方法

「課外活動の再編・体系化」: 宿泊行事や交流活動等が「グローバルキャリア力」の養成に寄与するよう，課外活動を見直し，体系的に再構成する。

①「KMGC グローバルキャリア研修旅行」: 生徒の発達課題を踏まえ，日本の歴史・伝統文化への理解促進に資する「ローカル&グローバル」な視点を盛り込んだ宿泊行事を実施することにより，グローバルシティズンシップの育成を図る。

②「KMGC 異文化交流事業」：帰国生並びに留学生の受入れ等により異文化理解交流を日常的に促進するとともに，オックスフォード大学並びにケンブリッジ大学の学生との交流ではグローバルな課題について学習する。
③「KMGC グローバルセミナー」：グローバル人材に必要な教養及び資質の形成に資するセミナー（3 形態：基礎／リーダー／連続リレー）を開催する。
④「KMGC 国際交流ワークショップ」：地球規模の課題等に関するワークショップを充実・発展させ，「神戸大学留学生」及び「JICA 教育行政官視察団」と英語で議論する。
⑤「KMGC 自治組織」：生徒の自発性の涵養，将来像の明確化に資するため，生徒会の下部組織として「グローバルキャリアコミッティー（GCC)」を創立し，トップリーダー育成の場とする。
⑥「進路相談体制の整備」：進路指導部に担当者を配置し，留学や海外大学への進学など，生徒のグローバルキャリアデザインの支援体制を整備する。

４　その他特記事項

現在「グローバルな時空間認識」の育成に資する新科目「地理総合」「歴史総合」について「研究開発学校」指定(平成 25～28 年度，延長：平成 29～31 年度)を受けており，内容面で本事業との相乗効果が見込まれる。運営面では，両事業を着実かつ適切に推進するため，明確な分業体制を構築する。

３　平成 31 年度研究開発実施計画

（１）実践上の課題

平成27～30年度SGH実践の成果を踏まえ，次の課題（下表）を明らかにした。平成31年度はこの課題解決のため目的意識をもって実践に臨む。

事業	課題
A1 課題研究の実施	論文の評価観点・方法の検討及び生徒・教員への周知徹底。
A2 独自科目設置	「国際理解」におけるSDGsに関連する授業の実施。
A3 科目の領域への再編	教科領域単位での実践検証及び単元単位での試行の必要性。
A4 Kobe Global Forum	米・越・台・英４校との交流協定（覚書）を土台としたGlobal Forumの実施。
B1 国内グローバル体験	ポストSGHを踏まえた上級生から下級生への継承。
B2 海外グローバル体験	課題研究と関連した研修内容の充実。
C2 総合的生徒評価システム	教科学力とグローバル意識の連関についての調査の継続。
D2 広報活動	ホームページ更新による事業成果の迅速な発信。
D3 予算執行	予算の精選と事務室との相互理解に基づく,円滑な執行体制。

（２）実践内容

前述した課題を踏まえながら,今年度 SGH 事業として以下の内容を実施する。

１）課題研究

◇全体テーマ：「神戸から発信する『地球の安全保障』への提言」

◇研究領域：全体テーマのもと，生徒の関心意欲を踏まえ，次の 4 研究領域を設けて実施する。

Ⅰ 震災・復興とリスクマネジメント　　Ⅱ 国際都市「神戸」と世界の文化

Ⅲ 提言：国際紛争・対立から平和・協力へ　　Ⅳ グローバルサイエンスと拠点都市「神戸」

◇全体の枠組

4 年「課題研究Ⅰ」，5 年「課題研究Ⅱ」，6 年「課題研究Ⅲ」として系統的に実施する。

各段階で発表を行うと共に，6 年生は，課題研究論文（18，000 字：和文・英文要約付）を作成する。

２）「課題研究グローバル・アクション・プログラム（以下,「GAP」)」

米・越の交流校及び国内から生徒を招いて，神戸大学主催「Global Forum」を実施する。

40 以上のプログラムを，以下の A～C の種別ごとに継続実施する。C プログラムについては課題研究との関係性をより明確なものにして取り組む。

A ：グローバルな課題認識に教養面からアプローチするプログラム
B ：国際交流体験，語学研修等を通して課題認識を育成するプログラム
C ：明確な課題認識を持った上で研修に参加し，認識を深化させるプログラム
C1：課題研究アクション・プログラム（国内）C2：課題研究アクション・プログラム（海外）

＜表＞SGH 経費から支援を行うもの（主として C プログラム：一部外部資金による実施）

	テーマ・研究領域	グローバル・アクション・プログラム（GAP）海外派遣事業	グローバル・アクション・プログラム（GAP）国内実施事業
	地球の安全保障 （全体：共通）		・グローバルリーダーセミナー ・JICA 研修員ワークショップ ・アートマイル
Ⅰ	震災・復興とリスクマネジメント		・神戸･宮城交流プログラム ・復興庁訪問 ・高校生津波サミット参加
Ⅱ	国際都市「神戸」と世界の文化	・台北･高雄（Asian Student Exchange Program ）（台湾）研修	・World Youth Meeting （台湾高雄師範大附属来日交流）
Ⅲ	提言：国際紛争・対立から平和・協力へ	・ハノイ（ベトナム）研修 ・カンボジア研修	・全国高校生模擬国連 ・EU 東京研修 ・ハノイ国家大外国語大附属来日交流
Ⅳ	グローバルサイエンスと拠点都市「神戸」	・シアトル（米国）研修 ・ロンドン・ケンブリッジ（英国）研修	・臨海実習 ・ジオパークフィールドワーク ・米国シアトル ICS 来日交流 ・ケンブリッジ CVC 来日交流

３）学校設定科目

課題研究を支える学校設定科目「国際理解」（4 年）及び「ESD」（3 年）を継続実施する。

４）課題研究以外の取組

①教育課程の整備：教科の枠を越えた領域の編成，協同探究学習による授業改革
②英語教育改革：グローバルキャリア力の基盤能力である英語能力の飛躍的向上（卒業時に CEFR：B1～B2 レベルを習得）を目指し，英語教育高度化事業を推進
③課外活動の体系化：グローバルキャリア力の向上に寄与する課外活動を GAP として実施

５） 留学生受け入れ事業

「アジア高校生架け橋プロジェクト」（1 名）をはじめとする留学生受け入れ及び在校生交流事業を継続すると共に，2020 年度以降の留学生受け入れ継続について，改善策の検討も含め合意形成を図る。

６）検証評価体制

生徒の意識変化や課題研究，GAP 実施に当たっては，下記項目の中の該当項目について評価・検証を行う。実務はグローバル教育推進室評価・検証部会が担当する。

①地球の安全保障についての理解　②世界的視野に基づく多元的思考の習慣化
③「課題発見力」及び「課題研究の時間」　④リサーチリテラシーの水準と研究論文
⑤「国際フォーラム」等における国際対話力及び英語活用力
⑥グローバルな課題認識の広がりと総合化　⑦教員及び教員組織の指導力及び大学との協力関係
⑧国際社会で活躍しようとする意欲を持つグローバル・リーダーの育成

7）研究成果の普及

①神戸大学主催「Global Forum」(5 月)

②SGH 課題研究発表会（生徒の対外発表：7 月）

③SGH 第 5 年次報告会（学校の公開発表：2 月）　④課題研究優秀者論文集発行（2 月）

⑤SGH 第 5 年次報告書発行（3 月）⑥ホームページ公開　⑦グローバル・アクション・プログラム報告会（年 3 回）

（3）事業実施体制

神戸大学に SGH 高大連携委員会（委員長：教育担当理事・副学長）を置き,大学の諸機関が連携して事業の指導に当たる。また,事業の指導機関として運営指導委員会を組織する。

校内に SGH 校内研究委員会（委員長：学校長）を置き,企画・立案に当たる。なお,「課題研究」に関連する実施体制は次の通りである。

課題項目	実施場所	事業担当責任者
4 年「課題研究」Ⅰ	本校及び神戸大学,フィールドワーク先	・主担当教員を各領域 2～3 名配置し,領域内に班を編成し,主担当・副担当を配置する　※主担当：1 人 4 班程度担当 ・神戸大学関係部局及び大学院生の支援
5 年「課題研究」Ⅱ	本校及び神戸大学,フィールドワーク先	・主担当教員を各領域 5 名程度配置し，テーマの類似性に応じて班を編成し,主担当・副担当を配置する　※主担当： 8 人程度担当 ・神戸大学関係部局の支援,大学院生・教員支援
6 年「課題研究」Ⅲ	同上	同上
課題研究フィールドワーク	各フィールドワーク先	・プログラムごとに以下の実施体制を組む 事前学習,事後学習担当,　引率指導,発表指導

（4）課題項目別実施期間

業務項目	実施期間（　契約日　～　2020 年 3 月 31 日）											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
運営指導委員会				○							○	
課題研究（Kobe プロ）	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
高校生グローバルフォーラム		○										
米国シアトル受入		○										
ベトナムハノイ受入		○					○					
英国ケンブリッジ受入								○				
米国シアトル研修							○					
ベトナムハノイ研修								○				
台湾高雄研修									○			
英国ケンブリッジ研修										○		
カンボジア研修										○		
カナダ語学研修				○	○							
オックスブリッジ				○	○							
オックスフォード留学生受入			○									
全日本高校模擬国連								○				
EU 東京研修												○
震災復興研修						○						
臨海実習					○							
ジオパーク研修					○					○		
リーダーセミナー 含連続リレー講義		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
その他（ユネスコ，OECD 企画等）未定												

※計画は事業計画書提出時のものであり，実際の事業着手は契約締結後とする。
※展示：文化祭・オープンスクール発表　発表：SGH 年次報告会発表。担当者は未定。
※支援期間終了後，上記業務は継続して実施する予定であるが，支援経費の関係から海外研修については，隔年で実施する可能性がある。

4　平成 31 年度　SGH 研究開発完了報告

（「SGH 研究開発完了報告書」を加筆・修正している）

1　管理機関の取組・支援実績

（1）　実施日程　●は新型コロナウィルス感染症対応策による休校措置で実施できず。

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①課題研究支援	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	●
②国際交流支援		○		○	○			○	○	○		●
③調査研究の支援		○			○				○	○	○	●
④高大連携事業	○		○	○				○				●

（2）　実績の説明

①課題研究支援

・課題意識育成に向け「社会基礎学連続リレー講座」(6・7 月 6 日間，計 12 講座)に 4，5 年延べ 79 名が参加した。
・大学教員，石川慎一郎(大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター教授)，林創(人間発達環境学研究科准教授)が，4 年～6 年（計 403 名）を対象に，テーマ設定，調査方法と分析，プレゼンテーション指導及び優秀者発表会における講評を行った。
・以下，大学研究室におけるインターンシップに 4 年生徒が参加した。人文学研究科（心理学）6 名，文学研究科 5 名，国際人間科学部 6 名，海洋底探査センター3 名，医学研究科 11 名，工学研究科 2 名，都市安全研究センター8 名，農学研究科 17 名，国際協力研究科 20 名，海事科学部 1 名，海洋安全システム科学科 3 名　計 82 名。

②国際交流支援

・文学部の支援で，オックスフォード大留学生との交流(6 月)を実施した。(4，5 年 249 名対象)
・SGH 集大成のイベントとして，神戸大学主催「Global Forum」を神戸大学百年記念館（六甲ホール）にて開催。シアトル ICS 生徒 24 名，ベトナム FLSS 生徒 4 名を受け入れ，国際的課題についてグループでディスカッションし，提言をプレゼンテーションにまとめて発表した。
・神戸大学ジャンモネ COE 主催シンポジウム（7 月）を本校で開催，1～5 年 41 名が参加。講師①：神戸大学経済学研究科　吉井昌彦教授（兼副学長，Jean Monnet Chair)，演題：「EU の移民・難民問題とポピュリズムの台頭」，講師②：神戸大学大学院国際文化学研究科　坂井一成教授，演題：「Brexit 後の日英・EU 関係」

③調査研究の支援

・石川慎一郎監修「グローバルキャリア人意識調査」を全学年（784 名）を対象に 12 月に実施。
・林創監修「批判的思考力テスト」を 4～6 年（409 名）を対象に 7 月に実施。

④高大連携事業

・4 月　　神戸大学農学部との連携講座（6 年生 9 名参加）

・6～7 月　神戸大学連続リレー講座(6 日間：4，5 年希望者)　79 名参加。
・11 月　神戸大学文学部（心理学）連携授業(1～5 年生希望者)　60 名参加。
・11 月　科学技術振興機構等「サイエンスアゴラ in KOBE～科学・技術って誰のもの」1 年生から 5 年生 44 名参加。5 年生 1 名パネリストとして登壇。
・2 月　神戸大学発達科学部　NGO「PEPUP」学生代表　小畑美優子氏らによる「国際協力講話」フェアトレードワークショップを本校「ESD Food プロジェクト」の取組の一環として本校で開催。1～5 年 47 名参加。
・3 月　神戸大学農学部との連携講座（5 年生 10 名参加予定）

＜成果の普及＞
・課題研究優秀者発表会を大学講堂・施設で行うと共に，文化祭及び授業研究会・SGH 第 5 年次報告会においてポスター発表，口頭発表を行うことにより保護者，地域の学校関係者，大学関係者等の参加者を拡大した。また，大学広報誌，SNS ニュースなどを通して学内外に周知した。
・附属中等の SGH 年次報告会，授業研究会での成果の普及活動に大学教員が協力した。
・グローバルキャリア人意識調査について，各種報告書に記載配布したほか，全国国立附属学校連合会高等学校部会，他校研究会（広島県立福山誠之館高等学校），教育関係セミナー(大阪大学，日本教育新聞)等で発表した。

＜成果と課題＞
・神戸大学と附属中等教育学校の一体的運営による SGH 事業の推進は，上記①～③の各分野で順調に進展した。

２　研究開発の実績

２－１　課題研究

（１）　実施日程　●は新型コロナウィルス感染症対応策による休校措置で実施できず。

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①課題研究の実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●
②独自科目の設置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●
③科目領域への再編					○				○			●
④教科，新教育目標の策定		○			○			○	○	○	○	●
⑤グローバルフォーラムの運営	○	○	○	○							○	

（２）　実績の説明

①課題研究の実施

Kobe ポート・インテリジェンス・プロジェクト(以下「KP」:「総合的な学習の時間」)を利用し，全体テーマ『神戸から発信する「地球の安全保障」への提言』のもとに，次の 4 研究領域を設けて取組んだ。

Ⅰ　震災・復興とリスクマネジメント　　Ⅱ　国際都市「神戸」と世界の文化
Ⅲ　提言：国際紛争・対立から平和・協力へ　Ⅳ　グローバルサイエンスと拠点都市「神戸」

今年度，教員の推進体制では論文の評価ルーブリックの整備がさらに進んだ。当該生徒全員が論文を提出した。ただし，3 月 13 日に予定していた 5 年生の中間報告会（ポスター発表）は新型コロナウィルス対応に係る臨時休業のため実施できなかった。

＜課題研究Ⅰ＞　4 年(8 回生)　113 名対象

4 月　共通学習：ガイダンス，大学図書館オリエンテーション，先行研究調査

5 月　テーマ相談会

共通講義「講座別課題研究に向けて」神戸大学大学院人間発達環境学研究科　林創准教授　※8 講座編成。

6～8 月　講座別課題研究，研究計画に基づく調査・実験

共通講義「情報収集と分析－統計的視点より－」神戸大学大学院人間発達環境学研究科　林創准教授

9 月～12 月　調査・実験，論文構想，発表準備，論文執筆

共通講義「プレゼンテーション力」本校教員

講座内中間発表，4KP 全体発表会，

1 月　優秀者発表会（大学講堂）（林創准教授講評），8,000 字論文提出

2 月　共通講義「卒業研究テーマ設定」神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター　石川慎一郎教授

3 月　課題研究へ向けての概要説明，5KP のポスターセッション見学→中止

＜課題研究Ⅱ＞　5 年(7 回生)対象　136 名対象

4～5 月　ガイダンス・テーマ相談会：講座内テーマ設定　講座担当決定　4 研究領域 19 講座編成

共通講義「テーマ設定」石川慎一郎教授

6～ 7 月　共通講義「「アンケート・統計手法」　林創准教授，　6 年優秀者発表会見学

9～12 月　夏休みの成果発表，講座内での論文指導，論文書式，評価の観点等の提示

1～2 月　共通講義：「論文作成に向けて」本校教員　講座内中間報告

一次論文提出（18，000 字）

2～3 月　ポスター作成・発表準備，　3/13 課題研究中間発表会→中止

＜課題研究Ⅲ＞　6 年(6 回生) 160 名対象

4～6 月　全体ガイダンス：第一次論文の加筆修正・日本語要約作成　最終論文提出

7 月　共通講義「プレゼンテーションの方法」　（本校教員）最終発表会

課題研究優秀者発表会（大学講堂）（石川教授・林准教授講評）

9 月～11 月　英文要旨執筆指導

2 月　優秀論文集発行

②独自科目について

「ESD」「国際理解」は，課題研究を支える科目として 3・4 年で継続実施した。社会科との関連性が高いことから，社会科系分野・科目を横断的に編成し「目標」を位置付けている。

＜3 年：ESD＞　対象 131 名

社会科の枠内で実施。社会科系各分野を横断的に扱うと共に，理科・情報・栄養教諭が協力している。今年度は，「共創 co-creation」を基盤とした授業を実践した。

＜4 年：国際理解＞　対象 113 名

「現代社会」1 単位分を充当。中学社会及び ESD 等の履修内容を踏まえ，先進国と途上国の関係

性に中に位置付けつつ，模擬国連等の形態を意識した「主題学習」として深い学びを組織した。

③横断的学習

教科の枠組みを残しながら，「対話表現」「数理探究」「生活環境」「地球市民」の 4 教科領域を編成し，協力関係を強化している。「生活環境」では保健体育科教員，養護教諭，栄養教諭が大学，保護者と連携し，生徒のよりよい生活習慣を目指した調査・研究を進めた。

④教科新教育目標

次期学習指導要領を踏まえながら，教科共通の能力として，「知識・理解」「技能」「思考力」「課題探究力」「グローバルキャリア力(国際人的素養)」の 5 観点(指導要録等公的評価には 4 観点に読み換え)を教科共通の学力要素として「教科新教育目標」を整備し，2 月の授業研究会にて授業公開，実践発表を行った。

⑤グローバルフォーラムの実施

本校 SGH 集大成のイベントとして神戸大学百年記念館（六甲ホール）にて開催。シアトル ICS 生徒 24 名，ベトナム FLSS 生徒 4 名を受け入れ，本校滞在中に授業体験や文化交流も行うと共に国際的課題についてグループでディスカッションし，提言をプレゼンテーションにまとめて発表した。

＜成果の普及＞

・課題研究発表会（Ⅱのポスター発表は中止）を行って，研究成果を保護者，下級生（624 名）及び他校生徒（一部生徒：全国高校生フォーラム，他校課題研究発表会，大学学生会議，「国際問題を考える日」等）（約 500 名）に普及した。優秀作品については，優秀者論文集を発行し下級生の論文執筆に役立てた。

・校内でのポスター展示（約 70 点）を充実させた。校外での SGH 発表会，各種学会等で延べ 18 名が発表を行った。

・課題研究及び「ESD」「国際理解」「海外研究」については，SGH 年次報告会及び授業研究会で公開し，延べ 74 名の参観者を得た。

・書籍の刊行・普及

昨年度刊行した『探究の力を育む課題研究－中等教育における新しい学びの実践－』（学事出版：大学教員 2 名，本校教員 7 名うち 2 名は元教員）を用いた教員研修を行うと共に，普及に努めた結果，10 月に第 2 刷が公刊された。

＜成果と課題＞

・課題研究では指導体制や指導方法・評価方法の改善が進んだ。より詳細なルーブリックの改訂も行った。優秀論文選考方法については，さらに検討する必要がある。

・課題研究と教科学習の連関した取り組みが進んだ。課題研究領域や ESD をテーマに授業を行った教員が 66%に達し，教員の 77%が，課題研究と教科学習の間で相乗効果があったと評価している。また，次期学習指導要領を踏まえつつ，全教科で「課題探究力」の育成を観点に掲げ，「主体的・対話的で深い」学習を幅広く展開した。

・海外研修についても事前事後学習の進展があったが，課題研究との関係性をさらに深める必要がある。

２－２　グローバル・アクション・プログラム

（１）　実施日程　●は新型コロナウィルス感染症対応策による休校措置で実施できず。

業務項目	実施日程											
＊事前事後学習を含まず	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①リーダーセミナー等の実施			○	○			○	○			○	●
②課題認識育成プログラム			○		○		○	○	○			●
③国内課題研究プログラム		○		○	○	○	○	○	○	○	○	●
④海外課題研究プログラム			○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑤グローバル体験評価制度							○				○	●
⑥グローバル体験の普及		○	○	○		○		○	○		○	●

（２）　実績の説明

「グローバル・アクション・プログラム」（GAP）は，その性格から次の４種類に分類している。各事業の到達点を明確にすることで，グローバルキャリア力を段階的に養成しようとの考えからである。課題研究とも連関性が高く，目標の高いＣの GAP を「課題研究アクション・プログラム」と位置付けている。

Ａ　グローバルな課題認識に教養面からアプローチするプログラム

Ｂ　国際交流体験,語学研修等を通して課題認識を育成するプログラム

Ｃ　明確な課題認識を持った上で，認識を深化させるプログラム＝課題研究アクション・プログラム

Ｃ１課題研究アクション・プログラム：国内　Ｃ２課題研究アクション・プログラム：海外

①Ａ　教養面からアプローチするプログラム

＜神戸大学講座＞　延 158 名参加。

・4 月・3 月　　神戸大学農学部との連携講座｛6 年生 9 名参加，5 年生 10 名参加予定｝

・6～7 月　神戸大学連続リレー講座(6 回：4・5 年希望者)＊前述 79 名参加。

・11 月　神戸大学第 15 回連携授業（文学部心理学）神戸大学文学部　准教授　野口泰基氏「心理学のウソ・ホント」　（全学年希望者）60 名参加。

＜グローバルリーダーセミナー＞　　計 4 回延 180 名参加。

・7 月　神戸大学大学院経済学研究科　吉井昌彦教授「EU の移民・難民問題とポピュリズムの台頭」国際文化学研究科坂井一成教授「Brexit 後の日英・EU 関係」（兼 2019 年度神戸大学ジャンモネ COE 主催「高校生向けミニシンポジウム」）（全学年希望者）41 名参加。

・7 月　独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構金属資源開発本部　特命参与　辻本崇史氏　「金属資源講話」（全学年希望者）48 名参加。

・11 月　国立研究開発法人科学技術振興機構科学コミュニケーションセンター・神戸医療産業都市・京コンピューター一般公開特別企画「サイエンスアゴラ in KOBE～科学・技術って誰のもの？～」（全学年希望者）44 名参加。※本校 5 年生パネリスト登壇

・2 月　神戸大学 NGO PEPUP 学生代表神戸大学国際人間科学部 3 回生　小畑芙優子氏「国際協力講話」※フェアトレードワークショップ（2 月）（全学年希望者）47 名参加。

②Ｂ．　国際交流体験,語学研修等を通して課題認識を育成するプログラム（計 224 名参加）

＜海外研修＞

・7月　カナダ語学研修(3・4年)　30名参加。
・9～10月　シドニー修学旅行(5年全員)　135名参加。

＜国内研修＞

・8月　PDA高校生即興型英語ディベート合宿大会(4,5年)　10名参加。
・3月　PDA中学生即興型英語ディベート全国大会（オンライン会議）(2,3年)　4名参加。
・10月　ハノイ国家大外語大附属高受入れ(4・5年)10名参加。
・11月12月　神戸在留中高生交流(カナディアン・アカデミイ)(3, 4年)　24名参加。
・12月　**神戸市国際協力交流センター主催。**「KOBE COMMUNITY FORUM」(1～4年) 11名参加。

③C1.　国内課題研究プログラム（計166名参加）

・7～8月　オックスブリッジ英語サマーキャンプ(3～5年)　24名参加。
・通年　ユネスコ関連事業「ESD　Food プロジェクト」(フードバンク関西，コープこうべ，神戸大学と連携）(1～5年)　53名参加。
・通年　アートマイル国際協働学習プロジェクト（交流相手校：サウジアラビア Al Hussan International School Al Knobar ）(2～4年)　27名参加。
・通年　「震災・復興・減災宮城交流プログラム(DR3)」　(宮城教育大学，宮城県多賀城高等学校，滋賀県立守山高等学校，尼崎市立武庫東中学校，NECネッツエスアイと連携)(4～5年)　14名参加。
・8月　臨海実習（神戸大学内海域環境教育センター（KURCIS）と連携）(3～5年) 15名参加。
・8月　数学・理科甲子園ジュニア兵庫県大会（兵庫県教委主催）(2年) 3名参加。
・8月　近畿・北陸地域ASPnet校（小・中・高）による日・中ESD/SDGs学びあい交流会（1, 2, 5年）　4名参加。
・兵庫県中学生水の作文コンクール（1年）3名参加。{1名「優秀賞」(第2位）入選}
・ ESD実践研究集会（ESD推進ネットひょうご神戸）分科会で「ESD Foodプロジェクト」の取組を発表）(3年) 3名参加。
・ 11月　全日本高校模擬国連大会　議題：「死刑モラトリアム」ノルウェー大使を担当（4年）2名参加。
・ 12月　全国高校生フォーラム（5年）1名参加。
　　（※「アジア高校生架け橋プロジェクト」のタイ留学生1名参加。）
・ 12月　WWL等課題研究交流発表会：神戸市立葺合高校（4・5年）4名参加。
・ 1月　サイエンスフェアin兵庫（兵庫「咲いテク」事業推進委員会）(5年) 1名参加。
・ 2月　DR3神戸・宮城交流　宮城県被災地視察，大川小学校訪問（4～5年）7名参加。
・ 2月　高校生国際問題を考える日（兵庫県教委，大阪大学）(5年) 5名参加)

④C２.海外課題研究プログラム（計27名参加）

・7・8月　文科省派遣事業トビタテ！留学JAPAN国際ボランティア（ベリーズ）(5年) 1名参加。
・7・8月　中高生マレーシアワークキャンプ(ボルネオ島植林活動）(5年) 1名参加。
・10月　米国シアトル研修Global Science in Seattle：ICS(4年) 5名参加。
・11月　ベトナムハノイ研修：ハノイ国家外国語大学附属外国語英才高等学校交流(4年) 6名参加。
・12月　台湾Asian Student　Exchange　Program (ASEP)高雄師範大学附属高級中学と協働プレゼンテーション大会に出場(4, 5年)
　　5名参加。
・1月　カンボジア研修（JICA事務所及び関連施設，プノンペン日本人学校訪問）(4・5年)

5名参加。

・1～2月　英国ロンドン・ケンブリッジ研修（コンバートン・ビレッジ・カレッジ交流（5年）4名参加。

⑤グローバル体験評価制度

・GAPの各プログラムへの参加度・達成度を評価するマイレージ制度(kmi単位で付与)を適用している。算定には，各プログラムの目標設定度，選考方法，テーマ・場所・日数等を考慮した。

＜成果の普及＞

・全校集会(始業式・終業式等を含む)，文化祭，オープンスクール，GAP報告会，学年集会，SGH第5年次報告会等で報告した。

・SGH年次報告会，ホームページや出版物(報告書，論文集，大学広報誌)等を通して，②③④については，学内外に広報した。

＜成果と課題＞

GAPをはじめとするグローバル体験については，軌道に乗り，事前事後学習も充実し，英語による発表・対話活動も増加した。ただし，交流校の財政上の問題から予定していた受け入れが実施できなかったプログラムもある（英国CVC受け入れ)。また，本校においてもSGH終了後の交流校の受け入れ・派遣共に財政問題をどうするかが課題である。

２－３　高大一体による調査研究

（１）　実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①グローバル意識の調査・分析									○	○	○	○
②SGH事業評価												○
③各プログラムの調査・分析	○				○				○	○	○	○
④教員研修・自己評価	○	○		○		○	○	○		○	○	

（２）　実績の説明

神戸大学の多面的な支援については，「(１)管理機関の取組・支援実績」のところで記した。ここでは「調査研究」を中心に略述する。ただし，新型コロナウィルス感染症対応策による休校措置で3月に予定していた生徒及び保護者対象のアンケート等が実施できないなど事態が起きており，SGH指定5年間を振り返っての事業の評価・検証ができなかった。

①グローバル意識の調査・分析

平成25年度より,石川慎一郎教授の助言を受け「グローバルキャリア人」に関する意識調査を継続実施しており，本年度も12月に行った。

②SGH事業評価

・教員を対象にアンケートを実施。

③各プログラムの調査・分析

・GAPについては，事業ごとの統一報告書を作成し，事業評価を実施した。

④教員研修・自己評価

・教員研修（新学習指導要領，アクティブ・ラーニング，SDGs，評価等）については，全体研

修会を利用して，年 10 回実施した。

＜成果の普及＞

・グローバル意識調査結果については，テキストマイニング方式を用いた調査方法自体が注目されており，各種報告書に記載配布したほか，全国国立附属学校連合会高等学校部会，他校研究会（広島県立福山誠之館高等学校），教育関係セミナー(大阪大学，日本教育新聞)等で発表している。

＜成果と課題＞

組織改革が機能し，SGH への教員の参加意識は高い。また，生徒の「グローバル意識調査」や SGH 事業評価を行うことで，SGH 事業の分析・検証・評価を行うことが可能になった。課題は，一部項目に関して，生徒・保護者への説明が不足していることである。

２－４　組織整備，広報活動

（１）　実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①組織整備・運営	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
②広報活動		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
③予算執行			○	○		○	○	○	○	○	○	

（２）　実績の説明

①組織整備・運営

・学校の横断的組織(事務員参加，教員組織である教科・分掌を越える)グローバル教育推進室を毎月定例開催した。)

・課題研究，批判的思考力，及び SDGs をテーマにした校内研究会を 3 回開催した。

・運営指導委員会を 2 回(9 月・2 月)開催した。

②広報活動

・10 月『探究の力を育む課題研究』（学事出版）が増刷された。

・8 月　大阪大学及び日本教育新聞社・株式会社ナガセ主催のセミナーで本校教員が「探究」の指導に関する講演を行った。

・12 月　本校の探究活動の取組が掲載された『高等学校「探究的な学習」実践カリキュラム・マネジメント』（稲井達也編著）が学事出版より公刊された。

・2 月　SGH 年次第 5 年次報告会及び授業研究会を開催し，約 350 名の参加を得た。
『SGH 第 5 年次報告会当日資料』を刊行した。
『SGH 課題研究優秀論文集』を刊行した。

・3 月　『SGH 研究開発実施報告書（第 5 年次)』を刊行した。

・生徒の活躍の様子をホームページに掲載した。

③予算執行

・ほぼ予定通り執行した。一部不足分については大学経費で執行した。

＜成果と課題＞

・全体に順調であるが，ホームページの更新及び英語版のホームページ作成等，広報活動の改

善が遅れている。より一層丁寧な広報活動が必要である。

３　平成 31 年度目標の進捗状況，成果，評価

令和１年度事業計画に基づく事業の「進捗状況，成果，評価」について，以下に記載する。神戸大学の支援・協力を得ながら,全体として順調に進行している。一方，依然として活動成果の発信及び広報活動で不十分な点がみられる。SGH 指定終了後も必要な改善を図りたい。

	事業	年度当初の課題	進捗状況，成果，評価(△肯定的▼課題有)
A 課題研究を核とする教科横断型体系的グローバル人材育成カリキュラムの開発	A1 課題研究の実施	論文作成各段階（課題設定，調査，概括，執筆，発表）における目標設定の更なる改善を行うと共に，評価基準についての教員意識の平準化を図る。	順調に進捗した。 △論文の評価ルーブリックの改善が図られた。 △評価基準についての教員間格差が，ある程度是正された。
	A2 独自科目設置	課題研究の研究領域と「ESD」「国際理解」の連関性をさらに深める。SDGsを意識しつつ主題学習を発展させる。	順調に実施した。 △SGH年次報告会の評価から独自科目内容の深化がみられる。また，「ESD」については，SGH指定終了後も教育課程に位置付けることが決定した。
	A3 科目の領域への再編	新学習指導要領を踏まえた教科「新教育目標」を実践する。生徒の「主体的で対話的な深い学び」が実現するよう，SGH実践を梃に教科改革・授業改革を行う。	順調に進捗した。 △授業研究会等において，教科単位でSDGsを意識し，教科横断的実践が広がり，引き続き課題研究と教科学習の相乗効果がみられた。
	A4 Global Forum	神戸大学主催 「Global Forum」を開催し，各交流校との交流実践を基に内容協議を行うと共に，フォーラムを成功させる。	順調に進捗した。 △4校との交流協定締結に基づく研修交流が充実し，フォーラムへの布石となった。 △シアトルICS生徒24名，ベトナムFLSS生徒4名を受け入れ，国際的課題についての提言をプレゼンテーションにまとめて発表することができた。
B 国内外での圧倒的なグローバル・アクション・プログラム	B1 国内グローバル体験	事業継続のため,GAP成果の普及機会を拡充する。マンパワーも考慮し，諸企画を整除すると共に,支援体制を講じる。	順調に進捗した。 △活動報告を継続的に行うことで，アートマイル，ESD Food プロジェクト，新規事業，ESD関連事業が継承・発展した。
	B2 海外グローバル体験	事業継続のため,GAP成果の普及機会を拡充する。海外研修と課題研究との関連性をさらに深める。また海外受入れ事業との内容的関連を強化する。	ほぼ順調に進捗した。 △事前・事後学習を強化し，課題研究との関連性が深まるケースが増加した。 ▼海外受入れ事業との内容的関連の面では課題を残した。

(GAP)の実施	B3　グローバルマイレージ	生徒の「学びの履歴」総体の中に個々のプログラムを位置付け,それに応じて GAP マイレージの修正を図る。	ほぼ順調に進捗した。 △「学びの履歴」との関係性を周知したことで，全体にマイレージ制度に対する生徒・保護者の理解が進んだ。
C 高大一体による実践を支える確かな調査研究の推進	C1 アンケート実施･分析	グローバル意識調査と教科教育の連関について分析を進める。全体調査と GAP 等の個別調査結果を連関させる。	ほぼ順調に進捗した。 △統語分析ソフトの活用等，本校教員の調査分析技術が向上した。 ▼プログラムによっては，課題を残した。
	C2 総合的生徒評価システム	グローバルキャリア力と教科学力を組み合わせた評価法を広く実施する。高大接続研究に伴う検証・評価を実施し，「志」特別入試にデータを提供する。	ほぼ順調に進捗した。 △課題研究の評価ルーブリックを参考にした各教科におけるルーブリック作成が進展した。 ▼高大接続研究に伴う検証・評価については，遅れがある。
	C3 教員自己評価	教育プログラムのPDCAのため,教員自己評価を継続すると共に，教科における自己評価の改善を図る。	ほぼ順調に進捗した。 △新学習指導要領研修及び教科目標づくり，公開授業等を通して，SGHへの教員自身の自己評価が高まった。 ▼一部教科，教員レベルで遅れがある。
	C4 教員研修	新学習指導要領を踏まえ学校教育改革と連動させた教員研修を行う。また，大学教員の助言を得るため｢研究アドバイザリー制度｣の拡張を図る。	ほぼ順調に進捗した。 △新指導要領とSGHの関連についての研修を実施し，教員研修の改善を図った。 ▼英語科で実施している｢研究アドバイザリー制度｣は拡張できなかった。
D ※前記課題を遂行できる実施体制	D1　グローバル教育推進室	室員数を縮小し運営の効率化を図ると共に，計画の早期決定と業務分担の合理化を図る。	順調に進捗した。 △実務の一体的運営が進展し，計画等の立案・周知が改善された。
	D2 広報活動	『探究の力を育む課題研究』を活用する。保護者への周知方法の改善，ホームページ(和・英版)等の迅速な更新及び内容の充実を図る。	ほぼ順調に進捗した。 △『探究の力を育む課題研究』を活用し，円滑な実践に寄与した。 ▼活動報告についてホームページへの掲載が一部のプログラムにとどまった。
	D3　予算執行	予算が縮減する中，重点配分と事業の自立についての検討を継続する。円滑な執行のため，事務室との協議を定例化する。	ほぼ順調に進捗した。 △SGH終了後を想定し，予算の減少に対応した支援体制の見直しを行った。 ▼SGH終了後の運営と予算確保についての見通しについては課題を残した。

２章　各分野の実施報告

１　「課題研究」について

（１）課題研究の位置付け

本校はもともと総合的な学習の時間を「Kobe ポート・インテリジェンス・プロジェクト（以下 Kobe プロジェクト)」と称し，6 年間で一貫したリサーチリテラシーの育成を図ってきた。6 年間を 2-2-2 学年単位で分け，「探究入門(1・2 年)」,「課題学習(3・4 年)」および「卒業研究(5・6 年)」として，段階的に育成することをねらいとしていた。

卒業研究では，生徒が中等教育学校 6 年間を通して学び体験してきたことを踏まえ，主体的に「研究テーマ」を設定し，蓄積してきた知識や技能，思考力を総動員する。卒業研究は「グローバルキャリア人の育成」をめざす附属中等教育学校教育の総仕上げと位置付けられている。

平成 27 年度 SGH 指定を機に，研究主題に「地球の安全保障」を掲げ 5・6 年生で実施している卒業研究の時間を「課題研究Ⅱ・Ⅲ」とした。さらに 4 年生で実施している課題学習（実態は卒業研究入門）を「課題研究Ⅰ」として，課題研究の指導体制の充実を図った。

（２）本年度の取組

１）「課題研究Ⅰ」について

課題研究の入門的位置付けとして実施している。前期課程での探究活動を基礎に，「グループから個人へ」「学習から研究へ」の転換を図ることを目的としている。

1 年間の活動は大きく 2 段階に分けられる。第一段階は，「課題研究とは何か」を理解するための学年共通の取組である。共通テキストとしては，山田剛史，林創著『大学生のためのリサーチリテラシー入門』(ミネルヴァ書房，2011 年)，林創・神戸大学附属中等教育学校編著『探究の力を育む課題研究－中等教育における新しい学びの実践－』(学事出版，2019 年）を用いている。特に，「課題発見力」，「情報収集力」，「書く力」に関わる 6 章を重点的に学ぶ。また，両書の著者でもある神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授の林創先生より直接指導を受けた。

第二段階は，各個人の興味に基づき個人で研究できる力をつけることである。ここでは，8 名の担当教員が 113 名の生徒を対象に個別に講座を開講し，生徒たちは教員のアドバイスを受けながら研究し，各講座での中間発表，8，000 字程度の論文執筆，プレゼンテーションソフトを用いた最終発表を行う。これらの活動を通して，5・6 年生が行う「課題研究Ⅱ・Ⅲ」につなぐ。

２）「課題研究Ⅱ」について

研究課題は 4 研究領域（震災・復興とリスクマネジメント/国際都市「神戸」と世界の文化/提言：国際紛争・対立から平和・協力へ/グローバルサイエンスと拠点都市「神戸」）を参考に，各個人がより限定した課題を設定し臨んでいる。課題テーマが比較的類似している生徒 7～8 名程度を，担当教員がゼミ方式で指導している（136 名の生徒を 19 名の教員で担当)。研究は個人で進め，最終的には 18，000 字程度の課題研究一次論文（卒業研究一次論文）を提出する。

実際の研究指導にあたっては，課題報告等を提出させたりすることで，全体のペースを設けている。授業時間中は，研究の進捗状況を報告すると共に,生徒同士で議論し研究を主体的に進めていくことを目標としている。また，論文の添削や研究相談については，「卒業研究アドバイザー」として神戸大学大学院生のティーチング・アシスタント（TA）の支援も得ている。

３）「課題研究Ⅲ」について

課題研究Ⅱのテーマを継承しつつ，中間論文を最終論文として完成させると共に，和文・英文の要約を作成する。また，全員が最終発表会でパワーポイント等を用いたプレゼンテーションを行って研究活動を締めくくる。最終発表会には下級生や保護者を招くと共に，優秀者発表会を開催し，優秀な研究の紹介を行っている。

資料Ａ　課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの実施計画（内容と指導の方針）

※詳細は，SGH 第 5 年次報告会「総合的な学習の時間」研究協議会配付資料各学年シラバスを参照されたい。

「課題研究Ⅰ」

時期	内容	指導の方針
4 月	ガイダンス「卒業研究を始めるにあたって」・大学図書館オリエンテーション	「研究」と「調べ学習」の違いを理解し，「研究とは何か」ということについて学ぶ。また，中等生として研究を行うことの意義や目的について学ぶ。先行研究や図書館の利用も含む情報検索の方法について学ぶ。
5 月	先行研究調査・情報検索について	
6 月	共通講義（課題設定）	社会的意義のある課題を設定し，調査や実験などの研究計画を立てる。
	課題の設定・研究計画書案作成	
	課題の設定・研究計画案決定	
7 月	6 年生卒業研究発表会見学	先輩のモデルを見てプレゼンテーションソフトを用いた口頭発表について学ぶ。
	共通講義「夏休みに向けて」（研究計画に基づく調査・実験の進め方）	研究計画に基づき文献調査や実験を行い,8,000 字程度の論文にまとめる。
8 月	研究計画に基づく調査・実験及び論文作成	
9 月		
10 月	講座内中間報告・論文（8,000 字）作成	作成している論文を基にプレゼンテーションソフトを用いた口頭発表を行う。 発表で得られたフィードバックを基に論文を修正し,最終稿として提出する。
11 月	講座内発表準備	
12 月	課題研究Ⅰ論文発表会（口頭発表）	
	論文加筆修正・最終稿提出	
1 月	課題研究Ⅰ優秀者発表会（口頭発表）	
2 月	課題研究の検証，卒業研究のテーマ（仮）設定	自身の研究を検証し，卒業研究に向けた課題を設定する。
3 月	5 年生卒業研究中間発表会見学	先輩のモデルを見て「ポスター発表」について学ぶ。

「課題研究Ⅱ・Ⅲ」

時期		内容	指導の方針
5 年生	4 月	共通講義（テーマ設定）・仮テーマ提出	テーマに関連した先行研究を調査し,自分の研究で解決する「問い」を立てる。
	5 月	所属講座（ゼミ）決定	
	6 月	ゼミ	
		共通講義（アンケート・統計手法）	アンケートの質問紙作成法及び収集したデータの処理について学ぶ。
	7 月	6 年生卒業研究発表会・優秀者発表会見学	先輩のモデルを見てプレゼンテーションソフトを用いた口頭発表について学ぶ。
		共通講義（アンケート・統計手法）・ゼミ	「問い」について,研究史をたどり，必要なデータを収集・分析する。
	8 月	夏休み	

	9月	夏休み課題掲出（各ゼミ）	指定された書式を基に論文の体裁を整える。 ※体育大会，修学旅行，合唱祭等の学校行事で集中して取り組むのが難しい時期でもある。
	10月	ゼミ	
	11月	ゼミ	
	12月	ゼミ・研究進捗状況報告会	
	1月	ゼミ・論文執筆	これまでの研究をまとめ，より論文の一貫性や結論の妥当性を高めるために再検討し，必要なデータをさらに集める。
		一次論文（18,000字）提出	
	2月	共通講義（ポスター作成・プレゼンテーション）	
		中間発表会（ポスター発表）準備	
	3月	中間発表会（ポスター発表）	
6年生	4月	論文修正	論文の構成や体裁をきちんと整えていくなかで，必要に応じて追加のデータを集める。
	5月	論文修正	
	6月	最終論文（18,000字）提出	
	7月	最終発表会（口頭発表）準備	全体発表に向け，講座内でリハーサルを行い，フィードバックを基にスライドや発表原稿の修正を行う。
		最終発表会（口頭発表）	
		優秀者発表会	

※英文要旨の作成は「英語表現Ⅱ」の授業の枠組みで行う。

（３）改善点と課題

１）「課題研究Ⅰ」について

・昨年度の改善経験がさらに蓄積され，課題設定の指導法やPC等の改善が一定進んだ。
・各教員が多数の生徒を担当するため，生徒一人一人に対して丁寧な指導を行うことが難しい。
・設定時間内では，生徒個々人が実地調査を行ったりする時間を確保することが難しい。

２）「課題研究Ⅱ・Ⅲ」について

・研究手法や評価方法について，教員間の共通理解が進んだ。
・校内・校外の「ヒトを対象とする調査に係る研究倫理の審査」についての手続きを確立した。
・生徒の研究が進むとよりテーマが細分化されるため，教員個人の技量に負うところが多い。
・週1回の時間設定のなかでは，生徒の活動時間は足らないため，時間外を含めて生徒がより自律的に研究を進めていけるようにする必要がある。
・中間論文提出前に教科課題が多く出されることもあり，全校的視野から生徒の負担軽減措置を講ずる必要がある。

（４）課題研究（卒業）論文の評価

一昨年度，課題研究(卒業)論文の指導にあたって，「論文の目標を明確化し指導に生かすこと」と「可能な限り公平な評価を行うため」に評価規準と評価基準(ルーブリック)を作成した。（本校『SGH研究開発実施報告書第1年次平成27年度』pp.28-29）さらに，一昨年度から論文評価の基準（チェックリスト及びルーブリック）を整備した（資料1)。

資料１　Kobe プロジェクト課題研究（卒業）論文評価チェックリスト及びルーブリック

（１）①表記と②体裁のチェックリスト

①表記

□段落の最初は全角スペース１文字空けられているか
□適切に段落が分けられているか。
□誤字・脱字が１ページあたり１個未満程度であるか。
□すべてのページで明朝体にフォントが統一されているか。
　（タイトルや引用など，理由のあるフォント変更は不問）
□すべてのページでフォントサイズが統一されているか。
　（タイトルや引用など，理由のあるフォントサイズ変更は不問）
□句読点の表記が次のいずれかのルールで統一されているか。
　コンマピリオド（，．）　コンマ句点（，。）　読点句点（、。）
□文法的におかしい文がないか。
□主語と述語がねじれていないか。
□言葉の修飾関係はねじれていないか。
□論文にふさわしい書き言葉で書かれているか。

②体裁

□用紙サイズは A4 か。
□目次には章レベルに加えて節レベルで掲載し，ページ数も載っているか。
□章や節の階層の分け方が論文全体で一貫しているか。
□ページ番号が記されているか。
□最初に（英文の）要約が掲載されているか。
□文章は「である調」に統一されているか。
□図表についての説明が本文中にあるか。
□図表に通し番号がついているか。
□図表にタイトルがついているか。
□引用や先行研究を参照した部分とオリジナルな部分が明確に分かれているか。
□引用・参照の仕方は統一されているか。
□参考文献リストの書き方は統一されているか。
□引用・利用したすべての文献は参考文献リストに載っているか。

※これらのチェックリストは以下の文献を参考に作成した。
・松井　剛「卒業論文の体裁に関するメモ」
　http://www.cm.hit-u.ac.jp/~matsui/stsm.pdf　（2015 年 6 月 7 日閲覧）
・@int 中高一貫校適性検査研究会 2012.11.14「小学生作文評価ルーブリック」
　http://job.intweb.co.jp/sakubun/007.html　（2015 年 6 月 29 日閲覧）

（２）「③構成」と「内容」のルーブリック（第 2 版）

1. 問題提起，研究手法，結論が首尾一貫しているか。（③構成に対応）

(1) 問題提起

A　卒業論文で解決する問いが明確であり，その問いがどのような社会的意義もしくは学問的意義につながっているかが明確に示されている。
B　卒業論文で解決する問いが明確である。
C　卒業論文で解決する問いが何なのか明確にはなっていない。

(2) 研究内容と題目の一致

A　研究内容を必要十分に要約した題目となっている。
B　研究内容を反映している題目であるが，実際の研究内容よりも広い（もしくは狭い）内容を指す題目となっている。
C　研究内容をほとんど反映しない題目となっている。

(3) 問いと研究手法の整合性

A　研究手法が問いに対応し，問いの解決に部分的にでも寄与する研究手法を用いている。
B　（なし）
C　研究手法が問いに対応していない。

(4) 問いと結論の整合性

A　結論が問いに対応し，問いに部分的にでも答えられている。
B　（なし）
C　結論が問いに対応していない。

(5) 研究手法と結論の整合性

A　研究手法で分かったことから結論を導いている。
B　（なし）
C　研究手法で分かったことから関係のない結論を導いている。

2. 説得力のある結論を導くことができているか。（④内容に対応）

(1) データ

S　結論を導き出すのに十分なデータを集めており，それらのデータが（量や質などで）顕著に優れている。
A　結論を導き出すのに必要十分なデータを集めている。
B　結論を暫定的にでも導くことができるデータを集めている。
C　結論を導くにいたるデータを集められていない。
※S は特別に優秀な場合にのみ付ける。

(2) 分析・考察

S　選択した研究手法に応じて，データ分析や考察が十分にできており，それらの分析や考察が顕著に優れている。
A　選択した研究手法に応じて，データ分析や考察が十分にできている。
B　選択した研究手法に応じて，データ分析や考察が部分的にできている。
C　選択した研究手法に応じて，データ分析や考察がなされていない。
※S は特別に優秀な場合にのみ付ける。

(3) 参考文献

A　参考文献や注の書式が統一されている。（著者名等の順序，五十音順，注の頁数の有無）
B　参考文献や注がつけられているが，部分的に軽微な不備がある。（参考にした情報源はわかる）
C　参考文献の引用・参照に方法に不備があり，他人の意見と本人の意見の区別がつきにくい形で書かれている。

(4) 論文にオリジナリティはあるか。

A　オリジナリティのある研究として認められる。
B　高校生なりのオリジナリティがある。
C　オリジナリティはない。

（３）「③構成」と「内容」のルーブリック（第３版）

1. 問題提起，研究手法，結論が首尾一貫しているか

規準	1(1) 問題設定とその意義が明確か。	1(2) 問い→根拠→結論の論文の構造に整合性がある。	1(3) 研究内容と題目が一致しているか。
S 基準			
S 具体的な特徴			
修正方針			
A 基準	卒業論文で解決する問いが明確であり，その問いがどのような社会的意義もしくは学問的意義につながっているかが明確に示されている。	問い→根拠→結論の間の整合性が明確に認められる。	研究内容を必要十分に要約した題目となっている。
A 具体的な特徴		明確に定義された問い対して，調査で明らかになったことと先行研究のみを根拠として，明確な結論を出している。	
修正方針	その問いを解決することがいかに重要であるかを社会的な意義の側面，もしくは学問的な意義の側面のどちらかから明記する。	調査設計の段階，もしくは調査結果がある程度見えてきた段階で，調査内容が問いに答えられるような内容であるかを確認する。必要に応じて調査内容か問いを調整する。 また，得られた調査結果から結論を組み立てる時に，調査結果でわかったことからどこまでは言えて，どこからは言えないか検討する。	研究の問いと根拠と結論がほぼ定まったのち（多くの場合は論文本文がほとんど完成した後）に，この研究で行ったことを広すぎず狭すぎず適切に表す題目を改めて考える必要がある。多くの場合は題目が広くなる傾向があるので，具体的にこの研究で解決した内容や探究した内容を表す題目にする。
B 基準	卒業論文で解決する問いが明確である。	問いに明確に対応した結論を出しているが，A の基準には至らない。	研究内容を反映している題目であるが，実際の研究内容よりも広い（もしくは狭い）内容を指す題目となっている。
B 具体的な特徴		問いと根拠の間の整合性が明確ではないか，根拠と結論の間の整合性が明確でないかのどちらかである。	
修正方針	研究には必ず「問い」が必要であり，その問いを誰が読んでもわかるように明記する。	出した結論が問いに対する答えになっているのかどうか確認し，結論を問いに対する返答になるようにする。得られた結果や考察の内容に応じては，問いの方を微調整して，問いと結論を対応させることもあり得る。	研究で行った内容についての題目を付ける。
C 基準	卒業論文で解決する問いが何なのか明確にはなっていない。	問いに明確に対応した結論を出すことができていない。	研究内容をほとんど反映しない題目となっている。
C 具体的な特徴			

2. 説得力のある結論を導くことができているか

規準	2(1) 研究内容の新規性は示されているか	2(2) 結論に説得力があるか：実験・調査手法や資料収集手法が適切か	2(3) 結論に説得力があるか：得られた結果や情報の分析・考察が適切か
S 基準	学術雑誌に投稿できるレベルの新規性があることが示されている。	全体として，高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を十分に活用して実行された手法であり，さらに部分的には高校のレベルを大きく超えた部分がある手法である。	全体として，高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を十分に活用して行った分析・考察であり，さらに部分的には高校のレベルを大きく超えた部分がある分析・考察である。
S 具体的な特徴	研究内容に過去に行われたすべての研究を超える新規性があることが明確に示されている。	量的研究の場合は，洗練されたデザインの実験で，適切な結果が出れば問いを解決できるような実験であり，実行可能性も高く，検出力も高い実験を行っており，極めて高いレベルの創意工夫がみられる。 質的研究の場合は，問いを解決するのに寄与するような多様な資料を多く利用し，資料による情報や視点の偏りが非常に少ないことが期待できる。	量的研究の場合は，十分な数のあるデータに基づいた結論である。さらに，データの統計的な処理や論理展開などが適切で，先行研究との位置付けも十分に考えられた考察によって結論を導いている。 質的研究の場合は，資料を用いて問いに答えており，反論や他の可能性を考慮した妥当な解釈を行っている。先行研究との位置付けも十分に考えられた考察によって結論を導いている。

修正方針			
A 基準	高校生向け学術雑誌に投稿できるレベルの新規性があることが示されている。	高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を十分に活用して実行された手法である。	高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を十分に活用して行った分析・考察である。
A 具体的な特徴	研究内容に日本で行われる高校・中学・小学の教育課程で教えられる内容を超える新規性があり，これまでに日本語で発表された研究を超える新規性があることが明確に示されている。論文にはどのような範囲で調べたところ新規なのかが示されている。 新規性としては，対象が新しい，手法が新しい，結論が新しいなど，どんな小さなことでも良いので，明確に説明できている	量的研究の場合は，妥当にデザインされた実験で，適切な結果が出れば問いを解決できるような実験であり，実行可能性も高く，検出力も高い実験を行っている。 質的研究の場合は，問いを解決するのに寄与するような資料を一定数利用した。	量的研究の場合は，ある程度の数のあるデータに基づいた結論である。結果からデータの誤差についても適切な考察によって結論を導いている。 質的研究の場合は，資料を用いて問いに答えており，反論や他の可能性を考慮した妥当な解釈を行っている。
修正方針	自分が立てた問いと全く同じ答えが，先行研究では発表されていないことを示す。なお，ごくわずか（対象が違う，手法が違うなど）でも違いを見つければよい。	選んだテーマによって実行可能性という意味での難易度は大きく異なるが，必要に応じて問いを小さくする，対象を明らかに差が出そうなものにするなど，自分の興味がもてる範囲で解決しやすい問いに変更する。	・調査に対して一定以上の努力量を要求する。 ・結果を考察するにあたって，結果の前提となるサンプリングの偏りや他に考えられる可能性などを検討する。
B 基準	研究内容に日本で行われる高校・中学・小学の教育課程で教えられる内容を超える新規性があることが示されているが,日本語で発表された研究を超える新規性があることは示されていない。	高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を部分的に活用して実行された手法である。	高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を部分的に活用して行った分析・考察である。
B 具体的な特徴		量的研究の場合は，妥当にデザインされた実験で，非常に都合のいい結果が出れば問いを解決できるような実験を行っている。 質的研究の場合は，問いを解決するのに寄与するような資料を数は明らかに不十分であるが利用した。	量的研究の場合は，数が少ないデータに基づいた結論であるなどの理由で，結果の誤差について議論することのない単純な考察に基づいて結論を導いている。 質的研究の場合は，資料を用いて問いに答えているが，反論や他の可能性を考慮しない分析を行っている。
修正方針	自分が立てた問いの答えが，直接的な形では教科書やすぐに見つかるような入門書には書いていないことを示す。	調査を行うにあたって，仮説検証型ではない（仮説がない），または探索的調査であるが，観点が定まっていないなど，問いが探究可能な形になっていないと考えられる。よって，仮説や観点を明確に定めた上で，実験・調査や資料の収集を行う必要がある。	・問いに対応した調査を行う。 ・必要に応じて調査結果から言える内容になるように問いを微調整する。
C 基準	研究内容に日本で行われる高校・中学・小学の教育課程で教えられる内容を超える新規性があることが示されていない。	高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方をほとんど活用することのなかった手法である。	高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方をほとんど活用することのなかった分析・考察である。
C 具体的な特徴		量的研究の場合は，この研究で行われた実験では，どのような結果が出たとしても問いを解決することができない。 質的研究の場合は，利用した資料では問いを解決することはできない。	量的研究の場合は，結論を支持するデータがほとんどない，あるいはデータと無関係な議論をするなど不適切な考察によって結論を導いている。 質的研究の場合は，資料を用いて問いや結論と無関係な議論を行うなど，不適切な考察で結論を導いている。

〔新規性について補足〕

※研究のテーマが決まった段階で，先行研究を調査して，文献情報（引用文献として使えるように）とその内容についてメモを残しておくことが必要である。

※先行研究との比較方法については，以下のようなものが例として考えられる。

①本文中で様々な文献を引用しながら，過去の研究で明らかにされていない点を述べる。

②表や図の形で先行研究についてまとめる。

③CiNii Articles（https://ci.nii.ac.jp/）や Google Scholar（https://scholar.google.co.jp/）の検索結果を示して，先行研究といえるものがないことを示す。

２　グローバル・アクション・プログラム（GAP）

（１）グローバル・アクション・プログラム（GAP）の創出

平成 24 年度に後期課程が発足した本校にとって，Kobe プロジェクトを中心に教育課程上の枠組が整っていた「課題研究」に比べて，国際交流事業の展開は遅れており急速に整備する必要があった。

具体的には，帰国生徒受入れの伝統，ローカル＆グローバルな視点に基づく宿泊行事（2 年：奈良，3 年：沖縄，5 年：ロンドン）やカナダ語学研修（4 年）が整備され，着実に成果をあげていたが，生徒の「グローバルな課題認識の育成」という点から考えた場合，まだまだ不十分であった。

そこで本校では，平成 26 年度に SGH アソシエイト校に指定されたのを機に，次のような国際交流事業の急速な展開を試みた。

①留学生受入れ（平成 31 年度までに受け入れた学生の出身国：カナダ，フランス，オーストラリア,フィリピン，フィンランド,タイ，アメリカ，イギリス）

②「グローバルキャリア（海外）研修」実施（シアトル，ブリズベン）

③国際交流校開拓（米国シアトル，英国ロンドン，英国ケンブリッジ，台湾高雄，ベトナムハノイ）

④国内異文化交流事業（「オックスブリッジ英語サマーキャンプ」，「アートマイル国際協働学習プロジェクト」

⑤グローバルセミナー（キャリア，ビジネス，リーダー，アクション）

⑥国際交流ワークショップ（国際学校（カナディアン・アカデミイ）生徒，留学生，JICA 視察団との交流）

事業創出の困難な中での取組は多くの成果をあげた反面，課題を浮き彫りにした。なかでも SGH アソシエイト校としての試行の結果判明した問題点は，各々の事業の到達点があいまいで，かつ，海外研修を除くと，学習の仕上げとなる総括的取組が明確に設定されていなかったことである。また，アジアとの交流の視点が未整備だったことも大きな課題であった。

平成 27 年度より本校では上記事業を「グローバル・アクション・プログラム」として一本化した。国立大学附属中等教育学校としての特性及び神戸大学が有する資産を活かし，課題研究とも連関させながら，国内外での圧倒的な量の事業を創出するとともに，各々の事業の到達点を明確に位置付けることで，生徒のグローバル体験を飛躍的に向上させ，グローバルキャリア力を段階的に養成しようと考えたからである。

（２）グローバル・アクション・プログラム（GAP）の種別

本校の GAP は，その性格から大きく分けて次の 4 種類に分かれる。

Ａ　グローバルな課題認識に教養面からアプローチするプログラム

「グローバルリーダーセミナー」「神戸大学基礎社会学連続リレー講座」などが該当する。

「グローバルリーダーセミナー」は文理様々な分野の専門家を招きグローバルなテーマについて，英語による講義も含め幅広く聴講し，生徒の課題意識を育成することがねらいである。平成 28 年度より前期課程生徒も多く受講している。

神戸大学主催の基礎社会学連続リレー講座は，産業界・官界・政界のトップランナーによるオムニバス形式の講義（「現在の金融システム」,「少子化・IT 化・グローバル化と我が国の将来ビジョン」,「人口減少社会で発展する ための国土づくり」,「海外で仕事をするときに最低限 身に付けておくべき資質・素養とは」,「東日本大震災の教訓と被災地から 見えてきた災害復興の在り方」）を通して「地球の安全保障」に関する諸課題を理解させることを目的としている。なお，連続リレー講座には，

毎回10名以上の本校参加枠があり,生徒の興味・関心に応じて講座を選択させている。

Ｂ　国際交流体験,語学研修等を通して課題認識を育成するプログラム

海外修学旅行（平成28年度まではロンドン，平成29・30年度はケアンズ，平成31年度よりシドニー），カナダ語学研修，「オックスブリッジ英語サマーキャンプ」，米国シアトルのインターナショナルコミュニティースクール（ICS）（平成27年度より隔年受入れ），ベトナムハノイ国家大学外国語大学附属外国語英才高等学校（Foreign Language Specialized School:FLSS）（平成28年度より毎年受入れ),台湾国立高雄師範大学附属高級中学（平成28年度より毎年受入れ),台湾新北市立福和国民中学（平成30年度1日受入れ），ケンブリッジコンバートトン・ビレッジ・カレッジ（CVC）（平成29年度受入れ，ロンドンアランズスクール（平成29年度1日受入れ），JICA視察団及び神戸大学留学生（オックスフォード大学生等）との交流が該当する。

上記事業は，体験や語学研修を通してグローバルな課題認識を育むことがねらいである。英語を活用することの意義も大きい。JICA視察団（途上国教育行政官）との交流では，生徒がアフリカやアジアの開発途上国の教育事情にふれることがきっかけで,グローバルな課題認識に目覚めることも多い。

生徒のグローバル意識調査では，グローバルな課題認識が5年生時に大きく変化することがわかっており，グローバルな課題認識の土台形成にとって，全員参加行事である修学旅行の影響も大きい。

Ｃ　明確な課題認識を持った上で研修に参加し，認識を深化させるプログラム
＝課題研究アクション・プログラム

高度な目標を設定する事業で，C1：国内アクション・プログラムとC2：海外アクション・プログラムに分かれる。多くの場合英語を活用することで，SGHプログラム全体の総括的取組として企図している，神戸大学で実施予定の英語による大規模な「神戸大学主催 高校生グローバルフォーラム」（第5年次）等の開催の前提となる。

Ｃ１　課題研究アクション・プログラム：国内

課題研究テーマとプログラムが直結した次の事業が該当する。

「震災・復興とリスクマネジメント」：神戸・宮城交流プログラム

「国際紛争・対立から平和・協力へ」：全国高校模擬国連大会，全国高校生英語ディベート大会

「地球の安全保障」全般：国際交流壁画共同制作プロジェクト（以下,アートマイル）

神戸・宮城交流プログラムは，研究領域「震災・復興とリスクマネジメント」に関する課題意識と直結したプログラムである。被災地体験を共有する神戸市と宮城県の学生が交流しながら，大規模震災に対するリスクマネジメントについて多角的な視点から学んでいる。

アートマイル国際協働学習プロジェクト（以下，アートマイル）は本校のESDの一環として参加している。本プログラムは海外生徒と「地球の安全保障」に関わる共通テーマで学習し，インターネットを用いた協働学習を行って，巨大壁画を制作する活動を通して，日本の伝統文化と世界の文化を理解しようとする生徒を育成する活動である。平成26年度の住吉校舎第3学年全クラスで取り組んだ交流（メキシコ，台湾，タンザニアの中高生）を踏まえ，平成27年度は生徒会GCC（Global Career Committee）ユネスコスクールアートマイルチームのメンバーで，フランスの高校生と「水」（パリのユネスコ本部で展示）を,平成28,29年度はインドネシアの学校と「平和」と「歴史を通した開発と景観」を，平成30年度は台湾の学校と「生物多様性」を平成31年度はサウジアラビアの学校と「SDGs目標5：ジェンダー平等及び目標11：持続可能なまちづくり」を共通の学習課題としてテレビ会議を行って交流しながら取り

組んでいる。なお平成31年度のプログラムは，SDGsをテーマとした「2020東京オリンピック・パラリンピック」の応援事業として位置付けられており，完成壁画はオリンピック，パラリンピック大会関連会場で展示される予定である。

詳述はできないが，「移民」の受け入れや食料安全保障問題等を論題とした全国高校模擬国連大会，全国高校生英語ディベート大会，社会科討論会等もこの事業に該当する。

Ｃ２　課題研究アクション・プログラム：海外

「国際都市神戸と世界の文化」：Asian Student Exchange Program (ASEP)

「提言：国際紛争・対立から平和・協力へ」：ベトナムハノイ研修，カンボジア研修

※当初の計画ではブリュッセルフォーラム

「グローバルサイエンスと拠点都市神戸」：シアトル研修，英国（ロンドン，ケンブリッジ）研修

課題研究領域との深い関連性のもと実施している。

米国シアトルは神戸市の姉妹都市で，歴史的なつながりがあると共に，現在は，マイクロソフト，グーグル，アマゾンやボーイング等の先端産業都市でもある。平成 27 年度より，「グローバルサイエンス・イン・シアトル」をテーマに，神戸市の協力を得て，マイクロソフトやボーイング社を見学すると共に，インターナショナル・コミュニティースクール(ICS)訪問において，課題研究の成果を発信，以後も同校生徒と交流している。

“Asian Student Exchange Program (ASEP)”（於：台湾高雄市）は，“World Youth Meeting (WYM)”(於：日本福祉大学及び立命館大学)の継続プログラムとして，「国際都市『神戸』と世界の文化」に関連して，平成 27 年度より参加している。“Traveling and Learning”（平成 27 年度），“Pop Culture and Life”（平成 28 年度），“Technology and Learning”（平成 29 年度），Distant Horizons, Close Friends”（平成 30 年度），“SDGs for Students”（平成 31 年度）をテーマに，交流校である国立高雄師範大学附属高級中学にて同校生徒の家庭に滞在しながら協働で発表を準備した後，プレゼンテーション大会で発表した。

研究領域「提言：国際紛争・対立から平和・協力へ」については，当初，EU に関係してブリュッセル研修を企図していたが，パリ多発テロの影響から中止し，平成 27 年度以降は EU についての国内研修（東京）及びカンボジア研修に変更している。カンボジア研修では「識字教育」「水質問題」「地雷撤去問題」「アンコールワット遺跡群」等に関するフィールドワークを行った。

また，平成 29 年度以降は，課題研究に関わって各研修事業で進展が見られた。詳細については，「Ⅱ分科会資料（公開授業＆実践発表）」に記載し，本報告会でプログラム参加生徒が研修の内容について発表する。

（３）GAP マイレージ制度の導入

平成 27 年度より生徒の参加意欲を高め，活動に対する評価制度として，「GAP マイレージ制度」を導入している。この場合「評価」は，「評定」「査定」ではなく，「価値を認める」という意味で使用している。「GAP マイレージ」では，単位をキロマイル（kmi）で表すこととし，卒業までの 6 年間で 25 kmi（初級），50 kmi （中級），100 kmi（上級）を達成してほしいと願っている。ちなみに 100 kmi は約 16 万 km で地球 4 周分の距離に相当する。

①GAP マイレージ（キロマイル数）の算定方法

キロマイル数の算定に当たっては，以下の原則に基づき実施している。

1）参加キロマイル：参加（受講）したうえで，レポート等の課題を提出してはじめて獲得できる。

2）達成キロマイル：当該 GAP の中で，顕著な活動成果が認められる場合に獲得できる。
3）GAP マイレージは，原則として GAP に認定されたプログラムに対し付与する。
4）別表以外の事業も新規に認定する可能性があり，その都度キロマイル数を決定する。
5）GAP マイレージは前期課程（1 年生）から卒業まで適用する。
6）獲得マイル数は，年度ごとに記録・更新する。
7）大学入学等に関する学校推薦にあたっては，積算したキロマイル数を，利用することがある。なお,推薦にあたっては,転校生や GAP 以外で奮闘している生徒が不利にならないように配慮する。

平成 31（2019）年度グローバル・アクション・プログラム（GAP）一覧

◇ 以下の事業は,平成 31（2019）年 4 月から令和 2 年 3 月（予定）までに実施するものである。
◇★印の事業は，本校及び神戸大学の独自企画または，外部団体（他校）主催事業のうち，本校が学校として応募し，取り組んでいる事業である。
◇ 網掛は参加生徒に対する SGH 助成金対象（後期課程生徒のみ対象）事業。
◇ EU ブリュッセルフォーラムへの派遣は連続テロ事件の影響から中止した。
◇ SGH 経費より費用を支援する海外派遣事業への参加は，原則として 1 人年 1 回までとしている。

海外派遣事業						参加
プログラム名	対象学年	参加者	期間	交流校等	実施内容	(kmi)
★ B カナダ語学研修	3・4	30 名	7/20～8/1	現地語学学校	カナダにおける英語・文化研修を通して，英語によるコミュニケーション能力を高め，現地家庭に滞在しながら，大学訪問，現地語学学校研修等を実施する。	15
★ B 神戸市・韓国青少年国際交流事業（大邱）	2～6	2 名 昨年度派遣者	7 月下旬～8 月上旬（3 泊 4 日）	神戸市 大邱広域市	神戸市と韓国大邱広域市の親善協力都市提携事業。今年度は大邱市学生をホームステイで受入れる。現地ではホームステイしながら文化体験活動に参加する。	5
★ C2 トビタテ！留学 JAPAN	4～6	1 名 採用	夏季休業中	ベリーズ 国際ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ	日本学生支援機構の官民協働海外留学支援制度。生徒自身が立案・作成した計画に基づいて短期留学する。	20
C2 中高生マレーシアワークキャンプ	全学年	3 名 採用	夏季休業中	マレーシア ボルネオ島	マレーシア・ボルネオ島で現地住民の収入源でもあるゴムの木を植林する。現地コーディネーターから環境に関する話を聞いたり，植林活動を通して，環境について実体験で学ぶ。現地では 5 泊のホームステイをする。	20
★ B シドニー修学旅行	5	全員	9/30～10/5	シドニー工科大学（UTS）	修学旅行の一環として実施する。交流校にてグローバルサイエンス，バイオ,日豪伝統文化比較,震災復興等について発表・意見交換を行う。	10
★ C2 米国シアトル研修	4	5 名	10/4～13	ICS （中高一貫）	「グローバルサイエンス・イン・シアトル」をテーマに，マイクロソフトやボーイング社を見学すると共に，ICS 訪問において，課題研究の成果を発信・交流する。研修期間中交流校生徒宅にホームステイする。	20
★ C2 ベトナムハノイ研修	4	6 名	11/8～16	ハノイ国家大附属外語大附属外国語英才高校 FLSS （高校生）	現地校生徒との交流及び調査活動を通して，東南アジアにおける平和及び異文化について理解を深めると共に，ベトナムにおける民族独立の歴史，経済発展の成果と課題について学ぶ。交流校生徒宅でホームステイする。世界遺産ハロン湾等も見学する。	20
★ C2 台湾 Asian Student Exchange Program (ASEP)	4・5	5 名	12/23～28	高雄師範大附属高級中学 （高校生）	World Youth Meeting (WYM)(於：日本福祉大学・立命館大学)の継続プログラム。台湾高雄市で開催。高雄市へ移動する前に台北研修も実施する。交流校にて共通テーマに基づき協働プレゼン準備後，本大会で発表する。高雄では交流校生徒宅にホームステイする。	20
★ C2 カンボジア研修	4・5	5 名	1/22～29	JICA 及び関連施設，現地日本人学校	カンボジアの抱える様々な課題について研修する。アンコールワット遺跡群，JICA 事務所，JICA 支援関連施設，プノンペン日本人学校等を訪問し，調査活動を行う。	20
★ C2 英国研修	5	4 名	1/25～2/3	CVC （ケンブリッジ） （高校生）	ロンドン，ケンブリッジでの研修を通して，グローバル社会の伝統と変革及びそれに伴って英国が直面している困難について学ぶ。交流校 CVC での交流活動では，自身の研究についての理解を深めると共に，国際対話力及び英語活用能力の向上を図る。ケンブリッジ滞在中は CVC 生徒宅でホームステイする。	20

国内交流事業						参加
プログラム名	対象学年	参加者	期間	交流校等	実施内容	(kmi)
★ A 神戸大学連続リレー講座	4・5	希望者	6月～7月 全6回	神戸大学	産業界・官界・政界のトップランナーによるオムニバス形式の講義に参加することにより，「グローバル化とは何か」等を理解する。講座を選択受講する。	1日3
★ A 神戸大学文学部との連携授業	1～5	59名 参加	11/16	神戸大学 文学部	神戸大学文学部（心理学）による授業，心理学実験室及び人文科学図書館見学に参加する。（下記グローバルリーダーセミナー参照）	3
★ A 神戸大学農学部との連携授業	6	9名 参加	3月下旬 4月上旬	神戸大学農学部生命機能科学環境生物学コース	「環境浄化に生物機能を応用する技術開発」「蛍光顕微鏡による生分子の1分子計測技術」「土壌成分の化学分析」「電子顕微鏡を用いた作物の細胞観察」「作物の新種改良につながる遺伝子解析」から2つのテーマを選択し，実験・実習に参加する。	1日3
★ A グローバルリーダーセミナー	1～6	各回 50名 程度	通年		様々な国際的な課題に取り組み，活動している専門家等を講師に招き，その課題について理解を深め，将来のリーダー育成を目指す。	1回2
①神戸大学大学国際文化学研究科　教授　坂井一成氏・同大学院経済学研究科　教授　吉井昌彦氏「EUの移民・難民問題とポピュリズムの台頭」（兼2019年度神戸大学ジャンモネCOE主催「高校生向けミニシンポジウム」）（7月）（全学年希望者） ②独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構金属資源開発本部　特命参与　辻本　崇史氏　「金属資源講話」（7月）（全学年希望者） ③神戸大学文学部　准教授　野口泰基氏「心理学のウソ・ホント」　神戸大学第15回連携授業（文学部）（11月）（全学年希望者） ④国立研究開発法人科学技術振興機構科学コミュニケーションセンター・神戸医療産業都市・京コンピューター一般公開特別企画「サイエンスアゴラ in KOBE～科学・技術って誰のもの？～」（11月）（全学年希望者）※本校5年生パネリスト登壇 ⑤神戸大学NGO　PEPUP学生代表　神戸大学国際人間科学部3回生　小畑芙優子氏「国際協力講話」※フェアトレードワークショップ（2月）（全学年希望者）						
C1　国際公共政策コンファレンス	4～6	1名	4/21・22	大阪大学	大阪大学大学院国際公共政策研究科高等教育・入試研究開発センター主催。国際的な社会問題に関心のある高校生が全国から集まり，研究成果を発表し，グローバル問題への関心を高めると共に，問題解決能力や発信力を身に付ける。	5
★ C1　Global Forum	4・5	22名	受け入れ 5/20～26 フォーラム 5/24	シアトルICS ベトナムFLSS	本校SGH集大成のイベントとして神戸大学百年記念館（六甲ホール）にて開催。シアトルICS生徒24名，ベトナムFLSS生徒4名を受け入れ，本校滞在中に授業体験や文化交流も行うと共に国際的課題についてグループでディスカッションし，提言をプレゼンテーションにまとめて発表する。5/24～25に1泊2日の奈良・京都研修も行う。	受入れ １０ 運営５
★ C1 オックスブリッジ英語サマーキャンプ	3～5	20名	7/23～8/3	オックスフォード・ケンブリッジ大学	オックスフォードとケンブリッジ大学の学生2名を講師に招き，2週間にわたって本校で英語研修プログラムを実施。	15
C1　かめのりスクール	3	1名 採用	7/26～29	かめのり財団	日本語を学んでいるアジア（インドネシア，中国，韓国，フィリピン，マレーシア，タイ）の高校生がYMCA東山荘にて交流し，一緒に学びお互いを理解することを目的とする。	10
★C1 数学甲子園神戸市予選大会	2	14名	8/1	日本数学検定協会	生涯学習の観点から数学を通じて考える力や発想力を高め，教育・ものづくりなどの発展に寄与。「問題解決力」「チームワーク力」「創作力」「プレゼンテーション力」など幅広い力が問われる。	5
★ C1 World Youth Meeting (WYM)	4・5	5年生 3名 参加	8/1～5 受入れ 8/5～6 大会	高雄師範大附高級中 ほか	共通テーマ“A Sense of Inclusiveness”(あなたに見える私の姿)に基づき，台湾の高校生を受け入れ，プレゼンを英語で作成，日本福祉大学で開催される大会で発表する。交流校生徒7名をホームステイで受け入れる。	全日程 10

国内交流事業（つづき）						参加
プログラム名	対象学年	参加者	期間	交流校等	実施内容	(kmi)
★B PDA 全国高校即興型英語ﾃﾞｨﾍﾞｰﾄ合宿・大会	4・5	11 名	8/7～8	全国の高校生	即興型英語ディベートの実践を中心としたプログラム。集中的に「英語での発信力」「論理的思考力」「プレゼン力」「コミュニケーション力」等を鍛える。合宿 1 日目の集中実践の成果を 2 日目の全国大会で発表する。	15
★ C1 臨海実習	3～5	15 名	8/5～6	神戸大学	神戸大学内海域環境教育センター（KURCIS）と連携し，藻類をはじめとする生物の進化と，海洋生物の多様性について学ぶ。海洋を含む環境問題とその対策をマクロとミクロの両視点に立って考え，自然環境に対する視野を広げる	10
★C1 数学・理科甲子園ジュニア兵庫県大会	2	3 名参加	8/16	兵庫県教育委員会	神戸常盤アリーナで開催。科学技術振興機構（JST）が主催する「科学の甲子園ジュニア全国大会」の兵庫県予選。科学好きな中学生が集い活躍できる場を提供すると共に中学生の理数に対する興味・関心を高める機会とする。	5
★C1 近畿・北陸地域 ASPnet 校（小・中・高校）による日・中 ESD/SDGs 学びあい交流会	1～5	4 名参加	8/21～22＋準備・事後セミナー（4 日）含む	関西ユネスコ連盟	小・中・高校の新学習指導要領で貫かれている ESD の理念や各教科を通じた「主体的・対話的で深い学び」，「総合的な探究の時間」の学習活動を意識した国際協働学習の実践を合宿で行う。	全日程 10
★ C1 兵庫県中学生水の作文コンクール	1～3	1 名入選		兵庫県	水と共生する県民生活の構築を目指した「ひょうご水ビジョン」に基づき，水資源の有限性や節水の重要性等への啓発の取組の一環とする作文コンクール。本校生は 852 編の応募作品の中から優秀賞（2 位）を受賞。	5
★ B ベトナム研修団受入れ	4・5	有志生徒	10/13～19	ハノイ国家大外語大附属高（FLSS）	交流校の高校生を 6 名ホームステイで受け入れ，交流する。日本語専攻の生徒も受け入れることにより，英語，日本語両言語による交流も期待される。受入れ期間中，ホスト生徒は広島・宮島研修にも参加する。	全行程 10 運営 2
★B カナディアン・アカデミイとの交流	1～4	12 名	11/6 12/11	カナディアン・アカデミイ	神戸在住の外国人生徒交流の一環として，100 年以上の歴史を持つカナディアン・アカデミイとの相互交流（学校訪問・授業体験等）を実施し，他文化共生についての理解を深める。	1 日 3
★ B 神戸大留学生との交流	4・5	一部クラス	6/13	オックスフォード大学	人文学研究科よりオックスフォード大学からの留学生が来校。全体会での相互プレゼンテーションと英語の授業において交流する。	2
	1・2	全員	3 月	各国留学生	SGH 基礎講座として，神戸大学留学生に対し，英語のプレゼンテーション（日本文化紹介等）を行い交流することを通して異文化理解を深める。	2
★ B KOBE コミュニティーフォーラム	全学年	11 名参加	12/8	神戸市在住外国人・県内中高生・大人	神戸市・（公財）神戸市国際協力交流センター主催。デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）で開催。「多文化に出会える場所づくりを考えよう」をテーマに外国人と日本人が英語でグループディスカッション及びポスター作成，発表に取り組む。	2
★ C1 ESD Food プロジェクト	1～5	54 名参加	7 月～3 月	ﾌｰﾄﾞﾊﾞﾝｸ関西 ｺｰﾌﾟこうべ 兵庫県漁連 神戸大学	「食」に関する持続可能なライフスタイルをテーマとして，理科や家庭科教員の授業・実習を受講，その成果を発表する。コープこうべとの連携授業に参加するほか，「フードドライブ」活動や神大国際人間科学部附属実習観察園を活用した「野菜探究」プロジェクトも行う。	10
★ C1 アートマイル国際協働学習プロジェクト	2～4	27 名参加	7 月～3 月	Al Hussan International School Al Knobar ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ	海外生徒と共通テーマ（ESD）でインターネットを用いた協働学習を行い，巨大壁画制作活動を通して，世界の文化や世界的課題を理解しようとする生徒を育成する。今年度の壁画のテーマは「ジェンダー平等」と「持続可能なまちづくり」。	10

国内交流事業（つづき）						参加
プログラム名	対象学年	参加者	期間	交流校等	実施内容	(kmi)
★ C1 震災・復興・減災(DR3)プログラム	4・5	17 名 参加	通年	神戸・宮城を中心とした諸学校・機関	震災（Disaster）・復興(Reconstruction)・減災（Reduction）・レジリエンス（Resilience）（DR3）をテーマとした被災地間交流を含む体験型プログラム	全日程 25
★ C1 神戸・宮城交流	4・5	7 名 参加	2/14～16	宮城県多賀城高校	宮城県被災地視察のほか，宮城県多賀城高校，震災遺構大川小学校を訪問する。「東日本震災メモリアル day 2019」に参加し，大規模震災に対するリスクマネジメントについて多角的な視点から学ぶ。	10
★ C1 ESD 実践研究集会	3～6	3 名 参加	9/22～23	ESD 推進ネットひょうご神戸	ESD 研究者による集会。本校生は 2 日目分科会 3「市民社会と SDGｓ～地域住民・企業（人）・中学生の視点から持続可能な社会を考える～」において ESD Food プロジェクトの取組を発表。	5
★ C1 全日本高校模擬国連大会	4・5	4 年生 2 名 参加	11/16～17	全国の選抜校	国連大学（東京都渋谷区）で開催。国連の多国間外交をロールプレイで学ぶことで，国際連合及び国際関係に関する研究と正確な理解，解決策を考察する。今年度の議題は「死刑モラトリアム」，ノルウェー大使を担当。	25
★ C1 全国高校生フォーラム	4～6	留学生含む 2 名 参加	12/22	全国 WWL，SGH，アソシエイト校生徒・アジア留学生	東京国際フォーラムで開催。全国の WWL，SGH 指定校，アソシエイト代表生徒が一堂に会し，英語でのポスター発表やディスカッションを通して，日頃取り組んでいるグローバルな社会課題・ビジネス課題の解決や提案について英語で発信する。「アジア高校生架け橋プロジェクト」の留学生も交流会に参加。	5
★ C1 WWL 等課題研究交流発表会	4・5	4 名 参加	12/26	WWL，SGH，SSH 生徒	WWL 指定校神戸市立葺合高校主催。同校で開催。WWL，SGH，SSH 指定校生徒 200 名が参加。課題研究などの成果をプレゼンテーション及びポスターで発表し，特定の課題について議論する。本校生徒はポスター発表（日本語・英語）及びディスカッションに参加する。	5
★ C1 サイエンスフェア in 兵庫	4・5	5 年生 1 名 参加	1/26	兵庫「咲いテク」事業推進委員会 県内高校・高専・大学生	ニチイ学館ポートアイランドセンター，甲南大学FIRST で開催。学生，企業，研究機関等によるポスター発表，口頭発表，研究者による特別講演の受講の他，大学院生・大学生との交流など。本校生はポスター発表で参加する。	5
★ C1 高校生国際問題を考える日	4・5	6 名 参加	2/11	近畿地区 WWL，SGH,ｱｿｼｴｲﾄ校等生徒	兵庫県教育委員会及び大阪大学との連携指定校における事業。神戸ファッションマートにて開催。国際問題に関する研究発表（ポスター）及び講演会に参加する。	5
★ B PDA 中学生即興型英語ﾃﾞｨﾍﾞｰﾄ全国大会	1～3	4 名	3/21	全国の中学生	即興型英語ディベートの普段の練習の成果を試し，全国の中学生と議論を交わすことで，さらなる成長・学習意欲を促す。	5
★ C1 探究甲子園	4・5	5 年生 1 名 参加	3/21 （中止）	全国 WWL，SGH，ｱｿｼｴｲﾄ校生徒	関西学院大学で開催。課題研究の成果をプレゼンテーション，ポスターで英語または日本語で発表する。ラウンドテーブル型ディスカッションでは特定の課題について日本語でディスカッションを行う。本校生徒は口頭プレゼンテーションで参加する。	5
★ C1 EU 東京研修	3～5	6 名 参加	3/22～24 （中止）	外務省 EU 国大使館	大使館等の訪問や専門家とのディスカッションを通して，移民受入れをはじめとする EU の諸課題についての理解を深める。訪問先はエストニア大使館，スェーデン大使館，EU 駐日代表部，外務省等（調整中）。	10
★ C1 ジオパーク（山陰）研修	3～5	10 名 程度	3/23 （中止）	玄武洞ミュージアム 城崎温泉	フィールドワークを中心とした自然科学的研究手法の基礎を習得すると共に太平洋側の神戸と日本海側の気候・地形・風土・歴史の違いを学ぶ。	5
★ C1 その他 課題研究成果発表（学会等）	4～6	15 名	8 月～3 月頃随時	学会等主催 大学等	課題研究の成果を学会や大学等主催の探究成果発表会等高校生セッションで発表。	3～5

※新型コロナウイルス感染症対策に関する休校措置のため，3 月実施予定の活動はすべて中止となった。

３　本校における特設科目（「ESD」，「国際理解」）の取組

A　「ESD の取組〔第 5 年次〕

１．ESD の位置付け

本校の ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）は SGH における本格的な学びの準備教育として位置付けられている。すなわち，課題研究を核とした教科横断型体系的グローバル人材育成の学びの基礎を担うものであり，SGH の目標である地球安全保障への提言の基礎という側面も備えている。大きな枠組みで捉えると，本校の ESD の実践は２つの取組を柱としている。1 つが後述する ESD の授業実践であり，もう１つが ESD の理念を共有した全校的な取組としての ESD である。前者の授業実践は，前期課程の３年生社会科公民分野の週１時間（秋学期は週２時間）を ESD として行うものである。後者は，ユネスコスクールや文部科学省指定研究開発学校（地理総合・歴史総合），「アートマイル国際協働学習プロジェクト（アートマイル）」，「震災・復興・減災宮城交流プログラム（DR3）」及び「ESD Food プロジェクト」などの取組である。ここでは主として ESD の授業実践（第５年次）の取組について説明する。

２．ESD の目標・授業概要

今年度は以下の目標を設定し，授業実践を行った。

グローバルな諸課題を自己の課題として捉え直し，正確かつ批判的に分析・考察するとともに，持続可能な社会の形成に向けて学び続けられる力を育成する。また，他者の価値観や考え方も踏まえて建設的な議論を行い，代替的な思考力や提案力を育成する。

ESD は，国際理解教育や世界遺産に関する教育，環境学習など学際的で教科横断的な側面がある。特定の分野に絞って，ESD を行っていく事例などもみられるが，本校では図１で示した ESD の各領域を包括するように授業テーマを精選している（表１）。これは，それぞれの領域が独立し，切り離されたものではなく，相互の関連性を意識して学ぶことで，同時解決性やテーマの統合性を意識できるようにしている。また，SDGs（持続可能な開発）との関連性をもたせたカリキュラム構成となっている。今年度も生徒の学習ニーズを踏まえてカリキュラムを作成した。すなわち，生徒と教員の双方向性を担保することで，生徒と教員の「共創」による学びとなっている。加えて，今年度も日本国際理解教育学会との連携（教材の検討や理論的な研究など）や他教科の教員（理科）との連携を図りながら授業実践を行った。

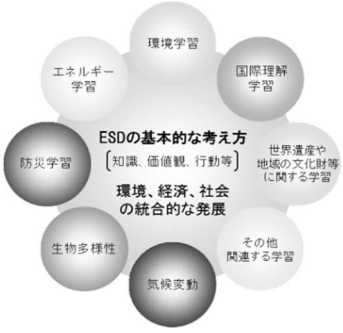


図１：ESD で扱う領域
出典：文部科学省ウェブサイト

表１：2019 年度 ESD 授業テーマ・キーワード・関連諸分野

テーマ	キーワード	環　境	国際理解	世界遺産	エネルギー	防　災	生物多様性	気候変動	その他
1 ESDとは何か	環境・経済・社会の視点	○	○	○	○	○	○	○	○
2 「持続可能な開発」とは何か	生命の持続可能性，批判的考察								○
3 グローバル化と相互依存①	グローバル化の光と影，食，マングローブの役割	○	○				○		
4 グローバル化と相互依存②	ゲーム機，資源，アフリカ，相互依存		○						
5 世界遺産は万能か	自然保護，人間社会，自然環境，景観，危機遺産	○	○	○					
6 阪神淡路大震災と東日本大震災	防災，ボランティア，津波てんでんこの多義性					○			
7 震災から復興へ	復興，減災，レジリエンス					○			○
8 水・気候変動①（水の学び）	ため池，水と人との関係，バーチャルウォーター，水紛争，水の権利，水道法，SDGs	○	○					○	○
9 水・気候変動②（CCE）	地球温暖化，パリ協定，ダイベストメント，気候正義，バルネラビリティ，人間の安全保障，環境難民，SDGs	○	○				○	○	
10 AIと私たちの生活	AI，ディープラーニング，GAFA，知的財産権，自動運転，医療分野への応用，人間とは何か								○
11 生物多様性について考えよう	生態系サービス，神戸市の生物多様性	○					○		
12 持続可能な社会とは	人口減少社会，豊かさ，成長，共創，SDGs	○	○	○	○	○	○	○	○

授業ワークシートなどより作成

３．授業の実際－「競争」から「共創」へ－

今年度は，ESD を「深い ESD」とするために，「共創 co-creation」を基盤とした授業を実践した。以下では，共創が求められる社会的な背景と取組の実際について述べてみたい。

現代のグローバル社会を ESD が目指す「持続可能な社会」へと再方向付けするためには，根本的に発想を転換する必要がある。現代のグローバル社会が競争原理を伴った社会であることを踏まえると，それに方向付けされた教育は，グローバルな競争を勝ち抜くための能力開発的なものとならざるを得ない。そのような社会ではなく，他者との協調・協同による社会こそが，持続可能な社会の基盤と考えられる。これが，今年度，ESD の授業実践に通底する考え方として「共創」を強く意識した所以である。

次に「共創」を基盤とした授業を展開するための重要な学習スキルである「対話」に関してふれておきたい。本校の ESD の授業実践では，対話を多田（2017）の「参加者が多様な意見・感覚，体験などを真摯に出し合い，絡み合い，ぶつかり合い，対立・混乱・混沌をも生かし，調整・融和・統合し，そこから新たな智を共創し，さらに，この過程が次々継続していくことにより，参加者相互が，視野を広め，思考を深め，協力して高みに至った成就感・親和感を共有する対話」の定義を援用している。とりわけ，「省察」や「混乱・混沌」の時間を確保することで，議論を整理し，自身の考えやアイデアを再組織化できるように工夫した。また，多田（2018:25）で提唱されている「実践の智」の考え方も，皮相的な議論に陥らない深い思考力を育成する授業を実践するための手がかりとした。「実践の智」は，「科学や哲学・文学など諸学問の研究成果の援用および教師の実践から生起する事柄の総体」と捉えられている。ESD で扱う諸課題は学際的であるがゆえに，さまざまな学問分野の研究成果を取り込んでいくことで，豊かな教材となり得るという点において，まさに適した考え方といえる。

表２：「持続可能な社会とは」の単元構成

時	各時の主題	主な学習内容・活動
1時～2時	リサーチワーク①（事前学習）※夏休み	持続可能な社会の形成に関して，レポートにまとめる。
3時～4時	リサーチワーク②（事前学習）	持続可能な社会のデザインシートを作成する。
5時	日本が抱える課題	人口減少社会のなかで，豊かさ・成長などを問い直す。
6時	世界が抱える課題	SDGsと身近な課題との関連から，ローカルとグローバルを往還する。
7時～8時	持続可能な社会とはどのような社会か★	他者との共創的な対話に基づき，「持続可能な社会」を自分のことばで論理的に表現する。

SGH第5年次報告会公開授業資料により作成

例えば，最後の単元「持続可能な社会とは」では，生徒間の「共創」によって深い学びが構築されたと言っても言い過ぎではない。リサーチワークによる多様な個人のアイデアが，終盤の共創型対話における創発の基盤となっている。

実際に７時では，個人で作成した持続可能な社会のデザインシートをもとに，小集団で「持続可能な社会」のプランを作成した。そこでは，それぞれのアイデアを組み合わせたり，組み替えたりする中で，「共創する」生徒の姿が確認できた。さらに議論の様子を観察すると，すんなり合意とはならないことが多く，衝突する場面やことばの意味を問い直す場面などがみられた。

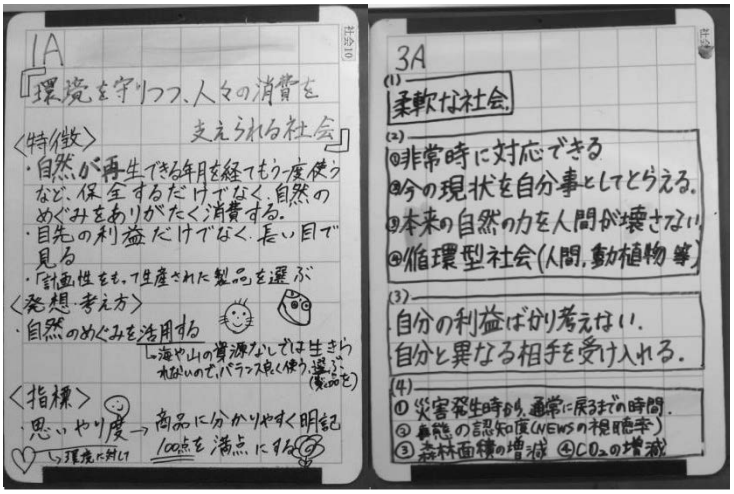


図２：小集団で作成した「持続可能な社会」のデザインプラン

８時では，各小集団で作成したプラン（図２）をもとに，さらにプランを良くするために，全体で論議を深める授業を展開した。授業者は，各小集団のプランの良いところを探し，全体的に温和な雰囲気で進むと予想していたが，実際は全く異なる展開となった。すなわち，各プランの曖昧な部分や不十分な点を鋭く指摘する雰囲気が醸成されたことで，活発な議論が促され，全体として学びが深まるという結果となった。また，これまでの授業で学んだことが基盤となった発言や記述が随所にみられたことから，統合的な見方ができるようになっていることも確認された。当初の授業計画では，後半に各プランへの助言や批判を付箋で貼り付ける予定であったが，論議が活発になされたため，急遽，議論の時間を延長する措置をとった。

このように生徒の発言や呟きといった授業のなかで生起するものに即して，教師が柔軟に対応を変化させることも，「共創」を基盤とした授業では求められる。

４．ESDにおける対話と評価－SGHの５年間をふり返って－

ESD（持続可能な開発のための教育）は，これまで環境教育や国際理解教育などの学問的成果や枠組みを援用しながら発展してきた。また，様々な領域（気候変動や生物多様性，防災など）を包含し，それらの関連性を指摘するところに特長がある。このように多様な領域・学問を背景としたESDの学びを豊かにするための，方法論的枠組みとはどのようなものだろうか。既存の講義型授業のような方法ではなく，多様な方法論的枠組みの組み合わせによって，授業実践がなされるべきだろう。そのなかでも改めて注目したいのが，「対話」の効果である。ESDで扱う諸課題は，多様なステークホルダーが関与している場合が多く，そこでは，異なる価値観・考え方が混在している。そのような実際を踏まえるならば，学校現場においても，異なる考えをもつ生徒との対話は，極めて重要な意味をもってくる。ただし，留意しておきたい点が２つある。

第一に，対話そのものが目的化してはならないという点である。対話は，あくまでもその授業のねらいやその先の変容に到達するための手段として位置付けるべきである。対話的な学びが求められる趨勢にはあるが，対話を用いる際は，授業のねらいなどを確認したうえで，丁寧に検討する必要がある。

第二に，皮相的な対話に陥らないように工夫することである。ESDで扱う学習は，価値観の衝突や容易に納得ができない場面が，しばしば出てくる。また，ゴールが見えない（決まった正解がない）課題も少なくない。そのような場面でも，対話することを放棄しない，「粘り強い対話力」が必要であろう。近年は，授業のなかで，粘り強く対話する（議論する）ことを忌避する生徒が散見されるようになった。ESDにおける対話の真価は，このような状況といかに向き合うかにあるといえる。加えて，明確な答えが出ないことに対する，ある種の「もやもや感」を抱えながら，継続的に問いに向き合える力も育成していかなければならない。近年では，このもやもや感を「ネガティブ・ケイパビリティ」と称する文献もみられる（例えば，帯木（2017），多田（2018））。効率や合理性を追求する教育ではなく，ネガティブ・ケイパビリティを大切にする教育へと転換していくことが粘り強い対話力に結びつくと推察される。

５年間のESDの授業実践から，効果的な対話を生み出すためには，まずは，教師自身が対話の楽しさを体現していくことが何より肝要であると考えられる。また，多様な意見にふれ，ときには衝突する対話が，自身の知や考えを更新し，自身の考えを深めるという実感をもたせることが必要である。今後のESDでは，他の教科や科目にも転用できる「多様な考えを統合・更新していくような学び方」を身に付けることが求められる。

一方，ESDの評価に関しては，いくらか課題が残った。ESDは個人の価値観や考え方に根差した問いが少なくない。それゆえ，その価値観自体を「評価する」ことは困難を極める。そこには，教師自身の価値観やそれに基づく物差しが無意識的に介入し，それにそぐわないものの評価を低くしてしまう恐れがある。これは，規準を設けて評価するルーブリック評価のような評価体系の一つの課題と捉えてもよいかもしれない。ESDでは，ルーブリック評価のみならず，それ以外の様々な評価方法を組み合わせた新たな評価体系が必要であろう。本校のESDでは，その試行的実践として，「ロジックモデルを援用したプログラム評価」を採用し，検証してきた。その詳細は別稿に譲るが，生徒自身が学びの方向性や到達点を考え，それを共有した学びが行えるという点で，生徒の学びの質的な改善に結びつく，言わばESDに適した評価方法となり得る可能性を示した。加えて，従来の「評価者＝教師，被評価者＝生徒」という関係性のみならず，生徒自身も評価者となることで，より自分事に引き付けた学びになると考えられる。

ESDに関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）にも示されているように，ESDは，「学習者中心」の学びである。今後は，学習者の学びの質的向上を意識した学習および評価であることが求められる。学習者を置き去りにしない学びこそが，ESDを深く豊かなものに変え，引いては，教育システムの再方向付けにも寄与することが期待される。

【参考文献】

多田孝志（2017）『グローバル時代の対話型授業の研究 実践のための12の要件』東信堂.
多田孝志（2018）『対話型授業の理論と実践―深い思考を生起させる12の要件』教育出版.
帯木蓬生（2017）『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』朝日選書.

Ｂ　「国際理解」の取組

１.「国際理解」の位置付け

平成 27 年度に SGH の指定を受け，本校では「世界の課題を発見・探究・提案できる次世代型グローバルキャリア人」を育成する「グローバルキャリア人育成神戸モデル」の確立を目指している。「国際理解」は主に後期課程において行う本校 SGH 事業における「課題研究」の総合化と，同事業における海外 GAP（グローバル・アクション・プログラム）参加者の経験を，授業という形で他の生徒への還元を図り，一般化することを意図している。また，本校前期課程３年生で実施した教科 ESD に続く形で，現行の高校公民「現代社会」のうち１単位を学校設定科目「国際理解」として置き換えて実施している。

２.「国際理解」の目標

今年度の「国際理解」では以下の目標を設定し，授業構成を行った。

①　地球的課題に対する問題意識を持ち，将来におけるよりよい社会像を問うことができる。
②　学びを通して多彩な価値観に触れ，幅広い視野から複数の立場を考慮した「相互利益」となる提案を発信することができる。

現在，世界中で猛威を振るうウィルス感染症対策や，アメリカのパリ協定脱退を受け，いよいよ難局を迎える気候変動問題，イギリスによる EU 離脱の一因ともされる難民問題，形は異なれど，途上国のみならず日本をはじめとする先進国でも問題視される教育，世界中で進行する高齢化など，地球的課題は特定の国や地域だけで解決することが，もはや不可能ともいえる状況となっている。

これらの課題に取り組むため，豊かな知識を備えると共に，国際的な視野を育み，異なる文化や価値観を持った人々と協力・共存する能力や，創造的な課題解決能力を身に付けることは不可欠である。また，様々な課題を身近な問題と重ね合わせて自分事として捉え直し，異なる立場の人たちと共に解決することを志向していく力は，本校の目指す次世代型グローバルキャリア人の要件とも合致する。「国際理解」では，「平和と安全」や，「経済的格差」，「環境」といった幅広い問題に対して多面的に物事を捉え，自ら発信できる生徒の育成を目標とする。

３．授業の形態

本年度の「国際理解」の授業実践においては，以下の地球的課題に関わるテーマを題材に授業を行った。

表１：本年度取り扱ったテーマ一覧

①　地球環境問題	気候変動問題，資源・エネルギー問題
②　国際経済	食料問題
③　人権意識	ジェンダー平等，教育問題
④　国際政治	国際連合の仕組み，安全保障理事会の役割と課題

「国際理解」における授業実践では，準備段階としてワークシートを用いて該当問題に関し，議論をする上で前提となる基本的な情報を講義形式で共有した後，以下の３つの形で議論を行うことで諸課題に対する理解と，課題解決に向けた力を育むことを目的とした。①生徒３～４人程度の小集団で提

案を出させたのち，クラス全体で共有する。②クラスを３分割し，10 人程度で１グループとし，全員に異なるハンドアウトを渡した上で，討論を行わせる。③個々の生徒に担当国を割り当て，クラス全体で１つのテーマについての対応を検討させる。いずれの方法を用いた場合でも，それぞれの問題に対しての論題を設定した上で，経済・社会構造・文化・資源など，議論を行う上で必要となる要素についての調査を行い，割り当てられた立場から当該課題に対する解決策や妥協案を考案し，相互の利益を目指して議論を交わすという流れを１つのサイクルとして授業を構成した。ただし，議論に際しては，高校生であることを鑑み，過度に自分自身の利益を追求するのではなく，互いの利益を前提としつつ，自己の立場を意識することを強調した。また，ジェンダーなど繊細な問題に対しては，LGBTN など特定の意識を有する生徒が存在する場合に負担となることのないよう，その良し悪しではなく平等性・公平性を考える点を強調した。提言に対しては，プレゼンテーション及び質疑を行い，その後に投票を行うことで，複数の立場が存在すること，独善的な意見に偏らないことに留意した。

４．成果

今年度「国際理解」の取組の成果については,以下（表２）に示す通りルーブリックによる評価の検討に着手できたことが挙げられる。

具体例として,「ジェンダー平等」をテーマに，単元開始時（７月）と単元終了時の定期考査内（９月）に「ジェンダー平等とはどのような状態か」という同一の問いを自由記述させた結果の一部を表３に記載する。表３の【　】内のＡ～Ｃは，各観点における評価を表している。結果として，授業の前後では，概ね記述量が増加しているが，これについては授業を経て知識が増加したためであると考える。同様の理由も含め，具体的な記述内容から多面的な判断ができている生徒が増加しており，結果として，より広い視野から当該問題を捉えることができるようになったと考えられる。

表２：ルーブリックに基づく評価基準

	A評価	B評価	C評価
①多角的な視点で「ジェンダー平等」を考えることができているか。	ジェンダー平等をいわゆる男性・女性だけではなく，LGBTN を含む様々な視点から捉えることができている。	ジェンダー平等をいわゆる男性および女性の視点から捉えることができている。	ジェンダー平等を単一の視点（男性・女性・自らの性別など）のみで考えている。
②多面的な視点で「ジェンダー平等」を考えることができているか。	不平等感を持つ特定の性を優遇することでのリスクを考慮することが出来ており，それを踏まえて一時的な優遇など合理性のあるものを受け入れることが出来ている。	不平等感を持つ特定の性を優遇することでのリスクを考慮することができている。	単純な女性（や不平等感を持つ性）に対する保護という視点からのみでジェンダー平等を捉えている。
③文化的・歴史的な要因を考慮することができているか。	保護意識が権利の抑圧に結びついているものがある事に言及できている。		文化的・歴史的な要因を考慮することができていない。

表３：生徒の記述の変化　※下線部が「批判的思考力」が変化したと思われる個所

授業初回	考査段階
男女差別なく，女性も男性と同じように差別されることなく，同じ職に就けたり，自分がやりたいことを女性も思うままにすることができる社会。女性への偏見がない社会がジェンダー平等だと思う。	女性だけでなく男性目線や性的少数者の目線，女性保護の目線という視点から考えたときに，「どの視点から見ても一人一人が差別などを受けずに平等に扱われている状態。男性も女性も性的少数者もすべての人が平等に守られている社会がジェンダー平等な社会だと思う。 【観点①：A，観点②：C，観点③C】
男も女も平等に雇用される社会	女性からの目線だけでなく，男性の目線も入れること。性的少数者への偏見をなくし，生きやすい社会にすること。女性を保護するだけでなく，女性の意思・権利を尊重しなければならない。このように性において，誰もが生きやすい社会。【観点①A，観点②C，観点③A】
男性・女性の性別関係なく，常に同じような扱いを受け，同じような生活を送る事ができる状態。男性だけが優先され，便利な生活を送れる状態ではないこと。	女性だけでなく男性目線でもジェンダー不平等を捉え，互いの役割から解放すること。性的少数者の意見も積極的に取り入れていくこと。女性を保護することで差別的な社会構造が維持される仕組みや考え方を変えていくこと。この３つの視点でジェンダー平等に対して考えていき，性的な役割に左右されることなく，社会や文化の中で自由に生きていける状態。 【観点①A，観点②B，観点③A】

４　英語教育高度化に向けた取組

本節では,平成 31（2019）年度の英語教育高度化に向けた具体的な取組及び成果と課題について記載する。

１．はじめに

本校では，平成 21（2009）年の創設以来,「グローバルキャリア人」の育成を教育目標に掲げ，様々な取組を行っている。グローバル・リーダーに必要な資質・能力としての「国際的コミュニケーション能力」の育成については，大学からの期待も大きく，英語を基盤ツールとする大学の研究入門レベルまで英語運用能力の引き上げることが求められている。本校英語科では,「育てたい生徒像」を以下のように設定している（表１）。

表１　本校英語科が考える育てたい生徒像

英語によるコミュニケーション能力を活用し，地球上に生きる人間として，自分の足元から世界を見る視点を持ち，同時に多様化が進む世界の動きの中で人々と協力・共生しながら自分の生き方を選択し，地球的視野で考え行動できる生徒

このような目標を踏まえ，本校英語科では，特に後期課程（高校段階）発足以降，現在に至るまでの８年間，全生徒に対して，世界に発信できる英語力の習得を目標に，カリキュラム及び指導法の開発を行ってきた。本スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業においても英語教育高度化に向けた取組は１つの核として位置付けて推進している。

２．英語科全体の研究

（１）今年度の研究課題

今年度は，次期学習指導要領で育成すべき資質・能力の３つの柱（「知識・技能」「思考・判断・表現」「学びに向かう力・人間性等」）の評価の在り方に関して，国の示す方向性を確認すると共に，「マイ・イングリッシュ[1]の評価」に焦点を当てた教育実践を行った。令和２（2020）年２月９日の授業研究会ではこの実践において明らかとなった課題について報告した。

①学習評価に係る国の示す方向性について

以下に，資質・能力の３つの柱の学習評価に係る国の示す方向性について述べる。

「知識・技能」の評価については,「既有の知識及び技能と関連付けたり活用しているか」,「他の学習・生活場面でも活用できる程度に概念等を理解したり，技能を習得しているか」を評価するため，具体的な評価方法として実際に知識や技能を用いる場面を設けるなど，多様な方法の取り入れる姿勢を指導者に求めている。

「思考・判断・表現」の評価については,「知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力，判断力，表現力等を身に付けているかどうかを評価」するため,「ペーパーテストのみならず，多様な活動」による評価が推奨されている。例えば，論述やレポート作成，発表やグルー

[1] 「他者理解」と「相手に納得してもらうことのできる自己表現力」（田中，2017）

プでの話合い，作品制作，そしてそれらを集めたポートフォリオの活用などが挙げられている。

「学びに向かう力・人間性等」の評価については，観点別評価を通じて見取ることができる「主体的に学習に取り組む態度」と，観点別評価や評定にはなじまず，個人内評価として捉えるべき「感性や思いやりなど」とを区別している。前者の評価観点については「①　知識及び技能を獲得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面」と，「②　①の粘り強い取組を行う中で，自らの学習を調整しようとする側面」の２つの観点が設定されている。

（２）実践研究の公開

上述の国の方向性を踏まえ，研究課題に沿った実践研究を本校英語科教員全員が行い，以下の２つの研究会で，その成果と課題について報告し，他校英語科教員へも還元した。

①英語授業勉強会（令和元（2019）年 11 月 22 日実施）

本勉強会は，教員の授業力向上を主な目的として平成 28（2016）年度より毎年実施しており，今年度で４回目の開催となる。近隣の学校の英語科の先生方にも参加いただくことによって，多角的な視点で実践を共有することも１つの目的としている。今年度は，参会者約 50 名に対し，「自己関連性」を共通の問いとした２年生と５年生の授業を公開した。神戸大学の横川博一先生（大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター教授）には，本勉強会の企画段階から御指導をいただき，研究協議会においても指導・助言を賜った。

公開授業前には，当日の授業までに至るプロセスの紹介を行った。授業後に実施した研究協議会では，協議のポイントとして「教材（テーマ）をどう自分のものとして落とし込むか？」を提示し，その後の懇談会でも情報共有及び意見交換を行った。横川先生からは，授業の中に「やりとり」の場を設定することが大切であることと，授業の随所に「考えてみる」活動を設定する必要があることについて御助言いただいた。

写真１　公開授業の様子

写真２　研究協議会の様子

②授業研究会実践報告（令和２（2020）年２月９日実施）

本校主催の「2019 年度授業研究会」では，SGH 事業における英語教育高度化に向けた取組（「マイ・イングリッシュの育成」）の実践報告及び研究協議を行った。

本授業研究会の研究テーマは「グローバルキャリア人としての資質・能力を育成するカリキュラ

ム開発と評価方法の研究-汎用的能力論と次期学習指導要領の方向性を踏まえて-」であった。英語科では，次期学習指導要領で育成すべき資質・能力の３つの柱の本校の取組と評価の在り方をテーマとして，単元学習を通したマイ・イングリッシュ育成の授業実践と評価について発表した。本研究会では，京都橘大学の中井弘一先生（国際英語学部 国際英語学科教授）に御指導いただいた。

研究協議では，生徒の自己表現のモデルとしてライティングの型を提示すると英語で表現しやすくなる一方，思考や表現内容の幅が狭まることになることが指摘され，型の提示の在り方及び自由度の検討が課題とされた。中井先生からは,「流暢でなくても自分の意見を話せる人を育成するためには，マイ・イングリッシュの中でも特に『マイ』の部分が大切であること，つまり，生徒の自己表現への渇望から生まれる英語がマイ・イングリッシュ育成につながる」と御教示いただいた。また,「教育評価は学習者を選別するものではなく，個人個人を評価するものであること，達成評価だけでなく個人内評価などを組み入れて複眼的に個々の生徒を評価支援していくことが重要である」との御指摘もいただき，今後の研究課題へつながる充実した協議会となった。

写真３　実践発表の様子

写真４　研究協議会の様子

３．今年度の「スキル・運用能力」に係る最終学年（6 年生）の到達度

文部科学省は英語教育の目標として，高校卒業段階で 50%がヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages（以下,CEFR)）の A2 に達することを掲げている。表２は，本校 SGH 指定後に卒業した学年について，６年時の到達度を比較したものである。

なお，このデータは各年度の 11 月に実施した Benesse©の GTEC（Global Test of English Communication）のトータルスコア（リーディング・リスニング・ライティングの３技能）から算出したものである。

表２　平成 27 年度～平成 31 度卒業生の CEFR 到達度比較

	n	B2 以上	B1	A2	A1
2 回生（平成 27 年度卒）	135	--	17.0%	53.3%	29.6%
3 回生（平成 28 年度卒）	134	--	13.4%	70.9%	15.7%
4 回生（平成 29 年度卒）	161	14.4%	43.4%	32.9%	9.3%
5 回生（平成 30 年度卒）	174	16.1%	56.9%	23.0%	4.0%
6 回生（平成 31 年度卒）	157	11.5%	37.6%	47.1%	3.8%

いずれの年度においても A2 レベル以上が 70%以上を示しており，国が示す目標（50%）をはるかに超えている。

一方，3.8%の生徒が A1 段階にとどまっており，下位層に対する手当については，さらなる検討が必要である。

４． 神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンターとの共同研究

神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター主催の「大学・附属学校英語教育連携推進会議」では，「研究アドバイザリー制度」が設けられている。本制度では，本校英語科教員はそれぞれに割り当てられた大学の英語担当専任教員の指導助言を受けながら，英語科全体の研究及び個人研究に取り組んでいる。毎年４月には，「神戸大学・附属学校英語教育連携会議」が開催され，大学及び附属学校（小・中等教育学校）の教員がそれぞれの英語教育について報告し，意見交換を行っている（今年度は４月 12 日開催）。今年度は，大学と本校英語科で先述の 11 月英語授業勉強会に向け，「自己関連性」について共同研究を行った。

５．Annual Review の開催

平成 26（2014）年度より，１年間の振り返り，指導法の共通理解，今後の課題の共有等をねらいとした“Annual Review”を毎年３月に行っている。今年度は，令和２（2020）年 3 月 30 日に神戸大学にて英語科全教員および神戸大学の大学教員もお招きし，実施する予定である。１年間の実践を教科として振り返り，今後の方向性を確認する本会の開催は，今年度で６回目となり，英語科教員の授業改善に向けた機会を提供する意義のあるものとして定着している。

参考文献

Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.

Council of Europe. (2018). *CEFR Companion Volume with New Descriptors* Cambridge: Cambridge University Press.

神戸大学附属中等教育学校英語科（2016）『神戸大学附属中等教育学校英語科 5 年誌-後期課程発足後の歩み－』

文部科学省. (2013)『第 2 期教育振興基本計画』
http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/1336379.htm (2013 年 11 月 1 日閲覧)

文部科学省 (2019) 『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1412933.htm
(2019 年 2 月 1 日閲覧)

田中茂範 (2017) ベネッセ教育総合研究所 ARCLE. 第 1 回「マイ・イングリッシュの育成」新企画リレーコラム『言語能力育成を考える』https://www.arcle.jp/note/2017/0021.html
(2017 年 8 月 1 日閲覧)

5　SGH と教科教育目標の策定

（１）作成の目的と経緯

平成 21 年 4 月に開校以来，本校の目指す教育目標として「グローバルキャリア人の育成」を掲げ，あらゆる教育活動を通してその育成に努めてきた。

グローバル社会に対応する 21 世紀型市民を学校全体で育成するためには，各教科領域を超えた学校全体としての具体的な学力の枠組が必要になった。そこで，SGH 指定を好機として，「グローバルキャリア人」の構成要素を検討し，各教科の教育目標策定に際し共通の指標（観点）を策定することとした。

その際，日本学術会議「21 世紀の教養と教養教育（2010）」の提言や，UNESCO（ASPnet）の教育目標や OECD のキーコンピテンシー等に学ぶと共に，本校の研究アドバイザーである石川慎一郎教授（神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター）の指導を受けた。

（２）教科教育目標作成のための共通指標（観点）

【表 1】「教科教育目標」記入シート（巻末資料編参照）

		目標						
	学年	科目分野等	現学習指導要領の観点	基礎力		思考力		実践力
				知識・理解	技能	思考・判断・表現		関心・意欲・態度
			本校独自の5要素	Ⅰ 知識・理解	Ⅱ スキル・運用能力	Ⅲ 論理的・批判的思考力等	Ⅳ 課題探究力	Ⅴ グローバルキャリア（市民的資質・能力）
基礎期	1 年							
	2 年							
充実期	3 年							
	4 年							
発展期	5 年							
	6 年							

・汎用的能力

＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

※公的評価は現学習指導要領の枠組みで行っている。

2016 年 12 月発表の「中教審答申」が迫るなか，SGH 推進にあたり，グローバルキャリア人の資質・能力に関わって策定したのが，3 能力 5 要素に基づく「教科教育目標」（＝観点別評価の枠組み）である。なお，「中教審答申」発表前に作成したので，国立教育政策研究所作成「資質・能力の構造イメージ」により近い。

本校では，教科等の教育目標として基礎力・思考力・実践力の 3 能力と「知識・理解」「スキル・運用能力」（基礎力）「論理的・批判的思考力等」「課題探究力」（思考力）「グローバルキャリア（市民的資質・能力）」（実践力）の 5 要素を盛り込んだ。

課題探究力に実践力的要素を重ねているのは，主体的な関心等を考慮してのことである。また，判断力・表現力等の位置付けは保留している。

未だ検討の途中ではあるが，現在本校では下表に示すとおり「理解力」「思考力」「運用能力」「課題探究力」「グローバルキャリア力（国際人的素養）」の５つを教科共通の学力要素と仮定し，共通の教科目標シートを作成した。シートでは学習指導要領で示されている従来の４観点と対比した形で示しているが，新しい枠組みの作成過程にあって現行の枠組みを参照するための便宜的なものである。また，教科独自の観点を追加することも認めている。

なお，蛇足ながら「指導要録」への記載にあたっては，現行の４観点に読み換えて記載している。

本報告書「資料編」に所収している各教科作成の教科教育目標は，「グローバルキャリア人」育成に向けた中等教育学校６年間のロードマップを示すもので，各領域の諸要素について発達段階を考慮して配列したものである。次期学習指導要領の方向性も踏まえながら，SGH 実践と教科教育の相乗効果をねらって，具体的な実践計画を立て，効果的な学習形態や評価の方法について検討を進めた。

（３）４教科領域と協同学習

グローバルキャリア人の資質・能力育成の観点から，課題研究をはじめとする SGH 事業の推進にとって，教科の枠を越えた横断的視点がきわめて重要である。「教科固有の論理（見方・考え方）」を踏まえつつ，教科共通の学力論を深める意味からも，本年度は４つの領域「対話表現：国語，英語，芸術等」，「数理探究：数学，理科，情報等」，「生活環境：技術家庭，保健体育等」，「地球市民：公民，地歴，総合，特別の教科道徳等」）ごとに各教科教育目標を比較・検討した。

その結果，各領域内においても教科によってグローバルキャリア人育成に対する捉え方に顕著な差異がみられる項目もあり，教科横断的な取組を実施するにはかなりの相互理解を図る必要があることがわかった。

今年度もこれらの汎用諸能力を意識した授業づくりを行ったが，今後の方向性として，５つの観点ごとに各教科で共通する具体的なグローバルキャリア人の構成要素を抽出し，それに基づく各教科及び合科型の授業実践に取り組む予定である。具体的な取組として，生活環境領域の中で，「ヘルスプロモーション」をテーマに教科横断的な実践を進めていることが挙げられる。

協同学習の実践については，附属住吉中学校時代からの伝統を踏まえ，前期課程の授業を中心に実践してきた。また，「共創型対話力」を重視する多田孝志氏（金沢学院大学文学部教授・共創型対話学習研究所所長，本校 SGH 運営指導委員）の指摘に学んで，後期課程においても多くの教科でその実践を試みている。SGH 事業そのものが総じて「アクティブ・ラーニング」であるが，協同学習は「主体的・対話的で深い学び」を組織する上で，有効な学習法と位置付けている。

なお，協同学習は，前期課程（中学校相当），後期課程共に以下の目的，意義を意識して行っている。

1　協同学習は，他者から自分が認められていることを知り，自信がつき，社会の中で必要な存在なのだということがわかる。同時に他者を理解することの大切さがわかる。
2　協同学習によって，考えて課題を解決することが中心となり，自分の中に学習に対する目的ができる。そして，学習スタイルを身に付けることが大切であることがわかる。
3　協同学習によって，自分の考えを伝え，他者の考えを知り，総合的な判断力を持って問題解決にあたる，いわゆるコミュニケーション能力や意欲的に社会参画するための技能を身に付けることが大切であることがわかる。

６　その他の取組

○　グローバルキャリア人育成のためのキャリア支援プラン

本校は「優れた課題発見力を持ち，世界の中で自己を位置付け，文化理解と行動を踏まえて，国際協力による関係構築を積極的に行おうとする『グローバルキャリア人』」を「グローバル・リーダー」と位置付け，その育成を教育目標に掲げ，グローバル・リーダー育成に関する環境整備の１つとして，進路相談体制の整備に努めている。課題研究やGAPへの取組は，海外への関心を高め，間接的に留学や海外進学を推奨する機能を有しているが，直接的なキャリア支援プランの必要との観点から，次の進路指導体制を設けている。

留学(本校在学中)相談，海外大学及び国際化に重点を置く大学への進路相談等，生徒のグローバルキャリアデザインの支援体制を整備するため，進路指導部に担当者を配置すると共に，留学指導経験豊かな教員，留学・海外大学在学経験のある教員，ALTがそのサポートを行う。

具体的には次の取組を企画している。(*は，今年度は未実施)

１　留学，海外大学進学を身近なものとして捉えさせる機会

☆　自分たちが直接・間接的に知っている身近な人たちから話を聞くことにより，留学・海外大学進学を選択肢の１つとする機会とする。

(1)　留学経験（短期留学も含む）のある在校生・卒業生による報告会

(2)　海外大学進学者による報告会*

(3)　留学・海外大学在学経験のある教員によるセミナー*

２　海外での学びをより豊かなものにさせる機会

☆　海外での学びが語学の修得以上に様々な内容があることを理解させ，費用面・安全面の情報も提供する。

(1)　神戸大学留学生との交流

(2)　海外交流校の教員による講話*

(3)　留学支援団体による講話*

７　神戸大学の戦略と研究開発組織

（１）神戸大学におけるグローバル人材育成に関する計画，戦略について

神戸大学第２期中期目標・中期計画において，国際化に関する目標として，教育研究のグローバル化に即して，国際的に活躍できる国内外の人材を養成することを掲げている。そして，その目標を達成するための措置として，国際競争力のある教育プログラムの開発・提供，海外の優れた大学等との組織的な連携・協力の促進等に取り組むこととしている。

（２）附属中等教育学校の戦略・計画上の位置付けについて

神戸大学第２期中期目標・中期計画において，附属学校に関する目標として，附属学校の使命を果たすため，神戸大学の教育研究に資すると共に，国・地域における初等中等教育の先導的・実験的な取組を推進することを掲げ，その目標を達成するための措置として，附属学校及び各学部・研究科等の教育研究活動における連携協力体制の強化等に取り組むこととしている。

附属中等教育学校は，「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げており，SGH 事業の目的であるグローバル・リーダーの育成と合致している。さらに，本事業の各計画は，本学各学部・研究科等との連携を図ると共に，我が国の中等教育の先導的・実験的な取組を行うものである。

（３）附属中等教育学校に対する支援について

「国際交流推進機構」は，EU 総合学術センター，アジア総合学術センター及び米州交流室で構成しており，各々の国・地域との交流促進を担っている。また，11 の「海外同窓会」を組織しており，各国・地域との交流を支援している。さらに，事務組織として「国際部」を設け，外部機関との連絡調整や海外交流協定の締結等を行っている。これらの組織が連携先の紹介や協定締結のノウハウの教授等を行うことにより，国内外の外部機関との連携推進を支援する。また，課題研究やテーマに応じ，本学の外国人研究者の派遣及び留学生との交流の機会を提供している。

（４）神戸大学における本事業の管理方法・体制について

本事業の進捗状況及び経費面については，附属学校の管理運営組織である「附属学校部」において日常的に管理する。また，教育研究の内容については「SGH 高大連携委員会」を設け，副学長・理事（附属学校担当）を委員長，附属学校部長を副委員長，大学教員でもある申請校の校長を教育担当委員長とすることで，大学と附属学校が一体となって指導・管理する体制を構築する。さらに，本学の外国語教育を担当し，「グローバル人材育成推進事業」において大学教育推進機構の教授を研究担当委員長とすることで，グローバル・リーダーの育成に資する質の高いカリキュラムの開発・実践を推進する。

（５）運営指導委員会について

本事業の運営指導委員会を設け，委員（次ページに記載）から各々の専門に基づき，本事業について指導・助言を受けると共に，生徒に対してグローバル・リーダー育成に資する講演会なども開催する。

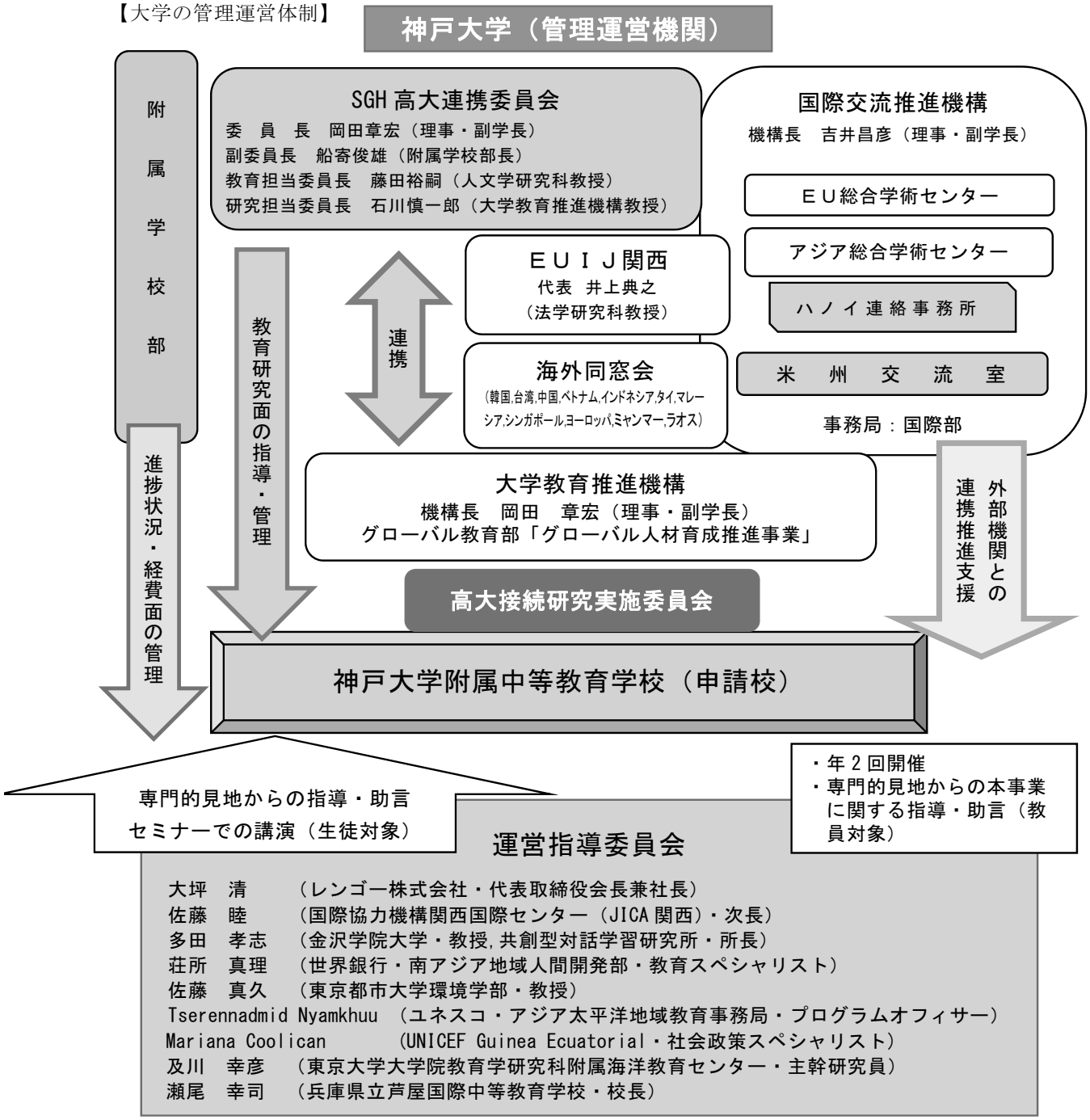
（６）校内推進体制について

校内の実施体制については，校長を委員長とする「SGH 校内研究委員会」を中心に方針等を協議・決定すると共に，実務運営機関として「グローバル教育推進室」を設置している。

グローバル教育推進室は，SGH が全校的取組になるよう教科・分掌・学年の枠組みを越えた組織とし，事務職員の参加も得て構成する。推進室には「課題研究」，「評価・検証」，「国際交流」，「英語教育高度化」の４部会を設け実務を担当する。また，臨時部会として「自治組織」，「海外進路」，「経理担当」部会を置く。

全校的組織とする点では成功しているが，逆にやや緩やかな組織であるため，業務が特定の担当者に偏る傾向（特に海外派遣における英語科教員の負担大）が否めない。研究部や対象学年等との連携を密にしながら，業務分担の円滑化を図る必要があると考えている。

【大学の管理運営体制】



専門的見地からの指導・助言
セミナーでの講演（生徒対象）

・年２回開催
・専門的見地からの本事業に関する指導・助言（教員対象）

運営指導委員会

大坪　清　（レンゴー株式会社・代表取締役会長兼社長）
佐藤　睦　（国際協力機構関西国際センター（JICA 関西）・次長）
多田　孝志　（金沢学院大学・教授,共創型対話学習研究所・所長）
荘所　真理　（世界銀行・南アジア地域人間開発部・教育スペシャリスト）
佐藤　真久　（東京都市大学環境学部・教授）
Tserennadmid Nyamkhuu　（ユネスコ・アジア太平洋地域教育事務局・プログラムオフィサー）
Mariana Coolican　（UNICEF Guinea Ecuatorial・社会政策スペシャリスト）
及川　幸彦　（東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター・主幹研究員）
瀬尾　幸司　（兵庫県立芦屋国際中等教育学校・校長）

【校内組織】

SGH 校内研究委員会

委員長　藤田　裕嗣（附属中等教育学校・校長）
副委員長　山﨑眞一郎：研究担当（副校長）
　　斎木俊城：事業担当（副校長）
研究開発主任　岩見理華（指導教諭）
各部会担当者

グローバル教育推進室

部門）A 課題研究　B 評価・検証
C 国際交流　D 英語教育高度化

３章　生徒の活動紹介

本章では,2 章の 2 で記載した本校の課題研究を支える体験事業であるグローバル・アクション・プログラムのうち,明確な課題認識を持った上で研修に参加し,認識を進化させるプログラム（C：課題研究アクションプログラム）を抜粋して紹介する。

１　グローバル・アクション・プログラム（国内研修）
A「震災・復興とリスクマネジメント」（DR3 プロジェクト）

担当　主幹教諭・保健体育科　石丸　幸勢

(1)テーマ

震災（Disaster)・復興(Reconstruction)・減災（Reduction)・レジリエンス（Resilience）をテーマとした体験型プログラム（DR3 プロジェクト）

(2) SGH における位置付け

本事業は，本校の「課題研究」の 4 研究領域における I「震災・復興とリスクマネジメント」に位置付けて実施するものである。

(3)目的

被災地訪問や学校交流,Zoom 会議による交流,防災学習プログラムへの参加や発表,他中学校への出前授業を通して，大規模震災に対するリスクマネジメントについて多角的な視点から学ぶ。

具体的には,

①身近な地域に起こった，あるいは今後起こるであろう自然災害と被災者の思いについて学ぶ

②震災の記憶や教訓をどのように後世に伝えていくかを考える

③人文科学・自然科学の両面から震災を捉え，理解する

④校内で実施される年 2 回の防災学習を生徒が企画し，主体的に進行することで防災・減災の担い手となる意欲や知識，経験をする

⑤公立中学校にメンバーが出向き，相手校生徒を対象に防災学習を実施する

⑥上記の活動を通して，他を思いやり，地域と共生することのできる生徒を共に目指す

ことを主たる目的とする。

(4) 対象生徒　4～5 年生，14 名

(5) 連携機関

①宮城県多賀城高等学校

②宮城教育大学
③滋賀県立守山高等学校
④尼崎市立武庫東中学校
⑤NEC ネッツエスアイ

(6)今年度実施内容
①毎月 3 月曜日昼休み　DR3 ミーティングとグループ別研究
テーマＡ　地域コミュニティの実態調査と地域連携の課題
Ｂ　校内防災学習プログラム（6 月）の企画と進行
Ｃ　校内防災学習プログラム（1 月）の企画と進行
Ｄ　防災学習プログラムと教材の開発
②毎月 2（3）金曜日放課後　多賀城高等学校 Zoom 会議による交流
・防災をテーマにした課題研究について互いに支援と助言
・宮城教育大学と NEC ネッツエスアイが共同開発しているテレビ会議システム“Zoom-Zoom”の開発に協力
・開催日　6 月 21 日，7 月 12 日※，8 月 23 日，10 月 18 日，11 月 8 日
12 月 13 日，2 月 14 日
※第 2 回より滋賀県立守山高等学校が参加
③6 月 20 日　校内防災学習
④6 月 31 日　宮城県多賀城高等学校から生徒 4 名と教員 1 名が来校
・1 年間の活動計画について意見交換
⑤8 月 26 日　滋賀県立危機管理センター訪問
・滋賀県の危機対応についての講演
・滋賀県立守山高等学校生徒会 4 名と避難訓練について意見交換
⑥11 月 21 日　尼崎市立武庫東中学校での防災学習出前授業
・DR3 メンバー4 名が出向き，相手校 2・3 年生 11 名に対して 3 種類の防災学習を実施
・尼崎市立小・中学校教員研修として実施の様子を公開
⑦12 月 2 日　宮城教育大学・小針教授来校
・Zoom 会議システム利用の課題と今後について意見交換
⑧1 月 16 日　校内防災学習の計画と進行
1 年生　クロスロード，2 年生　ハザードマップの活用（本校教材）
3 年生　アクションカードゲーム，4 年生　ハザードマップの活用（多賀城）
5 年生　アクションカードゲーム
⑨1 月 24-26 日　宮城研修プログラム
・「東日本大震災メモリアル day 2019」でのポスター発表
・各地域の震災遺構フィールドワーク
⑩3 月 17 日　交流 3 校での課題研究発表会
・Zoom 会議システムを利用
・多賀城高校 4 テーマ，守山高等学校 1 テーマ，本校 2 テーマ

⑪3 月 21 日　震災 25 年キャンペーンプロジェクト報告会でポスター発表

・DR3 活動紹介

・課題研究「避難所における外国人支援～ヘルプアイテムブックの開発～」

(7) 活動の一例

①宮城研修プログラム（2020 年 1 月 24-26 日）

1/24（金）	1/25（土）	1/26（日）
1.　石巻市と女川町のフィールドワーク 2.　多賀城高等学校交流 ・両校課題研究の発表 ・交流方法の意見交換	「東日本大震災メモリアル day 2019」 ・被災地スタディツアー ・基調講演 ・ワークショップ	「東日本大震災メモリアル day 2019」 ・ポスターセッション ・講評 ・多賀城街歩き

②DR3 各活動の様子

写真 1 Zoom 会議
月 1 回開催

写真 2 多賀城来校
ワークショップ

写真 3 滋賀危機管理ｾﾝﾀｰ
見学と守山高校交流

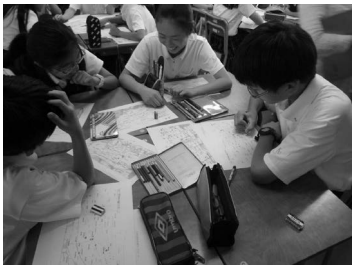


写真 4 校内防災学習①
1 年：ﾊｻﾞｰﾄﾞﾏｯﾌﾟづくり

写真 5 校内防災学習②
2・4・5・6 年：ｸﾛｽﾛｰﾄﾞ

写真 6 校内防災学習③
3 年：ﾊｻﾞｰﾄﾞﾏｯﾌﾟの活用

写真 7 出前授業①
尼崎市立武庫東中学校

写真 8 出前授業②
尼崎市立武庫東中学校

写真 9 石巻・女川訪問
被災地タクシー研修

写真 10 ﾒﾓﾘｱﾙ day①
震災遺構・旧荒浜小学校

写真 11 ﾒﾓﾘｱﾙ day②
本校のポスター発表

写真 12 ﾒﾓﾘｱﾙ day③
都市津波多賀城街あるき

③参加生徒の所感

○尼崎市立武庫東中学校での防災学習出前授業

私は尼崎在住で，武庫東中学校も身近な学校でした。防災授業の準備をするにあたって，家にハザードマップなど尼崎の防災に関する資料があったので，地元に沿った準備ができました。その方が，きっと抵抗なくみんなで考えることができると思いました。

せっかくの授業で，こちらの話ばかりでは退屈になるだろうし，やはり目的は身近な問題として受け止めてほしいということが一番の願いでした。そして他校と交流することで，お互いの防災意識を高めらたと感じています。校内で他学年に防災学習をしたことはありましたが，初めて他校で防災授業をして，受け入れてもらえるか緊張しました。このような，校外でも活動も増えていけたらいいと思います。（5 年生女子）

○校内防災学習の計画と進行

本校の防災学習は生徒主体で行っていますが，ここ数年は内容が単調化してきたため，新たな防災学習の開発が求められていました。そこで 3 年生を対象にした独自の防災学習を計画し，6 月 20 日に実施しました。

本校は六甲山の中腹に位置しており，土砂災害警戒区域に指定されています。その対処方法を学ぶことのできるプログラムを考案しました。大半の生徒が通学時に使用しているバス車内で地震が発生したという想定で，地震により土砂災害の危険性が高まっている前兆現象を見聞きした時にどのような行動をするのか考えるというプログラムです。

自分で授業を進めることで，どうすれば防災に関心をもってもらうか，どのように進行すれば効果的に学べるか，について深く考えることで，自身の防災意識が今まで以上に高まりました。（5 年生女子）

○DR3 活動を通して

宮城県の多賀城高校と滋賀県の守山高校とは，月 1 回の Zoom 会議で防災に関する取組を交流しています。一言に「防災」といえども，多賀城高校は東日本大震災の復興住宅，守山高校は避難訓練や行政の防災，本校は校内外での防災学習というように各校で活動は様々ですが，その 1 つ 1 つが興味深く，お互いに質問や意見を言い合うことで，自分たちの活動に活かせるような学びにつながることも多くありました。また，2 校の方には個人の課題研究のアンケートにも協力していただきました。加えて，3 月と 8 月には守山高校の生徒 3 名と実際に会って交流しました。このような年間を通しての他校との交流だからこそ得られる学びがあると感じています。（5 年生女子）

(8)成果と課題

主体的な減災防災活動を通して，生徒一人一人が減災防災の担い手となることを目指して様々な活動プログラムを年間通じて実施した。2年目となるZoom会議による定期交流は，互いのメンバーの親交を深めることが当初の目的であったが，後半は課題研究の成果を発表したことで，次年度の他実践校との交流可能性を拡げることとなった。メンバーによる年２回の校内防災学習企画進行は校内で定着し，前期生徒の中からも活動参加を希望する声があがった。内容がパターン化しているため，避難所運営など地域との連携を含めた新しい教材開発が求められる。また，地域の中学校に出向いて防災学習をレクチャーした貴重な体験の中で，防災課題の地域差を認識する機会となった。

B　全日本高校模擬国連大会

担当　社会科教諭　木下　宏史

(1) テーマ　「死刑モラトリアム」(担当国：ノルウェー)

(2) SGHにおける位置付け

本プログラムへの参加は，本校「課題研究」の４領域のうち,Ⅲ「提言：国際紛争・対立から平和・協力へ」に関わるものである。これに関連するカリキュラム上の科目としては,「ESD」,「国際理解」が特に関わりが深いものとして設定されている。

(3) 目的

「全日本高校模擬国連大会」は，グローバル・クラスルーム日本委員会｛GLOBAL CLASSROOM IN JAPAN（以下，GCIJ と略記)｝が主催する,「1. 国際連合及び国際関係に関する研究と国際問題の正確な理解又その解決策の探求を促進すること」,「2. 豊かな国際感覚と社会性を有し未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し輩出すること」｛GCIJ「全日本高校生模擬国連大会」（http://jcgc.accu.or.jp/alljapanmun.html ）｝を目的とした大会である。

実際に国連総会の場で取り上げられてきた議題について，特定の国の立場から調べ,政策を固め，主張し，決議案を作り上げることを通して，議題に対する複眼的視点や政策を発信する力,交渉力を身に付けることができる。それらの力は，本校課題研究の基礎となる「見つける力」,「調べる力」,「まとめる力」,「発表する力」を含み，かつそれらを統合する「考える力」まで及ぶものである。

このように，本プログラムは,「全日本高校生模擬国連大会」参加を通して，課題研究に係る力を伸ばすことを志向するものである。

(4) 対象生徒　　4～5年生，4名（1校につき，2組4名の応募制限があるため）

(5) 2019年度実践（「第13回全日本高校模擬国連大会」）の内容

7月 1日　GCIJ　が大会の選考課題を発表（「相対的貧困とは何か」）

7月 2日　校内選考課題を発表
7月 19日 校内選考申込締切
7月 24日 校内選考結果発表（5年生2名と4年生2名）
9月 1日　GCIJへ申込み
10月 1日　GCIJ選考結果発表，Bチーム(4年生2名)が出場決定
10月 9日　GCIJによる国割の発表（ノルウェーに決定）
10月 21日 自己紹介カード提出
11月 6日　Position and Policy Paperを提出
11月 16日・17日　大会当日

(6) 大会の様子

写真1　公式討議
（英語によるスピーチ）

写真2　非着席討議
（アンモデレートコーカス）

写真3　決議案投票

(7) 成果と課題

参加生徒による振り返りアンケートを基に今回の成果について述べる。成果としては，2名の生徒たちは共に「情報分析能力」「論理的思考力」「多面的思考力」「創造力」「課題発見能力」「探究力」などの高まりを感じていることが挙げられる。

今年度の議題は「死刑モラトリアム」であった。今年度の特徴として，各国に根付いた文化や宗教的側面などが重要な要素となる分野であり，地域や伝統的な考え方などにより国家間の立ち位置が明確に異なっているテーマであった。また，国際的な方向性として廃止，または停止が強く訴えられているテーマであり，コンセンサスを要求されてはいないものの，死刑制度に対し肯定的な国々に対し死刑制度の廃止，または停止を求めるという議論の構造上，例年以上に交渉能力や情報処理能力が求められる大会となった。さらに専門的な用語が使われることも多く，高い英語能力も求められた。これらの課題に対して，生徒たちは自国のみではなく他国の情報も含め調査を行い，死刑制度への賛成・反対双方のグループに関わりながら妥協点を探っていった。

以下，生徒たち自身による感想の一部を掲載し，今回の成果の一端として紹介する。「国際的な情勢を考える上での英語力不足と，その必要性を知ることができました。また，過去の1つの政策や条約の解釈をとっても，自国の立場の変化や反対国の宗教，文化的な背景が影響しており，深く考えていくことの難しさ，多くの情報がつながっていく面白さがありました。」

「序盤から，大会に慣れている人たちの勢いがあり，緊張してしまいましたが，上手な人の所作を見て，どう動けばよいかわかった気がしました。」

これらの感想から，生徒たち個々人がそれぞれに目標とする力の必要性を自覚し，課題に取り組む中でそれらを伸ばしていったことがうかがえる。

反省点としては，同じく生徒の記述にあったが，本校の行事においても多方面で活躍している生徒たちが，本プログラムの課題の多さと逼迫するタイムスケジュールに追われ，万全の準備ができなかったことである。また，例年感じることではあるが，前年度参加者から次年度参加者への引き継ぎが不十分であり，経験の少なさが余計に表に出てしまう点などが挙げられる。社会科や英語など授業を通して，連年の参加の成果を積み上げ，継承していけるよう指導していきたい。

C　臨海実習

担当　理科教諭　副島　麻衣

(1)テーマ　「内海域から学ぶ環境と生物多様性」

(2)SGHにおける位置付け

本事業は，本校の「課題研究」の4研究領域におけるⅣ「グローバルサイエンスと拠点都市『神戸』」に位置付けて実施するものである。

(3)目的

①机上の学習ではなく，自らを自然環境に置いて五感で自然体験をする。

②藻類をはじめとする生物の進化と，海洋生物の多様性について学ぶ。

③専門家の研究を知り，生徒自身の探究活動の深化につなげる。

④海洋をふくむ環境問題とその対策とマクロとミクロの両観点に立って考え，自然環境に対する視野を広げる。

(4)参加生徒　3年生5名，4年生3名，5年生7名　合計15名

(5)日程・行程　2019年8月5日(月)・6日(火)

〔1日目〕	〔2日目〕
9時半：開講式	9時～：講義
10時～：プランクトン採集，観察	10時～：標本作成
11時～：海藻組織観察	13時～：蛍光顕微鏡観察と光合成色素分析
13時半～：ウニの発生	16時：閉講式
15時半～：海藻採集	
17時：終了　（夜間：宿舎にて任意の観察）	

(6)活動の様子

写真１プランクトン採集	写真２ プランクトンの観察	写真３ 生きたウニとの対面

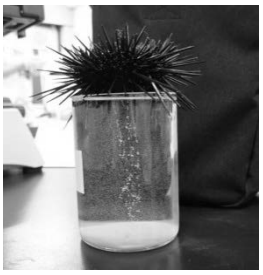
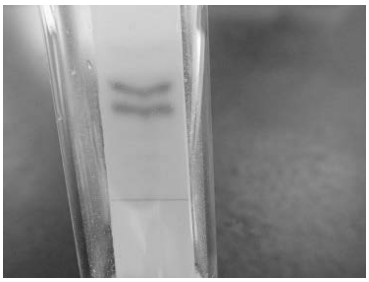



写真４ ウニの放卵	写真５ 海藻採集	写真６ 講義
		
写真７ 採集した海藻の種の同定	写真８ 藻類のクロマトグラフィー①	写真９ 藻類のクロマトグラフィー2

(7)参加生徒の感想（一部抜粋）

○プランクトンの観察では，どのような種類のものなのかを見極め，調べながら観察するのが楽しかったです。動きが面白く，いつまでも見ていて飽きませんでした。
○動物プランクトンが動いている姿を初めて見ることができましたが，それらはとても激しい動きをしていたり，逆にゆっくりと動いていたり，様々でした。なぜそんな動き方をするのか，なぜ動きに違いが出るのか，といった疑問が生まれたので，その点をもっと知りたいと思いました。
○海が怖くて，シュノーケルの使い方がよくわからなかったので，浅いところにある海藻しか採れませんでした。海藻は岩や他の海藻にしっかりと張り付いていたので，根元から採ることができませんでした。どのような仕組みがあれば流されることなく張り付くことができるのだろうかと思いました。
○講義を聞いて，海藻は海の生態系の中の一次生産者を担っていて，海の生物にとっても海の豊かさを享受する私達にとっても大切な存在であると気づきました。水中はあまり可視光線が届かず，光合成色素を多様性させるという進化を遂げたことも学べました。

○受精して分割が進んでいくと，あまり時間がたっていないにも関わらず動き出したので，こんなに小さくても生きているのだということを実感して，人間の人工妊娠中絶の残酷さを思い知りました。
○生きたウニの口の周りをえぐり，その中に塩化カリウムを入れ放卵・放精をさせました。私はえぐられてもまだ生きているウニの生命力に驚かされました。
○ウニの精子と卵を入れたプレパラートを観察したところ，卵の周りに無数の精子が寄ってきているところを見ることができ，精子 1 つ 1 つが頑張って卵に入ろうとしていて面白かったです。
○ウニの発生観察をしました。人工授精によって精子が卵子にくっついて受精膜をつくる様子は神秘的でした。卵割の様子を実際に見ることができてとても嬉しかったです。四細胞期から桑実胚期までの卵割をこの日は見ることができました。14 時 20 分に受精⇒16 時 30 分に四細胞期⇒16 時 45 分に八細胞期⇒17 時 21 分に十六細胞期⇒22 時 3 分に桑実胚期⇒2 日目の 11 時 27 分にプリズム幼生期・プルテウス幼生初期を確認することができました。
○この 2 日間で定期的に受精からの様子を見てみて，教科書や図説と同じものだとはあまり感じませんでした。というのも，受精卵自体の変化の様子は同じようなものでしたが，実際は未受精卵の周りでは精子が動いていたり，受精卵が発生の進む中で活発に動いていたりと，資料の中では拡大されていたり，静止した状態だったりしているので見ることのできない様子を観察することができたからです。
○実際に観察するのは初めてで，一卵子が受精して徐々に動くようになる過程はとても興味深く，教科書を見るだけでは得られない経験になりました。ただし，1 つ感じたのは，ただ一度経験するだけでは授業で習うのと大して変わりはないのではないかということです。（中略）なぜ塩化カリウム水溶液を加えるのか，ウニはどのような構造をしているのか，あるいは他の生物では発生にどのような差異があるのか・・・と，その実験の本筋には関連しない部分についても関心を持ち，考えようとする姿勢が重要なのではないかと思います。いずれにしても，「一度経験したからそれについては詳しくなった」という考えは捨て，逆に知らないことが増えたと考えるべきであると思いました。
○私は去年もこの臨海実習に参加したのですが，その時よりも生物に関する知識が増えていたせいか，全体的に理解できることも多くなっていて，非常に有意義な実習となりました。それに加えて今年は 2 日間かけての実習だったため，発生の経過について日をまたいで見ることができたのも面白かったです。
○海藻の名前は今まで一度も気にしたことがなかったのでコンブだと思っていたものが実はカジメという海藻だったり，いつも食べているヒジキが海の中ではこんな姿なのだと思ったり，新たな発見ばかりでした。
○実習に参加するまでは，理科が苦手だし，ついていけるか不安に思っていました。しかし，現地に行って見聞きしたことを周りの人たちと活発に共有でき，思っていた以上に濃い時間を過ごすことができました。これからこのプログラムに限らず，自分が苦手意識を持っていることでも，「やってみないとわからない」，「見てみないとわからない」，というチャレンジする気持ちを持ってやってみようと思いました。
○臨海実習を通して私はさらに生物のことが好きになったように感じます。

○今回の実習の前にある程度は知識を入れていたつもりでしたが，実際に説明を聞いていると，まだまだ知らないことが多く，知識は知りすぎても十分になることはないのだとわかりました。しかし，その中で，生物の授業で習った範囲がとても理解しやすかったので，色々な学習につながるのだとわかり，一夜漬けではなく，ずっと活用できるような勉強の仕方を考えなければいけないと思いました。普段の授業では使うことがない器具を使ったり，見ることがない生き物を見ることができたりしたので，この実習に参加したことはとても良い経験になったと思います。また，生物の分野にも興味がわいたので，色々な大学の学部を調べてみたいと思いました。

(8)成果と課題

過去 2 回の実習は 1 日のみの実施であったため，1 日ではできなかったような実習も，実習を 2 日間に拡大した今年度は実施可能であった。従前心配されていた潮の都合も，2 日間あれば採集できるタイミングがあり，課題が解消された。プランクトン等の極めて小さな生物からウニの成体のような大きな生物まで，あらゆる「いのち」が動く姿を，生徒の思い思いの観点から観察できた。生物の数や種類の多さ,そしてその違いから,「多様性」という言葉の意味を実感できた点は成果だといえる。また，マリンサイトの先生方から，常に生き物と触れて研究している科学者の日頃の姿を間近で見ることができ，その点からも生徒の探究心を大いに刺激したと感じる。生徒の感想からは，生物の神秘に純粋に感動した記述も多く，実習が有意義であったようだ。

課題としては，1 つにはやはり天候の問題が挙げられる。プログラム実施期間中，海での実習ができない場合の代替プログラムも検討することが必要である。

2 つ目の課題としては，一部の参加生徒によっては自身の参加動機や意識とプログラムの内容に差があったことである。華やかな実習や，実験結果を期待していた生徒にとっては,研究者が日頃行っている地道な実験作業や観察には興味がわかなかったかもしれない。今後は，参加生徒に対し，より細やかな事前・事後研修を行うことにより，充実した研修になるように図っていきたい。

D　ユネスコスクール関連事業

ユネスコスクールは，1953 年，ASPnet(Associated Schools Project Network)として，ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するため，国際理解教育の実験的な試みを比較研究し,その調整をはかる共同体として発足した。現在世界 182 か国・地域で約 11,500 校以上が ASPnet に加盟して活動している。日本国内では，2019 年 11 月現在，1,120 校の幼稚園，小学校・中学校・高等学校及び教員養成系大学がこのネットワークに参加しており，1 か国あたりの加盟校としては世界最大である。日本では，ASPnet への加盟が承認された学校を,「ユネスコスクール」と呼んでいる。ユネスコスクールは，そのグローバルなネットワークを活用し，世界中の学校と交流し，生徒間・教師間で情報や体験を分かち合い，地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発，発展を目指している。

2002 年の国連総会において，我が国の提案により，2005 年から 2014 年までの 10 年間を「国連持続可能な発展のための教育(ESD)の 10 年」とすることが決議され，国際連合教

育科学文化機関（ユネスコ）がその推進機関に指名された。これを受けてわが国では，日本ユネスコ国内委員会や関係省庁が協力し，ESD の推進のため取り組んできた。2006 年には内閣官房に設置された ESD 関係省庁連絡会議が，わが国における ESD の実施計画を策定し，同計画に基づいて様々な関係者と連携し，ESD を推進している（「ユネスコスクール」HP 参照）。

前述のように，文部科学省及び日本のユネスコ国内委員会ではユネスコスクールを ESD の活動推進拠点として位置付けている。本校は平成 26（2015）年 9 月にユネスコスクールに認定され，学校全体で ESD を推進するとともに，ユネスコスクール関連事業に積極的に参加している。

本節では，本校が取り組んでいるユネスコスクール関連事業のうち「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」と「ESD Food プロジェクト」の取組について報告する。

なお，2015 年にフランスのユネスコ本部で開催された第 38 回ユネスコ総会において，これまでユネスコ支援事業として行われてきた世界ジオパークネットワークの活動が「国際地質科学ジオパーク計画」として世界遺産と同じユネスコの正式事業となったことを受け,本校でも山陰海岸（兵庫県豊岡地区）において「ジオパーク研修」を行っている。今年度は,3 月 23 日に実施を予定していたが，新型コロナウィルス感染症対策に係る臨時休校のため，実施することができなかった。

１）「アートマイル国際協働学習プロジェクト(Artmile International Collaborative Learning (AICL)」～東京 2020 オリンピック・パラリンピック参加国・地域の子どもたちと協創する未来～（文部科学省・外務省後援事業）

担当：英語科指導教諭　岩見　理華
英語科教諭　　島　　安津子
美術科教諭　　柴田　美帆子

「アートマイル国際協働学習プロジェクト（以下，アートマイル)」は，一般財団法人ジャパンアートマイル（JAM）主催の海外の学校と ICT を活用して共通のテーマで協働学習を行い，学習の成果として 1 枚の壁画（1.5m×3.6m の大型絵画）を共同制作する国際協働学習の事業である。また，アートマイルはユネスコから「平和の文化 10 年プロジェクト」として認定されている。

今年度本事業は,文部科学省・外務省の後援事業として,「東京 2020 オリンピック・パラリンピック応援プログラム」としてオリンピックに参加する国・地域の子どもたちと実施され,完成作品はオリンピック関連施設に展示される予定である。また,各参加校は壁画のテーマを SDGｓの 17 の目標から選び,自分たちが生きる未来のあるべき姿について一緒に考え,課題について議論して学習を深める。

(1)目的

本プロジェクトは,日本の子どもたちと海外の子どもたちをインターネットでつないで,文化的・歴史的背景が違う海外の子どもたちと共通のテーマで協働学習を行い，学習成果として壁画を共同で制作する国際協働学習を通して日本人として自分の国の伝統文化に誇りを持ち，グローバルな広い視野を持って，自ら考え行動し，世界の人々と協働して世界の調和と平和に貢献する次世代を育てることを目的としている。

(2)SGH における位置付け

アートマイルにおける世界の同世代と現代社会に共通の課題について学び合う国際協働学習は,持続可能な社会づくりの担い手を育む教育として ESD に最適なプログラムであり,本校の SGH 研究開発の目的にも合致するものである。

また，本校ではアートマイルを「課題研究」の 4 領域のうち,Ⅱ「国際都市『神戸』と世界の文化」を主要領域として，異文化理解教育を推進するものとして位置付け，平成 26 年度より 6 年間継続して ESD の学習分野を交流相手校との協働学習のテーマとして取り組んでいる（表 1)。前述のとおり,今年度はアートマイル全参加校が SDGｓの 17 の目標のいずれかを選んで学習を進めることとされており,本校は,神戸が震災を体験した町であることから「目標 11：住み続けられる（災害に強い）まちづくり」をテーマとして提案し,女性差別が大きな問題となっているサウジアラビアの交流相手校が選んだ「目標 5：ジェンダー平等」の 2 つのテーマで協働学習を行い,壁画制作に取り組むことに決めた。

(3)目的

表 1　アートマイルの交流相手校と ESD のテーマ

参加年度	交流相手国	交流校名	ESD のテーマ
平成 26 年度	タンザニア	Kilakala Secondary School	エネルギー
	台湾	南栄国民中学	環境
	メキシコ	Preparatorial Lomas Del Valle UAG	世界遺産
平成 27 年度	フランス	Le likés	水資源管理
平成 28 年度	インドネシア	SMA Lab School Cibubur	平和
平成 29 年度	インドネシア	SMP Islam Tugasku	歴史を通した開発と景観
平成 30 年度	台湾	新北市立福和国民中学	生物多様性
平成 31 年度	サウジアラビア	AI Hussan International School AI Knobar	持続可能なまちづくり・ジェンダー平等

(4)概要

①期間　2019 年 4 月～2020 年 3 月

②対象生徒　2 年生 7 名,3 年生 10 名，4 年生 10 名　計 27 名

③活動の日程及び内容

前年度 2 月	プログラム参加申請（アートマイル事務局（以下，JAM）宛申請書及び Entry Sheet の送付）。ユネスコスクール（可能であれば）と「持続可能なまちづくり」をテーマにアートマイルを通して協働学習を進めたいことを JAM に要望。
前年度 3 月	JAM より参加決定通知受領。 サウジアラビアの AI Hussan International School AI Knobar が交流相手校に決定。
4 月	相手校とスケジュール調整。 スケジュールシートの作成と JAM への送付。
5 月	「アートマイル関西セミナー」（於：JICA 関西） 本校生徒 3 名（2 年生 2 名，4 年生 1 名）と英語科教員 1 名が参加。 本校参加生徒によるミーティングで役割分担等を決定。相手校に報告。
6 月 7 月	学校紹介,自己紹介動画作成準備。
9 月	アートマイル参加校専用フォーラムを用いた教員同士の連絡・調整。生徒同士の自己紹介文,動画の投稿。教員によるテレビ会議（Zoom）接続テスト。 学習テーマの設定（SDGｓ目標 5「ジェンダー平等」と目標 11「持続可能なまちづくりの 2 つに決定）。

10 月	フォーラムによる教員同士の連絡・調整。相手校生徒と本校教員による Zoom によるテレビ会議。両校によるフォーラムへのビデオレターの投稿。 テレビ会議(両校による自己紹介及びジェンダー平等と持続可能なまちづくりについて,相手校によるプレゼンテーション) 本校による上記２テーマに関するプレゼンテーション動画のフォーラムへの投稿。
11 月	壁画の構図についての両校生徒によるフォーラムでの話し合い。 壁画のデザイン決定。
12 月	本校壁画制作（下絵・色付け作業開始）。冬休み前に完成。
1 月	EMS（国際スピード郵便）にて相手校へ壁画送付（1 月初旬）。 相手校壁画制作開始。
2 月	相手校壁画完成。フォーラムに完成作品を掲載。DHL にて本校に壁画が到着（2 月下旬）
3 月	新型コロナウィルス感染症対応策に係る臨時休校のため，壁画鑑賞会は実施できず。JAM へ完成作品を送付。
新年度	本校全校集会にて完成作品披露。文化祭（5 月），オープンスクール（6 月）にてこれまでの作品と共に展示，広く一般の方にも取組を紹介する。（予定）

図１　フォーラム上の話し合いで決定した壁画の構図

ジェンダー平等を象徴する天秤を中央に配置する。天秤には「平和」と「知恵」が花言葉であるオリーブを絡ませる。両校の絵の配分を決める境界線として，川の流れを描いてサウジアラビアと日本を自然につなぐ。手前には伝統的な街並みを，奥になるほど新しい時代の建物などを描いて町が開発されていく様子を表現する。また，背景には互いの国のシンボル的な山や建物，花などをあしらって仕上げていく。

(5)活動の様子

写真１　サウジアラビア相手校の生徒たち

写真２　テレビ会議の様子（相手校側）

写真 3　壁画下絵作業の様子（本校）

写真 4　壁画色付け作業の様子（相手校）

写真 5　本校側完成

写真 6　完成作品（サウジアラビアにて）

(6)成果と課題

前期課程生徒が参加できる国際交流活動が少なかったことから,今年度は 2 年生も本プログラムに参加できることとし,3 年生と前年度参加者をあわせて 27 名の参加者を得た。学年の枠を越えた課外活動のため,役割（フォーラム,デザイン班等）ごとにリーダーを決め,メンバーが集まりやすい昼休みに生徒主体でミーティングを行って活動の計画を立て作業を進めた。ここ数年は,前年度参加者（4 年生）が活動をリードし，制作作業を円滑に進めることができている。相手校がイスラム系国際学校で,ラマダンの時期や長期休業が多かったり,互いの定期考査の時期がずれていたりしたことから,テレビ会議などで直接交流する機会は少なかった。その分,今年度はフォーラムを活用し,メッセージや発表スライド,ビデオファイルなどを投稿することによって積極的にコミュニケーションを図るようにした。サウジアラビアでは,教育や仕事など，様々な場面で女性に対する差別が根強く残っている。テレビ会議で同年代の女子生徒から具体的に説明してもらうことによって「ジェンダー平等」はサウジアラビアにとって非常に重要な課題であるということを,本校の生徒たちはとても身近な問題として捉えることができた。また,小学生の頃から学習しているとはいえ,生徒たちが生まれる前に起こった神戸の震災について,壁画のテーマとして相手に伝えるために,理解を深めることができたと思う。

新型コロナウィルス感染症の影響で壁画到着直後に学校が休業となってしまった。オリンピック展示準備で事務局への発送が急がれたため,到着した完成壁画をメンバー同士,また学校全体で鑑賞することができなかったことが残念である。新学期には学校が再開し,生徒たちと壁画の完成を共に喜び,これまでの学習を振り返ることができればと願っている。

２）ESD Food プロジェクト

担当　栄養教諭　　永野　和美
英語科指導教諭　岩見　理華

(1) テーマ

「食」を通して考える持続可能な生活と社会

(2) SGH における位置付け

本事業は,本校「課題研究」の 4 領域のうち, Ⅱ 国際都市「神戸」と世界の文化及びⅣ グローバルサイエンスと拠点都市「神戸」に位置付けている。

(3) 目的

本事業は,「食」をテーマとした 2016 年度文部科学省委託事業日本/ユネスコパートナーシップ事業の国際協働学習プロジェクトの継承プログラムである。「食」とそれを取り巻く状況は,生物多様性や気候変動,食の安全,消費,伝統文化など経済,環境,社会,文化など多彩な切り口が考えられる豊かな題材である。

「食」に関する課題について,大学や地域企業・団体と連携した協働学習を通して,問題解決力を養い,多様な価値観から意思決定する能力を身に付け,多様な文化や考え方が存在することを学び,批判的思考力や創造的思考力,長期的に物事を考える力を養うことを目指す。

(4) 概要

①実施期間　　2019 年 5 月～2020 年 3 月

②対象生徒　　1～5 年生　53 名

③日程と内容

5 月	・ミーティング ・第 1 回フードドライブ活動
6 月	・ミーティング ・講義①「植物と生活の多様な関わり」（理科教諭）」 ・講義②「ESD と私たちの暮らし」（社会科教諭）
7 月	・ミーティング ・GAP 発表会にて活動報告 ・講義③「国際社会のおける食の課題」（社会科教諭）
9 月	・第 1 回農園実習（神戸大学実習観察園） ・ESD 実践研究集会（神戸大学）
10 月	・ミーティング ※第 2 回農園実習（神戸大学実習観察園）は台風の影響により中止 ・第 1 回調理実習「旬の食材を用いた料理」
11 月	・ミーティング ・第 3 回農園実習（神戸大学実習観察園） ・講義④「旬の食材とエコ・クッキング」（家庭科教諭：エコ・クッキングナビゲーター）」
12 月	・ミーティング ・第 4 回農園実習（神戸大学実習観察園）
1 月	・ミーティング ・フードドライブ活動
2 月	・ミーティング ・全校集会でフードドライブの参加（食品の寄附）御礼 ・グローバルリーダーセミナー（フェアトレード実施団体）
3 月 （中止）	・ミーティング ・GAP 報告会に向けてスライド発表準備 ・次年度フードドライブ活動の準備

④「食」に関するグローバルな問題との関連性

ア　持続可能な社会を目指す中で環境破壊やエネルギー資源の枯渇，健康問題など様々な問題がある。4 人の教師による専門性の高い講義（植物の循環や生活との多様な関り，ESD と私たちの社会，国際社会における食の課題，旬の食材でエコクッキング）を実施する。これらの講義を通して，生物多様性と環境保護，持続可能な社会に向けて今の自分たちができること，自国や他国の食料事情を踏まえ，自分たちの食生活を見つめ直し，限りある資源の有効活用，野菜料理を食べて健康増進することについて理解する。自分の行動が将来の持続可能な社会につながることを理解する。

イ　世界の飢餓の現状に目を向け，先進国による大量生産・大量廃棄を陰で支えている発展途上国では環境破壊，貧富の格差，児童労働，健康被害など様々な問題が起きている。フードドライブ活動を行うことを通して日本の食料廃棄の現状を理解し，食品ロスの削減に努めると共に食料需給率の向上を目指すための取組につながることを理解する。フェアトレード実施団体の話を聞くことを通して，公平な経済を目指して自分の消費活動を見直し，発展途上国と手を携えてよりよい社会を作ることを目指し，今自分ができることを実践する。

ウ　食文化の継承が難しくなっている現状がある中で，旬の食材を取り入れた料理を作ることを通して，旬の食材や旬の食材を用いることの利点を理解する。

エ　野菜の栽培の過程において，農薬使用の安全性や旬の時期以外の栽培に関わる過剰なエネルギー使用などの問題がある。神戸大学の 3 名の先生の支援を得ながら人間発達環境学研究科附属農園で野菜を安全に栽培し自宅で調理するなど自分ができる方法を実践すると共に，生産から消費までの食の循環を理解する。この活動により，無農薬や天候の影響を受ける露地栽培の難しさや自分が栽培した野菜を大切に思う気持ち，おいしさなどを感じることができる。これらの活動を通して地元産の野菜の購入促進や食料自給率の向上につながることを理解する。

(5)参加生徒の感想（一部抜粋）

○世界で何が起こっているかを知った上で，世界中に通じる解決策などを考える。（消費期限が近いものから買う，食べる。好き嫌いをしない，食べられる量だけ計画をたてて買う。）（「講義③食の課題」参加生徒：1 年）

○ワークショップで考えた「50 年後の理想の食生活」は，食品ロスが無くなり，フードバンクが無くなる。日本を主とした輸入に頼る食生活をする国々が，海外からの輸入に頼ることなく地産地消を心がけて平等に安全で環境に良い食料を食べることができる生活。また，生物多様性をおびやかすことなく，人間以外の生物の事を考えてこそ持続可能な食生活になる。（「講義③食の課題」参加生徒：4 年）

○調理というのは一番「食」に直結するものの 1 つであり，生活の中でとても身近なものであると思う。そして気軽にみんなができるものだからこそ「調理」方法の意識をみんなが 1 つでも変えられたら，それが持続可能な社会への貢献につながると思う。実際，今回学んだことは簡単にできることなので，まずは自分から実践していき，啓発活動も行いたい。（「講義④エコ・クッキング」参加生徒：2 年）

○今回，調理実習を通して学んだ調理に関することは家でも生かしたい。この料理も自分のレパートリーの 1 つにして，作れるようにしたい。「スイートポテトもち」がおいしかったので，家で作ってみたら家族からも大好評だったので良かった。(「調理実習」参加生徒：2 年)

○発表後のワークショップでは，いろいろな立場のから意見をいただいたことで，これからの活動をよりよくする案が浮かんだ。特に，私たちの活動を「伝える」というのは難しいと感じた。興味がない人にどう興味を持ってもらうか，また，その入り口に入ってきた人にはどう中まで入ってきてもらうかをスポーツの取組や他の地域の取組を参考に，様々な視点から考えることができた。また，SDGs は目標がありゴールは決めているが，本当はゴールではないのではないかという意見にハッとさせられた。SDGs に当てはめて取り組むのではなく，取り組んだものが SDGs に当てはまっていたという方がいいのではないかと思った。意図的にするのではなく，自然にできる方が親しみやすく，参加しやすいプロジェクトができると思う。他に「フードドライブ活動は，無駄をなくす面では良い取組だが，貧困の格差が前提のため，貧困解消につながらず根本的な解決になるかはわからない」という意見が出た。私たちが今している活動をもっと批判的に見て改善しないといけないと思った。(「ESD

研究集会」参加生徒：3年）
○私たちの豊かな生活の裏には,発展途上国が不正な取引をされたり,児童労働が行われていたり,様々な問題があると気づかされた。また,つい安い商品を買ってしまい,状況が改善されないことも問題だと思った。寄附よりも実行・継続がしやすく,努力をした発展途上国に直接届くフェアトレードをもっと広める必要があるとも感じた。私自身も今までフェアトレードについてよく知らなかったので,今回のセミナーで学んだことを生かし,友達や家族と話し合ってみたい。今後もこのような会や活動に積極的参加していきたい。（「国際協力講話」参加生徒：1年）
○今,私たちの学年はKobeプロジェクト｛2年総合的な学習の時間（探究入門）｝でSDGsについて調べている。今回のセミナーではSDGsに関する話も出てきたので,すごく参考になった。SDGsでも途上国について考えるものが多いけれど,実際に行動を移すことの難しさを感じた。フェアトレード商品は今のままだと私たちには「高い」だけでメリットがないように感じるので,もっとメリットを伝えてほしいと思う。実際に活動されている人の話を聞くのはとても貴重な経験になった。今後のKPなどの活動でこの体験を生かしていきたいと思う。（「国際協力講話」参加生徒：2年）
○日本で売られている商品の値段はフェアトレードがなされていない上で成立しているのだと思った。またフェアトレードは誰にとって「フェア」なのか,その基準は何なのかなど,考えなければならないことが多いと感じた。生産者,NGO,NPO,消費者と商品に関わる人々が誰も不当な扱いをうけないようにすることは難しく,うまい落としどころはないだろうかと思った。また,現在,先進国やNGO,NPOが支援している発展途上国もいつかは自立してもらわねばならず,寄付など与えるのみの支援は見直す必要があるとも感じた。（「国際協力講話」参加生徒：3年）

(6)活動の様子

写真1　調理実習

写真2　附属実習農園での野菜探究活動

写真3　校内フードドライブ活動

写真4　「フードバンク関西」の方と

写真 5　「ESD 実践研究集会」分科会発表

写真 6「国際協力講話」（フェアトレード）

(7)成果と課題

学年リーダーの活動が昨年度よりも活発になり，リーダー同士で自発的に話し合い，現在行っている活動の課題を見出し，改善しようと意見を出したりするなど，「自分たちの活動」として捉え，よりよいものを作っていこうとする前向きな姿が見られた。少しずつではあるが生徒が主体となる活動が増えてきている。地域の方々との交流や生徒の発信の場が広がりつつある。「ESD 実践研究集会」の参加者，神戸大学の先生や園芸教室に参加されている地元の方など，多様な人々と交流することを通して，地域や日本の「食」の課題を確認し，持続可能な社会を目指して自分たちができることを考えるようになってきた。

神戸大学で開催された「ESD 実践研究集会」の分科会において本プロジェクトの活動を報告する機会をいただいた。参加者（大半が大人）とのディスカッションを通して，自分たちの活動の意義や価値に気づくことができた。さらに，交流時にいただいた意見から自分の考えを深めたり，これまでの活動を批判的に捉えたりする姿が参加生徒の感想からもうかがえる。

前述のとおり，本プロジェクトでは，教師の協働による合科教育行っているが，参加生徒は，理科・社会科・家庭科教諭による専門性の高い講義を受講することを通して，疑問を追及したり，さらに深く知りたいと考えるなど，本プロジェクトのテーマである続可能な生活を考えたりするようになってきている。

その一方で，単年度の活動であるために毎年多くのメンバーが入れ替わり，活動が生徒間で引き継がれにくいことや，学年リーダー以外では受け身で活動に参加する生徒が多くなっている現状がある。また，学年リーダーをはじめ，生徒は本プロジェクト以外の複数の活動や委員会との重なりがあり，忙しく過ごしていることや，担当職員も会議等で，活動日の日程調整が難しかった。

昨年度に引き続き，自分たちの活動が持続可能な生活や社会となるための問題意識をどのように持たせるかが継続して考えたい課題である。問題意識を持たせるための活動内容や生徒の主体性が発揮できるように，上級生から下級生の引継ぎや教師の関わり方を考えていきたい。

２ グローバル・アクション・プログラム（海外研修）

A 米国シアトル研修

担当　英語科教諭　軽尾　弥々

(1) テーマ　“Global Science in Seattle”

(2) SGH における位置付け

本海外研修は，本校の「課題研究」の４研究領域におけるⅣ「グローバルサイエンスと拠点都市『神戸』」に位置付けて実施するものである。

ただし，対象学年が課題研究入門レベルである４年生であることから，サイエンスや IT の領域のみにとどまらず，「多文化共生」を体現する国際都市シアトルにおいて，生徒が自身の課題研究を進めるにあたって，異なった視点から様々な課題を発見する役割も果たしている。

(3) 目的

“Global Science in Seattle”をテーマに，交流協定校である International Community School（ICS）訪問において，課題研究の成果を発信・交流する。また，同校生徒保護者の協力のもと，シアトル近郊の各企業も見学する。

(4) 概要

①期間　2019 年 10 月 4 日（金）～10 月 13 日（日）〔10 日間〕
②場所　米国ワシントン州シアトル市と周辺，ICS（カークランド市）
③対象生徒　4 年生 5 名
④日程

<table>
<tr><th>日付</th><th colspan="2">行程等</th><th>備考</th></tr>
<tr><td>10/4（金）</td><td colspan="2">関西国際空港発　シアトル・タコマ空港着
ICS にてホストファミリーと対面</td><td rowspan="8">ホームステイ</td></tr>
<tr><td>10/5（土）</td><td colspan="2">シアトル市内見学（スペースニードル，パイクプレイスマーケット等）</td></tr>
<tr><td>10/6（日）</td><td colspan="2">レーニア山トレッキング</td></tr>
<tr><td>10/7（月）</td><td rowspan="5">ICS にて授業参加
Humanities / Government / World History / Psychology / Algebra / Analytics / Chemistry / Biology / Earth Science / Art / Spanish
最終日は送別会</td><td>グーグル社見学・ICS バディと交流</td></tr>
<tr><td>10/8（火）</td><td>アマゾン社及びアマゾン・スフィア見学</td></tr>
<tr><td>10/9（水）</td><td>ボーイング工場見学</td></tr>
<tr><td>10/10（木）</td><td>マイクロソフト社見学</td></tr>
<tr><td>10/11（金）</td><td>近隣高校のフットボール試合観戦</td></tr>
<tr><td>10/12（土）</td><td colspan="2">シアトル・タコマ空港発</td><td>機中泊▼</td></tr>
<tr><td>10/13（日）</td><td colspan="2">成田空港経由　伊丹空港着</td><td></td></tr>
</table>

(5)活動の様子

写真 1 ICS での授業参加

写真 2 課題研究発表

写真 3 送別会

写真 4 スペース・ニードル

写真 5 レーニア山国立公園

写真 6 マイクロソフト社

写真 7 グーグル社

写真 8 アマゾン社

写真 9 アマゾン社での懇談

(6)参加生徒の感想（一部抜粋）

○I will write about races in Washington. As many people know, there are many kinds of races in the United States. Of course, I knew it before going there. Though this trip, I found that kinds of races are biased according to each place. I will tell you some examples. In an American restaurant where I went to eat breakfast with my host family, all people there were white people expect for us. And in ICS, a majority of students are Asian. On the other hands, in Lake Washington High school, most students are white. Like this, kinds of races are different from place to place.

I also found that people or families have their own culture and lifestyle from their native

countries. For example, Thai families usually eat Thai food for dinner and speak in Thai at home though they work or study with people who are different races in the daytime. Moreover, they go to a temple every Sunday and participate in Thai community. In this trip, I knew that people in Washington treasure the culture of their native countries.

Finally, I would like to tell you about interaction. Many people I met treated me warmly. I had my host family take me many place for shopping, sightseeing and eat many kinds of food. Also they always cared me. I had my ICS friends correct my presentation and translate what I did not understand from English to Japanese. A student who is not Japanese did it for me with "Google Translate." Anyway, I had them do so many things. I felt people's kindness through this trip. As they did for us, I would like to do for visitors when visitors come next time. （男子生徒 1）

○We visited four companies, Google, Amazon, Boeing and Microsoft, and heard stories from people who actually work there. Here, I realized more strongly that English is not a way of studying and learning, it is a means of expressing our opinions and ideas. In addition, I found out that the key point is to improve the environment around us and use it to create new ideas.

In addition, what can be said in common about the two is that both are gathering a lot of people from various backgrounds. I realized that it is a true intercultural understanding not only to accept the differences but also to incorporate them as “good.” （女子生徒 1）

○Especially visiting Spheres in Amazon and studying with ICS students were the most important program for me during the Seattle training. Why are they important for me? My purpose in Seattle was visiting Spheres to know how to manage temperature and humidity in plant factories and how we work with AI in growing plants. This has a relation with my KP topic. I was surprised that it is becoming standard in Seattle. For example, I experienced self-driving for the first time. This is an experience which we can’t have in Japan. When I rode this, I was impressed by the convenience of this. Also, I thought about social problems. (Who bears the blame when this car has an accident?)

In spheres, I could answer my question. There are some machine to adjust temperature. And also the glass cut only sun light. (The glass takes in warmth.) There, they used LEDs instead of sun light. This point is similar to my research. In my opinion, we can grow vegetables to introduce this system. In spheres, there are more than 40,000 plants, but it manages them all. Moreover, there are a few workers in spheres.

I think that if we used them in a plant factory, we will reduce labor costs and maintain the quality of vegetables. Through these results, I want to learn more about AI. （女子生徒 2）

○ICS では，私の学校と全く違うシステムについて日本となぜ異なるのかを考えたりして，同世代の子に刺激を受けました。ホームステイでは，異文化を体験することはもちろん，銃社会や政治についてお話させていただき，私にとってとても貴重な時間になりました。私よりも年下のホストシスターでしたが，ニュースを見て社会的なことに関心を持ったり，パソコンを使いこなして課題やプレゼンテーションを作っていたり

する姿が印象的でした。（中略）またアメリカの中でも様々なバックグラウンドを持つ人が多い地域での研修だったので，研修全体を通して「人種」について考えさせられました。私の周りでは日本人しかいないので，これまであまり考えたことがなかったことでした。人種に関する差別やステレオタイプについて，高校生ながらに学べたことは，とても良い機会でした。（女子生徒 3）

○KP に関しては， Amazon Spheres（アマゾン・スフィア）において，植物の生育のために壁のガラスに使用されていた“Solarban”というガラスについて知ることができました。シアトルで，断熱に優れていると聞いたため,調べてみると,Vitro というメーカーの Low-e ガラスでした。Low-e ガラスとは,Low Emissivity,つまり低放射ガラスのことで，放射熱を低減する役割が強化されたガラスのことです。ガラスの中空層に薄い金属の膜をコーティングし，そのコーティング位置によって「遮熱タイプ」と「断熱タイプ」に分けられます。Solarban のメカニズムの記述は見つからなかったものの，担当の方が外部の熱を遮断するとおっしゃっていたため，おそらく太陽光等を遮断する「遮熱タイプ」であると考えられました。私の KP の問いの参考になるため，今後もっと詳しく調べる必要があると感じました。（男子生徒 2）

(7) 成果と課題

ICS の生徒が普段受けている授業に参加した際，日本人生徒一人一人にバディをつけ，隣に座って授業を受けるなど丁寧にサポートしてくれたことに大変感謝している。今年 5 月に ICS の生徒 24 名が本校へ訪問したことは今回の研修をさらに意味深いものにしたと考えている。受け入れ交流した生徒と再会し，現地で助けてもらいながら，1 週間の学校生活を終えることができた。本校生徒は自分の力不足を実感しながらも，ICS の生徒たちが，自分たちと同じ高校生として将来について悩み，課題に取り組もうとしている姿勢から大いに刺激を受けた。このように，これからの将来を共に作っていく同世代の生徒と交流できることは本校 GAP の真骨頂だといえる。しかしながら，本校生徒の英語力と授業内容を考えるとサポートがあったとしても理解できることには限界があり，単なる英語での現地授業の体験に終わってしまっていることは否めない。本研修において，学校授業交流にどの程度重きを置くのか，また学校交流で何を経験させたいのかということについては，引き続き検討する余地がある。

また，人文科学系の高校 1 年生の授業では，個々の課題研究を発表する機会も与えられた。生徒の感想（女子生徒 2，男子生徒 2）にもあるように，研究テーマの性質によっては，シアトル研修を自身の課題研究のフィールドワークと位置付け，かなり直接的に研究のヒントを得た生徒もあった。また，研究発表を英語で行い，フィードバックしてもらうことで，自らの研究を客観視し理解を深めることができ，リサーチリテラシーを高めるという点では参加生徒全員の課題研究にとって有意義であった。しかしながら，研究テーマによってはシアトル研修と課題研究を関連付けることが難しいものもあり，本研修における課題研究の位置付けは今後も議論していきたい。

シアトル近郊の企業訪問のアレンジから送迎まで ICS の保護者の方々に大変な尽力をいただいたことに深く感謝したい。さらに，今年度はそれぞれの企業で働いている日本人の方々と話をする貴重な機会を設けていただいた。グローバル企業の働き方に驚くと共に，働き方の哲学を感じるお話を聞くことができ，生徒の働くことに対する考え方に大きなインパクトを与えた。この企業訪問は，多文化共生の点においても非常に意味深いものと考え，大切にしていきたい。

B ベトナムハノイ研修

担当　数学科教諭　中時　貴弘

(1) テーマ　「ベトナムにみるグローバリゼーションの現在」

(2) SGHにおける位置付け

本プログラムは，本校の「課題研究」の 4 研究領域におけるⅢ「提言：国際紛争：対立から平和・協力へ」をテーマとしている。

ベトナム戦争を経て文化的にも経済的にも急速に発展している社会主義国家ベトナムにおいて，現地家庭に滞在しながら交流校の高校生と交流することを通して，自国の文化について見直したり，自身の課題研究について認識を深めたり新たな気づきを促す場を提供している。

(3) 目的

ベトナム現地高校生との交流及び調査活動を通して，東南アジアにおける平和及び異文化について理解を深めると共に，ベトナムにおける民族独立の歴史，経済発展の成果と課題について学ぶ。

(4) 概要

①期間　令和元年 11 月 8 日（金）～11 月 16 日（土）〔9 日間〕

②場所　ベトナムハノイ市　ハノイ国家大学外国語大学附属外国語英才高等学校　(Foreign Language Specialized School：FLSS)

③対象生徒　4 年生 6 名（男子 2 名，女子 4 名）

④日程

日付	活動内容
11 月 8 日(金)	大阪（関西国際空港）→　ハノイ（ノイバイ空港） ホームステイ△
11 月 9 日(土)	〔交流校 FLSS 創立 50 周年記念式典〕 運動会 観戦 民族博物館 見学 創立 50 周年記念式典 参加　ホームステイ△
11 月 10 日(日)	〔ベトナム市街見学〕 世界遺産 チャン・アンを見学 FLSS 生徒，家族とともに　ホームステイ△
11 月 11 日(月)	〔学校交流Ⅰ〕 1 校時　課題研究発表準備 2 校時　歓迎式 3 校時　課題研究発表 〔JICA 施設訪問〕 JICA ベトナム事務所 訪問 イェンソーポンプ場（JICA 支援終了案件施設）　見学 ホームステイ△
11 月 12 日(火)	〔世界遺産見学〕 世界遺産 ハロン湾と鍾乳洞を見学 (FLSS 生徒と共に)　ホームステイ△
11 月 13 日(水)	〔学校交流Ⅱ〕 1,2 校時　英語の授業に参加 3,4 校時　日本語の授業に参加 5 校時　日本語クラブ（CJC）生徒との文化交流 ホームステイ△
11 月 14 日(木)	〔ベトナム市内見学〕 ホーチ・ミ・ン廟，文廟，教会，市場の見学 水上人形劇鑑賞　ホームステイ△

11 月 15 日(金)	〔学校交流Ⅲ〕 1～3 校時　体育の授業に参加(バスケットボール) 4 校時　　英語による数学の授業に参加 送別会 ハノイ（ノイバイ空港）発　　機中泊▼
11 月 16 日(土)	大阪（関西国際空港）着

(5)活動の様子

写真 1 民族博物館見学

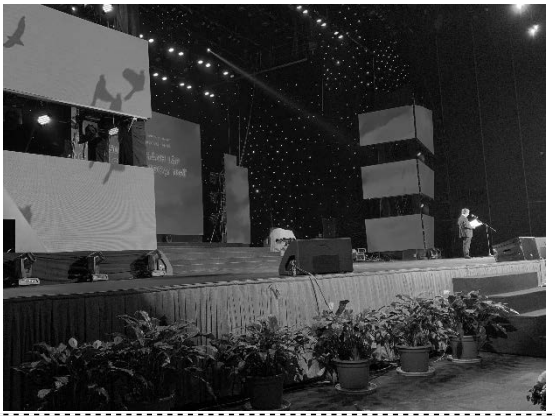


写真 2 FLSS 創立 50 周年記念式典参加

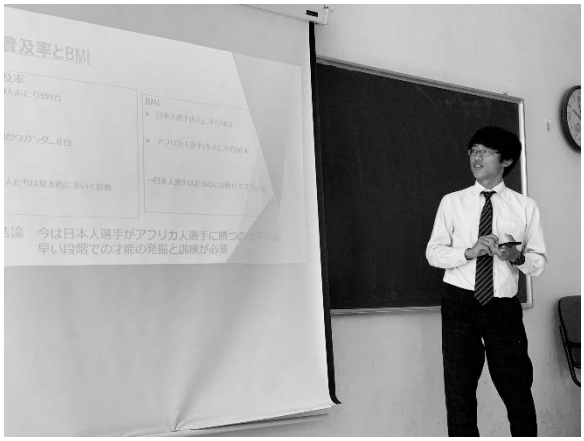


写真 3 課題研究発表

写真 4 イェンソーポンプ場 見学

写真 5 日本語クラブ生徒との交流

写真 6 体育の授業に参加

(6)参加生徒感想（一部抜粋）

〇50 周年記念行事の一部である体育大会では，ベトナムの伝統的な棒を使ったダンスもチームごとに個性があってとてもおもしろかったです。レベルが高く，たくさん練習してきたこと，また服や道具にお金をかけていることがわかりました。また，日本と違うなと思ったところは，日本は応援演技をするときに，上手い人も下手な人も，やりたい人もしたくない人も全員で一緒になってするのが一般的です。しかし，ベトナムでは上手くてしたい人がして，その中でも目立つ役というのもありました。みんなが一緒なのではなく，その人の能力でする人がする，しない人はしないと個人にまかせるのだと思いました。
〇ベトナムは日本ほど体育に力を入れておらず，体育の授業も週に 1 回しかないと聞きました。体育はバスケットボールをしました。僕は，バスケを少しすることができるので，授業を受けている他の生徒から声をかけられて，一緒に試合をしました。身長が僕と同じくらいの小柄な韓国から来たという生徒には勝つことができましたが，バスケットボール部の生徒との試合は高校生とは思えないほど大きな体をしていて完敗しました。それでも，「うまいね」とほめてくれました。言語は通じなかったけれど，スポーツでつながることができてとても嬉しかったです。
〇私は４KP（課題研究）の紹介で，「夏目漱石の『こころ』をジェンダーの視点から読む」という研究について発表しました。「ジェンダー」という言葉自体，ベトナムの生徒さんは知らないようで，もう少し詳しく説明すればよかったと反省しています。後日，ホストの生徒に KP に関する問いを聞くことができました。「身近なことで男女が不平等だと感じたことはあるか」と聞いてみたところ，特にないそうでした。次に，「 LGBT についてどう思うか」を聞いてみると，ベトナムでは LGBT に反対する人は多くはなく，特に若い人は賛成してくれる人が多いそうです。ホストの生徒も中学校の時に同性愛について勉強したことがあるそうです。日本でも，国語や道徳，社会の時間に LGBT について扱うのも良いのではと感じました。
〇現地の人々は私が思っていた以上に，水に気を配っていて，私がホームステイしていた家には浄水器が取りつけられていました。しかし，薬剤耐性菌がベトナムに蔓延している要因としては，ベトナムの人々には手洗いの習慣がないこと，抗生物質を大量に投与した豚や鶏を毎日たくさん食べていることが挙げられます。特に，手洗いの習慣がベトナムにないということは，レストランではあまりお手拭きが配られない，家に帰ってきても手洗いをする習慣がない，学校のトイレにハンドソープ等が置かれていないということから，そのことを現地で実感しました。私はこれから薬剤耐性菌の蔓延を防ぐために，手洗いによって予防できることを追及していこうと考えました。
〇JICA 訪問では今のベトナムの課題について知ることができました。例えば，大気汚染や貧富の差が大きいこと，高齢化が始まっていること，栄養バランスが偏っている人が多いこと，生活習慣病がはやり始めていること，公害とかは実際に行くとよくわかるけれど，高齢化や生活習慣病については予想もしていなかったので驚きました。事前学習で JICA のような支援事業の二面性について学びました。でも，ベトナムの人は日本にはとても感謝していると言って，もう 1 つの面については特に何も思っていないようでした。ホストファミリーにきいてみても，同じような答えが返ってきました。もう 1 つの面についてどう思っているのかは結局わかりませんでした。
〇KP（課題研究）の発表では，ベトナム人生徒が僕の発表をどれだけ理解してくれるのか，正直不安でした。特に，僕の研究テーマは「今後の日本の外交を杉原千畝の外交官としての姿勢から考察する」というものであり，とてもマニアックだったからです。質疑応答では，「もしあなたが杉原千畝の立場だったら，どうしていたか」と聞かれ，返答に困ってしまいました。もちろん，僕は世界平和を願っているし，ユダヤ人を助けたいと思います。でも，それは今だから思えることで，日本政府の命令に逆らうということは，自分の職を失うことにつながるかもしれないからです。すると，「個人の職と全国民のどちらを優先するのか」と言われてしまい，自分を多少犠牲にしてまでも，全国民の生きる権利を優先させることの方が重要であると思いました。

(7)成果と課題

本プログラムは，神戸大学国際協力研究科の協力を得て平成 28 年度に創設したもので，10 月のベトナム生徒 10 名の受入れプログラムの継続事業である（ただし，今年度は Global Forum 開催の関

係で5月に4名，10月に6名を受け入れた）。今年度の本校参加生徒6名のうち2名が現地ホームステイ先の生徒を受け入れた生徒である。

〔成果〕

①学校交流について

言葉の壁は大きく，日本語と英語でコミュニケーションをとることが多くあった。もともと控えめな生徒たちではあるが，送別会のスピーチでは,「積極的に自分から話しかけることができるようになってきた。もっといろいろな話をしてみたい」「たくさんの人と話をすることが楽しかった」といった感想が多くあった。交流活動やホームステイでの成果といえる。

自身の課題研究のためのアンケート調査を日本語学科の生徒を対象に実施した生徒もおり，個人研究についての意見交換も行うことができた。

②施設等見学について

民族博物館へ見学に行き，多民族国家であるベトナムの昔と今を学べ，どことなく日本の昔の様子とよく似ているのは興味深いものであった。また，交流校の生徒が一つ一つの展示物を丁寧に説明してくれ，生徒同士の会話が多く見受けられた。

JICAベトナム事務所の訪問では，ベトナムが抱える今の課題を知ることができ，JICAが行っている支援の意味を考えることができた。たくさん雨が降ると,ハノイの近くを流れるホン川はたびたび氾濫する。これを回避するために作られたのがイェンソーポンプ場である。施設長の話に耳を傾け，現地で感じたことを素直に質問している生徒の姿がとても印象的であった。

〔課題〕

本プログラムは年々文化交流の側面が強くなっている。今回はじめてJICA事務所や支援施設訪問をプログラムに組み込んだが，交流校が用意してくださったプログラムではこれまで以上に観光・見学が多く，授業体験や生徒たちとの交流の時間は限られていた。出発直前にスケジュールについて連絡を受けることもあり,十分に準備を進めることができなかった。今後は，参加生徒それぞれにとって，自身の課題研究について認識を深めたり，新たな気づきのある研修となるよう，事前・事後研修をさらに充実させると共に，交流校との調整を図り，現地におけるプログラム内容について改善していきたい。

C　台湾高雄研修：Asian Student Exchange Program（ASEP）

担当　英語科指導教諭　岩見　理華

(1)大会テーマ：“SDGs for Students”

(2)SGHにおける位置付け

本プログラムは，本校の「課題研究」の4研究領域におけるⅡ「国際都市『神戸』と世界の文化」をテーマとしている。また，今年度の大会テーマでは, SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）を扱うことから，Ⅲ「提言：国際紛争・対立から平和・協力へ」とも関わりが深い。

また, 本プログラムは, 同じく上記研究領域Ⅱ，Ⅲをテーマとする World Youth Meeting (WYM)(8月，日本福祉大学東海キャンパスと立命館大学びわこ・くさつキャンパスの2会場にて同時開催)の継続プログラムである。

(3)目的

①海外の生徒との協働プロジェクトに参加することにより，言語や文化的背景の異なる人たちとの英語を用いたコミュニケーション能力，問題解決力等の国際的素養を身に付ける。

②SDGｓについてのプレゼンテーションを作成するにあたり，リサーチ活動や相手校生徒とのディスカッションを通して，世界の課題について理解を深め，共に問題を解決し，自分たちの生活及び世界をよりよくするために高校生の自分たちに何ができるかを考える。

(4)主催団体

（日本）アジア高校生インターネット交流プログラム実行委員会

（台湾）高雄市政府教育局

(5)開催校

高雄市私立三信高級家事商業職業学校（大会運営）　輔英科技大学(会場)

(6)参加校

立命館大学，日本福祉大学，関西大学，立命館中学・高等学校，奈良育英高校，立命館宇治中学・高等学校，名古屋商業高校，立命館守山中学・高等学校，関西学院千里国際高校，兵庫県立川西緑台高校，大阪市立東高等学校，神戸大学附属中等教育学校，福井商業高校，日本福祉大学附属高校，南山国際高校，日本郡山高校（日本16校）

輔英科技大学，義守大学，国立中山大学，国立高雄師範大学附屬高級中学，高雄市立小港高級中学，高雄市立高雄女子高級中学，高雄市立高雄高級中学，高雄市立高雄高級工業職業学校，高雄市立高雄高級商業職業学校，高雄市立三民高級家事商業職業学校，高雄市私立三信高級家事商業職業学校，高雄市立瑞祥高級中学，国立鳳新高級中学，高雄市立中山高級中学，高雄市立鼓山高級中学，他（台湾39校）

Michuhol Foreign Language High School，Dongducheon Foreign Language High School，Dongducheo Foreign Language High School, Jungwon Girl’s Middle School, Posan Middle School (韓国4校)，SMA Lab School Cibubur, SMA Islam Al-Izhar Pondok Labu Senior High School，Al-Azhar Islamic 28 Cibinong Junior High School, Amalina Islamic School，SMA Lab School Jakarta，Al-Azhar 1 Islamic Junior High School, Al-Islamic Junior High School 9 Bekasi, Al-Azhar Islamic Junior High School 3 Bekasi（インドネシア8校），Yuk Choy High School（マレーシア1校）, Te Aroha College（ニュージーランド1校）, Hanoi Star Primary and Secondary School，Western Hanoi School，Everest Elementary and Secondary School（ベトナム3校），New India School（インド1校）

(7)実施内容

①期間　　令和元年 12 月 23 日（月）～12 月 28 日（土）〔6 日間〕

②場所　　台湾台北市（12 月 23～24 日）・高雄市（12 月 24 日～28 日）
　　交流相手校：台湾国立高雄師範大学附属高級中学（ASHS）

③参加生徒　5 名（4 年生女子名 2,5 年生男子 1 名，5 年生女子 2 名）

④日程

日付	行程等	備考
12 月 23 日（月）	関西国際空港着・集合 関西国際空港発　桃園国際空港着 士林観光夜市等見学	ホテル泊△
12 月 24 日（火）	台北市内見学（故宮博物院，龍山寺，中正記念堂（衛兵交代式見学）， 台湾鉄道高速新幹線にて高雄（左営）へ ホストファミリーと対面	ホームステイ△
12 月 25 日（水）	歓迎式（高雄師範大学附属高級中学） 家庭科・体育の授業参加，プレゼン準備	ホームステイ△
12 月 26 日（木）	記者会見（プレイベント）（輔英科技大学） ＊代表生徒 1 名が交流相手校生徒と出席 交流校にてプレゼン準備	ホームステイ△
12 月 27 日（金）	〔午前〕プレゼンテーション大会 （輔英科技大学） 本校生，高雄師範大学附属と協働発表 〔午後〕パフォーマンス大会 ※本校生徒は日本チームの 2020 応援ソング『パプリカ』（Foorin）の歌をリード 閉会式・表彰式	ホームステイ△
12 月 28 日（土）	高雄国際空港集合 高雄国際空港発　→　関西国際空港着	

(8)活動の様子

写真 1 故宮博物院（台北）

写真 2 交流校にて歓迎式

写真 3 学校交流の様子

写真 4 本番当日の練習

写真 5 パフォーマンス大会

写真 6 「プラチナ賞」受賞

(9) 生徒の感想（一部抜粋）

○海外に住む同じ世代の高校生が SDGs という私たちの未来にかかわる問題についてどのような考えを持っているのか，一緒にプレゼンテーションを作ることで意見を共有したいと思い，このプログラムへの参加を希望しました。ASEP では交流校の生徒と SDGs の教育，貧困，気候変動について発表しました。高雄の生徒たちは，とても英語力があって，日本人生徒をリードしてくれました。同じアジア圏でもこれだけ英語を使うことができるのとできないのとでは，将来の仕事への有利不利が大きく変わってくると，改めて英語力の重要性を知ると共に，自分の英語が伝わらない悔しさも味わいました。こうした未熟さがありながらも，台湾のパートナーやその他の生徒，先生たちはアドバイスをくれたり励ましてくれたりして，とても良い雰囲気の中，プレゼンに向けた練習を重ねることができました。日本人生徒にも意見を求めて一緒に作り上げようとしてくれたことが本当にありがたく，うれしかったです。本番は見る人にわかりやすいようジェスチャーを入れたりしながら，自信をもって堂々と発表することができました。（4 年生女子）

○私たちのグループでは，3 つの大きな項目に分けて，それぞれのパートに分けて発表し，私はその中の「ジェンダーバイアス」を担当しました。そこでの成果としては，事前に SNS(LINE)を通じて連絡を取り合い，日本人だから感じることや個人的な経験を伝え，プレゼンテーション作成の助けにすることができたことです。しかし，プレゼンのセリフやパワーポイントなども全て台湾側が進めていてくれて，負担を大きくしてしまったことは反省すべき点であると思います。また，SGDs の知識があまりないまま日本を出発したために，他のパートの内容が完全に理解できなかったり，本番でも他の学校が言及している項目のことをよく知らないことが原因で，質問に手を挙げられなかったりしました。これらのことは自分の準備不足であり，反省しなければいけないと思いました。ASEP で見た他校のプレゼンテーションはその内容の良さ，英語スキルの高さ共にすばらしいものであり，なかでもタイと高雄の高校のチームは，構成・内容・発表・質疑応答全てにおいて参考になるものでした。これからの学校生活，大学生活でぜひ取り入れたいと思いました。（4 年生女子）

○私は，異国の生徒と交流することで，自分の英語力やコミュニケーション力を知るということと，台湾の文化を実際に体験するということを目標に，ASEP に参加しました。そして，参加して知ることができたのは，現地の人は他人を大切にし，英語の学習をはじめ，たくさんのことに対して真面目にかつ必死に取り組む気持ちを持っていることでした。私たち日本人の英語力は台湾の人に比べるとたいそう劣っています。プレゼンをするにあたって，話す言葉の発音を正確にしてアクセントの場所を間違えずに，さらには強調することを聞いている側でもわかるぐらいに大袈裟に発表しなければならないのですが，私は全くわかっていませんでした。しかし，高雄の生徒は，私が理解できるように簡単な英語を用いて最後まで気を配って細かいところまで教えてくれました。そして，プレゼン準備の最後の方には，リーダーを中心に，自分たちで「何がダメでどこを直せばいいのか」を熱心に考えていました。一方で，私自身の課題は言いたいことをすんなりと英語でしゃべることに苦労してしまうことでした。自分自身の英語力，特にスピーキング能力が不十分なために英語で正確にコミュニケーションをとることができず，怖くなって余計に英語で話すことに，抵抗してしまっていたので，今後改善していきたいと思います。（5 年生男子）

○私は今年の夏に World Youth Meeting に参加し，高雄師範大学附属高級中学の生徒の人たちと一緒にプレゼンテーションをしたので今回の ASEP が 2 回目の交流となりました。今回は 2 日というとても時間が限られた中での練習でしたが，プレゼンテーションの練習をする中で，台湾の生徒のみんなからたくさんのアドバイスや刺激をもらいました。英語の発音やアクセント，間の取り方，聴衆への表現などのアドバイスに加えて，限られた時間の中で協力してお互いを高めあっていくことや想定していなかった課題にぶつかってもみんなで話し合い，いろいろな意見をまとめて引っ張っていくリーダーシップなど本当に見習うところが多く，今の自分を見つめ直して課題を今後につなげていくのにとても大切な経験となりました。（5 年生女子）

○今回の研究成果はプレゼンテーションが成功したことと台湾人生徒と交流し良い交友関係を築けたことだと思います。台湾に着いてから，スクリプトやスライドを見せてもらった私たちは自分のパートを覚えたり，全体を把握したりしながら各自で練習を行った後，全体での通し練習を行いました。台湾人生徒の方が覚える量が多かったのにもかかわらず，日本人生徒の方がうまくできないでいました。もどかしさを感じながらも何度も自分のセリフを読み直し，頭の中に刷り込んで行きました。次の日になると前日には覚えられていなかったセリフが自然と出てくるようになっていました。それからは台湾人生徒が中心となって，グループごとのパフォーマンスを見合いました。それまでに練習していたのとは違ってメンバーに見られているので少し緊張しましたが，なんとか成功することができました。しかし昼過ぎになって急遽私のセリフが 1 文ほど増えることになってしまいました。それでも台湾人生徒のセリ

フ量に比べると少ないのですが，準備期間があと半日しかない，という状況だったので正直焦りはありました。たったの1文がなかなか覚えられず，最後のリハーサルの時も完璧とは言えない状態だったので，そこからは自分で繰り返し練習を行いました。また，プレゼンテーションではジェスチャーを加えたり，語句を強調したりといった工夫が必要になってくるので，そのことでも苦労しました。本番では，緊張したものの，練習の時よりも少し余裕を持ってできたと思います。全然覚えられない自分に腹が立ったこともありましたが，今回この研修に参加することができて本当によかったなと思いました。2日間という短期間でこのような素晴らしいプレゼンテーションを作ることができたのも，私たち日本人生徒が台湾人生徒に刺激を受けたからだと思います。（5年生女子）

(10)成果と課題

8月のWYM及び本プログラムでは，交流校を互いにホームステイで受け入れ，共通のテーマでプレゼンテーション（発表8分間，質疑応答2分間の計10分間）を作成し，交流校で準備を行ったあと，大会で発表するという流れになっている。今年度の参加生徒5名のうち，2名はWYMに参加し，1名はホームステイ受け入れを経験している生徒が含まれていたため，交流内容については十分に理解できており，WYMでの自己の課題の克服を目標に参加していた。短い期間ではあったが，高雄現地ではホームステイや発表の練習を通して台湾生徒と時間を共有する中で，交流も深まり，英語力，リーダーシップ，積極的に学習に取り組む態度など，台湾生徒から学ぶことも多く，自己の課題を発見・再認識することができ，研修としての充実度は高かったと思う。

高雄に到着してから大会までわずか2日間しか準備の時間がない。これは他の参加校も同じ条件で，プレゼンテーションの成功は，いかに事前にSNS等を通じてやり取りできるかにかかっている。参加生徒の感想にもあるように，WYM，ASEP共に台湾生徒のリードのもとで準備が進められ，本校生徒の活動は，「ほぼ役割分担までできあがったセリフを練習して発表する」ということが中心であった。これは，やはり本校生徒と台湾の生徒の英語力の差が大きく影響している。自分の意見を伝えようと思っても，メールなどでは十分に伝えることができず，もどかしさを感じていた。しかしながら，ホームステイを通じて交流関係も深まったうえで，直接対面するコミュニケーションでは，ジェスチャーなどの非言語手段を用いて単語をつなぎあわせるだけでも，意思疎通ができたようである。また，パフォーマンスについては，相手校の教員や生徒からのアドバイスや励ましもあって，最終的にはそれぞれが満足のいく発表ができたと思う。そして，大会では，数少ない「プラチナ賞」を受賞することができた。このような経験は生徒たちの自信につながり，これからの学校生活や学習に大きな活力となっていくにちがいない。

課題としては，やはり質疑応答における即興のやりとりを含むプレゼンテーションの指導が挙げられる。ある生徒の感想にもあるように，日頃から社会的な課題について関心を持ち，それに対して自分の意見を持つ習慣を身に付けさせたい。そして，リーディングやリスニング活動を通じてプレゼンテーションのテーマについて十分な背景知識（語彙・表現）と，それに対する自分の意見を論理的に表現するためのライティング活動，発音やイントネーション，アイコンタクトやジェスチャーなど相手に伝わるようなスピーキング，そして質疑応答における即興のやりとりができるように指導していくことが重要である。

また，SNSを通したバーチャルな交流は，現地での直接交流の質を高めるのに大きく貢献した。今後は，テレビ会議など対面で行う事前交流についても検討していきたい。

D　カンボジア研修

担当　英語科教諭　真田　弘和

(1)テーマ「カンボジアにみる再生と平和」

(2)SGHにおける位置付け

本プログラムは，本校の「課題研究」の4研究領域におけるⅢ「提言：国際紛争･対立から平和・協力へ」に位置付けて実施するものである。

(3)目的

地雷撤去問題をはじめ,貧困,教育,環境問題等において,深刻な問題を抱えるカンボジアの抱える様々な課題について理解を深め,地球規模の課題解決のための国際協力の在り方について考える。

(4)実施内容

①期間　　令和2年1月22日（水）～1月29日（水）〔8日間〕

②場所　　カンボジアシェムリアップ市・プノンペン市

③協力機関　　JICAカンボジア事務所,シェムリアップ州公共事業運輸局・下水道ユニット,
プノンペン日本人学校,カンボジア日本人商工会

③参加生徒　　5年生4名　4年生1名（男子1名，女子4名）

④日程

日付	行程等
1月22日（水）	関西国際空港発　ハノイ経由　シェムリアップ着　　ホテル泊△
1月23日（木）	アンコールトム・アンコールワット見学　　ホテル泊△
1月24日（金）	スナーダイクマエ孤児院視察，JICAボランティア活動視察（シェムリアップ州公共事業運輸局・下水道ユニット），トンレサップ湖見学等 ホテル泊△
1月25日（土）	戦争博物館（シェムリアップ）後，プノンペンへ移動 キリングフィールド（プノンペン）見学　　ホテル泊△
1月26日（日）	王宮,国立博物館,トゥールスレン博物館,ワットプノン, シルクアイランド見学 ホテル泊△
1月27日（月）	カンボジア日本人商工会にて講話，セントラルマーケット散策, JICAボランティア事務所訪問,AEONモール見学 ホテル泊△
1月28日（火）	クラタペッパー社長講話,プノンペン日本人学校訪問 プノンペン出発→ホーチミン到着　　機中泊▼
1月29日（水）	ホーチミン出発→関西国際空港到着

(5)活動の様子

写真１　アンコール・トム	写真２　スナーダイクマエ孤児院	写真 3　シェムリアップ州公共事業運輸局・下水道ユニット
写真 4　虐殺からの生還者チュウ・メイさんと	写真５　カンボジア日本人商工会	写真６　JICA 事務所
写真７　トゥールスレン刑務所	写真８　クラタペッパー社長講話	写真９　プノンペン日本人学校

(6)参加生徒の感想（一部抜粋）

〇今回の研修で，私たちは様々な場所に訪問させていただいたが，その中の１つに「スナーダイクマエ孤児院」という日本人の女性が自ら設立した孤児院への訪問があった。私たちが博子さんの講話を聴く中，まだ小学校低学年であろう子供たちまでもが，椅子に並んで座り自習をしていた。私は驚いた。子供たちが楽しそうに，また熱心に自習に取り組んでいたからである。その光景を見て，カンボジアの教育問題は意欲だけの話ではなく，学習を受けることができる環境などの，子供たちの周りの影響が大きいことがわかった。そこで私は「では自分にできることは何だろう」と疑問を持った。以前の私は，何も考えず，「寄

付は大事だからやればやるほどいい」「人が足りないところへの手伝いに参加したい」という浅はかな考えであったが，博子さんや JICA での講話の中で「なぜ日本のごみをカンボジアへ送ってくるのか」「相手国の要請があってから初めて行動に移すべき」という話を聴いて衝撃を受けた。何も考えず，こちらが勝手にやることは偽善にもなってしまうことがあるからだ。きちんと相手国や相手の状況を調べて，何を望んでいるのか，何を求めているのかを知った上で，行動に移すことが大事であるとわかった。そして，これは，私たちが理解するだけでは意味がなく，大勢の人が理解して初めてこの話の意味があると感じた。私たちがなぜカンボジアにきて，学んでいるのか再確認することができた。自分たちだけで完結させてはいけないと強く感じた。

また８日間の中で，現地で活躍する日本人の方の強さに強い衝撃を受け，惹かれた。どの方も自分の強い意志でカンボジアの方々をサポートしていた。様々な話を聴いて素直に「かっこいいな，自分もこんな風に強くなりたい，誰かの笑顔を守れる人になりたい」と何度も思わされた。JICA の方がおっしゃっていたように，開発途上国の現状に自ら気づいて，「何とかしなきゃ」と思い，かつ，「私がやろう」と手を挙げられる人に私はなりたい。（5 年女子）

〇経済が発展してきている今，教師よりも仕事内容が良く給料がいい職業はたくさんあるという。学校はだいぶ足りてきているらしい。つまり，足りないのは，「質の高い」教育者なのである。教育者がいないと子どもたちは学べない，その子どもたちが大人になった時，教師になれるような知識を持った人が少ない，そしてまた教育者不足に悩まされる，といった悪循環を断ち切らない限り，カンボジアは発展しきれないと思う。質の高い教育者を育成するためには，ボランティア団体の協力は不可欠だ。その上で教師の賃金を上げ，カリキュラムを作り直す必要がある。私たちが訪れたのはプノンペンとシェムリアップの二都市のみである。しかも，両方とも空港や多くの観光地を有しており，経済的に発展している都市だ。しかし，農村部はどうだろうか。カンボジアは GDP の 35%が観光業を多く含むサビース業だと事前に学んだが，観光だけに頼っていては，国全体を成長させることはできないと感じた。そう簡単にはいかないと思うが，カンボジアの教育を一から見直し，強化していくことが，国全体を底上げすることの一番の近道だと感じた。（5 年女子）

〇キリングフィールド，トゥールスレン博物館に訪れたとき，実際に見たからこそ感じた空気があった。悲惨な跡や遺体を見て行くと，（遺体が）叫んでいるように感じたことが度々あった。事前にある程度どれだけ悲惨かは調べたものの，ここで実際に目の当たりにすると胸が締め付けられた。拷問がここまでひどいものとは思ってもみなかった。そして人として扱われなかった苦しさ，どんなに訴えようとも届かなかった叫び，自ら死を選ぶことも，生きることも選べなかった悲しさ。どんなに考えても実際の辛さはわからないのだろう。それでも，ここで目の当たりにしたものは僕に強く響いた。トゥールスレン博物館の見学が終わった後でも，自分の顔がこわばったままで，しばらく周りと話せなかったことを覚えている。僕はここで感じたこと，どんなメッセージを受け取ったかを大事にしようと心に決めた。今回の研修で改めて，現地で見ないと気づけないことがあると実感し，本当に必要な支援とは何かを考えるきっかけになった。ここで学んだこと，感じたことをうまくまわりに伝えられるようにしたい。（5 年男子）

〇一見カンボジアは，教科書で学ぶ通り，家，食べ物が足りず十分に生活することができないため，常に競争社会で，人々も笑顔が少ないというイメージを持っていた。しかし，そんな情報はただの偏見に過ぎず，都心部では，日本でも見られるチェーン店がいくつかあり，高層ビルもたくさん建っていた。そして，一番驚いたのはカンボジア人の心の暖かさだ。「暗い」，そんなイメージは現地に行ってみれば一つ足りとも感じることはなく，逆に日本人よりもフレンドリーで明るく親切なのではないかと感じるほどだった。確かに，トンレサップ湖周辺の水上生活の様子を見ると，元々のイメージと一致することもあったが，その最低限与えられた条件下で賢く生活している人々の姿を見て，物が豊富で便利なものを求めてしまう日本人が改善していくべきことをたくさん感じる機会となった。

また，スナーダイクマエ孤児院を訪れた際に，メアス・博子さんのお話を聞いた。「カンボジアに対して日本人は，「地雷」「内戦」「治安に悪さ」「貧困」のイメージを先行しがちだが，それだけではなく，カンボジアの人々にも同等に希望というものもあるのだから，未来を悲観せずに過ごしている様子を見てほしい。」その言葉を聞いたとき，勝手な独断と偏見で課題を探し，何か便利そうなものをとりあえず送るという発想ではなく，正しい知識の下で本当に必要なものとそうでないものを考えて支援することの大切さを改めて知った。確かに，いらないものであればその輸送費を他のことに使用できるかもしれない。ただ１つの状況から表面的なことを考えるのではなく，そのつながりをしっかり認識したうえで行動した

い。研修前までは，喜んでいる人の姿を想像し，誰かのためになる仕事をしたいと考えていたが，自分の好奇心や成長させる過程から自然と誰かの役に立つことのできるような大人になりたいと思う。（5年女子）
〇今回の研修では，カンボジアで活躍する日本人がたくさんいるということを知った。JICAに視察に行ったとき，ボランティアの方が日本で行っている方法を行うのではなく，カンボジアの環境に合わせて様々な案を考え，チャレンジしている日本人の姿を見た。私もいつかJICA海外協力隊としてカンボジアのこれからの発展に貢献したい。そして，将来的にカンボジアは日本などの先進国から援助と支援を受ける必要のない自立した国になれるよう，カンボジアの人たちと共に頑張りたい。それが私の夢だ。（4年女子）

(7) 成果と課題

8日間の研修中，生徒たちは片時も筆記用具を離さず，メモを取っていた。その瞬間しか感じられないこと，気づいたことを懸命に書き取り，少しでも多くのことを学ぼうという姿が大変印象に残っている。参加者それぞれが，自分の置かれた環境がいかに恵まれているかを実感し，そこから深く考えようとする姿勢を見せてくれたこと，それが一番の収穫であったと考えている。また，視察を終えるたびに，「生徒さんが熱心に聞いて下さり，質問して下さるのでありがたかったです。」という言葉をかけていただいた。生徒たちの熱心な姿勢が相手に伝わったことが，担当者としては本当にうれしく，この研修が有意義であったと実感している。

最終日のプノンペン日本人学校では，毎年講義を聞き，施設見学をしているが，担当者の方から，「もし次年度以降，機会があれば，本校の生徒のために，附属の生徒さんから何か発信してほしい。」というメッセージをいただいた。これまで，自分たちが情報を得るという一方通行の研修であることに気づかされた一瞬であった。今後は，受け身の姿勢でなく，双方向の活動を取り入れることができるか検討する余地があると思われる。

SGH研修としての本研修は本年度で終了となる。これまで，様々な方面に働きかけ，少しでも研修が実りあるものになるようプログラムを充実させてきた。カンボジア研修は，生徒の生き方や考え方を大きく変える可能性を秘めた大変貴重なプログラムであると思う。次年度以降も，SDGsの達成に向けたフィールドワークの機会を確保するという観点からも，何らかの形で途上国研修を継続する可能性を検討できればよいと思う。

生徒たちは，カンボジアの人たちの優しさに触れ，徐々に緊張がほぐれていった。そして，自発的に覚えたクメール語と英語を使って現地の人と楽しそうにコミュニケーションし，穏やかな雰囲気で活動に取り組めたことを最後に付け加えておきたい。

E　英国ロンドン・ケンブリッジ研修

担当　英語科教諭　大八木　優子

(1)テーマ　　「イギリスにおけるグローバル社会の伝統と変革及び直面する困難」

(2)SGH における位置付け

本プログラムは，本校の「課題研究」の 4 研究領域におけるⅣ「グローバルサイエンスと拠点都市『神戸』」に位置付けて実施するものである。

(3)目的

英国（ロンドン・ケンブリッジ）での研修を通して，グローバル社会の伝統と変革及びそれに伴って英国が直面している困難について学ぶ。特に，ケンブリッジの交流校コンバートン・ビレッジ・カレッジ(CVC: Comberton Village College)での交流活動（授業参加，調査活動，課題研修報告等）を通して，自己の研究についての理解を深めると共に，国際対話力及び英語活用能力の向上を図る。また，大英博物館等のロンドン諸施設やケンブリッジ大学の見学では，政治・科学・文化等の分野における英国のグローバリズムの伝統と現状について学ぶ。

(4)概要

①期間　　2020 年 1 月 25 日（土）～2 月 3 日（月）〔10 日間〕

②場所　　英国（ロンドン・ケンブリッジ）

③対象生徒　5 年生 4 名（男子 1 名，女子 3 名）

④日程

日付	行程等	宿泊
1/25 （土）	□関西国際空港発　ロンドン・ヒースロー空港着 i) The Bountiful Cow にて Canon DS Product Management Office & EDSM European Marketing Specialist グレイ友之さんと夕食	ホテル 3 泊 The Royal National Hotel
1/26 （日）	i) ウェリントン門，勝利の女神像，ウェリントン公像 ii) ケンジントン・ガーデンズ，アルバート公記念碑，ロイヤル・アルバート・ホール iii) ロンドン科学博物館 iv) ロンドン自然史博物館 v) ロンドン塔，タワーブリッジ，セント・ポール大聖堂 vii) 大英博物館	
1/27 （月）	i) グリーンパーク，バッキンガム宮殿 ii) ナショナル・ギャラリー iii) Caffè Concerto, Haymarket にてアフタヌーン・ティー iv) ロンドン市内自由行動時間 v) ミュージカル “Wicked” the Apollo Victoria Theatre	
1/28 (火)	□ロンドン・キングスクロス駅からケンブリッジに鉄道で移動 i) Comberton Village College 訪問 ii) 校長 Mr. Peter と対面，挨拶	

	iii) 代表生徒(tour prefects: Sam and Adam)による学校案内ツアー iv) 5~6 時間目：ホストファミリー生徒と同じ授業に参加 （歴史，陶芸：絵付け，文学：シェイクスピア，数学：ポアソン方程式）	ホームスティ 4 泊
1/29（水）	i) 1~2 時間目：心理学(Sixth Form)の授業に参加 ii)3~4 時間目：本校生徒による研究発表（プレゼンテーション） iii)5~6 時間目：Sixth Form 生徒対象の日本語・日本文化紹介授業の実施	
1/30（木）	i) ケンブリッジ市内観光 クライストカレッジ（ダーウィンの庭）／キングスカレッジチャペル／キングスカレッジ／コーパスクロック／パブ「イーグル」（DNA 二重螺旋構造の発見）／マーケットスクエア／トリニティ・カレッジ（ニュートンのリンゴの木） ii) ケム川からパンティング(punt:観光船)によるケンブリッジ観光	
1/31（金）	i) 低学年生徒集会（約 280 名）にて日本文化の紹介 ii) 1~2 時間目：歴史の授業に参加 iii)3~4 時間目：スコーン作りに挑戦 iv)5 時間目：７年生対象の日本語・日本文化紹介の授業を実施	
2/1（土）	i) ホストファミリーと一日を過ごす 〇歌や演劇のクラスに参加，ラグビー等ニュースをテレビで見ながら団欒 〇アイススケート 〇ケンブリッジ植物園，オセロ観劇 〇ダックスフォード帝国戦争博物館 □ケンブリッジからロンドン・キングスクロス駅に電車で移動。その後，地下鉄ピカデリー線でヒースロー空港に向かうが，突然の電車打ち切りによって途中からバスで空港に向かった。	ホテル 1 泊 Sofitel London Heathrow
2/2(日) 2/3(月)	□ロンドン・ヒースロー空港発　関西国際空港着	機内泊

(5)活動の様子と参加生徒の感想（一部抜粋）※斜字体と英語は生徒の感想

 写真１ イギリス勤務のグレイ君と食事	◆イギリス勤務の方と夕食 イギリスの CANON で働くグレイ友之さんと夕食をしながら，イギリスで働くことや，その経緯について話を聞いた。人生観だけでなく，イギリスに住んで初めてわかるイギリス文化や，そこから理解した日本についても話をうかがうことができた。 *〇グレイさんは非常に行動力のある方で，自分の「海外で働きたい」という芯にある思いを確実に行動に移されていた。私は今将来やりたいことが特になく，大学の学部も他の人に言われたから，という理由で志望している。グレイさんのように「自分のしたいこと」を見つけ，ただ闇雲にやるのではなくそれに向かって努力しているという意識を持てるようになりたい。*

写真 2 科学博物館での飛行機展示

写真 3 齋木優城さんによる絵画解説

写真 4 ミュージカル「ウィキッド」

◆ロンドン市内観光

ロンドン市内は観光する箇所が多く，全てを周ることができないので，研修前に重点的に見学する場所を決めていた。特にナショナル・ギャラリーでは芸術を専門とする齋木優城さんの解説により，大変充実した鑑賞となった。生徒がもとより希望していた『ひまわり（ゴッホ）』『テメレーア号の戦い（ウィリアム・ターナー）』等の鑑賞も実現することができた。左写真は齋木さんがナショナル・ミュージアムで最も好きだと熱弁されたポール・セザンヌによる『水浴者たち（大水浴）』である。画面中央に集約されるような三角形の構図について説明をいただいた。

〇科学博物館では，航空機のフロアでエンジンの実物が見られ，大きさに改めて驚いた。他のところにはエンジンの気流の流れを表している模型があり本とかで読んだことしかなかったので参考になった。

〇最近の美術鑑賞の領域では「対話型」というものが注目されているので，それを意識している訳では無いと思うけど外国の雰囲気も相まってその雰囲気をなんとなく肌で感じることが出来た。また，これまでに日本で訪れた博物館や美術館，これまでに受けた世界史の授業，理科の授業などこれまでの経験と結びつけて鑑賞することが出来た。

〇夜は Wicked というミュージカルを観に行った。演技力・歌唱力・演出すべてにおいて迫力があり想像以上に感動してしまった。一糸乱れぬ動きに引きつけられ，世界観に引き込まれ，夢の中にいるようだった。

写真 5 英語による KP 発表

写真 6 鶴の折り方を説明

◆CVC 学校交流

〇ホスト生徒と受講した英国文学「シェイクスピア『オセロ」』」

In the English Literature class, we read Othello by Shakespeare. It was written in old English, which made it very difficult for me to comprehend.

〇ホスト生徒と受講した数学「ポワソン方程式」

In the math class, I was very surprised to see their fast progress as everyone calculated the Poisson equation, which is the level of university studies. In Japan, students study how to solve math questions but in CVC, the students were learning how to think through questions to find the answers.

〇KP 発表を英語で実施

Every Japanese student had different topics on their KP presentation, so I enjoyed it very much. I was very nervous when I did my presentation in front of everybody, and I realized my preparation was not enough. However, I tried my best. The teachers who listened to my presentation said that it was good because I could make a relaxed atmosphere. I was very happy when I heard this. I think that I could make use of my experience.

 写真 7　スコーンを作る実習	○スコーン作り After that, we made scones. It was sweet and tasted of raisins, because I put too many raisins into my scones. Some raisins stuck out and burned, but the scones themselves tasted nice. It was my favorite.
  写真 8　生徒が購入した 1 月 31 日のブレグジットを報じる新聞紙 写真 9　ケンブリッジを離れる前に学校前でホストファミリーとの写真撮影	◆ホストファミリーとの交流 ○イギリスの社会情勢についてホストファミリーと会話 Brexit was the biggest topic which my host family and I talked about today. They were not happy about brexiting since they felt a need for European countries to come together and work together. I agreed with their idea, and even though I might've been biased, I felt that Brexiteers who were on TV had opinions similar to radical supporters of Donald Trump, and repeatedly stated that Brexit would make the UK "better like before". Nevertheless, it is said that the decision whether Brexit was a good choice or a bad one can only be made after ten years or so; hence I want to be attentive to the British news for a while. ○お互いの理解を深めたホストファミリーとの交流 *ホストファミリーからのプレゼントは私用と私の家族用とがあって，家族ぐるみで交流しようとしてくれていることに喜びを感じました。また，グレーテストショーマンのブルーレイなど私の好みをすごく把握してくれていて感激しました。ホストファミリーとの別れはすごく辛いもので，この短いホームステイの間だけでも本当の家族のように接してくれた家族に感謝の気持ちでいっぱいでした。*

(6) 成果と課題

今回のように泊を伴い海外で実施する研修について，その成功を左右する大きな鍵となるのは「人」であることを確信した。ロンドンには訪問するべき場所や見るべきものが非常に多く，数日で満足できるような都市ではない。しかし，その一端に触れ，そしてそれらが自分たちと全く関係のないものではないということを，歴史，経済，科学の面から感じ取ることができれば，また再び彼らがこの地を訪れる理由となるであろう。そのようなきっかけを与えてくれたのが，今回，この研修に大きな影響を与えてくださったグレイさんと齋木さんであった。ロンドンという街で，あらゆる側面から解説してくださったことが，生徒の持つイギリスへの印象や考えを大きく揺さぶり，彼らを新たな見地に導いたように思う。

また，ケンブリッジでは，ホストファミリーとの交流があり，日本人生徒 4 名が個々の力で研修に挑み，そしてイギリスの生活に深くかかわる 5 日間であった。英語という言語の面では，イギリス在住のホストファミリーを凌ぐことはなかったが，言語の壁を越えた彼らの人間性や知性がホストファミリーのみならず周囲の人との距離を縮めた要因だったのではないか。

このように，人との関わりが多い英国研修であったからこそ，ただの観光旅行とは異なる深い学びや貴重な経験を得られる研修となった。今後とも，英国研修に参加する生徒には果敢に挑戦する強い志を持ち，イギリスと日本をあらゆる角度から考察してもらいたい。そして本校を代表するだけでなく，日本親善大使としての使命をも意識し，さらなる本プログラムの発展を支えてもらいたい。

平成31(2019)年度グローバル・アクション・プログラム（GAP）等活動の様子

写真１：「神戸大学 day」
理学部数学科　谷口隆准教授

写真２：神戸大学ジャンモネ COE 主催「高校生向けミニシンポジウム」Jean Monnet Chair（兼副学長）吉井昌彦教授

写真３：４年生「課題研究入門」講演会
神戸大学大学院人間発達環境学研究科　林創准教授

写真４：４年生「インターンシップ」
神戸大学大学院国際協力研究科　小川啓一教授研究室

写真５：カナディアン・アカデミイとの交流

写真６：シーナカリンウィロット大学パトゥムワンデモンストレーション校（タイ）生徒との交流

写真 7 ：兎原祭（文化祭）海外 GAP ブース

写真 8 ：授業研究会 2 年生 KP「探究入門」発表

写真 9 ：SGH 第 5 年次報告会 5 年生 KP
「卒業研究Ⅰ（課題研究Ⅱ）」発表

写真10：SGH 第 5 年次報告会ポスター発表

写真11：SGH 第 5 年次報告会「海外 GAP」発表

写真12：「EDD Food プロジェクト」調理実習

写真13：ESD Food プロジェクト
「野菜探究」農園実習

写真14：「ESD 実践研究集会」分科会発表

写真15：Global Forum 発表準備

写真16：Global Forum プレゼンテーション

写真17：ICS & FLSS 受け入れ「京都研修」舞妓体験

写真18：ICS & FLSS 受け入れ「京都研修」清水寺

写真19：ICS & FLSS 受け入れ「茶道体験」

写真20：DR3 による減災学習

写真21：「全国高校生フォーラム」発表

写真22：「全国高校生フォーラム」分科会討議

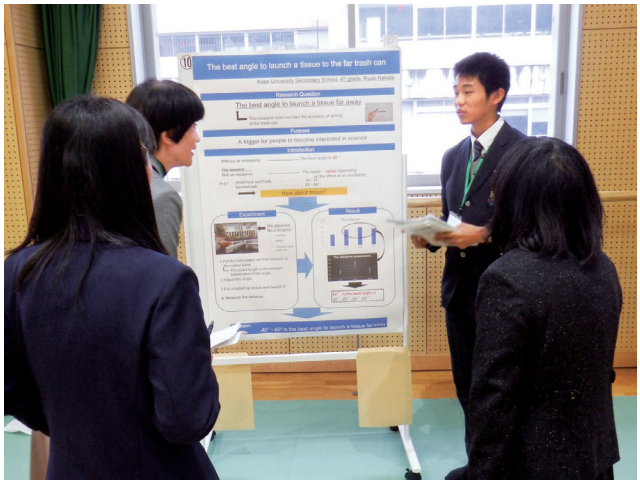


写真23：神戸市立葺合高等学校主催
「WWL等 課題研究交流発表会」

写真24：神戸大学主催
ACE Student Conference 2020

写真25：「国際問題を考える日」

写真26：PDA 全国高校即興型英語ディベート合宿・大会2019　課外授業の部（一般）藤島高校・神大附属合同チーム　準優勝

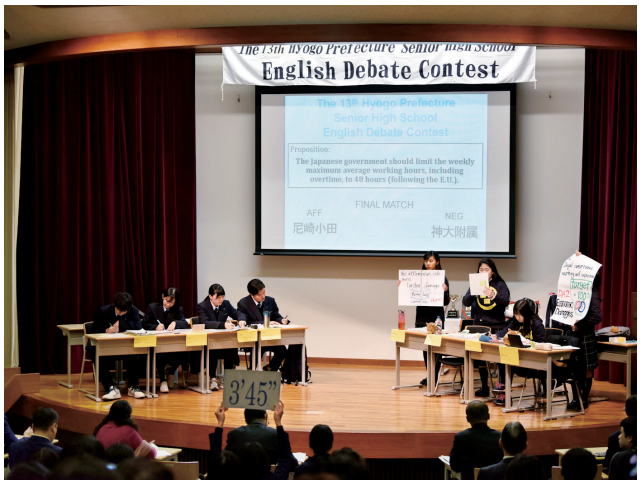


写真27：兵庫県高校生英語ディベート大会（優勝）

写真28：「近畿・北陸地域 ASPnet 校日中 ESD／SDGs 学びあい交流会」準備セミナー

写真29：「近畿・北陸地域 ASPnet 校日中 ESD／SDGs 学びあい交流会」臨場研修会（姫路市安富町）

写真30：「神戸コミュニティーフォーラム2019」

写真31：臨海実習（標本採集）

写真32：臨海実習（顕微鏡観察）

写真33：全国高校模擬国連大会

写真34：World Youth Meeting プレゼン準備

写真35：World Youth Meeting「プラチナ賞」受賞

写真36：「アートマイル」サウジアラビアとの
テレビ会議

写真37：「アートマイル」壁画制作

写真38：「アートマイル」日本側完成

写真39：「アートマイル」完成作品

写真40：「オックスブリッジ英語サマーキャンプ」①

写真41：「オックスブリッジ英語サマーキャンプ」②

写真42：ベトナム FLSS 受け入れ（広島研修）

写真43：「カナダ語学研修」①

写真44：「カナダ語学研修」②

写真45：「シドニー修学旅行」（5 年生）

写真46：「米国研修」Google 社

写真47：「米国研修」課題研究発表（於：ICS）

写真48：「ベトナム研修」JICA ベトナム事務所

写真49：「ベトナム研修」イェンソーポンプ場

写真50：「ベトナム研修」ホーチミン廟

写真51：「ベトナム研修」世界遺産ハロン湾鍾乳洞

写真52：「ベトナム研修」FLSS 授業参加

写真53：「ベトナム研修」日本語クラブとの交流

写真54：「台湾研修（ASEP）」高雄師範大附属高級中学生徒との交流

写真55：台湾研修（ASEP）「プラチナ賞」受賞

写真56：「カンボジア研修」アンコールワット遺跡群

写真57：「カンボジア研修」JICA カンボジア事務所

写真58：「カンボジア研修」JETRO カンボジア日本人商工会

写真59：「カンボジア研修」プノンペン日本人学校

写真60：「カンボジア研修」トゥールスレン刑務所

写真61：「カンボジア研修」スナーダイクマエ孤児院

写真62：「英国研修」ナショナル・ギャラリー

写真63：「英国研修」ケンブリッジキングスカレッジ

写真64：「英国研修」CVC 英国料理調理実習

写真65：「英国研修」CVC 日本文化発表

写真66：「英国研修」CVC ホストファミリーと共に

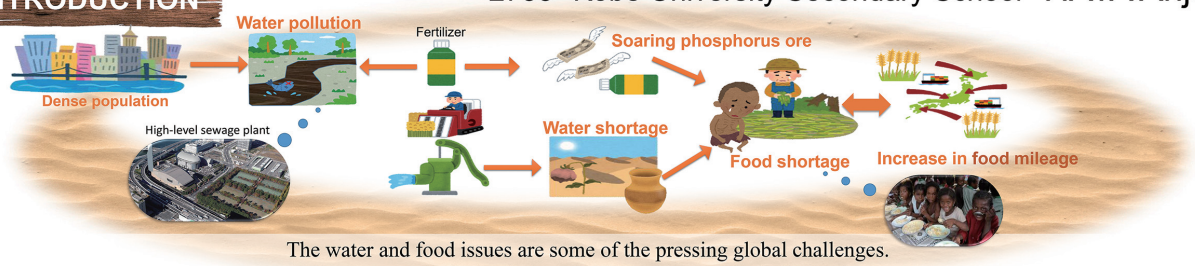
課題研究ポスター優秀作品

1　全国高校生フォーラム

International Cooperation
~ How to Solve Water and Food Issues ~

2735 Kobe University Secondary School HATA Anju

INTRODUCTION

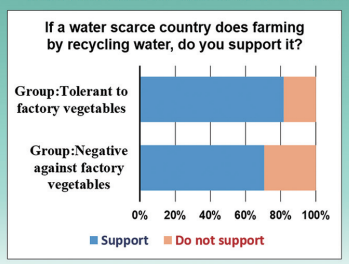


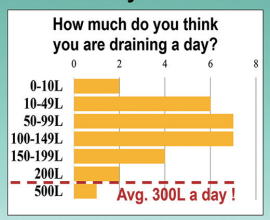
The water and food issues are some of the pressing global challenges.
However, technical solutions have not been applied efficiently.
Based on the research conducted in Seattle as a part of SGH program,
the author proposes the idea of global cooperation to achieve the world's sustainable development.

METHODS and RESULTS

Analysis of industry-academia-government collaboration systems

The Results of the Citizen Awareness Survey in Seattle



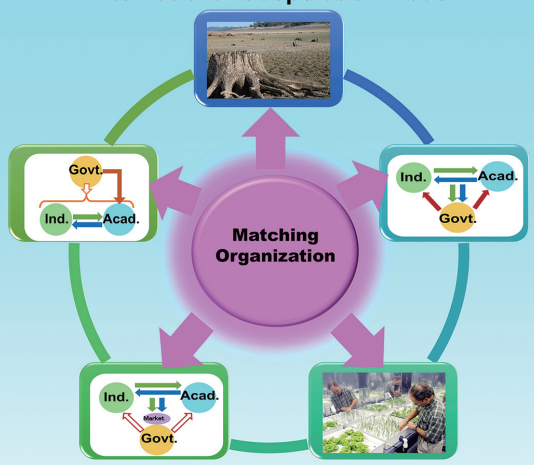


DISCUSSIONS

Classifying countries into 6 types

		Ind.	Acad.	Govt.	Measures
a)	Developed	v	v	v	Collaboration by Ind. and Acad.
b)	Developing	v	v	v	Country unit
c)	Developing	v	v		Village unit
d)	Developing	v			Technical assistance and Developing human resources
e)	Developing		v		
f)	Developing		v		Share its circumstance with UN

International Cooperation Model



CONCLUSION

(1) Broadly classifying countries into 6 types

I classified ten countries into six types according to maturity and proposed some measures to make full use of new technologies.

(2) International cooperation model

I propose a collaborative matching system to encourage industry-academia-government cooperation on the international scale.

(3) Future prospects

The most important thing is to communicate and seek an effective way by considering each histories, cultures, geographical and climate features.

樹木系精油の殺菌効果の研究 ―精油の使用方法に焦点をあてて―

キーワード：殺菌、精油、感染症対策、生命　　神戸大学附属中等教育学校5年3組25番　橋本　奈緒(7回生)

精油（エッセンシャルオイル）とは、植物の花、葉、樹皮などから抽出した天然の素材の揮発性芳香物質であり、強い殺菌作用があるという報告がある。医療現場ではその効果に期待した実用化が期待されているが、原液のままの精油は刺激が強く、実際は空気中に拡散させて使われるため、先行研究のようにシャーレの上で菌を散布し殺菌効果を試すのでは、実用上の殺菌効果を検証できているとは限らない。

そこで本研究は、「**精油の拡散方法によって殺菌効果に違いはあるのか**」という問いを立て、精油を空気中に様々な方法で拡散させて殺菌効果を確かめ、どのように精油を活用していくことができるのかを検討した。

その結果、「精油は現在殺菌するために使用される物質として一般的なエタノールよりも**使用方法によらず一定の殺菌力がある**可能性が高い」という結論を得た。

目的

抗生物質の濫用

↓

薬剤耐性菌の出現[2]

[1]

薬が効かないケース 増

予防を目的とした感染症対策商品の開発

世界の多様性を尊重するために…

イスラム教やキリスト教のひとつであるモルモン教では、アルコールの摂取が禁じられ、消毒用のエタノールも避けられる傾向がある[3]

多様化する世界で安心して使用できる感染症対策

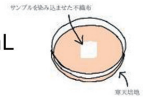
【原液による殺菌力を確かめる実験】

※減少率は１－(処理をした培地に生えたコロニー数)÷(処理をしていない培地に生えたコロニー数)のパーセント表示

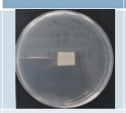
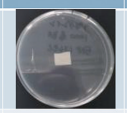
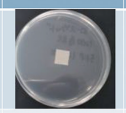
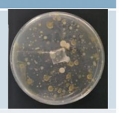
方法

1.雑巾から絞った水を0.1ml寒天培地に滴下しコンラージ棒で塗り広げた

2.サンプルを不織布に約 0.2 mL染み込ませて培地の真ん中に置いて培養した



結果

	ジュニパー	プチグレイン	ローズウッド	エタノール	サラダ油
写真					
コロニー数	0	0	0	31	53
減少率	100%	100%	100%	85.6%	75.5%

【拡散方法による浮遊細菌の殺菌力の実験】

方法

1.雑巾の水を 1.0 g 量りとった後、蒸留水 99.0 gを加えた

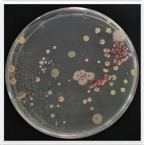
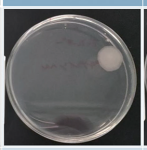
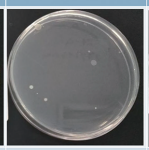
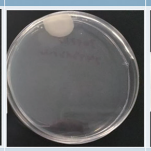
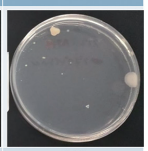
2.寒天培地に 0.1 mL 滴下しコンラージ棒で塗り広げた

3.ゴミ袋の中で菌を塗布した寒天培地を開けそれぞれの操作を行った(右の写真)

4.寒天培地を20時間培養した

【４つの操作】
〈スチーム〉お湯に精油を入れる
〈スプレー〉エタノールと精製水から調合した
〈ディフューザー〉物理的刺激を加えて空気中に散布する
〈アロマランプ〉ランプの熱で蒸発させる

結果

	処理なし	プチグレイン			
		ディフューザー	スチーム	アロマランプ	スプレー
写真					
コロニー数	128	2	6	5	12
減少率	(基準)	98.4%	95.2%	96.0%	91.4%

	処理なし	エタノール			
		ディフューザー	スチーム	アロマランプ	スプレー
コロニー数	174	0	5	33	98
減少率	(基準)	100%	98.1%	82.1%	44.7%

考察

・精油でもエタノールでも安定して殺菌力があったのは〈ディフューザー〉と〈スチーム〉
　→この２つの使用方法に共通するのは実験後のゴミ袋の中の湿り気が他の操作を行ったものよりあった

・精油では殺菌力があったがエタノールではあまりなかったのは〈アロマランプ〉
　→この実験を行った際、同じ量のサンプルを使用したが、実験終了後に精油は半分以上残っていたのに対し、エタノールは全て揮発していた

殺菌剤の殺菌力は湿度が関係する

殺菌剤の殺菌力は揮発速度が関係する

結論

精油は現在殺菌するために使用される物質として一般的なエタノールよりも**使用方法によらず一定の殺菌力がある**可能性が高い

使用方法の確立に繋げるためには、さらに殺菌の仕組みと湿度や揮発速度と殺菌力の関係の解析が必要

参考文献
1．朝日新聞(関西版)　2019年12月6日朝刊　31面
2．AMR臨床リファレンスセンター(厚生労働省委託事業)　http://amr.ncgm.go.jp/general/1-2-1.html　閲覧日：2020年2月3日
3．東京都多言語メニュー作成支援ウェブサイト　https://www.menu-tokyo.jp/menu/hospitality/religion.php　閲覧日：2020年2月14日

Is Working Style Reform Effective for Workers in Japan?

Nagomi Mizuta
11th grade, Kobe University Secondary School
KEY: working hours , labor, karoshi, working environment, social issues

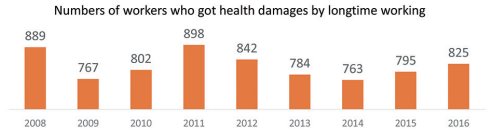
Abstract

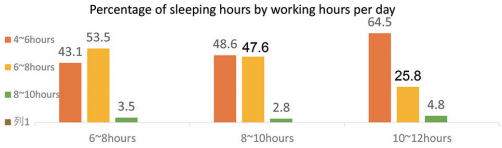
These days the long time working in Japan becomes one of the issues to solve since there are certain people who are suffering from bad effects such as health damages by working and worst cases, it may cause Karoshi. In order to solve the issue, the Japanese government adopts the working style reform. However, some studies said that it is not enough for workers in Japan.

This study aims to reduce health damages caused overtime working and explore whether Japanese government should set more limited law of working hours of working hour like EU law is effective. In this research, mainly focus on secret work and analyzing the precedents to search cause of secret work. Then this study finally concludes that having limited law like EU in Japan will be a good to reduce health damages if people change the awareness of longtime working.

Purpose of this research

Aim: Reduce health damages

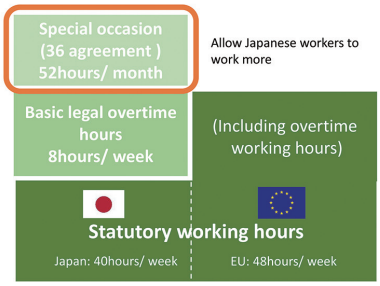




"people who sleep for less than six hours were 12% more likely to die prematurely than those who 6-8 hours."(Cappuccio,2010)

→heart-related problems, high blood pressure, Karoshi

The differences between EU and Japan

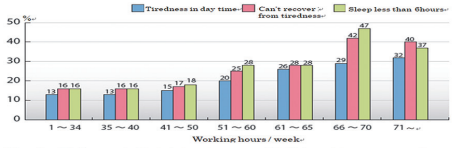


Japan : There are certain allowing time for special occasion

EU : No for special occasion, work no more than 48hours per week

Reality in EU

Expectation: Reduce health damages

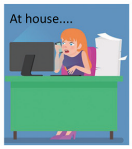


Reality in EU: Can't finish in time and it'll lead increase of secret work

Secret work:

Couldn't finish in time at company

Workers have to finish up work at house



Country	Average Secret working hours/week
🇯🇵	0.515 hours
🇬🇧	3.319 hours
🇩🇪	2.850 hours

-Working tasks won't change=it's too short to finish
→Would it happen in Japan?

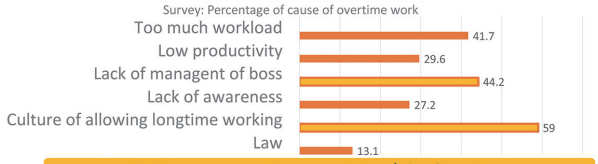
Analyzing the precedents

Research Question: What is cause of secret work?

Three main types of "secret work"

Amount of working tasks	Recognition by bosses	Wheather boss noticed to workers about secret work
Impossible to finish	✓	no
Impossible to finish	✓	Just proffer advices
Possible to finish	×	no

Conclusion/ Proposal



1. Bosses are not recognizing / don't notice
2. Their will to finish all work tasks even they aren't urgent
3. Impossible work tasks to finish in time

→Shorten the working hour in Japan is effective if workers (both boss and subordinate) **change their awareness of longtime working**

Suggestions : How can we change the awareness?

〔**Suggestions**〕

-Use timecard more effectively (Record time of working at house)

-Boss ask about the working condition to subordinate more often

→Boss will notice about the subordinate working hours/ overtime work more and can manage try to not to work a lot

-Workers talk about culture of allowing longtime working with workers who work with

→share oppinions and present situation so that the workers grasp the company's work situations and built unity of purpose of working hours

FOR NEXT SEARCH

-Survey (to search the detail of cause of secret work)
-Analyze other EU countries' precedent

REFERENCES

-Comparison of working hours, secret overtime and labor intensity in Japan, Germany and UK (Junji TODA)
-The present situation of Karoshi (Japanese ministry of health, Labor and Welfare, 2016)
-How to use labor precedents? (Testuya YASHIRO, 2010)
-Working hours law in the precedent (Hiroshi ISHIBASHI, 2013)

What is an Effective Way to Reduce the Amount of Plastic Garbage in Japan?

Kaho Fujikawa
Kobe University Secondary School

Keywords : plastic pollution, environment, awareness, deposit

Abstract

Plastic garbage harm for eco-stem and human's body. These days, leaders decided some goals about reduce the amount of plastic garbage. However, the number of plastic garbage is not decreased especially in Japan. That's why we should change in our awareness and introduce a new system to reduce the amount of plastic garbage.

Seriousness of Plastic Pollution

[human body]

Plastics are never decomposed. So, living things accumulate microplastics in their bodies and cause bioconcentration(Figure 1). The food chain system causes that. If plastic's substance is harmful, it directly affects the human body.

Figure 1. microplastics

[eco-stem]

Fishes eat plastic garbage has kept its original form. If fishes eat plastic garbage, they will not be able to breathe enough (Figure 2). So, Plastic garbage affects their health. That's why plastic garbage destroys the eco-system.

Figure 2. fishes eat plastic garbage mistakenly

Suggestion 1

[change our awareness]

A lot of people use my bags, my straw and my spoon in other countries. For example, many of Taiwan's teenagers drink tapioca juice and then, they use my straw and paper straw (Figure 5).

Figure 5. my straw and paper straw in Taiwan

Also, people who have high level of awareness about plastic pollution should spared information to use SNS.

The current situation of effort to reduce plastic pollution

[International conference (Figure 3)**]**

International conferences are held and representatives of each country discuss plastic pollution, and they decided goals.

G7	Ocean Plastic Charter
G20	the reduction of **plastic garbage** inflow to the ocean to **zero** by 2050
SDGs	"prevent and significantly reduce **marine pollution** of **all kinds**" by 2025 as a target of Goal 14

Figure 3. three International conference

[Practical measure in Japan]

1. plastic bags

Supermarkets introduce that people have to pay money to get plastic bags when they buy something. However, all supermarkets don't introduce. So, citizens still use plastic bags.

2. volunteer (Figure 4)

There are volunteer organizations that a lot of people who participate in volunteer activity. However, young people's volunteers are very few now.

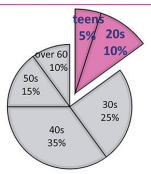


Figure 4. participation of volunteer activity data organized by generations

3. education

Suma aquarium provides plastic pollution's education for children. However, the number of children who participate in this opportunity is few. Especially, junior high and high school students don't participate.

4. company

P&G and Suntory make products considering about environment. Also, employees of those companies do volunteer activities. However, almost companies use plastic products like containers and so on.

Suggestion 2

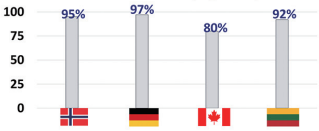
[Bottle Deposit -economic incentives-]

System of Bottle Deposit (Figure 6)

added to the price of the drink → take money back to be recycled

Figure 6. system of Bottle Deposit

the rate of collect bottle (Figure 7)



Countries with bottle deposit system tended to recycle between 80% and 100%.

If Japan introduces "Bottle Deposit", we need a company's agreement. Citizens who want to introduce this system should teach plastic products on how they harm the environment to companies and we should change the company's awareness. Also, they should submit collecting signatures and talk with the company's employees.

Conclusions

Plastic pollution directly affects the human body and the eco-system.

I think we should change people's awareness. As I explained, students have low awareness of plastic pollution. So, if more people use my bags, my straw, my spoon, my bottle and so on, the number of plastic garbage will be decreased. For example, Japanese students use about 4billion plastic bottles per year. If we can change all student's awareness, one six plastic bottles will more recycle.

If Japan can introduce "Bottle Deposit", almost citizens will recycle. According to other countries, "Bottle deposit" can surely reduce the plastic bottle garbage.

That's why the number of people who use plastic products and people who take away plastic bottles will be decreased.

Contact

Kobe University Secondary School
Kaho Fujikawa
Email: kapoleonfish@gmail.com

References

1. Bali's battle against plastic pollution (BBC News, 2018) https://www.bbc.com/news/world-asia-43312464
2. Dead Philippines whale had 40kg of plastics in stomach (BBC News, 2019) https://www.bbc.com/news/world-asia-47608949

[Interview]

1. Nezia Azumi(University of Hawaii), Joseph Zilliox(University of Hawaii), Waynele Yu(University of Hawaii), Shayne Torikawa(Tsukuba University)
2. Tara O'Neill(University of Hawaii)
3. Polanui Hiu(Reef survey at Maui Cultural Lands in Lahaina)
4. Maui Ocean Center(Maui, Hawaii)
5. Courney Kerr (Kaho'olawe Island Reserve Commission)
6. Rodrigo Serrallonga Mejia(Y20summit2019 representative of Mexico)
7. Tomoaki Moriguchi (representative of Kobe Umisakura)
8. Toshiya Amano(Kobe city environment department)
9. Satomi Abe(Kobe city Suma ward office)
10. Ryo Wakabayashi(Sumaura fishery)
11. P&G Japan
12. Suntory
13. Hiroyuki Yoshida(Suma Aquarium director)

神戸市における公共交通機関と街のあり方
―神戸市再開発・人口誘引事業および 北神急行電鉄市営化と関連して―

神戸大学附属中等教育学校　5年2組10番　榊 峻征（7回生）

Keywords:　震災・復興、神戸、国際都市、経済、社会問題、持続可能な社会、都市政策

問：神戸市において持続可能な社会をつくる街づくりとはどうあるべきか？
→人口誘引事業のみならず、今ある街の活性化を図った開発を行うべきである。

1　はじめに

・神戸市は東京 23 区と政令指定都市 20 市の中でワースト 1 位の転出超 となっている。(2018年調べ)
・2020 年 6 月に北神急行電鉄が市営化され、三宮～谷上間の運賃が現在のほぼ半額となる。
・「リノベーション・神戸」とよばれる人口誘引を狙いとする再開発プロジェクトが行われている。

2　神戸市へ質問調査

1.三宮の再開発に伴う地下鉄三宮駅の改修はあるのか？
2.北神地区、特に谷上方面において再開発や大型商業施設の建築予定はあるのか？

3　神戸市からの返答事項（2019年11月16日回答）

1.地下鉄三宮駅自体の改修は予定していない。
駅北側に駅前広場の拡充を計画しており、他の交通との乗り換えの利便性を向上させていく。
2.北神急行の市営地下鉄編入に伴う運賃低減による乗客数の増加を踏まえ、谷上駅の拠点性向上や街づくりについて検討を行っていく。

4　回答内容の考察

都心地域の活性化プラン

地下街建設案

三宮駅から新神戸駅間に地下街を建設し、商業施設が少なく、地上に空いている土地が少ないフラワーロード周辺に、新たな地下空間を作り、観光客のみならず地元の方もターゲットにした三宮・布引地区の活性化を図るプラン

LRT路線敷設案

新神戸駅からHAT神戸地区間にLRT路線を敷設し、将来的にHAT神戸内で自動運転を実施。新たな観光資源ともなり、主にHAT神戸や三宮地区の活性化を図るプラン

図①：LRTのモデル都市(富山市)

都心地域以外の活性化プラン

大規模アリーナ建設誘致案

兵庫県が検討している大規模アリーナの建設を神戸市西区西神南駅周辺地区に誘致し、西神ニュータウン及び神戸市営地下鉄西神・山手線沿線の活性化を図るプラン

まちの駅建設案

公共交通機関でのアクセスが困難な現行の道の駅の立地や機能を改善し、北区や西区の活性化を図るプラン

図②：道の駅東洋町(高知県安芸郡)

5　今後の展望

・神戸市役所へ今回の研究論文で出た新たな疑問点や神戸市の再開発ビジョンに対する質問調査
・LRT路線の敷設案や大規模アリーナ建設誘致案などを兵庫県および神戸市に提案、改善点の精査

４章　SGH 事業の評価

１　グローバル意識調査

本校では，平成 27 年度から 31 年度の 5 年間，SGH 各プログラムを実施した結果，生徒のグローバル意識がどのように変容したのかを検討するために，全学年生徒を対象に 5 年間にわたり，以下のアンケート（多肢選択と自由記述）を実施している。

（１）調査の目的と手続き

アンケートの質問項目として，批判的思考尺度（平山・楠見，2004），国民意識尺度（唐沢，1994），異文化受容態度（向井・渡部，2003），高等学校におけるグローバル教育アセスメント（石森，2011），大学教育の分野別質保証（日本学術会議，2010），「グローバル人材」の人材像および「グローバル人材」に共通して求められる能力（産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会，2010）等を参考に，本校教科教員の意見も聴取したうえで，神戸大学国際コミュンケーションセンターの石川慎一郎教授の監修のもと，関係教員で協議を重ね「グローバルキャリア力」に広義に関連すると思われる要因として 24 要因を抽出した。そして，それらの 24 項目を内容的な近接性に基づいて大きく 5 グループに分類した。これが資料 1 にある「A　知識力」，「B　基盤能力」，「C　人間力」，「D　課題対応力」，「E　経験力」5 観点の 24 評価項目の概要である。生徒たちにはそれぞれの評価項目（能力）について，それがどの程度重要であると認識しているかを「重要度」として，「5　大変重要である」～「1　ほとんど重要でない」，また各能力について，現在自分がどの程度達成しているかを「達成度」として，「5　ほとんど達成している」～「1　ほとんど達成していない」の 5 段階で評価させた（資料 1，Q1）。

なお，これに加えて本調査では，本校が教育目標として掲げる「グローバルキャリア人」とはどういう人であるかということについて 100 字程度の定義文を記述させた（資料 1，Q2）。計量的な調査では得られない学習者の意識の詳細な変化を追跡することがこの設問のねらいである。

回答の方法としては，多肢選択については，マークシート方式で，自由記述については，ワークシートに手書きで授業内に回答させた。平成 27 年度は無記名で実施したが，平成 28 年度以降は記名式で実施している。

（２）調査データ

調査は，毎年 12 月に実施した。回答数は表 1 に記載する。

表１　アンケート回答数

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	計
平成 27 年度	136	189	193	162	136	130	946
平成 28 年度	120	142	191	183	164	135	935
平成 29 年度	134	120	135	177	177	161	904
平成 30 年度	121	134	118	141	163	175	852
平成 31 年度	123	121	131	113	136	160	784

（３）結果と考察

(3)-1　5 年間の各観点の「重要度」と「達成度」の平均値の変化

図 1～5 に各観点の平均値と標準偏差を記載する。波線は重要度，実線は達成度を表す。また，図 6 はそれぞれの伸び幅を示したものである。

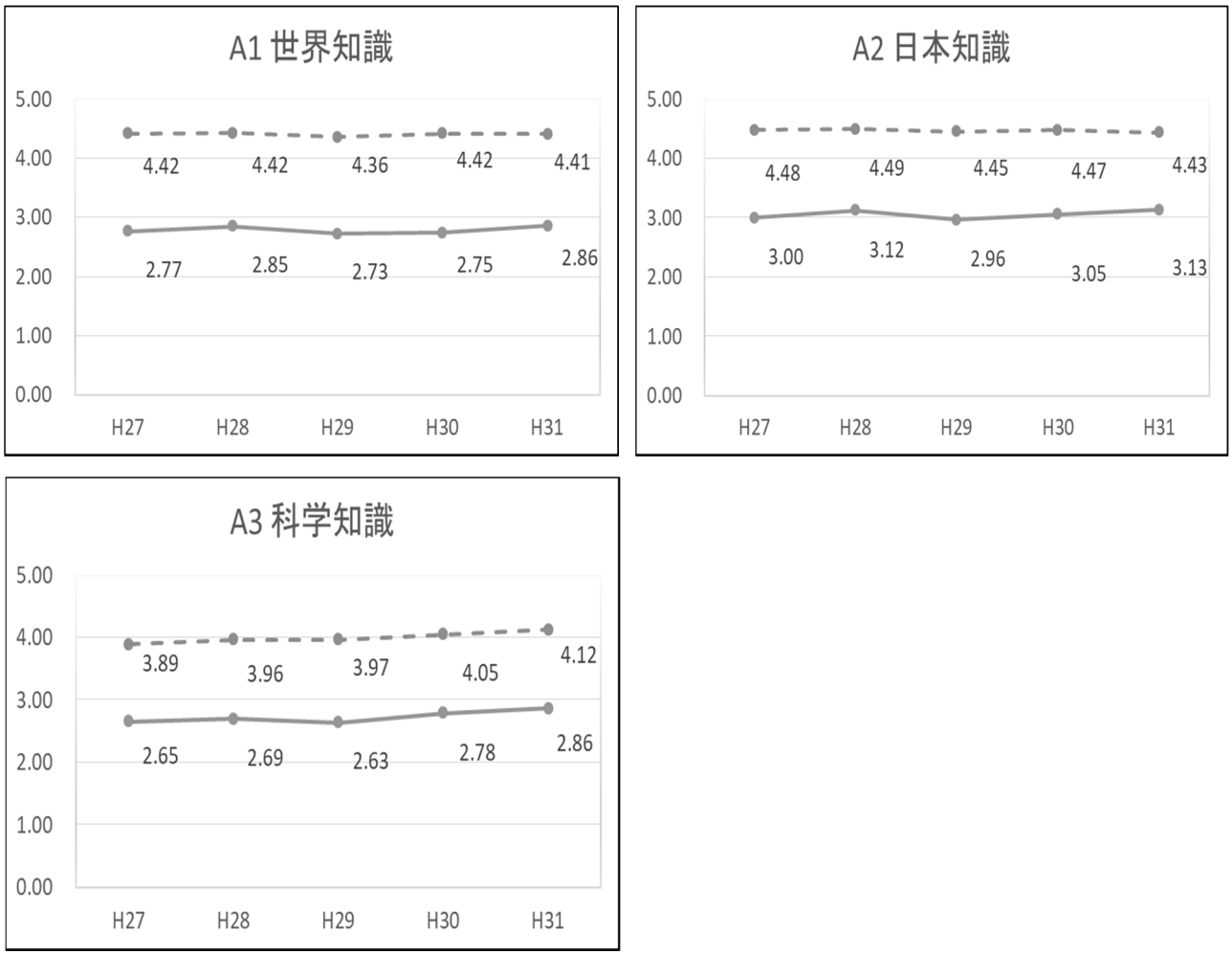
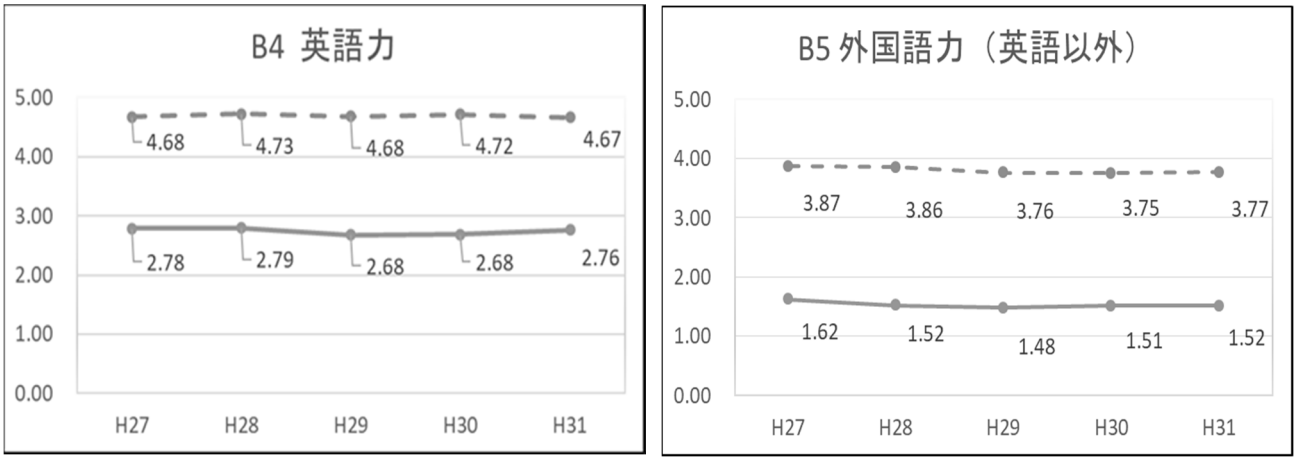
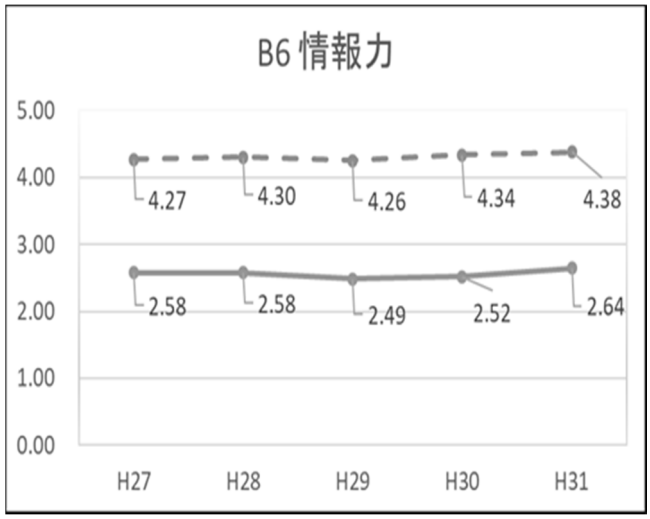
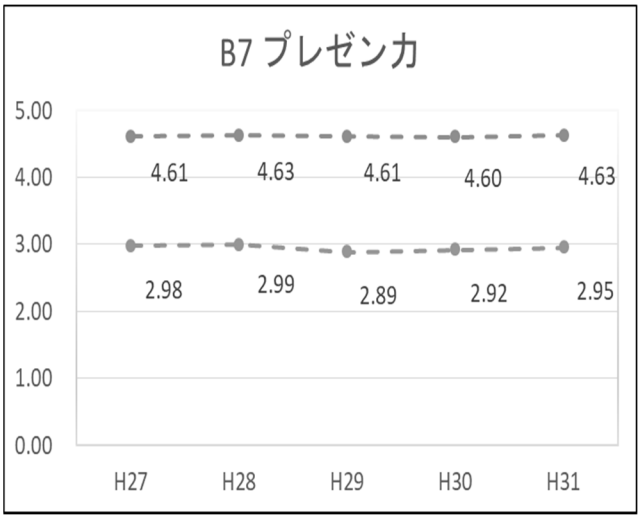
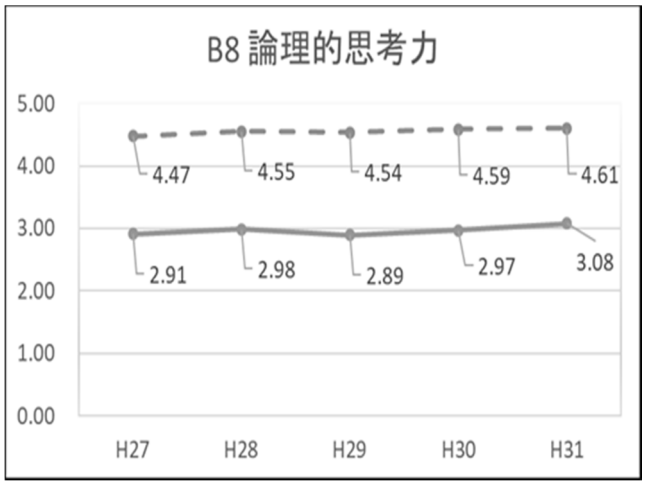


図 1　平成 27 年度～31 年度の「A　知識力」の各項目に対する「重要度」と「達成度」意識の変容









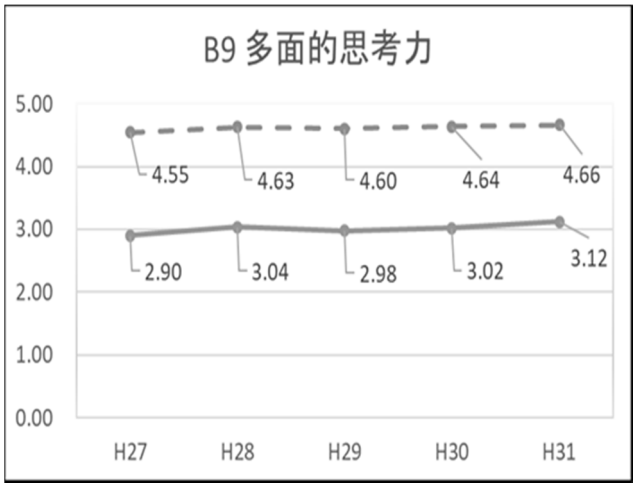
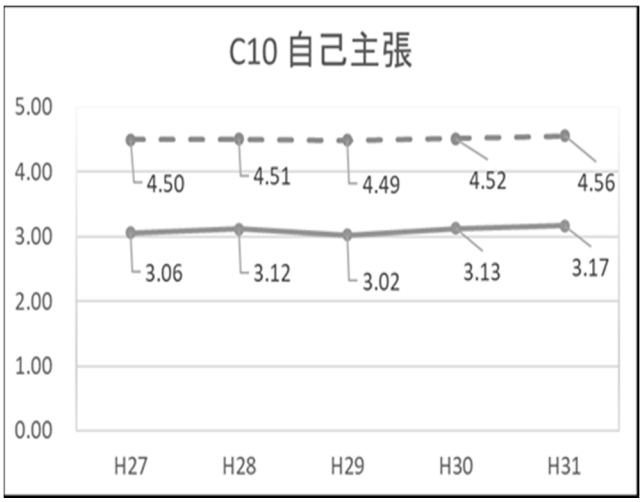
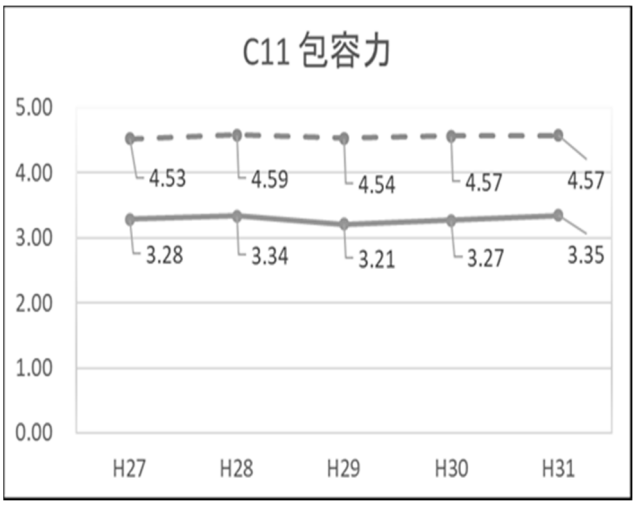


図 2　平成 27 年度～31 年度の「B　基盤能力」の各項目に対する「重要度」と「達成度」意識の変容





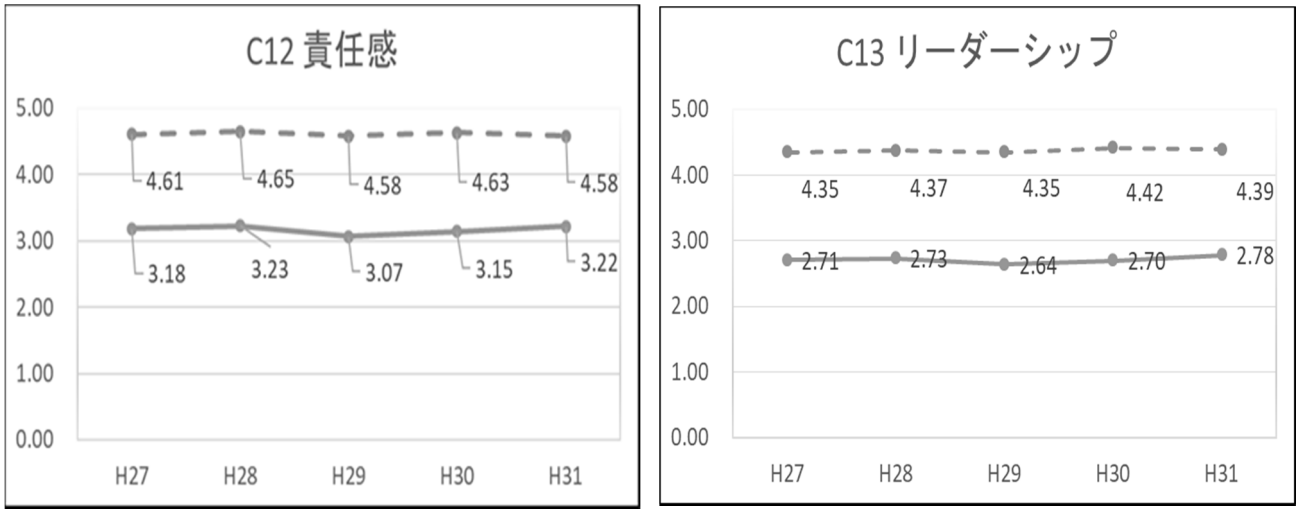
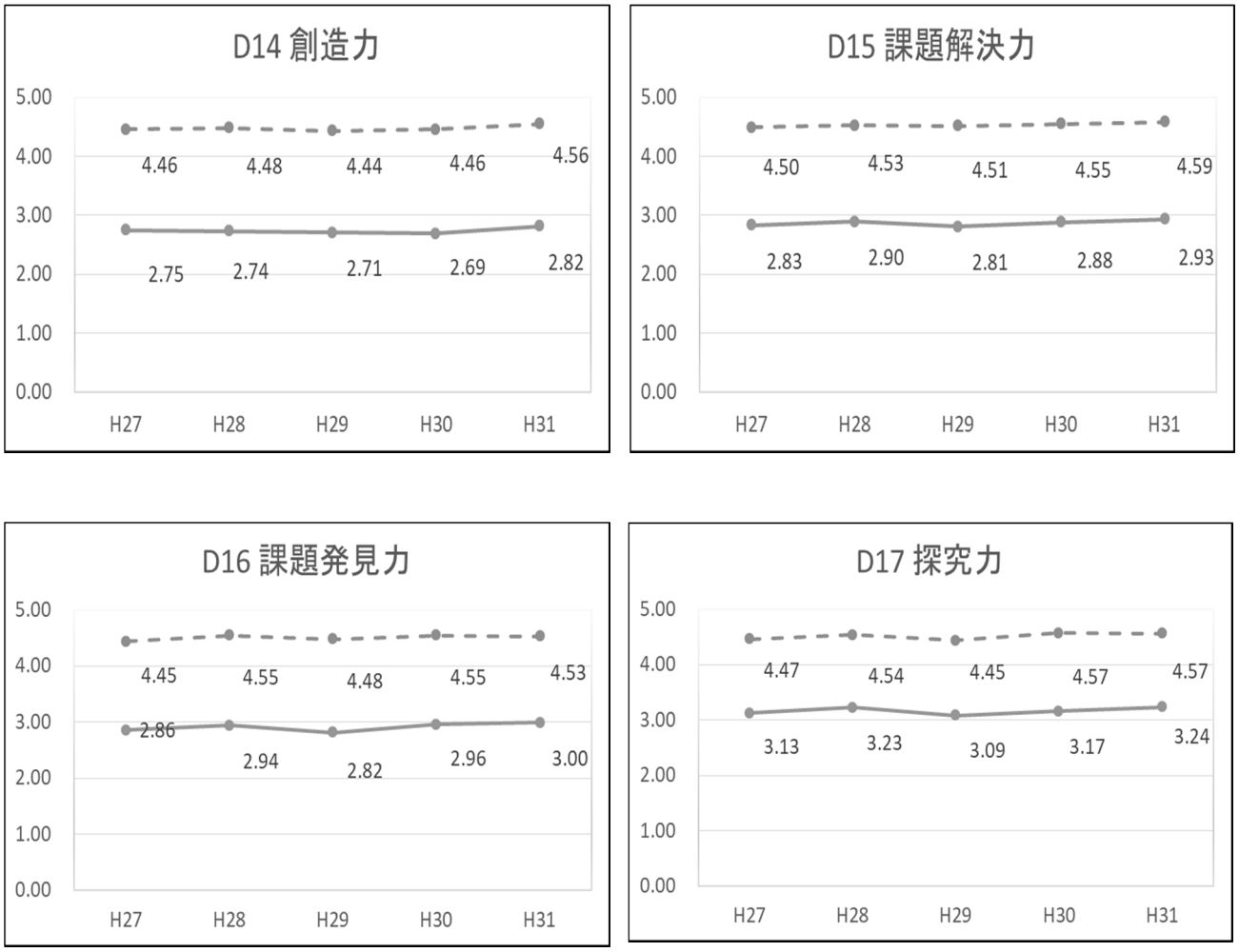


図 3　平成 27 年度～31 年度の「C　人間力」の各項目に対する「重要度」と「達成度」意識の変容



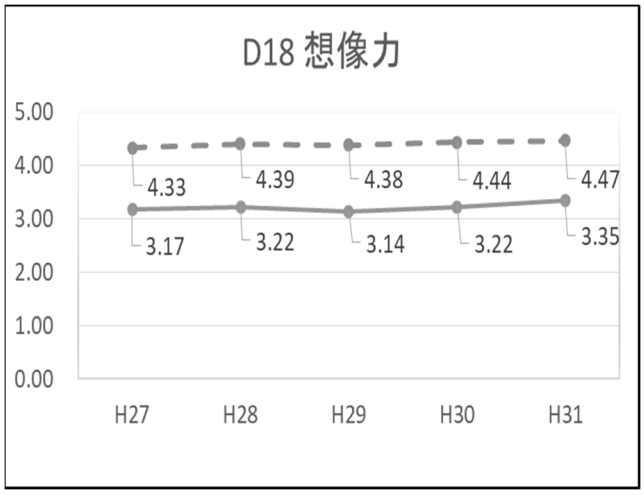
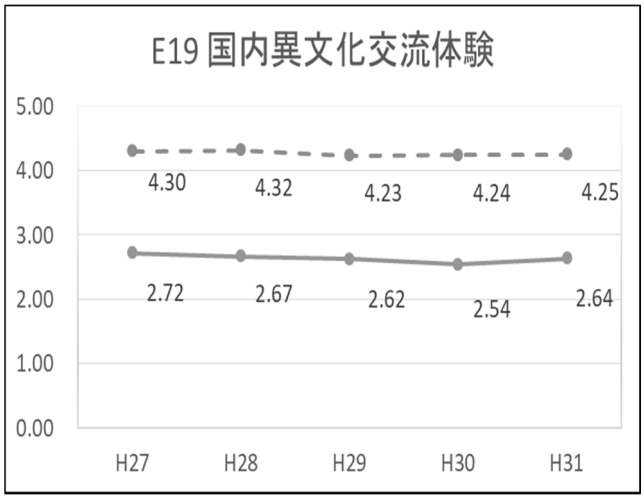
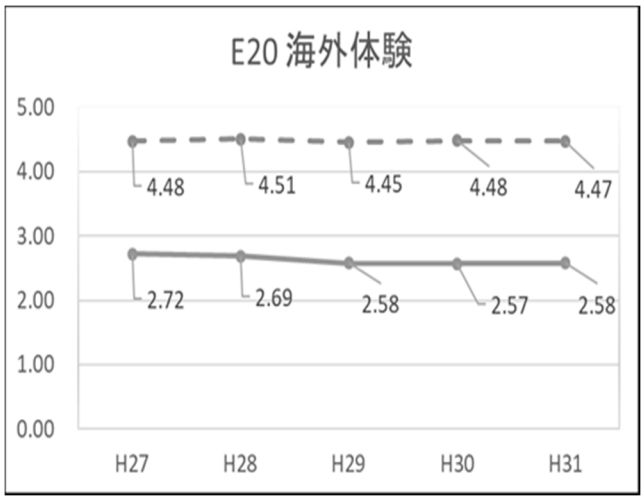
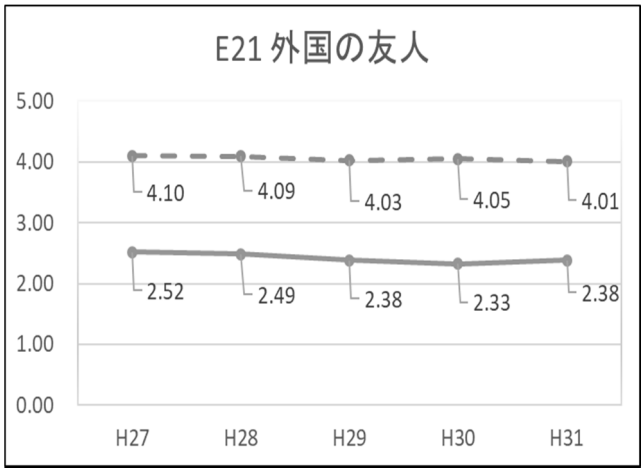
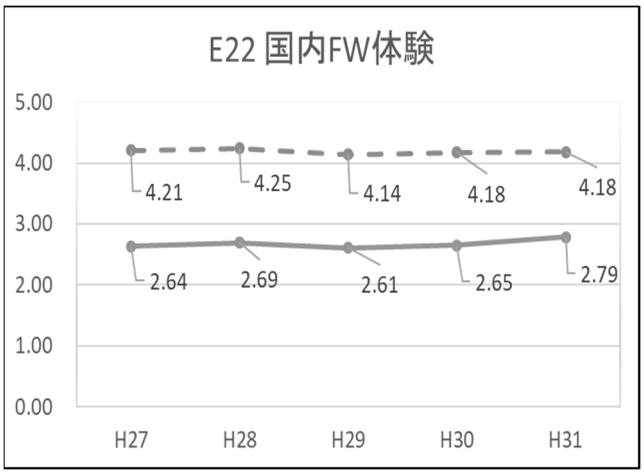


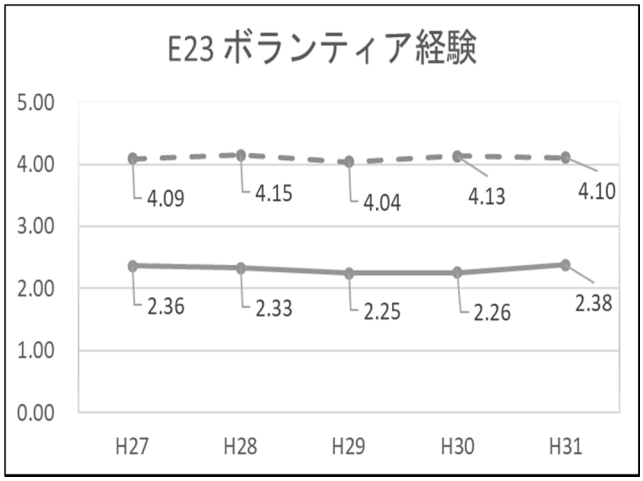
図 4　平成 27 年度～31 年度の「D　課題対応力」の各項目に対する「重要度」と「達成度」意識の変容











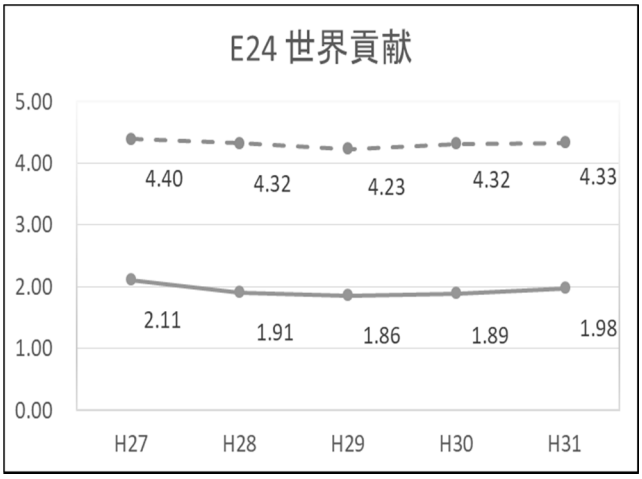


図 5　平成 27 年度～31 年度の「D　経験力」の各項目に対する「重要度」と「達成度」意識の変容

「A　知識力」に関して，当初は「科学知識」のみが重要度，達成度共に他の知識と比べて低いことが確認された（本校『SGH 研究開発実施報告書　第 1 年次』）。SGH 事業は，文系能力，理系能力共に備えた世界で，リーダーシップを発揮できる人材の育成を目標としているが，当時の生徒たちは日本や世界に関する知識は重要であると考え，またそれなりに達成感を感じているが，科学知識については重要であるという意識はそれほど持っていないようであった。この理系知識の涵養を目指す事業の開発が課題と考えられていたが，5 年間で科学知識については重要度，達成度共に伸びた。平成 27 年度から外部入学試験を導入し，理系教科が得意な生徒が増加していることも要因の 1 つであるが，サイエンス・リテラシー育成に注力した理科の授業改革や，生徒個人の課題研究における実験や観察といったリサーチ活動が奏功したと考えられる。

また，「B　基盤能力」の「論理的思考力」，「多面的思考力」，「D　課題対応力」の「課題解決力」，「課題発見力」，「探究力」，「想像力」も重要度，達成度共に伸び幅が比較的大きい。これも課題研究に取り組んだ結果，これらの能力が重要であると認識できるようになり，課題研究を指導する際に生徒が自律して独創的に課題を解決していくことができる指導の在り方についても検討し，実践した成果であると推察される。

「E　経験力」の「国内 FW 体験」について，重要度の伸び幅は低いが，前期課程の生徒も参加可能な国内のグローバル・アクション・プログラムを増やした効果として，達成度の伸び幅は大きくなっている。

しかしながら，「(英語以外の) 外国語」，「国内異文化体験」，「外国の友人」，「世界貢献」については，重要度，達成度共に伸び幅が減少している。

「(英語以外の) 外国語」については，カリキュラム上，第 2 外国語を設置していないことや，英語圏以外の人との交流の機会がほとんどないことから，分析の対象外としてもよいと考えている。

「国内異文化体験」，「外国の友人」については，海外交流協定校研修生や神戸大学の留学生，カナディアン・アカデミイの生徒を受入れた際に，短時間の交流であっても，異文化を実感することができるようにプログラムの改善を図ることが大切である。英語だけでなく，様々な科目の授業でも，積極的に交流できる機会を作りたい。

「世界貢献」についてであるが，質問項目を「世界」ではなく「社会」貢献とすべきであったとも思うが，「『世界貢献』とは，外国に行ってボランティア活動をすることのみを指すのではなく，日本にいながらでも自分たちでできることを考えたり，世界の課題について調べたことを発信し，他の人たちに理解してもらうのも『世界貢献』である」との認識も持たせたい。また，そのような意識を醸成するような教材やプログラムを開発することが必要である。今年度２月に実施した神戸大学発達科学部の学生団体代表者によるグローバルリーダーセミナー（「国際協力講話：フェアトレードワークショップ」）などもそのモデルとなる一例であろう。

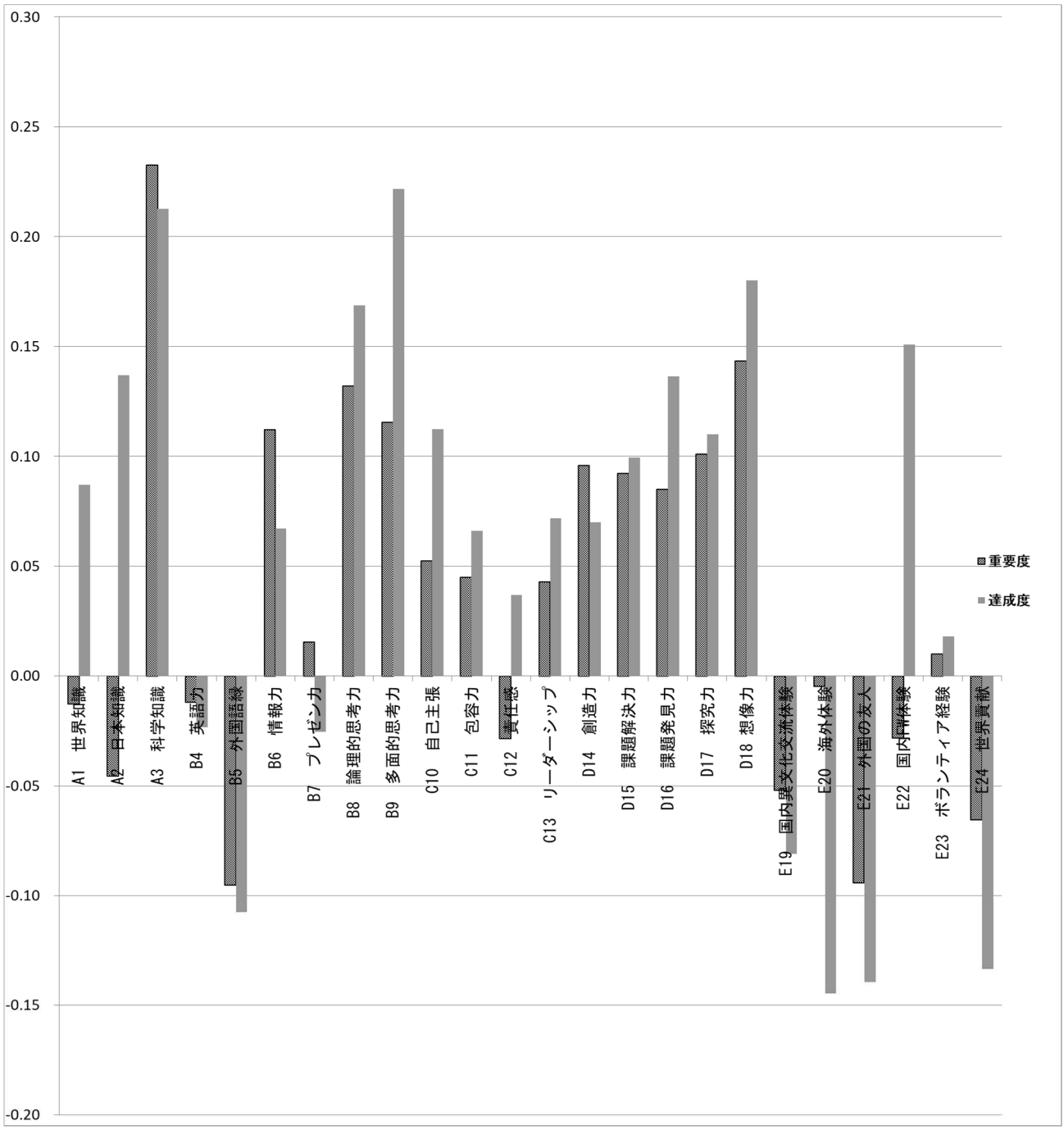


図６　平成 27 年度から 31 年度への全項目の「重要度」及び「達成度」に対する意識の伸び幅

(3)-2　「グローバルキャリア人」定義文にみられる生徒の意識

アンケートQ2の「グローバルキャリア人」の定義についての自由記述回答をテキスト処理し，計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用し，語単位の意味内容が定まりやすい，名詞及びサ変名詞のみを対象として，データセット内での頻度を取得した。

SGH初年度の平成27年度から終了年度の平成31年度まで5年間本校に在籍していた生徒は,6回生(現6年生）と7回生（5年生）である。

表2は，6回生と7回生のSGH1年目と5年目の回答中，出現頻度が高かった20個の単語を抽出した結果である。

ただし，順位を算出する際には,「グローバルキャリア人」という定義対象に含まれる「グローバル」と「キャリア」の2語については例外的に頻度が高いことから分析対象から除いている。

表2　6回生と7回生のSGH初年度と最終年度における「グローバルキャリア人」の定義に関する出現頻度数20位までの形態素

	7回生				6回生	
	平成27年度	平成31年度			平成27年度	平成31年度
	1年生	5年生			2年生	6年生
1位	世界	世界		1位	世界	世界
2位	自分	自分		2位	自分	自分
3位	文化	意見		3位	外国	解決
4位	意見	コミュニケーション		4位	解決	意見
5位	英語	文化		5位	英語	英語
6位	外国	知識		6位	考え	視野
7位	交流	解決		7位	意見	物事
8位	知識	能力		8位	貢献	行動
9位	他国	理解		9位	行動	知識
10位	解決	海外		10位	人々	海外
11位	コミュニケーション	英語		11位	世界中	活躍
12位	人々	行動		12位	物事	能力
13位	積極	課題		13位	活躍	理解
14位	貢献	活躍		14位	交流	イメージ
15位	行動	物事		15位	文化	貢献
16位	理解	人間		16位	課題	国内
17位	海外	言語		17位	国内	人物
18位	言語	自国		18位	海外	思考
19位	相手	リーダーシップ		19位	活動	視点
20位	自国	社会		20位	理解	多面

6回生，7回生いずれの回生も，低学年では「外国」や「交流」,「英語」といった「グローバルキャリア人とは英語を用いて文化交流をする人」と特徴づける言葉が多く出現しているが，高学年になるにしたがって,「解決」,「理解」,「行動」,「活躍」,「視野」,「思考」,「視点」といった内面的な行動を表す言葉が頻出している。

以下に，その定義文の例を挙げる。

〔1 年生（7 回生）〕

・外国の人々とたくさんの交流をし，現地の文化などを学び，そのことを他の人達に話してたくさんの人々にその国の文化などを知ってもらったり,ボランティア活動などを積極的に行い,世界の貧しい人々を支援したりする人。

・私の考えるグローバルキャリア人は日本についてよく知っていてそれに加えて世界のことも知っている国際的な人だと思います。また，実際に外国人とも交流して話し外国と日本の情報共有ができるのもグローバルキャリア人だと思います。

・世界を飛びまわって仕事をしたり外国の人とよくかかわる人。また外国の文化も日本の文化もよくわかっていて知識が広い人。他にもいろいろなことを知っていて，コミュニケーションのとれる人

・外国に行っても自国のことを英語などでくわしく語れる人。自分の国についても色々な目線から語れ実体験も豊富に持っている。色々な文化を受け入れられる人。

・自分と違う国や文化などの人たちとたくさん情報を交換し合ったり,気軽に話したりすることができ,その人たちと協力して仕事をすることができるような人や積極的に外国（異文化の所）に行って仕事ができる人。

・世界中を駆け回って仕事をしている人。外国語を聞く力，話す力，書く力，全てが優れており，世界の文化，社会的問題を熟知している人。池上さんのような人。

・外国の人など，様々な人々と積極的に交流し，自分の意見をはっきり述べることができる人。人種差別などなく，何事にも平等な人。社会で活やくし，友好的な関係を結べる人。

・外国の人と交遊関係があり，これからの日本の社会人を引っぱっていき，英語は勿論，他の言語がいくつか話せて，様々な知識が論理的に説明できる上で更なる知識を求めることができ，これからの世界を創っていける人。

・英語がしゃべれて，外国でも友人がいて，何事にもくっしない人だと思う。自分一人で，走っていくんじゃなくて，みんなの意見を聞いて，キレイにまとめる人のことを言うんだと思う。

〔2 年生（6 回生）〕

・まず，英語がしゃべれて外国人と親しくでき日本だけでなく，世界の問題も外国人と協力して解決していくような人。

・英語が話せて，外国人とうまく交流できる。異国文化を知り，それを受け入れて，なおかつ海外での実績もあげている人。日本の文化も知っていて,外国人に説明でき,日本の発展に貢献できるような人。

・まず第一に自国の文化をたくさん知ってそれを世界に発信するというのがグローバルキャリア人であるための一つだと思う。その発信時に英語が必要になってくるため，当然外国語も話せなくてはならないと思う。そして異国の文化を知り，それを国内に伝えていくことができるそういった人がグローバルキャリア人の形なのではないかなと思う。

・世界的に活動している人で，英語や外国語を話せる人，たくさんの知識をもっている人というイメージがあります。また,創造力や,自分の意見をしっかりもっているというのも,重要だと私は思います。

・イメージは 2 つあり，1 つ目は，外国人との交流をたくさんし，たくさんの文化をとりいれたりしている人。2 つ目は，世界の環境問題，日本の問題をあわせて世界で活やくしたりしている人です。

・私が考えるグローバルキャリア人とは，世界中で活動している人や外国の人と多く関わっている人の

事です，様々な外国語をしゃべり，外国の人と生活面や仕事面などで関わって，国をこえて活動している人をグローバルキャリア人と言うと思います。
・私が考えるグローバルキャリア人はいろんな国の人と交流をしたりいろんな言語をしゃべったり外国の文化にふれたりして外国とのつながりをたくさんもっている人ではないかと思います。
・まず英語が話せて，読み書きができる人，また，日本だけではなく外国の問題にも耳をかたむけて自分なりに考える人だと思います。
・外国の人と，英語で会話することができて，他の国の人々の考え方や文化を受け入れられる一方，自分たちの国ではこうだという自分の国に関する知識も持っていて，外国の人に，これを伝えることもできるようなプレゼンテーション力を持っている人。

〔5 年生（7 回生）〕
・つねに外に視野をかまえつつ，内部の事情や流れが世界とどうむすびつくかを考えられる人。また，世界の諸問題を知り，その問題をどう解決するか，自分はどう行動すべきかを客観的に考えられる人。
・ただ単に指示を受けてその内容の通りに動く人ではなく，自ら根本的なところから考えて自分なりの考えを持ち，それらを提案できる人。また，行動力があって使命感を持ち，自らの強みを自由自在に活かせる人だと考える。
・目標や問題解決に向けて，計画や課題を深く考え，それを多くの人々に伝えられることかできる人。また，人の気持ちを丁寧に考え，痛みによりそうことができ，努力を怠ることのない人。
・身のまわりには様々な考え方の人がいることを理解し,それぞれの立場に立って物事を多角的に考え，未解決の問題を解決するために努力できる人。またそのために日頃から学ぼうという高い意識を持てる人。
・世界の諸問題について考えることができ，また，その解決策を適切に判断し論争できる人。また，創造力にすぐれていて，リーダーシップがあり，周りを引っぱって行けることが重要だと思う。
・日本だけでなく，世界で活躍する人。自分で異文化理解し，外国の人とも英語などで積極的にコミュニケーションをとれる人。自分自身で課題を見つけ，創造性があり，課題を探究，考察でき，人にわかりやすく伝えることができる人。
・グローバルキャリア人とは，高いコミュニケーション力と人間力を持ち備え，視野を広く持って世界を見通せる人のことであると思う。世界でも通用する創造性と社会的知性のある人。
・世界に関する問題を解決するための方法を考え，それに向けた取り組みを積極的に行うこと。特に海外とのことを視野に入れ，コミュニーケーションを取りながら直面する課題に取り組むこと。
・常に相手の事，世界の事を考えることのできるような広い視野をもち，世界や日本の知識などを豊富に持った上で，それをどう活用すれば世界に貢献できるかを理解し，それを理解することのできるような人。

〔6 年生（6 回生）〕
・直面している問題に対して多面的に考え解決しようとする人。また課題解決だけでなく様々な価値観を理解し相手を思いやれる人。国外，国内関係なく 1 つの地球市民として世界中の人とかかわりお互いに支えあえるような人。
・私が考えるグローバルキャリア人とは，世界の課題に対して自ら積極的に行動することができる人の事である。何か問題が起こったとしても多角的に考え，発想力豊かに，臨機応変に対応することができ

る人でもある。
・課題を自ら発見して解決する意欲と能力を持ち，英語を用いて世界中に自分の考えを発信できる人。そのために論理的思考力，包容力，探究力，論理的思考力，責任感，多面的思考力，想像力を持ち，海外経験やボランティア経験もある人。
・自国のことを十分に理解したうえで，他国の状態や知識を理解し，それらの学びのうえで世界の色々な人と関わりながら，世界のあらゆる問題を解決しようといろいろな問題にとりくんで，達成していく人というイメージ。
・世界の諸問題を解決するなど，世界を視野に入れて自分一人ではなく共同体として活動・行動する人をグローバルキャリア人を考えます。表舞台に立っている人のみならず，裏で支えている人も含めてのグローバルキャリア人だと考えます。
・私が考える「グローバルキャリア人」とは世界に貢献するために広い視野をもって行動する人だと思う。様々な問題が発生している世界で，それを解決するために自ら考えて行動できる人こそがグローバルキャリア人だと考える。
・私が考える「グローバルキャリア人」とは世界に視野を向け，今，将来を考えた上で，解決のでき問題を発見し，多面的な考えと，創像力を持って解決策を提案し，実行する人だと思う。
・多様性を受けいれ，目の前のことにとどまらず何十年先を見すえて社会の課題に向き合おうとする人。コミュニケーションをとる人だけでなく，視野を広くもって新しい風を吹き入れたり，異なる意見をうまくとりまとめる人など，自分に合った役割をみつけられる人。

２　SGH 実践と教科学力との連関

１で述べたように，本校が 5 年間取り組んだ SGH 事業は，生徒のグローバル意識の向上という点で一定の成果が確認された。

本節では，SGH 実践のグローバル体験学習（本校ではグローバル・アクション・プログラム（GAP）と称している）と探究学習（課題研究，本校では卒業研究）が，生徒の教科学力とどのように関係しているかについて記述的に調査する。

（１）調査対象

本調査の対象は，SGH 本指定後に後期課程（高校段階）に進級した本校 4 回生（161 名），5 回生（175 名），6 回生（160 名）で，4 年生（高校 1 年生）時より，SGH の枠組みに基づくグローバル体験学習（各種 GAP への自主的参加）及び探究学習（課題研究）（授業時間内での全員参加）に取り組んでいる。SGH の活動は卒業時まで継続されるが，実質上，主な活動は第 5 学年 1 月末頃までに終了している。

（２）分析データ

以下，SGH が重視するグローバル体験学習と探究学習への参加度を説明変数，生徒の教科学力を目的変数とみなして分析する。

(2)-1　説明変数側データ

グローバル体験学習への参加度については，本校で算定しているグローバル・アクション・プログラム（以下，GAP）のマイレージポイントを分析の対象としている。2 章 2 の(3)で説明しているとおり，本校では生徒の GAP への参加意欲を高め，活動に対する評価制度として，「GAP マイレージ制度」を導入している。活動ごとに，活動負荷（準備時間，選考の有無，活動期間等）によって，獲得マイル数（kmi 単位）を決定しており，(pp.29-32 参照)，合計ポイントを見ることで，一定の期間内に個々の生徒がどの程度活発にグローバル体験に参加したか確認できる。

探究活動への参加度については，第 6 学年春学期終了までに全員が書き上げて提出した課題研究論文（卒業論文）(18,000 字) の評価値を指標とする。この評価値は，詳細なルーブリック（pp.21-24 参照）に基づき算出されたものである。授業外でも十分な時間をかけて研究を行った生徒とそうでない生徒の差は評価値に直接反映されているといえる。もっとも論文評価には，探究学習への参加度だけでなく，生徒の基礎学力も影響している可能性があるが，この点の切り分けについては，今後の課題としたい。

(2)-2　目的変数側データ

教科学力については，(A) 校内評定（国語，数学，理科，社会，英語），(B) 全国模擬試験（以下，模試）偏差値（国語，数学，英語），(C) 英語技能テスト（GTEC アセスメント版 3 技能型，以下 GTEC）の得点の 3 種類のデータを分析の（4～6 回生が受験した同じタイプの試験）対象とする。一教科について複数の科目（例えば「コミュニケーション英語」と「英語表現」等が存在する場合は，それらの平均値を教科学力とする。なお，本校の評定は，絶対評価を原則としている。

(2)-3　分析方法

グローバル体験活動と探究活動の教科学力に対する連関は，それぞれ相関分析を行う。

（３）　結果と考察

(3)-1 教科学力の推移

生徒の教科学力の推移については，図 7～図 9 に記載する。図中では生徒の学年を G1（4 年）～G3（6 年）で表し，合わせて月を示している。例えば.「G4_03」は「第 4 学年（高校 1 年生）の 3 月時点」であることを意味する。

評定平均値（5 段階）については，あまり変化がない。科目別にみると，英語は安定して好成績であり，理科も 0.14 ポイントの上昇が見られる。10 段階評価で検討してみると，もっと明確な差が確認されるかもしれない。

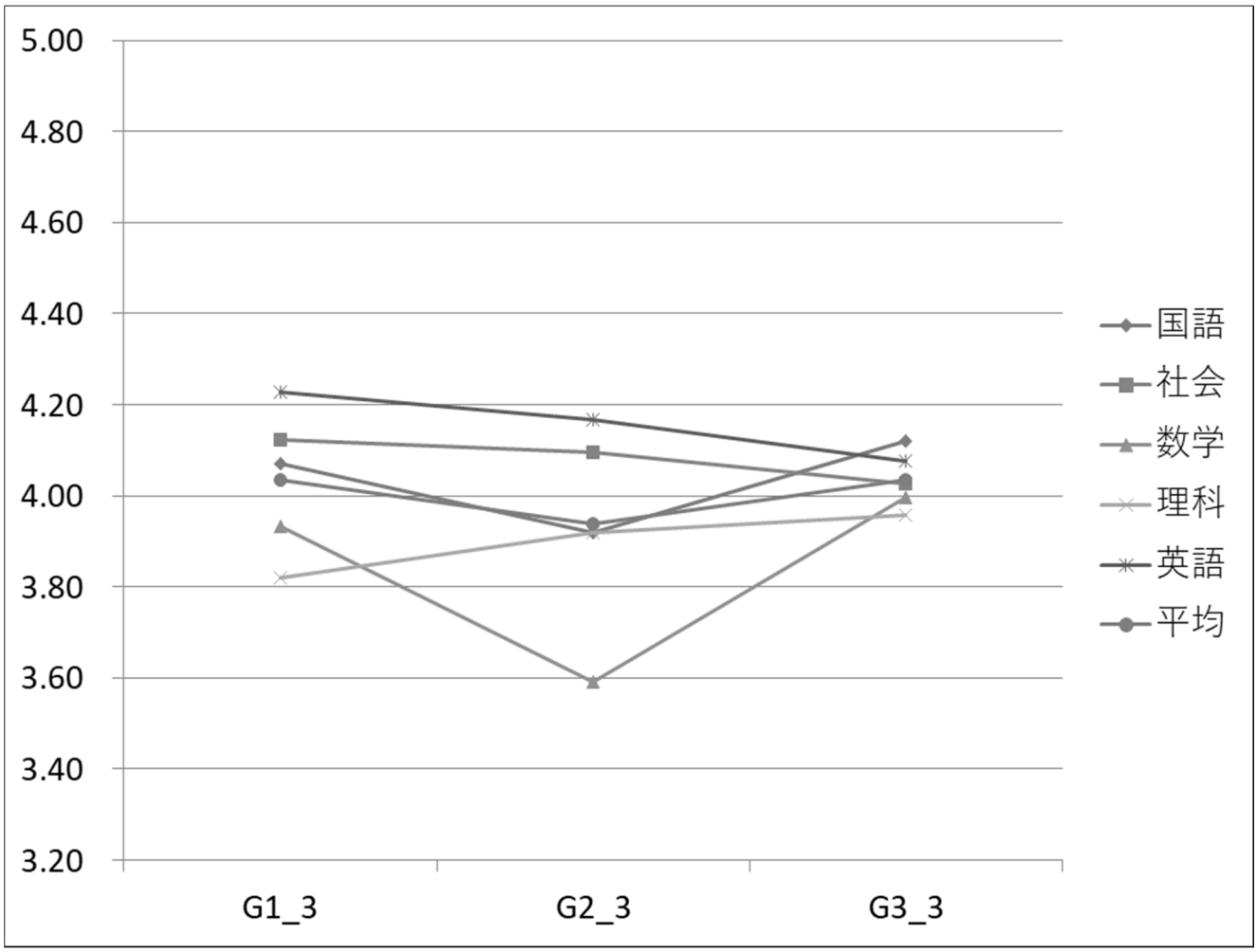


図 7　評定の推移

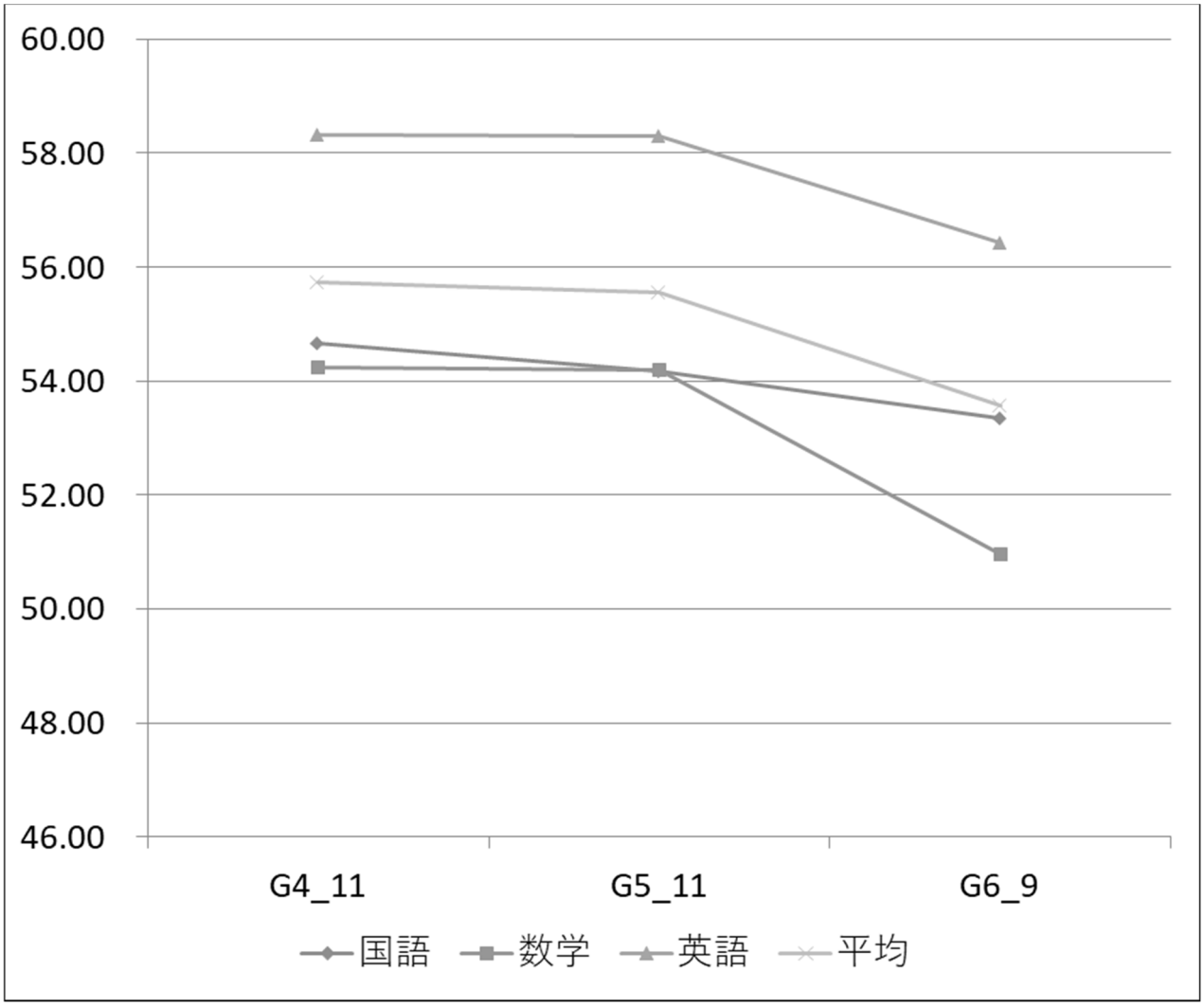


図 8　模試偏差値の推移

模試成績（全国偏差値）については，学年が上がるにしたがってやや下降ぎみであるが，全体としてそれほど変化はない。だだし，数学は 4 年生から 6 年生にかけて 3.29 ポイント低下した。これには，SGH 活動の事実上の終了に加え，本校では大学受験に必要な科目に関わらず，最後まで全員に 3 教科受験を課していることが影響していると考えられる。

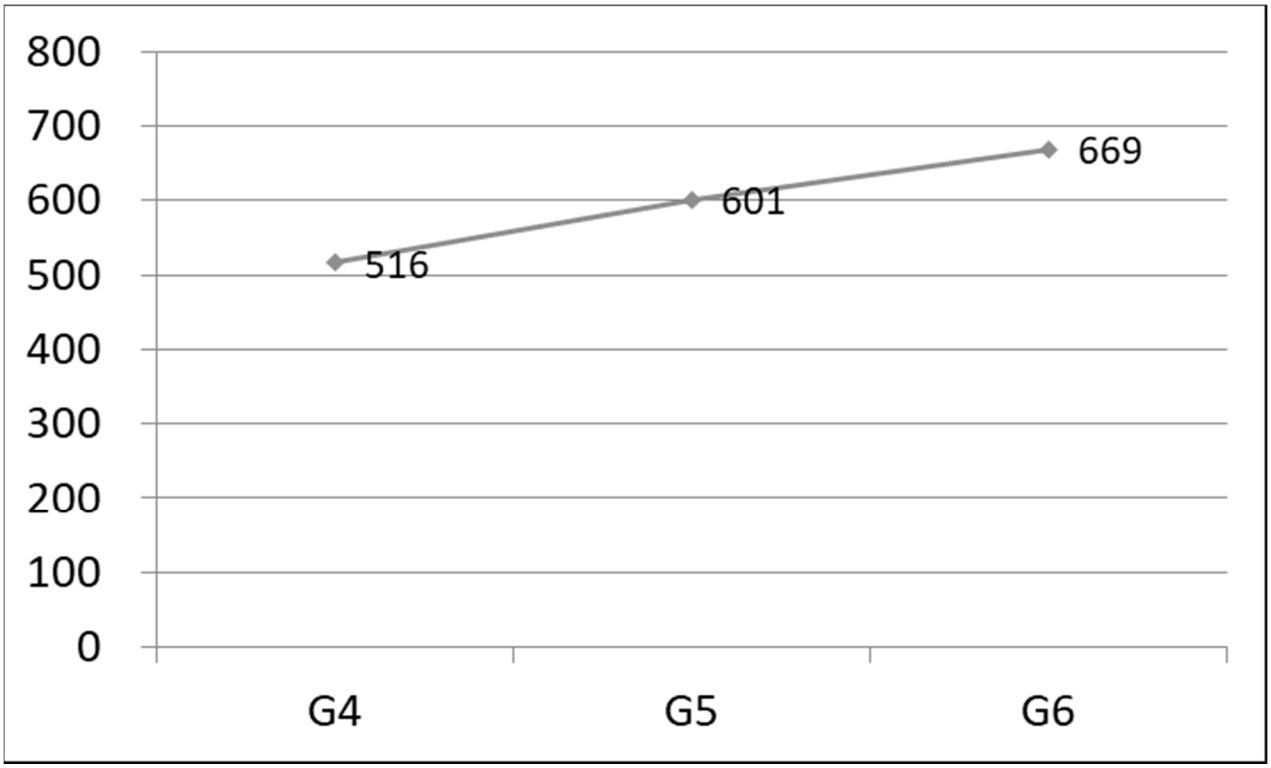


図 9　英語技能テスト（GTEC　3 技能型）得点の推移

なお，英語が一貫して好成績であることはすでに述べたが，このことは英語技能試験（GTEC）のスコアからも明らかであり，第 4 学年～第 6 学年にかけて約 153 ポイントの伸長が認められる。

(3)-2　グローバル体験学習（GAP）の影響

生徒のグローバル体験の度合いを示すGAPマイレージポイントの累計値の推移を図10に記載する。

図で示されているとおり，ポイントの約65%が国内体験によるものである。また，第6学年で新規に獲得したポイントはほとんどなく，第5学年まででグローバル体験活動がほぼ終了していることが確認できる。そこで，第5学年終了時を調査対象時期とし，GAPマイレージポイント（国内，海外及びその合計）と，評定，模試成績との相関を求めたところ，以下の結果が得られた（表3)。

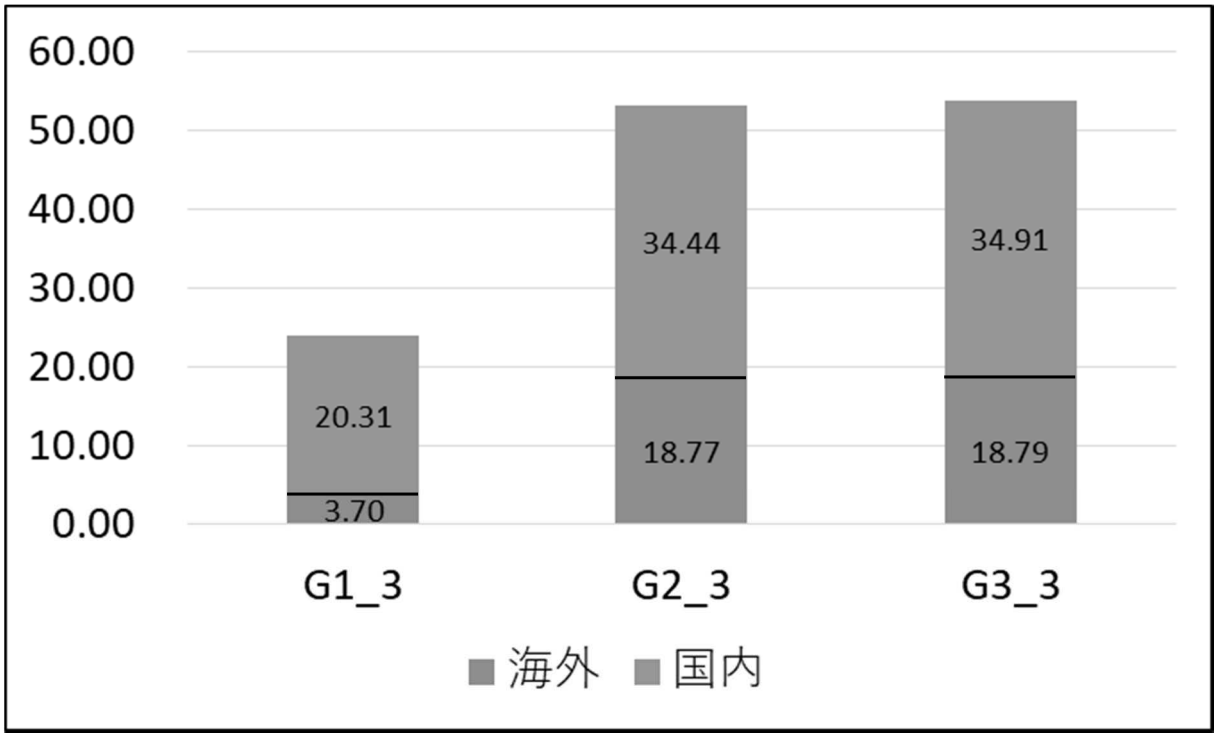


図10　グローバル体験スコア（GAPマイレージポイント）累計値の推移

表3　グローバル体験学習（GAP）と教科学力の相関

	評定						模試				英語技能テスト(GTEC)
	国語	社会	数学	理科	英語	平均	国語	数学	英語	平均	
国内GAP	.16	.15	.12	**.21**	**.24**	**.20**	.13	.07	**.21**	.16	.19
海外GAP	.19	.18	.15	.19	**.20**	**.21**	.13	.13	**.22**	.19	**.32**
合計	**.20**	**.19**	**.16**	**.24**	**.27**	**.24**	.16	.11	**.25**	**.20**	**.28**

r=.2以上を相関の目安とすると，国内体験学習（以下，国内GAP）は理科の評定と英語の評定と模試成績との間に弱い相関がみられた。海外体験学習（以下，海外GAP）は英語と5教科総合の評定平均値と英語の模試，英語技能テスト（以下，GTEC）の間に弱い相関がみられた。国内，海外GAPの合計は，国語と数学の模試成績を除く全ての教科の評定と模試成績及びGTECの得点と弱い相関があった。

このことから，グローバル体験学習は，教科学力に弱いながらも一定の影響を持つ可能性が示唆された。もっとも，グローバル学習をしたために教科学力が伸びたのか，もともと教科学力が高いため自己効力感や学習意欲も高い生徒がグローバル学習に積極的に取り組んだのかは不明である。英語の成績がよいから積極的に海外研修に参加するということも考えられる。今後，個別生徒へのインタビュー調査を実施するなどして慎重に判断することが課題である。

3-(3)　探究学習（課題研究）の影響

図 11 に，課題研究論文評価値の全体分布を示す。

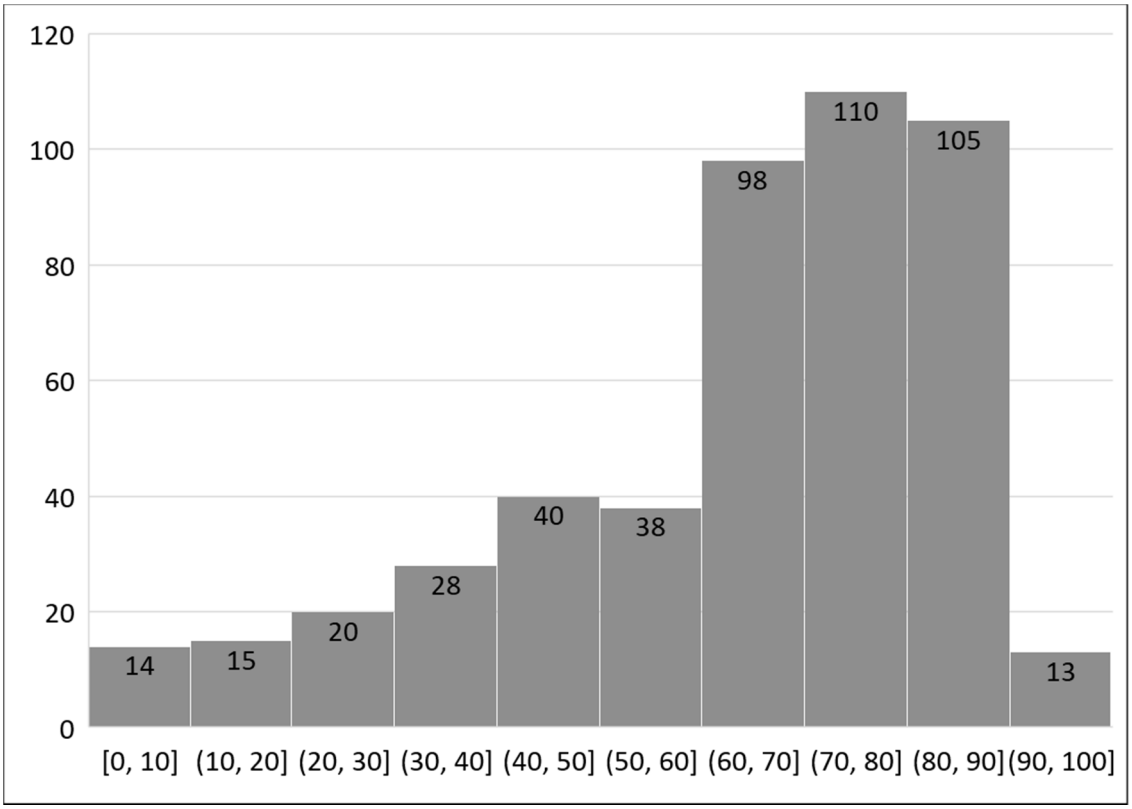


図 11　課題研究論文評価値の全体分布

この評価値と前述の第 5 学年終了時の教科学力データの関係を見たところ,以下の結果が得られた(表 4)。

表 4　探究学習（課題研究）と教科学力の相関

評定						模試				英語技能
国語	社会	数学	理科	英語	平均	国語	数学	英語	平均	(GTEC)
.47	.39	.39	.46	.42	.48	.25	.23	.25	.29	.27

前述の「グローバル体験と教科学力」との関係と比較すると，「探究学習と教科学力」にはより強い相関が見られる。論文評価値については，5 教科すべての評定との間に，r=.3.9～.48 の中程度の相関，模

試，またGTECとの間にr=.23～.29の弱いの相関がある。科目別に見ると，評定については，国語，理科，英語，模試においては，国語と英語との相関がやや強い。

このように，探究学習における論文執筆能力は，一般に想像されるように文系学力にのみ関係するものではなく，文系・理系問わず高等学校で教育する多様な学力と相関することが示唆された。ただし，ここでもやはり探究学習を行ったから教科学力が向上したのか，もともと教科学力の高い生徒，たとえば理系教科に興味・関心が高く，精緻な実験などを行って良い論文を書けたのか，あるいはその両方の要因が絡んでいるのかは慎重に検討する必要がある。

３　まとめ

本章では,「グローバル意識調査」の結果と分析から，本校生徒のSGH指定の5年間の生徒のグローバル意識の変容が明らかになった。本校がSGH事業として展開した「課題研究（卒業研究)」や「Kobeプロジェクト」,「グローバル・アクション・プログラム（GAP)」,「教科の教育改革」等の取組は，総体として生徒のグローバル意識を高めていると推察される。

また，グローバル体験学習や探究学習（課題研究）は，態度や意欲を含めた「広義の学力」を示す評定と「狭義の学力（知識・能力)」を測る模試成績の両方に一定の効果があることもわかった。

以上のことから,本校がSGH事業において実践したグローバル体験学習(GAP)や探究学習(課題研究)が生徒のグローバル意識の向上だけでなく，教科学力の涵養にも一定の効果を持つ可能性が示された。ただし，教科学力への寄与は必ずしも直接的，即時的ではない。5年間でグローバル人材を育成するというSGHの構想は壮大なものである。今後，本事業実践で得られた知見を基に追跡調査を継続し，生徒への個別インタビューなども併せて行うことにより，得られた知見の妥当性の向上を図ると共に，さらなる教育プログラムの改善につなげていきたい。

謝辞

本校のSGH事業の実践及び評価・検証にあたっては，平成26年度のアソシエイト指定後より実に6年間という長きにわたって，神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター教授の石川慎一郎先生に御指導をいただいた。多くの示唆に富む御助言に心より感謝申し上げる。

参考文献

石川慎一郎（2015)「学習者のグローバル意識の変化を観察する測定手法の開発と検証：コーパス言語学を応用した自由記述型回答データの分析」．グローバル教育，17　2-16.

石川慎一郎，岩見理華（2017)「グローバル体験学習と探究学習が高校生の教科学力およびグローバル能力に与える影響」『信学技報』(電子情報通信学会　思考と言語研究会）TL2017-46　13-18.

石森広美（2011)「高等学校におけるグローバル教育のアセスメント指標と実践枠組みに関する研究．東北大学大学院教育学研究科研究年報」．第59集・第2号，193-219.

唐沢 穣（1994）．日本人の国民意識の構造とその影響　日本社会 心理学会第 35 回大会発表論文集，246-247.

産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会（2010)「報告書～産学官でグローバル人材育成を～」．http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho.pdf.（2016.2.15閲覧).

日本学術会議（2010)「回答　大学教育の分野別質保証の在り方について」．http://www.scj.go.jp/ja

/info/kohyo/pdf/kohyo-21-k100-1.pdf. (2016.2.15 閲覧).
平山るみ・楠見孝 (2004)「批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響－証拠評価と結論生成課題を用いての検討－」. 教育心理学研究, 52, 186-198.
向井有里子・渡部美穂子 (2005).「異文化受容態度：日・独・英の比較. 比較文化研究－日本・ドイツ・イギリス－」都市文化センター. http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/wp-content/uploads/2005/03/200503_hikakubunkakenkyu.pdf. (2016.2.15 閲覧).

資料１:「グローバルキャリア人」アンケート

Q1：あなたがイメージする「グローバルキャリア人」にとって以下の項目がどの程度，重要（重要度）であると思いますか。また，それぞれの項目をどの程度，今のあなたは達成している（達成度）と思いますか。5 から 1 で答えなさい。

	重要度	達成度
5	大変重要である	ほとんど達成している
4	ある程度重要である	ある程度達成している
3	どちらとも言えない	どちらとも言えない
2	あまり重要でない	あまり達成していない
1	ほとんど重要でない	ほとんど達成していない

A	知識力	A1	世界に関する知識	重要度	達成度
		A2	日本に関する知識	重要度	達成度
		A3	自然科学に関する知識	重要度	達成度
B	基盤能力	B4	英語力	重要度	達成度
		B5	英語以外の外国語能力（中国語，ドイツ語などの外国語）	重要度	達成度
		B6	情報分析力（ICT などを利用して入手した情報がどのような意味を表すのかなどを考える力）	重要度	達成度
		B7	プレゼンテーション力（多くの人の前で調べたことなどを発表する力）	重要度	達成度
		B8	論理的思考力（物事を筋道を立てて考える力）	重要度	達成度
		B9	多面的思考力（1 つの考え方にとらわれずにさまざまな角度から考える力）	重要度	達成度
C	人間力	C10	自己主張（自分の意見・考えをはっきり表現すること）	重要度	達成度
		C11	包容力（考えの異なる人を受け入れる力）	重要度	達成度
		C12	責任感（途中で投げ出さず最後までやり抜く姿勢）	重要度	達成度
		C13	リーダーシップ（率先して行動し，他の人を引っ張っていく力）	重要度	達成度
D	課題対応力	D14	創造力（今までにない新しいことを創りだす力）	重要度	達成度
		D15	課題解決力（困難や未解決の問題を解決していく力）	重要度	達成度
		D16	課題発見力（何が問題であるか，何が未解決のことなのかなどを見つける力）	重要度	達成度
		D17	探究力（好奇心をもって自ら調べていこうとする力）	重要度	達成度
		D18	想像力（自分が直接体験していないことをイメージできる力）	重要度	達成度
E	経験力	E19	国内での異文化交流体験（日本に在留したり訪日したりしている外国人と交流すること）	重要度	達成度
		E20	海外での実体験（海外に直接行ってさまざまな体験をすること）	重要度	達成度
		E21	外国人の友人（国内外で外国人の友人を作ること）	重要度	達成度
		E22	国内フィールドワーク経験（直接現地に行って地元の人と話したり調査したりすること）	重要度	達成度
		E23	ボランティア経験（校外で清掃活動や介護施設等で手助けをすること）	重要度	達成度
		E24	世界貢献（世界の諸問題を解決するために行動すること）	重要度	達成度

Q2：あなたが考える「グローバルキャリア人」とはどんなイメージですか。100 語程度でその人物像について書きなさい。

関連資料 1)　教科教育目標

国語科　目標

		目標	言語活動を通して思考力,判断力,表現力や豊かな感情を養い,自分や社会の中に課題を見出し,多元的視点で課題に取り組んだりして新たな価値を創造するという,生涯にわたる学び方の基礎を構築する

	学年	科目	A　基礎力		B　思考力	C　実践力	
			言語についての知識・理解		読む能力　書く能力	話す・聞く能力	国語への関心・意欲・態度
			Ⅰ　知識・理解	Ⅱ　スキル・運用能力	Ⅲ　論理的・批判的思考力等	Ⅳ　課題探究力	Ⅴ　グローバルキャリア（市民的資質・能力）
基礎期	1年	国語	＊書き言葉と話し言葉の違い,共通語と方言の役割,敬語の働きを理解することができる。 ＊辞書を活用して語彙を豊かにすることができる。 文学的理解 ＊詩歌や物語を読み,描写表現に注意して感情や表現形式を理解することができる。 ＊伝統的な言語文化に親しむ。 論理的理解 ・事実と意見を読み分け,具体例の効果などを考えて,筆者の意見を論理的に読み取ることができる。	＊場や対象に応じた言葉を用いて,伝え合うことができる。 ＊原因と結果,意見・心情と根拠を区別して理解し,表現することができる。 ＊具体的・抽象的な表現を使い分けることができる。 ＊歴史的仮名遣いに注意して,読むことができる。 ・目的に応じて活字の資料を収集し,比較して読み取ることができる。 ・読書習慣を身に付ける。 ＊楷書・行書・仮名を目的や必要に応じて書くことができる。	論理的思考力 ・意味を的確に捉え,根拠を明確にして自分の考えを持つことができる。 ・自分の知識や体験を踏まえて,情報と情報の関係を整理し,自分の考えを表現することができる。 多元的思考力 ・時代や視点によって,ものの見方や感じ方は異なることに気づくことができる。	探究力・協同的解決 ・与えられた課題に問いを立てながら享受し,自分の考えとの共通点や相違点を整理することができる。 ＊相手の立場を尊重し,目的に沿って話し合い,互いの発言を検討して自分の考えを広げることができる。 ・日常生活の中から課題を発見し,仲間と協同的に解決することができる。	自己及び我が国の伝統や文化に対する理解 ＊物語,説明文等を読み,自己及び我が国の伝統的や文化について知識を深め,自分の考えを持つことができる。
	2年	国語					
充実期	3年	国語　国語総合	＊文語の決まり,訓読の決まりを理解することができる。 ＊抽象的な概念を表す語や多義的な意味を表す語句を理解することができる。 ＊古語や漢語,伝統的な言語文化に関する内容を理解することができる。 文学的理解 ＊詩歌や物語を,表現技巧や歴史的背景にも注意して読み,感情と表現の理解を深めることができる。 論理的理解 ＊文章の構成や展開を理解し,要旨を的確に捉え,筆者の主張を批判的に読み解くことができる。	＊日常の言葉遣いや敬語などにも配慮し,伝える相手と内容を考えて話すことができる。 ・伝える目的に応じて,事実を分析し,原因と結果を判断し,今後の課題を見つけることができる。 ＊抽象的な概念を表す語や多義的な意味を表す語句を用いて,文章の構成を考え論理的に表現することができる。 ・メディアを比較しながら,それぞれのよさを活かして資料を多面的に収集し,批判的思考を用いて読み取り構造化することができる。 ＊読書を通して言語感覚や感性を磨くことができる。 ＊多様な表現を通して文字を文化として認識し効果的に書くことができる。	批判的思考力 ・自分の経験や知識を活用する一方で多元的な視点を持ち,多面的に物事を捉えることができる。 ・ものの見方や感じ方の多面性を理解することで,物事に対する視点や観点を見出し,正当な評価をすることができる。 体系的思考力 ＊様々な情報を収集し,多面的・多角的に精査し構造化して,ものの見方や感じ方を形成し深めることができる。	探究力・協同的解決 ・課題に対して自ら情報を集め,経験や既存の知識を整理して考えをまとめて,取り組むべき問題を発見することができる。 ・目的にそって合意形成を図り,よりよい方向性を見出すための話し合いを行うことができる。 ・多元的な視点や批判的な思考を用いて評価し,新たな課題を見つけることができる。	自己と他者や異文化との関係に対する理解 ＊自己や我が国の文化に対する理解を基に,小説や評論文などを読み,他者や異文化との関係性について理解を深め,多元的な視点や批判的な思考を踏まえて,自分の考えを的確な言葉を用いて表現することができる。
	4年	国語総合					
発展期	5年	古典B　現代文B　探究国語	＊文語,訓読の決まりを理解し,古語や漢語と現代語とのつながりを理解することができる。 ＊抽象的な概念を表す語や多義的な意味を表す語句を体系的に理解し,語彙を豊かにすることができる。 文学的理解 ＊文学的・実用的文章を読み,思想や感情を的確に捉え,自己や社会との比較を通して,ものの見方や感じ方を豊かにすることができる。 論理的理解 ＊論理的文章特有の表現や語法の理解を深め,論理の道筋をたどりながら多角的に筆者の主張を読み解き,自分の考えを深めることができる。	＊口語や文語の豊かな語彙を持ち,目的に応じて,語彙を吟味して活用することができる。 ・校外や異年齢の人々との関わりの中でも,場に応じた言葉を使い分けて交流できる。 ＊古典を含む文章だけではなく,演劇や映像などの表現にも関心を持ち,豊かな表現を活用することができる。 ・メディアの差異を理解し,それぞれのよさを活かして,文章・図表・画像など多様な資料や情報を多面的・多角的に収集し,複数の資料を精査し統合的に活用することができる。	統合的思考力 ＊様々な情報を多面的・多角的に精査する上で,論理的・多元的・批判的に捉え,視点や観点を整理しながら再構成することによって情報を統合し,ものの見方や感じ方を形成し深めることができる。 創造的思考力 ＊既に持っている知識や経験,感情を基に,新しい情報や知識を加えることで,自己や社会の新たな側面や敷衍できるものを想像し,それに向けた思考や対応を創造することができる。	自律協同探究学習 ＊情報を重要度,信頼度によって分類整理し,　多角的に分析,考察,吟味した上で自ら課題を設定して言語表現を行うことができる。 ・広く社会の中に課題を見出し,多面的・多角的に情報を集め精査し,様々な角度から話し合い,人間相互の理解を深めることができる。	国際的視野や地球規模の視点を持ち,自分や社会の未来を切り拓こうとする態度 ・様々な資料,文献等を理解し,異文化との関係を踏まえ,未来に対する予測をし,地球的規模の課題に対して自分のできる貢献をめざすことができる。 自律的意志と行動 ＊我が国の伝統や文化を継承し創造する意志と行動,異なる歴史・文化を背景にした人々との共生・共存する意志と行動を目指すことができる。
	6年	古典B　現代文B　探究国語					

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

社会科・地理歴史科・公民科　目標

<table>
<tr><td colspan="2"></td><td>目標</td><td colspan="5">社会の成り立ちがわかり，共生の精神と広い視野から物事を考察・判断し，社会参画できる生徒，地球規模の問題に対し，文化や価値観，政治体制等の様々な違いを理解し，尊重しながら解決していこうとする生徒の育成</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">学年</td><td rowspan="3">科目・分野等</td><td colspan="2">A　基礎力</td><td colspan="2">B　思考力</td><td>C　実践力</td></tr>
<tr><td colspan="2">知識・理解</td><td>資料活用技能</td><td colspan="2">思考・判断・表現</td><td>関心・意欲・態度</td></tr>
<tr><td>Ⅰ　知識・理解</td><td>Ⅱ　スキル・運用能力</td><td>Ⅲ　論理的・批判的思考力等</td><td>Ⅳ　課題探究力</td><td>Ⅴ　グローバルキャリア（市民的資質・能力）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">基礎期</td><td>1年</td><td>社会
（地理・歴史）</td><td rowspan="2">・自国文化と異文化の基本的理解と基本的知識の習得
・地球的諸課題の基本的理解と基本的知識の習得
＊地理的，歴史的な視点による自国文化と異文化や地球的諸課題の基本的理解と基本的知識の習得</td><td rowspan="2">・言語，情報，数量についての基本的スキル
＊地図・年表に関する基本的読解・作成力
＊資料・統計に関する基本的読解・解釈力
＊社会科調査・発表に関する情報収集力</td><td rowspan="2">・基本的な論理的・批判的思考，二項対立的思考
＊地球的諸課題の直感的思考
＊社会（地理・歴史）的な見方・考え方（基本的）</td><td rowspan="2">・興味・関心から探究的思考へ
・協同的探究力（基本）
＊興味・関心に基づく地理歴史的テーマ設定と探究心
＊社会（地理・歴史）的な見方・考え方（基本的）</td><td rowspan="2">・規範意識と公共性
・人間関係形成力（自己と他者の発見）
・持続可能な社会への関心
＊地球（＆地域）的課題に関心を持とうとする姿勢</td></tr>
<tr><td>2年</td><td>社会
（地理・歴史）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">充実期</td><td>3年</td><td>社会
（公民）
ESD 重視
現代社会</td><td rowspan="2">・自国文化と異文化の多面的理解と概念的知識の習得
・持続可能な社会と地球的諸課題の多面的理解と概念的知識の習得
＊公民的視点による諸課題についての理解
＊地理的，歴史的な視点による諸課題と異文化についての多面的理解と概念的知識の習得</td><td rowspan="2">・言語，情報，数量についての多面的スキル
＊地図・年表に関する多面的読解・作成力
＊資料・統計・新聞等に関する多面的読解・解釈力
＊社会科調査・発表に関する情報収集・発信力</td><td rowspan="2">・多面的な論理的・批判的思考，多元的思考，メタ認知
＊自己，他者，社会，自然についての多面的思考
＊現代社会･地球的諸課題についての多面的思考
＊社会（地理・歴史・公民）的な見方・考え方（多面的）</td><td rowspan="2">・課題探究（発見・設定・解決）的思考力
・協同的探究力（発展）
＊社会（地理・歴史・公民）的テーマの発見と探究力
＊社会（地理・歴史・公民）的な見方・考え方（多面的）
＊諸課題解決についての発言・提案力</td><td rowspan="2">・市民的資質と公共性
・人間関係形成力（自立と協調）
・持続可能な社会への参画
＊地球（＆地域）的課題に参画しようとする姿勢</td></tr>
<tr><td>4年</td><td>地理総合
歴史総合
国際理解</td></tr>
<tr><td rowspan="3">発展期</td><td>5年</td><td>日本史Ｂ
世界史Ｂ
地　理Ｂ</td><td rowspan="3">・自国文化と異文化の総合的理解と概念的知識の習得
・持続可能な社会と地球的諸課題の総合的理解と概念的知識の習得
＊地理的，歴史的な視点による諸課題と異文化についての総合的理解と概念的知識の習得
※地球的諸課題と結びついた現代社会の総合的理解と概念的知識の習得</td><td rowspan="3">・言語，情報，数量についての総合的スキル
＊地図・年表に関する総合的読解・作成力
＊資料・統計・新聞等に関する総合的読解・解釈・作成力
＊調査・発表に関する情報収集・編集・発信力</td><td rowspan="3">・総合的な論理的・批判的思考，体系的思考，メタ認知
＊自己，他者，社会，自然の相互関係についての分析的思考
＊現代社会･地球的諸課題についての実証的・探究的思考
＊社会（地理・歴史・公民）的な見方・考え方（総合的）
＊地歴・公民相関的思考</td><td rowspan="3">・課題探究（発見・設定・解決）的思考力の深化
・協同的探究力（深化）
＊社会（地理・歴史・公民）的テーマの発見・限定と深化した探究力
＊社会（地理・歴史・公民）的な見方・考え方（総合的）
＊政策的課題解決についての対話・提案力</td><td rowspan="3">・市民的資質と公共・倫理性，主権者意識
・人間関係形成力（自律と合意形成）
・持続可能な社会への責任と貢献
＊地球（＆地域）的課題を解決（貢献）しようとする姿勢</td></tr>
<tr><td rowspan="2">6年</td><td>日本史Ｂ
世界史Ｂ
地　理Ｂ</td></tr>
<tr><td>探究公民
探究地歴</td></tr>
</table>

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

数学科　目標

		目標	数学的活動を通して，数理の普遍的な価値を見出し，多面的な見方や考え方で粘り強く真理を探究しようとする態度や力を持つ生徒の育成				
			A　基礎力		B　思考力		C　実践力
	学年	科目・分野等	数量や図形などについての知識・理解	数学的な技能	数学的な見方・考え方		数学への関心・意欲・態度
			Ⅰ　知識・理解	Ⅱ　スキル・運用能力	Ⅲ　論理的・批判的思考力等	Ⅳ　課題探究力	Ⅴ　グローバルキャリア（市民的資質・能力）
基礎期	1年	中等数学Ⅰ	・世界共通文化理解 ＊数学が現象の解明や課題の解決に役立つ学問であることを理解する。	・数量的リテラシー，コミュニケーション力 ＊数学用語を駆使して自分の考えを説明し，他者の考えと合わせて検討する。	・論理的思考力 ・多元的思考力，創造的思考力 ＊多様な考えを試行し，その中でより良い方法を見つける。	・興味・関心から探究力へ ＊数学の学習を面白いと感じ，課題解決に主体的に取り組もうとする。	・自律的行動力 ＊主体的，積極的に他者と協同して課題を解決しようとする。 ・基礎的教養 ＊時間や空間の効率的活用に数学が有効であることを自覚する。
	2年	中等数学Ⅱ					
充実期	3年	中等数学Ⅲ	・自己・他者理解，世界共通文化理解 ＊数学を通じて思考を記号化し，思考を共有したり，蓄積したりすることを知る。	・数量的リテラシー ＊数に対する感覚を養うとともに，数学的に定義された道具を正しく用いることができる。 ・コミュニケーション力 ＊思考を数学的に表現し，思考を共有する。 ・資料調査力・解釈力等 ＊統計的リテラシーを身に付ける。	・論理的思考力，批判・創造的思考力 ＊自由に思考し，筋道立てて考察する。批判的に考察する。 ・多元的思考力 ＊複数の課題解決方法を提案し，それらを比較してよりよい方法を探る。 ・体系的思考力 ＊思考法を整理する。	・興味・関心から探究力へ，自律的課題設定 ＊数学に興味を持ち，主体的に課題を設定し，解決する。 ・創造的・協同的解決 ＊課題解決方法を主体的に工夫する。また課題解決方法を他者と共有し，止揚する。	・基礎的教養 ＊数学は，その中に言語活動，論理的思考，資料活用，課題設定から解決プロセスといった，他の様々な分野で必要とされる力を育むための基礎を内包していることを自覚する。
	4年	中等数学Ⅳ					
発展期	5年	中等数学Ⅴ	・世界共通文化である数学の体系的理解 ・それを通しての生活文化・地球的課題・自然環境の総合的理解 ＊教科内容そのものの理解の深化を促し，諸世界との関わりを提示する。	・判断力・数量的リテラシー・言語運用能力（数学的コミュニケーション能力）の高度化 ＊数式・図形・グラフ間の自在な翻訳力を身に付ける。	・論理的思考力の体系化，多元化 ・総合的思考力への昇華 ＊発展期ならではの思考法の紹介・訓練と，その基盤となる諸スキルの習熟を図る。	・興味・関心から探究力へ（真理に対する探究心に基づく課題発見・解決能力の陶冶→自律探究学習による創造的解決へ） ＊１つの問題が解けた際に派生する発展的な問いの自覚とその探究を促進する。	・主体性・積極性・公共性の伴った自律的行動能力 ・そのための教科教養の基礎の涵養 ＊教科のもつ時間的・空間的な視野の拡張能力を体感させる。
	6年	中等数学Ⅵ					

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

理科（物理分野）　目標

		目標	・サイエンスリテラシー（自ら課題について探究し，解決していくための素養）の育成 ・自然科学領域，社会科学領域及び人文科学領域においても通用する研究実践力を備えた生徒の育成				
	学年	科目・分野等	A　基礎力		B　思考力		C　実践力
			知識・理解	観察・実験の技能	思考・判断・表現		関心・意欲・態度
			Ⅰ　理解力	Ⅱ　スキル・運用能力	Ⅲ　論理的・批判的思考力等	Ⅳ　課題探究力	Ⅴ　グローバルキャリア（市民的資質・能力）
基礎期	1年	理科1年（エネルギー領域）	・事実的知識の理解力 ＊日常生活に関連した自然現象や科学技術についての普遍的知識の理解	・資料読解力 ・個別的な計測技能 ・数理的データ処理技能 ＊物理実験及びそのデータ処理	・論理的思考力 ・定量的思考力 ＊日常生活に関連した自然現象や工学技術の考察を通した育成 ＊実験結果の考察	・知的好奇心 ＊物理学的方法・対象への興味・関心の向上	・持続可能な発展に関する課題認知 ＊物理現象の工学的応用とその社会への影響の理解
	2年	理科2年（エネルギー領域）					
充実期	3年	理科3年（エネルギー領域）	・概念的知識の理解力 ＊個別具体的な事象を抽象化・汎化した「重大な観念」の理解	・資料調査力 ・抽象概念の処理技能 ・論理的表現力 ＊物理理論演習や物理実験及びその報告	・抽象的思考力 ・批判的思考力 ＊論理や代数等の抽象概念の操作 ＊実験結果の考察や議論	・課題発見力 ・知識・技能の応用力 ＊日常生活に関わる自然現象や科学技術の探究的考察	・持続可能な発展に対する責任感 ＊普遍的法則の工学的応用と人間社会の変容との相互作用の理解
	4年	物理基礎					
発展期	5年	物理（理系） グローバル物理（文系）	・転移可能な形での永続的理解力 ・メタ認知力 ＊普遍的法則を中心とした6年間の修得内容の整理・統合・運用	・資料解釈力 ・論理的コミュニケーション力 ＊物理理論演習や物理実験及びそれらの報告・討議	・統合的思考力 ＊様々な自然現象と普遍的法則をつなぐ演繹的・帰納的考察	・課題設定力 ・課題解決力 ＊探究的実験の計画及び遂行	・持続可能な発展を実現させる科学技術観・市民性 ＊普遍的法則の工学的応用が現代社会の基盤をなしていることの理解
	6年	物理（理系） グローバル物理（文系）					

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

理科（化学分野）　目標

		目標	・サイエンスリテラシー（自ら課題について探究し，解決していくための素養）の育成 ・自然科学領域，社会科学領域及び人文科学領域においても通用する研究実践力を備えた生徒の育成

	学年	科目・分野等	A　基礎力		B　思考力		C　実践力
			知識・理解	観察・実験の技能	思考・判断・表現		関心・意欲・態度
			Ⅰ　理解力	Ⅱ　スキル・運用能力	Ⅲ　論理的・批判的思考力等	Ⅳ　課題探究力	Ⅴ　ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｷｬﾘｱ（市民的資質・能力）
基礎期	1年	理科1年（粒子領域）	・身近な科学的現象に関する基礎的な理解力 ＊日常生活で見られる現象の仕組みの理解	・基礎的な化学的実験観察技能 ・基礎的な数量的リテラシー ＊化学実験における技能習得及びデータ処理	・論理的思考力 ・定性的思考力 ＊日常生活で見られる現象の仕組みの考察 ＊実験結果への考察	・自然現象・科学技術への興味・関心に伴う探究心 ＊日常生活で見られる現象への興味・関心の向上	・自然環境との共生心及び科学技術と社会の協調心 ＊自然界における工業的な新規物質の位置付けに関する理解
	2年	理科2年（粒子領域）					
充実期	3年	理科3年（化学基礎）	・自然現象を粒子的に捉える概念的な理解力 ＊具体的な化学変化の仕組み・原理の理解	・数量的リテラシー ・論理的プレゼンテーション力 ＊化学実験におけるレポート作成	・批判的思考力 ・定量的思考力 ・論理的思考力 ＊実測データを用いた普遍的概念や数的処理による事象の考察	・探究心に基づく課題設定力 ・自己の関心対象への習得内容・技能の科学的応用力 ＊自然現象と実測データとの関連性に関する考察	・自然環境及び科学技術に関わる規範意識及び公共性 ＊化学的エネルギーとしての物質に関する考察
	4年	化学基礎					
発展期	5年	化学（理系） グローバル化学（文系）	・自然現象や化学工業に関する科学技術を説明する普遍的法則に関する理解力 ＊具体的な化学変化の仕組み・原理の数的理解	・言語運用能力 ・科学的事象を伝達するためのコミュニケーションに必要なデジタルコンピテンス ＊実験や考察におけるレポートの作成及び口頭発表	・抽象的思考力 ・化学的事象を普遍的視点で捉える体系的思考力 ＊基本的な化学変化及び物質観に関する考察	・習得内容を統合した課題解決力 ・サイエンスリテラシーの体現としての基礎的な研究実践力 ＊探究的な学習活動を通した理解	・基礎教養としての自然観 ・科学技術に係わる市民性（シティズンシップ） ＊科学と文明社会との関連を見据えた物質観の考察
	6年	化学（理系） グローバル化学（文系）					

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

理科（生物分野）　目標

		目標	・サイエンスリテラシー（自ら課題について探究し，解決していくための素養）の育成 ・自然科学領域，社会科学領域および人文科学領域においても通用する研究実践力を備えた生徒の育成				
	学年	科目・分野等	A　基礎力		B　思考力		C　実践力
			知識・理解	観察・実験の技能	思考・判断・表現		関心・意欲・態度
			Ⅰ　理解力	Ⅱ　スキル・運用能力	Ⅲ　論理的・批判的思考力等	Ⅳ　課題探究力	Ⅴ　ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｷｬﾘｱ（市民的資質・能力）
基礎期	1年	理科1年（生命領域）	・身近な地域の自然環境理解 ・生物体の基本的理解 ＊生物の基本構造とその成長・はたらきについての理解	・実験・観察技能 ＊生物実験・観察技能の習得	・創造的思考力 ＊既存の事実，またそれに関する知識・情報の習得	・興味・関心に基づく探究心 ＊身近な自然環境についての実験・観察	・基礎的教養 ＊自然環境・生命活動に対する興味・関心をもとにした実験・観察
	2年	理科2年（生命領域）					
充実期	3年	理科3年（生物基礎）	・生命現象に関する基本的理解 ＊生物の成長と生殖・遺伝法則の理解	・実験・観察技能 ・数量的リテラシー ＊実験結果の差異についてその理由の考察，および数量的な結果の分析 ＊バイオテクノロジー等の基本学習を通した，数理的規則性の発見	・論理的思考力 ＊生命活動について順序を組み立てた思考・表現	・探究心に基づく課題設定 ・自己の関心対象への習得内容・技能の科学的応用 ＊日常生活に関わる生命現象の探究的考察	・自然環境および生命科学技術に関わる規範意識および公共性 ＊個々の生命現象のつながりに関する探究的考察
	4年	生物基礎					
発展期	5年	生物（理系選択） グローバル生物（文系）	・マクロ・ミクロ双観点による多元的理解 ＊生命現象についての分子レベルでの理解 ＊生物どうしの関係についての体系的理解	・基礎的研究実戦力 ・論理的コミュニケーション力 ＊観察・実験や探究活動を通したレポート執筆および報告・討議	・多元的・体系的思考力 ＊生命現象を支える様々な化学反応に関する思考・表現 ＊生物多様性についての事例を通した考察	・自律的探究心に基づく課題設定 ・サイエンスリテラシーの体現としての基礎的な研究実践 ＊探究的な学習活動を通した課題設定および計画・遂行	・基礎教養としての自然観 ・生命科学に関わる市民性 ＊生命の科学的な把握および世界が抱える問題への考察
	6年	生物（理系選択） グローバル生物（文系）					

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

理科（地学分野）　目標

		目標	・サイエンスリテラシー（自ら課題について探究し，解決していくための素養）の育成 ・自然科学領域，社会科学領域及び人文科学領域においても通用する研究実践力を備えた生徒の育成				
	学年	科目・分野等	A　基礎力		B　思考力		C　実践力
			知識・理解	観察・実験の技能	思考・判断・表現		関心・意欲・態度
			Ⅰ　理解力	Ⅱ　スキル・運用能力	Ⅲ　論理的・批判的思考力等	Ⅳ　課題探究力	Ⅴ　ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｷｬﾘｱ（市民的資質・能力）
基礎期	1年	理科1年（地球領域）	・身近な地域の自然環境理解 ＊地形や地質の形成を地殻変動や地震，プレートテクトニクスなどと関連付けた考察 ＊身近な大気現象が起こる仕組みと規則性の学習	・地学的探究技能 ＊身近な岩石，地層，地形などの観察 ＊身近な気象の変化の観測 ・数量的リテラシー ＊測定値の取り扱い方の理解	・自然現象に対する論理的思考力 ＊大地の変化の成因の考察 ＊気象要素と日々の天気の変化の関係性の発見	・興味・関心に基づく探究心 ＊身近な地形，地質，天気などの自然環境の観察	・積極的行動力 ＊フィールドワーク ＊関連する雑誌，新書，入門書やインターネットを用いた学習
	2年	理科2年（地球領域）					
充実期	3年	理科3年（地球領域）	・地球と宇宙についての基本的理解力 ＊太陽や惑星の特徴，月の運動と見え方，太陽系や恒星などの学習	・地学的探究技能 ＊身近な天体の観察 ・情報リテラシー ＊インターネット等を活用した視覚的理解	・多元的・論理的思考力 ＊天動説と地動説の両方の立場からの考察 ＊宇宙の広がりや運動についての考察	・自立的課題設定 ・課題発見・解決能力 ＊身近な自然環境の調査・解析及び考察	・情報収集・理解力 ＊興味・関心を抱いた自然や環境に関する適切な情報の収集
	4年	開講なし					
発展期	5年	グローバル地学（文系）	・総合的理解力 ＊地球惑星科学についての基本的な概念，原理，普遍的法則の学習 ＊地球を様々なサブシステムの集合体としての把握	・基礎的研究実践力 ＊観察，実験を通したレポート執筆 ・資料調査力 ＊地球や宇宙に関する数値や観測結果の科学的な考察	・論理的・体系的思考力 ＊地球や宇宙についての科学的，論理的な考察 ＊身近な自然について，既習の知識を総合的に活用した成因の考察	・自己探究力と協同探究力 ＊日常生活と諸問題についての課題の発見 ＊発見した課題に関連する研究論文の購読	・基礎的教養 ＊地球惑星科学についての基本的な概念，原理，普遍的法則の学習・応用 ・自律的行動力 ＊探究活動のための仮説の設定及び情報の収集
	6年	グローバル地学（文系）					

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

音楽科　目標

<table>
<tr><td></td><td></td><td>目標</td><td colspan="5">表現及び鑑賞の幅広い活動を通して，音楽的な見方・考え方を働かせ，生涯にわたって生活や社会の中の音や音楽，音楽文化と豊かに関わり続けることができる資質・能力の育成</td></tr>
<tr><td rowspan="5"></td><td rowspan="5">学年</td><td rowspan="5">科目・分野等</td><td colspan="2">A　基礎力</td><td colspan="2">B　思考力</td><td>C　実践力</td></tr>
<tr><td>音楽への関心・意欲・態度</td><td rowspan="2">音楽表現の技能</td><td colspan="2">音楽表現の創意工夫</td><td>音楽への関心・意欲・態度</td></tr>
<tr><td>鑑賞の能力</td><td colspan="3">鑑賞の能力</td></tr>
<tr><td>Ⅰ　知識・理解</td><td>Ⅱ　スキル・運用能力</td><td>Ⅲ　論理的・批判的思考力等</td><td>Ⅳ課題探究力</td><td>Ⅴ　グローバルキャリア
（市民的資質と能力）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">基礎期</td><td>1年</td><td>表現領域
鑑賞領域</td><td rowspan="2">・自国文化と異文化(音楽及び民族)への基礎的理解力
＊「鑑賞活動」を通してその国々，地域に根付いた異なる音楽文化があることとその背景を理解する。
・世界共通文化としての音楽への基礎的理解力
＊「鑑賞活動」を通して，現在でも世界で受け継がれている曲の価値とその背景を理解する。</td><td rowspan="2">・インター・パーソナル・スキル（意思疎通力）
・コミュニケーション力
＊音楽を介して自分の考えを伝え，相手の考えを理解することができる。
・テクニカル・スキル
＊習得した知識・技能を活用して問題を解決する。</td><td rowspan="2">・創造的思考力
＊「創作活動」を通して感性を身に付ける。
・アナリーゼ
＊分析を通して知識や情報を活用する能力</td><td rowspan="2">・自己の興味・関心を基にした探究力
＊音楽活動に楽しさを感じ，主体的に課題解決に取り組むことができる。
・創造的・協同的課題解決力の基礎
＊アンサンブル活動など他者と１つの課題解決に向けて考えを共有する。</td><td rowspan="2">・自己理解・他者理解・社会的理解の基礎と協調性
＊他者との違いを認識して歩み寄り，協同でチーム力を発揮する。
・人間関係形成力の基礎
＊アンサンブル活動で培った感性を基に他者と円滑に人間関係を構築することで音楽の力を理解する。</td></tr>
<tr><td>2年</td><td>表現領域
鑑賞領域</td></tr>
<tr><td rowspan="2">充実期</td><td>3年</td><td>表現領域
鑑賞領域</td><td rowspan="2">・自国文化と異文化(音楽及び民族)への総合的理解力
＊「音楽表現活動」を通して音楽文化の多様性を知る。
・世界共通文化としての音楽への総合的理解力
＊音楽史から音楽文化と世界の歴史との関わりを理解する。</td><td rowspan="2">・インター・パーソナル・スキル(意思疎通力)
・コミュニケーション力
＊相手を感じながら音楽を通してコミュニケーションすることで感受性を高める。
・テクニカル・スキル
＊習得した知識・技能から新しい技法を身に付ける。</td><td rowspan="2">・創造的思考力・体系的思考力
＊音楽的な感受と知識技能の結びつきから感性を高める。
・アナリーゼ
＊分析を通して知識や情報を検討・活用する能力</td><td rowspan="2">・自己探究心に基づく課題発見・課題設定力
＊主体的に音楽的に深化したテーマを発見・設定する。
・創造的・協同的解決力
＊アンサンブル活動など他者とより高次な課題解決に向けて考えを共有する。</td><td rowspan="2">・自己理解・他者理解・社会的理解・協調性
＊協同学習でより高次なチーム力を発揮する。
・人間関係形成力・社会参画力
＊社会事象をテーマとした音楽活動への主体的な参画により社会に貢献する。</td></tr>
<tr><td>4年</td><td>表現領域
鑑賞領域</td></tr>
</table>

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

保健体育　目標

教科名	目標	心身の６年間の発育成長段階（基礎期・充実期・発展期）を理解し，スポーツを通じて，心身共に健康で，様々な次世代社会に適応できる能力（知識，体力，精神力，協調性，道徳心）と主体的に学びに向かう人間力を育成する。

時期	学年	科目・分野	A　基礎力		B　思考力		C　実践力	典型的な単元例
			運動や健康・安全への知識・理解	運動の技能	運動や健康・安全への思考・判断		運動や健康・安全への関心・意欲・態度	
			Ⅰ　知識・理解	Ⅱ　スキル・運用能力	Ⅲ　論理的・批判的思考力	Ⅳ　課題探究力	Ⅴ　グローバルキャリア（市民的資質）	
基礎期	1年	体育分野 保健分野	・心身の自己，他者理解 ＊スポーツ特性や基本技能の理解 ＊健康課題の基本的理解	・基本的な運動表現力 ・自己効力感を高める協同学習 ＊運動環境の主体的な改善	＊運動健康課題の多元的思考力	・基本的運動，健康課題の設定 ・運動課題への継続的な取組 ＊運動課題の協同的解決力	・人間関係力の形成 ・健康，運動への興味関心 ・フェアープレイ精神 ＊共存して生きていく生き方	〔体育〕 オリンピック・パラリンピック教育 〔保健〕 がん教育，病理学実習 〔教科外〕 学年スポーツ大会の企画・運営
	2年	体育分野 保健分野						
充実期	3年	体育分野 保健分野	・ライフステージに応じた心身の理解 ＊スポーツ文化や応用技能構造の理解 ＊健康課題の総合的理解	・体系的な運動表現力 ・自己有能感を高める協同学習 ＊運動環境の創造と運用	＊運動健康課題の論理的思考力	・総合的運動，健康課題の設定 ・運動課題のPDSAサイクルによる発展的な取組 ＊運動課題の協同的創造	・人間関係調整力の形成 ・健康，運動の自律的行動 ＊公平，公正な運動環境の創造	〔体育〕 オリンピック・パラリンピック教育・スポーツの価値について 〔保健〕 ﾁｬｲﾙﾄﾞｹﾓﾊｳｽ講演，SGD 〔教科外〕 前・後期スポーツ大会の企画・運営
	4年	体育 保健						
発展期	5年	体育 保健	＊ヘルスプロモーションと自らのライフスタイルの総合的理解	・運動スキルの総合的な応用力 ＊学校社会における生涯スポーツの展開	＊運動健康課題の体系的思考力	・体系的運動，健康課題の設定 ＊学校社会におけるヘルスプロモーションの創造	＊ヘルスプロモーションに基づいた健康社会の創造	〔体育〕 駅伝大会（男女別・混合） 〔保健〕 生徒が主体的に探究し学び合う授業 〔教科外〕 体育祭の企画・運営
	6年	体育						

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

技術・家庭科（家庭分野）　目標

		目標	実践的・体験的な学習活動を通して，多様な価値観と社会の変化に主体的に対応できる能力と態度を習得し，実生活の場で活用できる能力を育む。また，今の自分を見つめ，よりよい生き方について考えることができる。				
	学年	科目・分野等	A　基礎力		B　思考力		C　実践力
			生活や技術についての知識・理解	生活の技能	生活を工夫し創造する能力		生活や技術への関心・意欲・態度
			Ⅰ　知識・理解	Ⅱ　スキル・運用能力	Ⅲ　論理的・批判的思考力等	Ⅳ　課題探究力	Ⅴ　グローバルキャリア（市民的資質・能力）
基礎期	1年	家族（家庭生活），衣・住生活・消費生活	＊自分の身の周りを意識し，自分自身の生活を整え，自立した衣・住生活について理解することができる。	・情報リテラシー（読解・分析力） ＊身近な生活に関する情報収集力 ・基本的生活力（裁縫などの衣服の手入れや管理，家計管理）のスキル	＊家族の一員であることを自覚し，自分にとって適切な衣・住生活を理解したうえで，自分の生活を見直すことができる。 ＊いろいろな家族の家計管理を考えることができる。	・自己の興味・関心に基づく自立的課題探究力 ＊長期休暇期間に，自己の興味・関心に応じて，課題を設定し，主体的に研究に取り組むことができる。（大掃除レポート，地域の料理レポート）	・自立的基本的生活力 ・創造的，協同的行動力 ・持続可能な社会への関心 ・社会や地球規模の課題に関心を持ち，よりよい生き方について考えようとする意欲
	2年	食生活・環境	＊自分の日常の食生活を振り返り，中学生にとって健康的な食生活について理解することができる。	・情報リテラシー（読解・分析力） ＊自分にとって適切な食事や栄養などに関する情報収集力 ・基本的生活力（調理技能，環境）のスキル	＊中学生にとって健康で安全な食事，栄養の取り方などを理解したうえで，自分の食生活を見直すことができる。		
充実期	3年	家族（高齢者・乳幼児・妊婦）ライフデザイン	・自己・他者の理解 ＊自分だけでなく，他者（高齢者や妊婦など）や社会（世界）を理解することができる。	・情報リテラシー（読解・分析力） ＊身近な生活の中の経済・金融・住宅に関する情報収集力 ・高齢者・妊婦・乳幼児等を大切に思う心	＊日々の生活の中で，自分を見つめ，他者を尊重し，得た情報をもとにして社会（世界）をよりよいものにしていこうと行動することができる。	・自己の興味・関心に基づく自立的課題探究力 ＊長期休暇期間に，自己の興味関心に応じて，課題を設定し，主体的に研究に取り組み，社会（世界）における課題について理解することができる。	・生命尊重の意義 ・自律的，協同的行動力 ・自律的実践的生活力（自己・他者の尊重，向上心，国際理解，集団の一員としての自覚） ・ライフデザイン能力 ・リスクマネジメント能力 ・課題解決能力
	4年						
発展期	5年	家庭基礎	＊持続可能な社会を目指すための家庭生活及び社会や世界における課題について理解することができる。	・情報リテラシー（読解・分析力） ＊自分の生き方について考えるために必要な情報収集力	＊生活の諸問題について，話し合いや調べ学習を通して課題解決に向けて深く考えることができる。	・客観的価値観に基づく自律的課題探究力 ＊ホームプロジェクト活動で，自らの問題であると共に，広く社会に価値のある課題を設定し，計画的に課題解決に取り組むことができる。	
	6年						

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

英語科　目標

目標				英語によるコミュニケーション能力を活用し,自分の足元から世界を見る視点を持ち，同時に多様化が進む世界の動きの中で人々と共生・共存しながら自分の生き方を選択し,地球的視野で考え行動できる資質・能力の修得を目指す。				
				A　基礎力		B　思考力		C　実践力
	学年	グレード	科目	言語や文化についての知識理解	外国語理解の能力		外国語表現の能力	コミュニケーションへの関心・意欲・態度
				Ⅰ　知識・理解	Ⅱ　スキル・運用能力 英語評価尺度熟達度※	Ⅲ　論理的・批判的思考力等	Ⅳ　課題探究力 英文作成	Ⅴ　グローバルキャリア （市民的資質・能力）
基礎期	1年	G1	英語Ⅰ	自国文化（基礎） 異文化（基礎） *自国文化や異文化の特徴について自己の視点から理解している。	A 1.2	論理的思考力 *正確な「語の使用」について理解している。 *文のきまり（語順）について理解している。 *文と文との間の結束性（個性的・文法的なまとまりの良さ）を把握し，その意味を論理的に考え，理解している。 *情報や他者の考えを図などにまとめることで要点を理解している。 多元的思考力 *2人称3人称の概念の理解とその表現の違いを意識した上で，視点の違いによるものの見方について考えている。 ◆思考段階を意識　低次思考力（「記憶」→「理解」）	自己と他者の探究（基礎） *自分に直接関係する事柄を英語で表現することに興味を感じている。 *物事に対して疑問を持ち，考えを深めている。	自己理解 他者理解 ＊自己や直接関係する他者を肯定的に理解しようと心がけている。 【コミュニケーション／意欲・態度】 *間違いを恐れず，ボディランゲージなどを使って，なんとか言いたいことを英語で話そうと心がけている。 【文化理解／発信】 *他国の文化と日本文化との相違点を意識し，その違いをそれぞれの文化の特徴として理解している
	2年	G2	英語Ⅱ		A 1.3		自己と他者の探究（発展） *自分に直接関係する事柄を英語で表現することに興味を持ち,効果的に表現している。 *物事に対して疑問を持ち，問題点を見つけている。	
充実期	3年	G3	英語Ⅲ	国内外特定課題 国内社会（基礎） 自国文化（発展） 異文化（発展） *自国文化，異文化について多面的に理解している。 *社会問題について基本的な情報・事実を理解している。	A 2.1	論理的思考力 *話し手，書き手の意図を，内容の一貫性（意味的なまとまりの良さ）に着目しながら論理的に考え，理解している。 *自分の意見を支える具体例やデータを示している。 批判的思考力 *話し手，書き手からの情報，意見をそのまま鵜呑みにせず，根拠を明確にしたうえで自分の考え・意見を表現したり質問したりしている。 多元的思考力 *話し手，書き手からのさまざまな情報，意見をさまざまな視点から多面的に捉えている。 ◆思考段階を意識　低次思考力（「記憶」・「理解」→「応用」）	社会問題の探究（基礎） *社会問題に興味を持ち,自分と関連付けながら表現している。 *物事に対して疑問を持ち，問題点と課題を見つけている。	社会的理解 他者理解 ＊社会的な視点から事象や人間を理解しようと心がけている。 【コミュニケーション／意欲・態度】 *意見を述べるためには，知識や実際の体験が必要であることに気付き，意欲的にそれらを得ようと心がけている。 【文化理解／発信】 *コミュニケーションを通じて，異なる文化的背景を持つ人々のものの見方や考え方を理解しようと心がけている。
	4年	G4	ECⅠ EEⅠ		A 2.2		社会問題の探究（発展） *社会問題に興味を持ち,自分と関連付けながら論理的に表現している。 *社会問題に対して疑問を持ち，問題点と課題を見つけ，自分の問いを立てている。	
発展期	5年	G5	ECⅡ EEⅡ	地球的課題 世界社会（基礎） 国内社会（発展） ＊国内社会問題を多面的に理解し,また国際問題の基本情報を理解している。	B 1.1	論理的思考力 *テーマに対して，反論や意見が分かれる中で，一貫性のある自分の主張を作り出している。 多元的思考力 *話し手，書き手からの様々な情報，意見を多面的に捉え，自分なりの解決策を考え出している。 体系的思考力 *複数概念の比較をもとに独自の新しい概念化を試みようとしている。 ◆思考段階を意識 高次思考力（「低次思考力」→「分析」→「評価」→「創造」）	地球的課題の探究（基礎） *地球規模の課題に対して，自分の問いを立て，リサーチをしながらその問いの答え探している。 *地球規模の課題に興味を持ち，自ら調べたことをまとめて，英語で積極的に表現している。	自律的思考と行動 共生・共存 *地球規模の視点から，共生・共存を目指した自覚とその実現へ向けた自律的行動をしようと心がけている。 【コミュニケーション／意欲・態度】 *世の中をより広く知るためのツールとして，英語を積極的に活用しようとする姿勢を持っている。 【文化理解／発信】 *各国に対する先入観や思い込みを持つことなく，相手の個性を尊重している。
	6年	G6	ECⅢ EEⅡ	地球的課題 世界社会（発展） ＊地球的課題や国際問題について多面的に理解し,問題解決へ向けた行動や提案を具体的に示している。	B 1.2		地球的課題の探究（発展） *地球規模の課題について自ら問いを立て，積極的に調査したり考察したりして結論を導き出している。 *自ら調べたこと英語小論文形式にまとめている。	

※本校3能力5要素の評価尺度として，英語科では「神戸大学附属中等教育学校英語評価尺度（“Kobe University Secondary School Framework: KUSF”）」を設定している。KUSF では「スキル・運用能力」を4技能5領域に区分し，ヨーロッパ言語共通参照枠み（“Common European Framework of Reference for Languages: CEFR”）に準拠した本校独自の英語到達目標を設定し，開発・検証を重ねている。

Kobe ポート・インテリジェンス・プロジェクト（総合的な学習の時間）　目標

		目標	・課題を発見・解決する力としてのリサーチリテラシー（「見つける力」「調べる力」「まとめる力」「発表する力」）及び「考える力」の育成 ・主体的・協働的な探究的活動を通して獲得する「グローバル＆ローカルな課題」に対する理解と諸課題解決への姿勢の育成							
	学年	科目・分野等	基礎力		探究的思考力					実践力
			知識・理解	スキル・運用能力	見つける力（課題の設定）	調べる力（情報の収集）	まとめる力（整理・分析・まとめ）	発表する力 まとめ・表現	考える力（整理・分析）	グローバルキャリア（市民的資質･能力）
基礎期	1年 2年	探究入門	地域（神戸・奈良）の特色及び具体的な課題について理解できる。	フィールドワーク，レポート，発表，協同作業等のリサーチスキルの習得	用意された講演や資料などの情報を整理して，理解することができる。	実際の現場や本物から，事実と意見を区別して簡単な調査を行うことができる。	自分たちで行った簡単な調査内容から，中身を要約して，自分の言葉でまとめることができる。	自分たちで調査し，まとめた内容について，伝えたい内容を明確にして，適切なテンポで話すことができる。	「発見する力」・「調べる力」・「まとめる力」・「発表する力」の４つの力の中に示された「思考のプロセス」（下線部）を用いることができる。 ○学年進行に伴い深化する思考力（主体的，対話的，深い学びの追究） ○メタ認知の発達に伴うクリティカルシンキング（批判的創造的思考） ○論理的（概念的）思考力 帰納法的思考と演繹法的思考，類推的思考等 ○教科との関連 教科で学んだ知識・概念や見方・考え方を連関させる思考 ○個人的思考と協同的思考	自己関心に基づいて協同的に課題を探究できる。 探究的活動を通して，自然や社会に関心を持つことができる。
充実期	3年	課題学習	沖縄の特色及び日本の課題について理解できる。	基礎的なリサーチリテラシーの習得。図書館利用の手法，協同的探究法の習得及びレポートと論文の違いが理解できる。	与えられた課題，または自分で選択した講座の中で，自分の知っていることから類推し，多面的・批判的な視点で，疑問点・課題点を見つけることができる。	資料から，複数の関連する事実について，事実と意見を区別し，仮説の妥当性を高めようと考えて，テーマに関連した既知事項と未知事項の区分を調べることができる。	聞いた話，読んだ文献の内容，自分で行った簡単な調査内容から，わかることは何かを考えて，事実と自分の意見を区別して，レポートの形にまとめることができる。	自分で調査し，まとめた内容を，発表の内容が首尾一貫して，論理的であるように，ポスターやスライドに必要な情報をコンパクトにまとめて，聴衆に話すことができる。		自己の将来についてよく知ると共に，自己関心にもとづいて課題を探究できる主体的協同的な探究活動を通して，自然や社会的課題について考え，行動することができる。
	4年	卒業研究入門（SGH 課題研究Ⅰ）	「神戸から世界へ」をテーマに教科横断的な諸課題に対する理解を深める。							
発展期	5年 6年	卒業研究（SGH 課題研究Ⅱ・Ⅲ）	地球の安全保障につながる個別の諸課題に対する理解（概念的かつ具体的理解）と課題意識を深めることができる。	リサーチリテラシーの習得。 実験やフィールドワーク，アンケート調査スキルの習得 論文・要約スキル，協同的研究法等の習得	実地調査・研究を進めていく中で，新たにわかった事実から，研究テーマ，手法，結果や考察との一貫性を意識しながら，研究計画を立てて，課題をより深めることができる。	実験やフィールドワーク，アンケート調査などから，物事の因果関係について，明確な仮説を持ち，反論などを想定した上で，妥当性・信頼性の高い調査結果を出すことができる。	自分で行った一貫性のある複数の調査内容から，目的→手法→結果→考察の構成を首尾一貫させ，既知事項と未知事項の区分を踏まえて，論文のフォーマットにまとめることができる。	自分の研究結果について，発表内容の流れが理解しやすいポスターやスライドを使って発表できる。その際，聴衆の反応を見て，話し方や内容を臨機応変に対応することができる。		自己の将来について構想すると共に，自己の問題意識と研究テーマとの一貫性を深く考えることができる。探究的諸活動を通して新たな価値の創造や地球規模の諸課題について考え，行動することができる。

ヘルスプロモーション　目標

			目標	健康に関する正しい知識を身に付け，健康に生きていこうとする意識を高め，健康行動を実践する能力を育成する。				
		学年	科目・分野等	A　基礎力		B　思考力		C　実践力
				知識・理解	技能	思考・判断・表現		関心・意欲・態度
				Ⅰ　知識・理解	Ⅱ　スキル・運用能力	Ⅲ　論理的・批判的思考力	Ⅳ　課題探究力	Ⅴ　グローバルキャリア（市民的資質・能力）
基礎期	前期課程	1年 2年	保健体育 食育 給食 技術・家庭（家庭） KP（総合的な学習の時間） ESD Food プロジェクト	・運動・食事・睡眠などに関する知識理解 ＊ヘルスプロモーションの基本的理解	・自身の生活課題を理解し，健康的な生活を送るために必要な情報収集力。 ＊ヘルスプロモーションの基礎的な能力	・健康的な生活を送るために必要な事項を理解し，自身の生活を見つめ直すことができる。 ＊健康課題の多元的思考力	・様々な健康要因の中から自分の課題を見つける。 ＊自身の興味・関心にもとづく自立的課題探究力	・人間関係力の形成 ・自己肯定感の育成 ・健康的な生活への興味関心
充実期	前期課程	3年	保健体育 技術・家庭（家庭） KP（総合的な学習の時間） ESD Food プロジェクト	・健康的な生活習慣と自身の健康との関わりについての知識理解 ＊ヘルスプロモーションの総合的理解	・自身の生活課題を理解し，健康的な生活を送るために必要な事項を運用する能力。 ＊ヘルスプロモーションの応用的な能力	・健康的な生活を送るために必要な事項を理解し，疾病予防の観点から自分の生活を見つめ直すことができる。 ＊健康課題の論理的思考力	・自他の健康課題を解決するための方策を考える。 ＊自身の興味・関心にもとづく自立的課題探究力	・人間関係調整力の形成 ・自己肯定感の育成 ・自立的な健康行動
充実期	後期課程	4年	保健体育 国際理解教育 社会科（地理・公民） 家庭科 KP（総合的な学習の時間） ESD Food プロジェクト	・生涯を通して健康的な生活習慣を送るための知識理解 ＊ヘルスプロモーションと自身のライフスタイルの総合的理解	・各ライフステージにおいて，健康的な生活習慣を送る能力。 ＊生涯を通じたヘルスプロモーション能力の展開	・よりよい生活を送ることができるように，自分の生活や社会を見つめ直すことができる。 ＊健康課題の体系的思考力	・様々な健康要因の中から自他の課題を見つけて改善する。 ＊自身の興味・関心に基づく自立的課題探究力	・人間関係調整力の形成 ・自己肯定感の育成 ・各ライフステージや所属する社会において望ましい健康行動を選択・実践する。 ＊ヘルスプロモーションに基づいた健康社会（ヘルシーシティ）の創造
発展期	後期課程	5年 6年						

・汎用的能力…教科固有の論理を通して育成する汎用的能力　＊ヘルスプロモーション能力…自らの健康とその決定要因をコントロールし改善する能力

特別の教科　道徳　　目標

<table>
<tr><td colspan="2">目標</td><td colspan="6">道徳的諸価値の理解を基に，よりよく生きるための道徳的判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">学年</td><td rowspan="2">科目・分野等</td><td colspan="2">A　基礎力</td><td colspan="2">B　思考力</td><td colspan="2">C　実践力</td></tr>
<tr><td>Ⅰ　知識・理解</td><td>Ⅱ　スキル・運用能力</td><td>Ⅲ　論理的・批判的思考力</td><td>Ⅳ課題探究力</td><td>Ⅴグローバルキャリア（市民的資質・能力）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">基礎期</td><td>1年</td><td rowspan="2">道徳
各教科
総合的な学習の時間
特別活動など</td><td rowspan="4">道徳的価値の理解
A 主として自分自身に関すること
B 主として人との関わりに関すること
C 主として集団や社会との関わりに関すること
D 主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること（ただし，扱う価値は状況に応じて別の項目を扱うことができる）</td><td rowspan="2">周りの人たちの話をしっかり聞き，自分の意見を述べることができる。</td><td rowspan="2">周りの人たちの意見を意識しながら自分の立場を明確にすることができる。</td><td rowspan="2">問いに対して答える姿勢を持つことができる。</td><td rowspan="2">道徳性（判断・心情・意欲・態度）
道徳的な視点で自分の行いを見つめ，行動することができる。</td></tr>
<tr><td>2年</td></tr>
<tr><td rowspan="3">充実期</td><td>3年</td><td>道徳
各教科
総合的な学習の時間
特別活動など</td><td rowspan="2">周りの人たちの話を踏まえながら自分の意見を述べたり，議論をしたりすることができる。</td><td rowspan="2">周りの人たちの意見をよく聞いた上で，様々な考え方，捉え方を受け容れたり，反論したりすることができる。</td><td rowspan="2">問い返しを繰り返すことで，考えを深めることができる。</td><td rowspan="2">倫理性（判断・心情・意欲・態度）
反省的な視点で自分の行いを見つめ，行動することができる。</td></tr>
<tr><td>4年</td><td rowspan="3">各教科
総合的な学習の時間
特別活動など</td><td rowspan="3">各教科で登場する道徳的諸価値</td><td rowspan="3">基礎期，充実期の学習を様々な場面に活用することができる。</td><td rowspan="3">基礎期，充実期の学習を様々な場面に活用することができる。</td><td rowspan="3">基礎期，充実期の学習を様々な場面に活用することができる。</td><td rowspan="3">市民性・人間性（判断・心情・意欲・態度）
社会の中で他者とよりよく生きることができる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">発展期</td><td>5年</td></tr>
<tr><td>6年</td></tr>
</table>

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力

ESD（中学校社会科公民的分野）・国際理解（公民科現代社会）　目標

		目標	社会の成り立ちがわかり，共生の精神と広い視野から物事を考察・判断し，社会参画できる生徒，地球規模の問題に対し，文化や価値観，政治体制等の様々な違いを理解し，尊重しながら解決していこうとする生徒の育成				
	学年	科目・分野等	A　基礎力		B　思考力		C　実践力
			知識・理解	資料活用技能	思考・判断・表現		関心・意欲・態度
			Ⅰ 知識・理解	Ⅱ スキル・運用能力	Ⅲ 論理的・批判的思考力等	Ⅳ 課題探究力	Ⅴ グローバルキャリア（市民的資質・能力）
基礎期	1年	社会（地理・歴史）	・基礎的，基本的知識の理解 ＊日本および世界の地理，歴史事象についての基本的な理解	・言語，情報，数量についての基本的スキル ＊地図，年表，統計などの諸資料に関する基本的読解・作成力	・基本的な論理的・批判的思考，二項対立的思考 ＊地理・歴史の中に現れる地球的課題への直感的思考	・興味・関心から探究的思考へ ・協同的探究力（基本） ＊興味・関心に基づく地理歴史的テーマ設定と探究心 ＊社会（地理・歴史）的な見方・考え方（基本的）	・規範意識と公共性，持続可能な社会への関心 ＊地球（＆地域）的課題に関心を持とうとする姿勢 ＊学んだことを地球（＆地域）的課題に関連させようとする姿勢
	2年	社会（地理・歴史）					
充実期	3年	社会（公民分野） **ESD 重視** **現代社会**	・地球的課題についての概念的知識の多面的理解，習得 ＊公民的視点による諸課題についての理解 ＊地理的，歴史的事象の意味，意義，特色や相互の関連性の抽象的「地理・的歴史的概念」を活用した理解	・言語，情報，数量についての多面的スキル ＊主体的な資料収集と，諸資料の批判的な分析能力	・多面的な論理的・批判的思考，多元的思考，メタ認知 ＊自己，他者，社会，自然についての多面的思考 ＊日本および，世界の地理・歴史の展開に基づいた地球的課題の時間的・空間的考察	・課題探究（発見・設定・解決）的思考力 ・協同的探究力（発展） ＊社会（地理・歴史・公民）的テーマの発見と探究力 ＊社会（地理・歴史・公民）的な見方・考え方（多面的） ＊諸課題解決についての発言・提案力	・市民的資質と公共性，持続可能な社会への参画 ＊学んだことを地球（＆地域）的課題に生かそうとするとする姿勢
	4年	地理総合 歴史総合 国際理解					
発展期	5年	日本史Ｂ 世界史Ｂ 地　理Ｂ	・持続可能な社会と地球的諸課題の総合的理解と概念的知識の習得 ＊抽象的な「地理的・歴史的概念」を用いた精密な事象の解釈	・言語，情報，数量についての総合的スキル ＊複数の諸資料の批判的な分析と議論，統合による社会像の考察，構想，表現。	・総合的な論理的・批判的思考，体系的思考，メタ認知 ＊地理・歴史の解釈，説明，討議・論述による多様な地球的課題の批判的思考	・課題探究（発見・設定・解決）的思考力の深化 ・協同的探究力（深化） ＊社会（地理・歴史・公民）的テーマの発見・限定と深化した探究力 ＊社会（地理・歴史・公民）的な見方・考え方（総合的） ＊政策的課題解決についての対話・提案力	・市民的資質と公共・倫理性，主権者意識，持続可能な社会への責任と貢献 ＊地球（＆地域）的課題を解決（貢献）しようとする姿勢 ＊学ぶことを問い続ける姿勢
	6年	日本史Ｂ 世界史Ｂ 地　理Ｂ					
		探究地歴 探究公民					

・汎用的能力　＊教科固有の論理を通して育成する汎用的能力　注）基礎期については社会科，発展期については地理歴史科・公民科として実施

関連資料 2)　「2019 年度授業研究会」・「SGH 第 5 年次報告会」プログラム

1　期　日　　2020 年 2 月 9 日（日）
2　会　場　　神戸大学附属中等教育学校
3　主　催　神戸大学附属学校部　神戸大学附属中等教育学校
4　後　援　兵庫県教育委員会　神戸市教育委員会
5　日　程

8:30	9:15	9：55	10:05	10：55	11:10	12:00	13:00	14:30	14:50	16:30
受付	全体会①	休憩・移動	公開授業① SGH 分科会①	休憩・移動	公開授業② SGH 分科会②	昼休み ポスター発表	研究協議	休憩・移動	全体会② 14:55～16:10 講　演	

6　内　容

⑴　全体会①

授業研究会 テーマ	「グローバルキャリア人としての資質・能力を育成するカリキュラム開発と評価方法の研究－汎用的能力論と次期学習指導要領の方向性を踏まえて－」
SGH 報告会 テーマ	「地球安全保障への提言を目指す『グローバルキャリア人育成神戸モデル』」

〔基調報告〕研究部主事・グローバル教育推進室長　指導教諭　岩見理華
〔指導助言〕神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター　教授　石川慎一郎氏

⑵　公開授業①

教科	授業ｸﾗｽ	主題･ﾃｰﾏ	授業紹介	授業者	教室
数学科	１－２	論証	数学的な根拠による説明の技法を学び，言語活動による思考の深化を目指します。	髙木　勝久	選択Ｖ
保健体育科 【体育分野】	２－１	球技(ネット型)	自己やチームの課題を発見し，解決に向けて考えること及び伝えることについて検討します。	大谷　麻子	体育館 第 1 ｱﾘｰﾅ
技術･家庭科 【家庭分野】	２－２	和食を通して日本の伝統・文化を理解し，その良さを広める	和食の良さについて，小集団で調べ，まとめ，発表し，どのように広めるか検討します。 **※本時は道徳的内容も扱います。**	金田　理子	被服室

SGH 分科会①

分科会	授業ｸﾗｽ	主題･ﾃｰﾏ	授業紹介	授業者	教室
ＥＳＤ (社会科公民的分野)	３－４	持続可能な社会とは－より良い社会を目指して－	持続可能な社会とはどのような社会であるかについて，共創型対話を用いて議論する授業を提案します。	森田　育志	６－５
国際理解 (公民科現代社会)	４－３	途上国における教育問題について考える	途上国における教育問題について，それぞれ異なる立場から問題解決を目指した討議を行います。	木下　宏史	６－４
Kobe ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ (総合的な学習の時間)	５年	課題研究	生徒が取り組んでいる SGH 課題研究（卒業研究）の中間発表に向けて生徒同士の対話や担当教師の関わり方も含めて紹介します。	米田　　貴	選択Ⅲ 教室

実践発表	学年	内容	ﾃｰﾏなど	担当者	教室
ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ･ｱｸｼｮﾝ･ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ（GAP）	４・５・６年	国内 GAP への参加を通して得た学びについて生徒が発表します。	宮城研修（DR3ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ）模擬国連，臨海実習	副島　麻衣	６－１
ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ･ｱｸｼｮﾝ･ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ（GAP）	４・５年	海外 GAP への参加を通して得た学びについて生徒が発表します。	米国ｼｱﾄﾙ，ﾍﾞﾄﾅﾑﾊﾉｲ，台湾高雄，ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ	軽尾　弥々	６－２

⑶　公開授業②

教科等	授業ｸﾗｽ	主題･ﾃｰﾏ	授業紹介	授業者	教室
国語科	３－２	古典を現代へつなぐ	和歌を現代の物語として創作することで，思考力・想像力を養う授業を提案します。	立花　佳澄	３－２
社会科	２－３	現代の日本と世界	2 年間の歴史分野の学習を踏まえて，「歴史を学ぶ」とはどういうことかについて考えます。	奥村　　暁	社会科教室
数学科【数学B】	４－２	確率分布と統計的な推測	高校での PBL(Project Based Learning)型の授業を提案します。データを分析したことから意思決定をすることを目指します。	林　　兵馬 中時　貴弘	選択Ｖ
理　科【化学】	５－３	化学平衡	言語活動を含む，生徒自らが事象を科学的に考察する授業形態を提案します。	安田　和宏	化学教室
音楽科	１－３	創作活動	イメージと関わらせながら音の繋がり方を理解し，小集団で協力して旋律を創作します。	佐々木 ひかる	音楽室
英語科	実践報告	SGH 英語教育高度化の取組	単元学習を通した「マイ・イングリッシュ」育成の授業実践と評価について報告します。	英語科（報告者）	３－３
道徳	３－４	子どもの哲学	「子どもの哲学（p4c）」の手法を用いて，考え，議論する授業を行います。	山本　拓弥 中川　雅道	３－４
Kobeﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ（総合的な学習の時間）	２年	探究入門	探究活動として取り組んだ生徒の調査・発表活動について生徒自身が紹介します。	中田　雅之	選択Ｉ教室

SGH 分科会②

発表･研究協議	ﾃｰﾏなど	指導助言者	担当者	教室
ﾍﾙｽﾌﾟﾛﾓｰｼｮﾝ	ヘルスプロモーションの理念に基づく健康教育の実践－養護教諭・栄養教諭・神戸大学との連携研究－	加藤佳子（神戸大学）	藤原真由美 長谷川亜紀 永野　和美	６－３

⑷　昼休み・ポスター発表

⑸　研究協議

授業研究会研究協議

教科等	研究ﾃｰﾏ	担当者	指導助言者	教室
国語科	深い学び	川嶋　久予	目黒　　強（神戸大学）	３－２
社会科	社会的な見方・考え方を育む授業実践 －グローバルな時空間認識の育成を通して－	矢景　裕子	石井　英真（京都大学） 三田 耕一郎（立命館大学）	社会科教室
数学科	数学的活動を通した「深い学び」を促す 授業展開の工夫－評価方法について－	中時　貴弘	岡部　恭幸（神戸大学） 稲葉　太一（神戸大学） 長坂　耕作（神戸大学）	選択Ⅴ
理　科	サイエンスリテラシーの育成を目指した中等教育６年間のカリキュラムの構築とその実践	植田　好人 樋口真之輔	伊藤　真之（神戸大学） 佐藤　春実（神戸大学）	集会室
音楽科	豊かな表現力を育む授業実践	佐々木ひかる	森瀬　智子（頌栄短期大学）	音楽室
保健 体育科	学び合いを通した新学力観における思考力・判断力・表現力を深めるカリキュラム開発と評価方法の研究	藤本　佳昭	高田　義弘（神戸大学） 西園　友秀（神戸市教育委員会）	選択Ⅰ教室
技術・ 家庭科	自国の伝統・文化を大切にする心情を育み，社会の一員としてその良さを広めていこうとするキャリア学習	金田　理子	井上　真理（神戸大学）	被服室
英語科	「マイ・イングリッシュ」の評価をめぐって ―資質・能力の３つの柱から―	泉　　美穂	中井　弘一（京都橘大学）	３－３
道徳	考え，議論する道徳教育	上村　　幸 中川　雅道	稲原　美苗（神戸大学）	３－４
Kobeﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ (総合的な学習の時間)	６年一貫Kobe プロジェクトの実践 －汎用的能力育成の要として－	岩見　理華	林　　創（神戸大学）	選択Ⅲ教室

SGH 分科会研究協議

分科会	研究ﾃｰﾏ	担当者	指導助言者	教室
ＥＳＤ (社会科公民的分野)	SDGs 達成に貢献する生徒を育む ESD の授業実践と評価	森田　育志	多田　孝志(金沢学院大学)	６－５
国際理解 (公民科現代社会)	持続可能な社会に貢献する生徒を育む国際理解の授業実践	木下　宏史	山西　優二(早稲田大学)	

⑹　全体会②　講演

〔演題〕「『資質・能力』育成を目指したカリキュラム設計と授業実践－パフォーマンス評価をどのように活かすか－」

〔講師〕西岡 加名恵氏（京都大学大学院教育学研究科教授）

関連資料 3）平成31年度教育課程表

課　　程	前期課程			後期課程				
時期区分	基礎期		充実期		発展期			
学年 / 教科	(11回生) １年	（１０回生） ２年	（９回生） ３年	（８回生） ４年	（７回生）５年 人文・社会科学類型	自然・生命科学類型	（６回生）６年 文系	理系
国語 385	国語　140	国語　140	**国語　140** **１単位分移行** （国語総合）	国語総合　4	現代文Ｂ　2 古典Ｂ　2 ***探究国語***　3 (秋学期：1単位)	現代文Ｂ　2 古典Ｂ　2	現代文Ｂ　2 古典Ｂ　2 ***選択①***	現代文Ｂ　2 古典Ｂ　2
社会 350	社会　105	社会　140	**社会　140** **１単位分移行** （現代社会）	***歴史総合　2*** ***地理総合　2*** 春学期 現代社会(国際理解)　1	世界史Ｂ　4 日本史Ｂ 地理Ｂより ２科目選択 (2＋2単位)	世界史Ｂ　2 日本史Ｂ 地理Ｂより １科目選択	***選択②***　6 ***選択①　4***	世界史Ｂ　3 日本史Ｂ 地理Ｂ ***探究公民***より １科目選択
数学 385	中等数学Ⅰ140	中等数学Ⅱ　140	**中等数学Ⅲ　140** **１単位分移行**	中等数学Ⅳα　3 中等数学Ⅳβ　2	***G数学Ⅰα***　4 ***G数学Ⅰβ***　2	中等数学Ⅴα　4 中等数学Ⅴβ　2 秋学期 中等数学Ⅴγ　1	***G数学Ⅱ　4*** ***選択③　2***	中等数学Ⅵ　7
理科 385	理科　140	理科　140	**理科　175** **２単位分移行** （化学基礎） （生物基礎）	物理基礎　2 春学期 生物基礎　1 秋学期 化学基礎　1	***グローバル理科*** ***~~α（物理）~~*** ***β（化学）*** ***γ（生物）*** ***δ（地学）より*** ２科目選択　2	物理 生物より １科目選択　3 化学　3	***選択④　2***	物理　4 生物より １科目選択 化学　4
芸術 230	音楽　45 美術　45	音楽　35 美術　35	音楽　35 美術　35	音楽Ⅰ　2 美術Ⅰ １科目選択			***選択③***	
保健体育 315	保健体育　105	保健体育　105	保健体育　105	体育　2 保健　1	体育　3 保健　1	体育　3 保健　1	体育　2	体育　2
技術･家庭 175 情報	技術・家庭　70	技術・家庭　105	**技術・家庭　70** **２単位分移行** (情報の科学, 家庭基礎)	秋学期 情報の科学　1	春学期 家庭基礎　1	春学期 家庭基礎　1		
外国語 420	英語　140	英語　140	英語　140	Ｃ英語Ⅰ　3 英語表現Ⅰ　2	Ｃ英語Ⅱ　4 英語表現Ⅱ　2	Ｃ英語Ⅱ　4 英語表現Ⅱ　2	Ｃ英語Ⅲ　4 英語表現Ⅱ　2 ***選択①***	Ｃ英語Ⅲ　4 英語表現Ⅱ　2
道徳 総合 特別活動	道徳　35 ＫＰ　120 ＬＨＲ　35	道徳　35 ＫＰ　70 ＬＨＲ　35	道徳　35 ＫＰ　70 ＬＨＲ　35	ＫＰ　2 卒業研究Ⅰ ＬＨＲ　1	ＫＰ　1 卒業研究Ⅱ ＬＨＲ　1	ＫＰ　1 卒業研究Ⅱ ＬＨＲ　1	ＫＰ　1 卒業研究Ⅲ ＬＨＲ　1	ＫＰ　1 卒業研究Ⅲ ＬＨＲ　1
合計	1120	1120	1120	32	32	32	32	32

☆　***太字・斜体***は学校設定科目(仮称)

☆　**太字**は，後期課程の内容の一部を前期課程に移行し履修する科目(教科書購入)。それ以外でも後期課程の内容の一部を移行。

選択①　「***探究国語***」,「***探究世界史***」,「***探究日本史***」,「***探究地理***」,「***探究英語***」より２科目を選択

選択②　「世界史Ｂ」,「日本史Ｂ」,「地理Ｂ」,「***探究公民***」より２科目を選択

選択③　「***探究数学***」，「***探究音楽***」，「***探究美術***」より１科目を選択

選択④　「***探究物理***」「***探究化学***」「***探究生物***」「***探究地学***」より２科目を選択

関連資料　4)　6年（6回生）SGH課題研究テーマ（抜粋）

Ⅰ　震災復興とリスクマネジメント

生徒	担当	論文タイトル
Ⅰ-1	社会1	災害時の医療的ケア児の生存策－南海トラフを見据えて－
Ⅰ-2	社会1	避難所生活を改革できるか－震災国イタリアとの比較から－
Ⅰ-3	保体1	VR技術を用いた新たな防災教育－「減災アクションVRゲーム」の提案－

Ⅱ　国際都市「神戸」と世界の文化

生徒	担当	論文タイトル
Ⅱ－1	社会2	奈良県におけるアニメ・マンガを使った「聖地巡礼」による地域活性化の可能性
Ⅱ－2	社会2	国際観光地神戸の方向性－香港の観光地の良さを参考に国際観光地神戸の在り方を提案する－
Ⅱ－3	社会2	インスタグラムを利用した地域活性化の現状と課題 －北海道天塩町公認インスタグラマーを事例にして－
Ⅱ－4	数学1	日本食「寿司」の変遷－国内での変化とグローバル化による変化を比較して－
Ⅱ－5	理科1	Instagramから分析するパンケーキの流行－ビジネスにおけるInstagramの可能性－
Ⅱ－6	理科1	J-POPにおいて流行する音楽に共通点はあるのか
Ⅱ－7	保体2	大邱広域市はなぜ観光地として知られるようになったのか－神戸市との比較研究－
Ⅱ－8	保体2	邦楽ヒット曲と日本の移り変わり－東京オリンピックに向けて－
Ⅱ－9	英語１	ディズニー映画とジェンダー問題
Ⅱ－10	英語１	グローバリゼーションが促進されている現代における異文化理解プログラムとは －異文化理解教育の現状に関する研究を通じて－

Ⅲ　提言：国際紛争・対立から平和・協力へ

生徒	担当	論文タイトル
Ⅲ－1	社会1	企業に提案するLGBT受け入れに関する社内改善案
Ⅲ－2	社会1	子の連れ去り問題の対処の改善策－ハーグ条約の視点から考えて－
Ⅲ－3	社会1	意図された大量殺人が社会に与えるデメリット
Ⅲ－4	保体1	我が国における児童虐待の原因と児童虐待減少のための提案－国際比較から－
Ⅲ－5	保体1	発展途上国におけるノンフォーマル教育の役割について－カンボジアを事例に－
Ⅲ－6	保体1	発展途上国と先進国の児童虐待対策の取り組みについて－カンボジアの孤児院の現状－
Ⅲ－7	英語2	西宮市の貧困層の子どもの自己肯定感を高める方法とは－子ども食堂から考える－

Ⅳ　グローバルサイエンスと拠点都市「神戸」

Ⅲ－1	社会3	テコンドーの中段回し蹴りにおける蹴りの威力の考察－軸足の回転に着目して－
Ⅲ－2	数学2	セルオートマトン法を用いた駅空間における人の流動とその課題－サインに着目して－
Ⅲ－3	数学2	学習教材に適した色についての提案－青色は学習に良いのか－
Ⅲ－4	数学2	歌詞の朗読が歌の表現力に及ぼす影響－歌唱音声のフォルマント分析に基づく－
Ⅲ－5	理科2	茎の長さにより花の水分吸収速度、持ちは変わるのか－切り花を通して探る－
Ⅲ－6	理科1	フィトンチッドは高校生の創造性の向上に効果はあるのか
Ⅲ－7	理科2	神戸ポートアイランド南公園におけるアルゼンチンアリの防除方法の研究
Ⅲ－8	理科３	虫除け剤を使用せず蚊に刺されないには－安全性から見た代替成分・最適温度の提案－
Ⅲ－9	理科3	ユーグレナと他の原生生物の栄養素としての可能性

地球安全保障への提言を目指す「グローバルキャリア人育成神戸モデル」

スーパーグローバルハイスクール(SGH)
研究開発実施報告書

第５年次　平成 31 年度

令和２年３月27日

発　行　神戸大学附属中等教育学校
〒658-0063　神戸市東灘区住吉山手５丁目11番１号
TEL. 078-811-0232　FAX. 078-821-1504

印刷所　三和印刷株式会社